

YAMAGUCHI UNIVERSITY
ARCHAEOLOGICAL MUSEUM REPORT Vol.6

CONTENTS

Chapter I The project on the Yamaguchi University campus in the 2008 fiscal year 1

Section 1 General outline of the project on the Yamaguchi University campus
in the 2008 fiscal year 1

Section 2 Excavation on the Yoshida campus "Yoshida site" 5

Section 3 Excavation on the Kogushi campus "Yamaguchidaigaku-Igakubukounai site" 216

Section 4 Excavation on the Tokiwa campus "Yamaguchidaigaku-Kougakubukounai site" 220

Appendix 1 The gist of researches and studies at Yamaguchi University in the 2008 fiscal year ... 224

Appendix 2 List of researches in Yamaguchi University campus 227

Chapter II Report of the Yamaguchi University Archaeological Museum activities 248

Section 1 Exhibition activities 249

Section 2 Social education activities 258

Appendix A chronology study on Yayoi pottery and Haji ware from the late Yayoi period
to the early Kohun period in eastern Yamaguchi Prefecture 263

山口大学埋蔵文化財資料館年報

平成二十年
度

山口大学埋蔵文化財資料館年報
—平成20年度—

Published by
Yamaguchi University Archaeological Museum
Yamaguchi, 2012

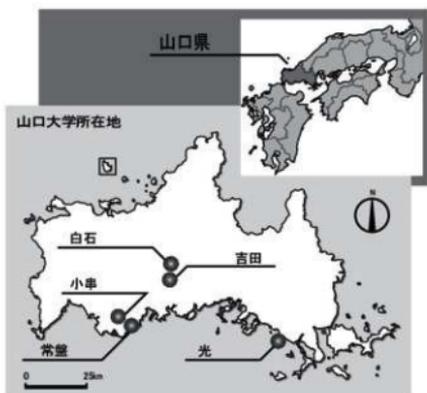
二〇一二年

2012

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学埋蔵文化財資料館年報

平成20年度 山口大学構内遺跡発掘調査概報
平成20年度 山口大学埋蔵文化財資料館活動報告



2012

山口大学埋蔵文化財資料館

序

山口大学埋蔵文化財資料館は吉田構内をはじめ、小串・常盤・白石・光地区に所在する山口大学構内遺跡における埋蔵文化財の発掘・保護を基幹業務としています。同時に、学術資産の収集管理と発信を主要な業務とする大学情報機構所属の一組織として、これら埋蔵文化財の調査成果や学術的価値を広く社会に告知するため、展示企画や冊子発行、社会教育活動など、情報発信活動にも積極的に取り組んでおります。

さて、2008(平成20)年度におきましては、新教育棟(O-HARA山口大学就職支援施設)新営工事並びに農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査が相次ぎ、新教育棟敷地では中世の村落跡、動物医療センター敷地では室町時代の掘立柱建物跡や奈良～平安時代の墨書土器が見つかるなど、多大な成果がありました。

本書には、当館が同年に実施した構内遺跡の調査成果をはじめ、収蔵資料の展示活動や社会連携活動、館員の研究活動を収録しております。本書が山口大学および学外研究機関、地域社会において幅広く活用されることを願ってやみません。

当館は、調査体制をはじめ、遺物の整理・保管場所の不足が年々深刻化するなど、多くの課題を抱えているため、今後ともこうした課題に全力を尽くして取り組む所存です。その意味におきまして、これまで当館の調査・研究活動にご支援、ご協力を頂いた関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年3月

山口大学埋蔵文化財資料館長

細瀬 厚

例言

1. 本書は、山口大学鑑蔵文化財資料館(以下「資料館」と呼称)が平成20年度に実施した、山口大学構内の遺跡発掘調査成果報告と、同年度に資料館が実施した社会教育等の活動報告を記したものである。
2. 構内遺跡発掘調査に関しては、現地での調査は資料館員である田畑直彦(大学情報機構埋蔵文化財資料館助教)・横山成己(大学情報機構埋蔵文化財資料館助教)・藤野好博(事務局情報環境部情報企画課教務補佐員※当時)が担当した。
また、現地での調査に際しては、株式会社宗像建設、有限会社芳西工務店、有限会社久富工務店に協力を依頼した。
3. 出土資料の整理は、平成21年度から平成23年度にかけて、資料館員である田畑・横山・藤野・乃美友香(事務局情報環境部情報企画課事務補佐員)・松浦鳴昌(事務局情報環境部学術情報課教務補佐員※平成22年4月1日Eより)が担当した。
4. 発掘調査における現地での実測は田畑・横山・藤野が、写真撮影は田畑・横山が行った。出土遺物に関しては、実測・写真撮影を田畑・横山・藤野・松浦が行った。製図・整図は田畑・横山・藤野・乃美が行った。
5. YD2008-4調査にあたって、市原英子、岩佐道子、土井和美、佐伯あけみ、宮原シズエ、宮原芳子の各氏を平成21年2月16日から同年4月30日の期間、教務補佐員として雇用した。その他、YD2008-3、YD2008-4の現地作業にあたっては、情報環境部の牧村正史部長(当時)をはじめとする同部職員から多大な応援を受けた。
6. YD2008-4出土木製品の墨書解読にあたっては、美祿市教育委員会 森田孝一氏、美祿市長登文化交流館 池田善文氏の御厚意により同館所蔵の赤外線カメラを使用させていただいた。YD2008-4の全景撮影及び測量は写真エンジニアリング株式会社に委託した。YD2008-4出土木製品、YD2008-5出土墨書須志器の判読は本学人文学部 橋本義典教授に依頼した。
7. YD2008-2～4出土遺物の鑑定にあたっては、山口市史編さん室 市賀信幸氏、山口市教育委員会 北島大輔氏、北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室 佐藤浩司氏、防府市教育委員会 杉原和恵氏よりご教示を受けた。
8. 発掘調査に伴う事務は、事務局情報環境部情報企画課総務係(当時)が統括した。
9. 発掘調査の諸記録類と出土資料は資料館で適正に保管している。
10. 本文の執筆分冊は目次に記した。
11. 本書の編集は資料館員の補佐を得て横山が行った。

凡例

1. 山口大学の吉田・白石・小中・常盤・光橋内は、そのいずれもが文化財保護法(法律第214号)で示されるところの「周知の埋蔵文化財包蔵地」内に位置している。山口大学各構内の位置する遺跡名は以下の通りである。

吉田構内～吉田遺跡 白石構内～白石遺跡 小中構内～山口大学医学部構内遺跡
常盤構内～山口大学工学部構内遺跡 光橋内～御手洗遺跡・月待山遺跡

2. 吉田構内における調査区および層位・遺構の位置は、日本測地系に基づいた国土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割のA-24区南西隅を起点(構内座標x=0, y=0)とする構内座標値で表示している。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値(X, Y)と構内座標値(x, y)とは下記の計算式で変換される。

$$x = X + 206, 000$$

$$y = Y + 64, 750$$

3. 平成20年度に実施した予備発掘調査に関しては、以下の略号により資料整理を行っている。
- 吉田構内経済学部研究棟改修工事に伴う予備発掘調査……………YD2008-1
吉田構内新教育研究棟新営に伴う予備発掘調査……………YD2008-2
吉田構内新教育研究棟設備関連工事に伴う本発掘調査……………YD2008-3
吉田構内新教育研究棟新営に伴う本発掘調査……………YD2008-4
吉田構内動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査……………YD2008-5
小中構内医学部総合研究棟改修Ⅱ期工事に伴う予備発掘調査……………KG2008-1
常盤構内女子学生寄宿舎新営その他工事に伴う予備発掘調査……………TW2008-1

4. 各遺構は下記の記号で表記することがある。

竪穴住居・掘立柱建物……SB 土塙……SK 貯蔵穴……SU
溝……SD 柱穴・ピット……Pit・SP 落ち込み……SX

5. 本書で使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

6. 標高数値は海拔標高を示す。

7. 土層および土器の色調記号は、農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

8. 遺物の実測図は、下記のように分類した。

断面黒塗り……須恵器、陶器、磁器

断面白抜き……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、石器、木器、金属器

本文目次

第1章	平成20年度山口大学構内遺跡の調査	
第1節	平成20年度に実施した遺跡調査の概要……………(横山)……………	1
第2節	吉田構内(吉田遺跡)の調査	
1	経済学部研究棟改修工事に伴う予備発掘調査……………(田畑)……………	5
2	新教育研究棟新営に伴う予備発掘調査……………(田畑)……………	9
3	新教育研究棟設備関連工事に伴う本発掘調査……………(田畑)……………	23
4	新教育研究棟新営に伴う本発掘調査……………(田畑)……………	43
5	農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査……………(横山)……………	113
6	国際交流会館B棟改修工事に伴う立会調査……………(田畑)……………	203
7	サッカーグラウンド防球ネット取設工事に伴う立会調査……………(田畑)……………	206
8	正門改修等工事に伴う立会調査……………(横山)……………	209
9	教育実践センター廻りフェンス取設その他工事に伴う立会調査……………(横山)……………	215
第3節	小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査	
1	医学部総合研究棟改修Ⅱ期工事に伴う予備発掘調査……………(横山)……………	216
第4節	常盤構内(山口大学工学部構内遺跡)の調査	
1	女子学生寄宿舎新営その他工事に伴う予備発掘調査……………(横山)……………	220
付節1	平成20年度 山口大学構内遺跡調査要項……………	224
付節2	山口大学構内の主な調査……………	227
第2章	平成20年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告……………(横山)……………	248
第1節	資料館における展示・公開活動	
1	第25回企画展『ロマン発見～考古学者の筆～』を開催……………(横山)……………	249
2	第26回企画展『ロマン発見～考古学者の筆～』を開催……………(横山)……………	250
3	第27回企画展『謎の官衙～山口大学1200年の時空を超えて』を開催……………(横山)……………	251
4	学内連携企画展『インストール A・I・A アート・イン・アルケオロジー』を開催……………(横山)……………	252
5	地域連携展示『やまぐち復元～古墳時代の食卓～』を開催……………(横山)……………	253
6	大学情報機構2008 in 七夕 fes.にて資料展を開催……………(横山)……………	254
7	大学情報機構2008 in 医学 fes.にて資料展を開催……………(横山)……………	255
8	大学情報機構2008 in 常盤 fes.にて企画展を開催……………(横山)……………	256
9	第8回～第9回大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催……………(横山)……………	257
第2節	資料館における社会教育活動	
1	第8回公開授業	
	「古代人の知恵に挑戦! - 古代のお米をつくってみよう3 -」を開催……………(田畑)……………	258
2	『野焼き体験・古代人に挑戦』作品展を共催にて開催……………(横山)……………	261
3	中学生の職場体験を受け入れ……………(横山)……………	262
付篇	周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年……………(田畑)……………	263

挿図目次

第1章第1節 平成19年度に実施した遺跡調査の概要	
図1 止口大学古田・白石橋内位置図……………2	
図2 小塚・堂整構内位置図……………4	
図3 光橋内位置図……………4	
第1章第2節 古田境内（古田遺跡）の調査	
図4 調査区位置図……………5	
図5 C・D調査区平面図・断面図……………6	
図6 調査区位置図……………9	
図7 A調査区東部平面図・断面図……………10	
図8 A調査区Pit1平面図・断面図……………11	
図9 A調査区西部平面図・断面図……………12	
図10 B調査区東部平面図・断面図……………13	
図11 B調査区西部平面図・断面図……………14	
図12 C調査区西部平面図・断面図……………15	
図13 D調査区西部平面図・断面図……………15	
図14 出土遺物実測図……………19	
図15 調査区位置図……………23	
図16 調査区設定図……………24	
図17 調査区平面図・断面図1……………25	
図18 調査区平面図・断面図2……………26	
図19 SK2平面図・断面図……………27	
図20 調査区平面図・断面図3……………28	
図21 遺構断面図1……………28	
図22 調査区平面図4……………29・30	
図23 遺構断面図2……………29・30	
図24 調査区断面図4……………31	
図25 出土遺物実測図……………37	
図26 調査区位置図……………43	
図27 調査区設定図……………44	
図28 調査区平面図……………45・46	
図29 調査区断面図1……………47	
図30 調査区断面図2……………48	
図31 調査区断面図3……………49	
図32 調査区断面図4……………50	
図33 S U 1 平面図・断面図……………51	
図34 S B 1 ～3 平面図・断面図……………54	
図35 S B 4 ～6・9 平面図・断面図……………55	
図36 S B 7・8 平面図・断面図……………56	
図37 S B 10・11 平面図・断面図……………57	
図38 S B 12・13 平面図・断面図……………58	
図39 S B 14・15 平面図・断面図……………59	
図40 S B 16・17 平面図・断面図……………60	
図41 S B 18・19 平面図・断面図……………61	
図42 溝群平面図・断面図……………63	
図43 SD 1～8・SK1 平面図・断面図……………65	
図44 SD9～11 平面図・断面図……………66	
図45 SE1・2 平面図・断面図……………67	
図46 SK2～4・6・SX1～3 平面図・断面図……………70	
図47 SK8 平面図・断面図……………71	
図48 G-7区Pit26、H-7区Pit15 平面図・断面図……………72	
図49 谷埋土・遺物包含層上面検出ビット平面図・断面図……………72	
図50 出土遺物実測図《土器①》……………88	
図51 出土遺物実測図《土器②》……………89	
図52 出土遺物実測図《土器③》……………90	
図53 出土遺物実測図《土器④・土製品・石器》……………91	
図54 出土遺物実測図《木製品①》……………93	
図55 出土遺物実測図《木製品②》……………94	
図56 出土遺物実測図《木製品③》……………95	
図57 調査区位置図……………113	
図58 第1調査区平面図・断面図……………115・116	
図59 SB 1 平面図・断面図……………121	
図60 SB 2 平面図・断面図……………122	
図61 SB 3 平面図・断面図……………123	
図62 SB 4 平面図・断面図……………124	
図63 調査区南西隅ビット群平面図・断面図……………125	
図64 第1調査区西端又中央部ビット群平面図・断面図……………127	
図65 第1調査区東地区ビット群平面図・断面図……………129	

図66 第1調査区出土遺物実照図	131	図99 調査区平面区・断面図	211・212
図67 動物医療センター周辺調査区配置図	136	図100 山上遺物実照図	214
図68 吉田遺跡第II地区第1調査区平面区	137	図101 調査区位置図	215
図69 第2調査区平面図・断面図	141	第1章第3節 小橋構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査	
図70 第2調査区NR1L5出土須志器	149	図102 調査区位置図	216
図71 第2調査区NR1L4出土須志器	149	図103 調査区詳細図	218
図72 第2調査区NR1L4出土土師器	151	図104 調査区平面図・断面図	218
図73 第2調査区NR1L3出土須志器	151	第1章第4節 常盤構内(山口大学工学部構内遺跡)の調査	
図74 第2調査区NR1L3出土土師器・緑釉 陶器・弥生土器・土製品	153	図105 調査区位置図	220
図75 第2調査区NR1L2出土土器類	153	図106 第1・第2調査区平面区・断面区	222
図76 第2調査区NR1L1出土須志器類	155	第1章付録2 山口大学の主な調査	
図77 第2調査区その他土器類	155	図107 山口大学吉田構内地区別および主な調査 区位置図	241・242
図78 第2調査区州土器類	155	図108 山口大学白石構内(幼稚園・小学校)調査 区位置図	243
図79 第2調査区NR1L6直上出土大製品①	171	図109 山口大学白石構内(中学校)調査区位置図	244
図80 第2調査区NR1L6直上出土大製品②	172	図110 山口大学小市構内調査区位置図	245
図81 第2調査区NR1L5直上出土大製品	172	図111 山口大学常盤構内調査区位置図	246
図82 第2調査区NR1L4下層出土大製品①	172	図112 山口大学光橋内調査区位置図	247
図83 第2調査区NR1L4下層出土大製品②	173	付録 周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初期の 土器編年	
図84 第2調査区NR1L4上層出土大製品①	173	図113 因達遺跡分布図	261
図85 第2調査区NR1L4上層出土大製品②	174	図114 複合I縁敷の成立過程	266
図86 第2調査区NR1L4上層出土大製品③	175	図115 後期I-1~2期の瀬戸内系長頸壺	267
図87 第2調査区NR1L4上層出土大製品④	176	図116 北九州市高島遺跡第2遺構出土土器	269
図88 第2調査区NR1L4上層出土大製品⑤	177	図117 吉川遺跡本館2号館第1号土壇出土土器	269
図89 第2調査区NR1L4上層出土大製品⑥	178	図118 朝日墳墓群Ⅶ地区SK9出土土器	270
図90 第2調査区NR1L3出土木製品	179	図119 河防西部における弥生時代後期から古墳時 代初期の土器編年図(巻・壺)	282・283
図91 第2調査区NR1L2出土木製品	179	図120 河防東部における弥生時代後期から古墳時 代初期の土器編年図(蓋・甕)	284・285
図92 第2調査区NR1肩部出土木製杭①	181	図121 河防東部における弥生時代後期から古墳時 代初期の上層編年図(鉢・高杯)	286
図93 第2調査区NR1肩部出土木製杭②	182		
図94 農学部解剖実習棟調査区との位置関係	201		
図95 調査区位置図	203		
図96 調査区位置図	206		
図97 各地点土層断面模式図	207		
図98 調査区位置図	209		

写真目次

第1章第1節 平成20年度に実施した遺跡調査の概要	写真1 吉田構内航空写真	2
---------------------------	--------------	---

写真2 白石構内 (教育学部附属山手幼稚園・小学校)	写真38 B区SK2付近遺構検出状況	33
航空写真	写真39 B区SK2付近遺構完備状況	34
写真3 白石構内 (教育学部附属山口中学校)	写真40 B区北端部西壁土層断面	34
航空写真	写真41 B区SD05土層断面	34
写真4 小串構内航空写真	写真42 B区SK2土層断面	34
写真5 常盤構内航空写真	写真43 B区SK3土層断面長	34
写真6 光構内航空写真	写真44 C区調査風景	34
第1章第2節 吉田構内 (吉田通跡) の調査		
写真7 C調査区調査前全景	写真45 C区白壁土層断面	34
写真8 D調査区調査前全景	写真46 C区北東部	34
写真9 C調査区全景	写真47 C区西端部北壁土層断面	35
写真10 D調査区全景	写真48 C区北東部遺構検出状況	35
写真11 E調査区1層断面	写真49 C区北東部遺構完備状況	35
写真12 H調査区土層断面	写真50 C区SD8北土層断面	35
写真13 敷地東部調査前全景	写真51 C区SK6土層断面	35
写真14 敷地西部調査前全景	写真52 C区SK7土層断面	35
写真15 A調査区Pit1土器出土状況1	写真53 C区SK8土層断面	35
写真16 A調査区Pit1土器出土状況2	写真54 C区SD9・10完備状況	35
写真17 A調査区Pit1柱礎・掘方土層断面	写真55 出土遺物①	38
写真18 A調査区全景	写真56 出土遺物②	39
写真19 B調査区全景	写真57 出土遺物③	40
写真20 C調査区全景	写真58 調査区全景	73
写真21 D調査区全景	写真59 調査区全景	73
写真22 A調査区東部北壁土層断面	写真60 調査区全景	74
写真23 A調査区西部北壁土層断面	写真61 掘立柱建物跡分布状況1	75
写真24 A調査区西端部北壁土層断面	写真62 掘立柱建物跡分布状況2	75
写真25 B調査区東部全景	写真63 掘立柱建物跡分布状況3	76
写真26 B調査区西部全景	写真64 掘立柱建物跡分布状況4	76
写真27 C調査区西部全景	写真65 調査区北壁 (I-I') 土層断面	77
写真28 D調査区西部全景	写真66 調査区西壁 (J-J') 土層断面	77
写真29 D調査区SD1掘検出状況	写真67 調査区北壁 (A-A') 土層断面1	77
写真30 出土遺物①	写真68 調査区北壁 (A-A') 1層断面2	77
写真31 出土遺物②	写真69 調査区北東壁 (B-B') 土層断面	77
写真32 調査前全景	写真70 調査区東壁 (C-C') 土層断面	77
写真33 調査区全景	写真71 調査区東部南壁土層断面	77
写真34 A区遺構検出状況	写真72 調査区SD5・6(近南壁)土層断面	77
写真35 A区西壁土層断面	写真73 調査区西部南壁土層断面1	78
写真36 A区柱穴半壊状況	写真74 調査区西部南壁土層断面2	78
写真37 A区P142土器出土状況	写真75 調査区西壁土層断面	78
	写真76 S.U1土層断面	78

写真77 SB1 I-4区Pit1土層断面	78	写真116 谷清掘状況	83
写真78 SB2 II-4区Pit16土層断面	78	写真117 谷堀上下掘削状況	83
写真79 SB4 G-6区Pit15土層断面	78	写真118 遺構実測	83
写真80 SB19 E-3区Pit2土層断面	78	写真119 遺構清掘状況	83
写真81 清群北部塚山状況	79	写真120 空掘	83
写真82 清群土層断面	79	写真121 土上遺物(土器①)	98
写真83 清群4土層断面	79	写真122 土上遺物(土器②)	99
写真84 清群9・13土層断面	79	写真123 土上遺物(土器③)	100
写真85 清群11土層断面	79	写真124 土上遺物(土器④)	101
写真86 調査区北部遺構塚山状況	79	写真125 土上遺物(土器⑤)	102
写真87 SD1及び周辺Pit土層断面	79	写真126 土上遺物(土器⑥・土製品)	103
写真88 SD2土層断面	79	写真127 土上遺物(土器⑦・不製品)	104
写真89 SD4・8・SK1土層断面	80	写真128 土上遺物(木製品①)	105
写真90 SD7土層断面	80	写真129 土上遺物(木製品②)	106
写真91 SD8土層断面	80	写真130 土上遺物(木製品③)	107
写真92 SD9土層断面	80	写真131 土上遺物(木製品④)	108
写真93 SK1土層断面	80	写真132 調査区周辺遺景	113
写真94 SE2曲物納め出土状況	80	写真133 第1調査区調査前遺景	113
写真95 SE2土師器Ⅲ出土状況1	80	写真134 第1調査区遺構検出状況	118
写真96 SE2土師器Ⅲ出土状況2	80	写真135 第1調査区遺構完掘状況	118
写真97 SK2土層断面	81	写真136 第1調査区西区全景	119
写真98 SK3土層断面	81	写真137 第1調査区西区西西部	119
写真99 SK4土層断面	81	写真138 第1調査区西区東西部南側	119
写真100 SK6土層断面	81	写真139 第1調査区西区東西部北側	119
写真101 SK8土層断面	81	写真140 第1調査区西区北壁断面	119
写真102 SK8遺物出土状況	81	写真141 第1調査区西区北壁断面	119
写真103 SX1土層断面	81	写真142 SP84・207土層断面	121
写真104 SX2土層断面	81	写真143 SP65土層断面	121
写真105 SX3土層断面	82	写真144 SP29土層断面	121
写真106 C-7区Pit26遺物出土状況	82	写真145 SP155土層断面	122
写真107 II-7区Pit15遺物出土状況1	82	写真146 SP153土層断面	122
写真108 D-6区Pit4土層断面	82	写真147 SP129土層断面	122
写真109 E-6区Pit12・13土層断面	82	写真148 SP129柱根遺存状況	122
写真110 H-6区Pit1・2遺物出土状況	82	写真149 SP171断面	123
写真111 D 3区水田暗渠	82	写真150 SP163断面	123
写真112 C・D-4区水田暗渠	82	写真151 SP166断面	123
写真113 矢板設置	83	写真152 SP196・197断面	123
写真114 機板掘削	83	写真153 SP116断面	123
写真115 調査区北東部掘削状況	83	写真154 SP148-150土層断面	125

写真155 SP164土層断面	125	写真194 第2調査区出土遺物(土器類)①	159
写真156 SP165土層断面	125	写真195 第2調査区出土遺物(土器類)②	160
写真157 SP172・173土層断面	125	写真196 第2調査区出土遺物(土器類)③	161
写真158 SP176-177土層断面	125	写真197 第2調査区出土遺物(土器類)④	162
写真159 SP120土層断面	127	写真198 第2調査区出土遺物(土器類)⑤	163
写真160 SP121土層断面	127	写真199 第2調査区出土遺物(土器類)⑥	164
写真161 SP121完掘状況	127	写真200 第2調査区出土遺物(土器類)⑦	165
写真162 SP122土層断面	127	写真201 第2調査区出土遺物(土器類)⑧	166
写真163 SP123土層断面	127	写真202 第2調査区出土遺物(土器類)⑨	167
写真164 第1調査区東地区ピット群	129	写真203 第2調査区出土遺物(土器類)⑩	168
写真165 SP4土層断面	129	写真204 第2調査区出土遺物(木製品)①	183
写真166 SP8土層断面	129	写真205 第2調査区出土遺物(木製品)②	184
写真167 SP8完掘状況	129	写真206 第2調査区出土遺物(木製品)③	185
写真168 第1調査区出土遺物①	131	写真207 第2調査区出土遺物(木製品)④	186
写真169 第1調査区出土遺物②	132	写真208 第2調査区出土遺物(木製品)⑤	187
写真170 第1調査区出土遺物③	133	写真209 第2調査区出土遺物(木製品)⑥	188
写真171 第2調査区遺構面検出状況	144	写真210 第2調査区出土遺物(木製品)⑦	189
写真172 谷埴土完掘状況	144	写真211 第2調査区出土遺物(木製品)⑧	190
写真173 谷埴土掘削風景	145	写真212 A地点土層断面	203
写真174 谷埴土掘削状況	145	写真213 B地点土層断面	203
写真175 谷埴土L6上面検出状況	145	写真214 C地点土層断面	205
写真176 谷埴土L6面上大製器出土状況	145	写真215 D地点掘削状況	205
写真177 谷埴部須恵器出土状況	145	写真216 E地点土層断面	205
写真178 谷埴土L6直上大製器出土状況	145	写真217 F地点掘削状況	205
写真179 木製品出土状況①	146	写真218 F地点土層断面	205
写真180 木製品出土状況②	146	写真219 G地点土層断面	205
写真181 木製品出土状況③	146	写真220 H地点土層断面	205
写真182 木製品出土状況④	146	写真221 敷地切り下げ部土層断面	205
写真183 土層確認アゼ断面①	146	写真222 調査区全景	206
写真184 土層確認アゼ断面②	146	写真223 A地点土層断面	206
写真185 P1:1・P1:2半截状況	147	写真224 B地点土層断面	208
写真186 P1:1半截状況	147	写真225 C地点土層断面	208
写真187 調査区東・北壁土層断面	147	写真226 E地点土層断面	208
写真188 調査区東壁土層断面	147	写真227 F地点土層断面	208
写真189 調査区東壁南側土層断面	147	写真228 G地点土層断面	208
写真190 調査区北壁土層断面	147	写真229 H地点土層断面	208
写真191 第2調査区出土遺物(土器類)①	156	写真230 I-2地点土層断面	208
写真192 第2調査区出土遺物(土器類)②	157	写真231 K地点土層断面	208
写真193 第2調査区出土遺物(土器類)③	158	写真232 調査区全景	209

写真233	遺構検出風景	211・212
写真234	調査区全景	211・212
写真235	調査区東部遺構群検出状況	213
写真236	調査区西部遺構群検出状況	213
写真237	調査区南東部遺構群完掘状況	213
写真238	遺構完掘状況	213
写真239	調査区東壁断面	213
写真240	調査区北壁断面	213
写真241	出土遺物	214
写真242	調査区南西部地口検出状況	215
写真243	調査区北東部遺構完掘状況	215

第1章第3節 小車橋内（山口大学医学部橋内遺跡）の調査

写真244	調査区周辺遠景	216
写真245	調査風景	219
写真246	調査区全景	219
写真247	調査区全景	219
写真248	調査区北壁断面	219
写真249	調査区東壁断面	219

第1章第4節 築壘橋内（山口大学工学部橋内遺跡）の調査

写真250	調査区周辺遠景	220
写真251	第1調査区全景	223
写真252	第1調査区全景	223
写真253	第1調査区南西壁断面	223
写真254	第1調査区南西壁断面	223
写真255	第1調査区作業風景	223
写真256	第2調査区全景	223
写真257	第2調査区全景	223
写真258	第2調査区南西壁断面	223

第2章第1節 資料館における展示公開活動

写真259	第25回企画展ポスター	249
写真260	企画展の模様	249
写真261	企画展の模様①	250
写真262	企画展の模様②	250
写真263	第27回企画展ポスター	251
写真264	企画展の模様	251
写真265	展示ポスター	252
写真266	展示の模様	252
写真267	展示の模様①	253

写真268	展示の模様②	253
写真269	展示の模様①	254
写真270	展示の模様②	254
写真271	展示の模様①	255
写真272	展示の模様②	255
写真273	展示の模様①	256
写真274	展示の模様②	257
写真275	第8回大学情報機構埋蔵文化財特別展	258
写真276	第9回大学情報機構埋蔵文化財特別展	258

第2章第2節 資料館における社会教育活動

写真277	種まき（4月21日）	259
写真278	代かき（5月23日）	259
写真279	苗の観察（5月24日）	259
写真280	口植え（5月24日）	259
写真281	梅草の説明（7月19日）	259
写真282	雑草とり（7月19日）	259
写真283	貝殻つづくり（7月19日）	259
写真284	赤米の花（8月8日）	259
写真285	稲の観察（9月20日）	260
写真286	石菫丁による収穫（9月20日）	260
写真287	門と柱による脱穀・脱すり（10月4日）	260
写真288	土器による炊飯（10月4日）	260
写真289	食事風景（10月4日）	260
写真290	参加者の皆さん（10月4日）	260
写真291	展示の模様①	261
写真292	展示の模様②	261
写真293	教育学部附属山口中学校児童の 職場体験①	262
写真294	教育学部附属山口中学校児童の 職場体験②	262
写真295	山口市立早川中学校児童の 職場体験①	262
写真296	山口市立早川中学校児童の 職場体験②	262

表目次

第1章第1節 平成20年度に実施した遺跡調査の概要	
表1 平成20年度山口大学構内遺跡調査一覧表 ……	1
第1章第2節 吉田構内(吉田遺跡)の調査	
表2 出土遺物(土器)観察表 ……	22
表3 出土遺物(石器)観察表 ……	22
表4 出土遺物(土器)観察表 ……	41
表5 出土遺物(石器・鉄器)観察表 ……	41
表6 竪立柱建物観察表 ……	84
表7 溝・土境・不明遺構観察表 ……	84
表8 出土遺物(土器)観察表 ……	109
表9 出土遺物(土製品・石器)観察表 ……	111
表10 出土遺物(木製品)観察表 ……	112
表11 出土遺物(土器)観察表 ……	134
表12 出土遺物(土器)観察表 ……	191
表13 出土遺物(石器)観察表 ……	194
表14 出土遺物(木製品)観察表 ……	195
表15 出土遺物(土器)観察表 ……	214
第1章付節 山口大学構内の主な調査一覧表	
表16 山口大学構内の主な調査一覧表 ……	227
第2章 山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告	
表17 埋蔵文化財資料館利用者の推移 ……	248
表18 平成20年度月別入館者数 ……	248
付録 周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初期の土器編年	
表19 併行関係表 ……	287
表20 山口県における併行関係表 ……	287

第1章 平成20年度山口大学構内遺跡の調査

第1節 平成20年度に実施した遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は、山口市(吉田・白石構内)、宇部市(小串・常盤構内)、光市(光構内)の県内各市に分散しているが、各構内は「周知の埋蔵文化財包蔵地」内、つまり遺跡の上に立地している。各構内の様相を概観すると、吉田構内は縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての全時代を網羅する複合集落遺跡として県内でも著名である吉田遺跡内に、白石構内は弥生時代から古墳時代を中心とした集落遺跡である白石遺跡内に、小串・常盤構内は旧石器時代から江戸時代にかけての遺物が出土する山口大学医学部構内遺跡内・山口大学工学部構内遺跡内に、光構内は縄文時代から江戸時代にかけての集落遺跡・遺物散布地である御手洗遺跡と月待山遺跡内にまたがって位置している。

このような環境の下、山口大学埋蔵文化財資料館は山口大学構内に埋存する貴重な埋蔵文化財を保護・調査・研究・活用する施設として、昭和53年に職員が配置されて以来、その重責を担い続けている。当館の平成20年度時の調査体制は以下の通りである。

まず、各構内において地下掘削を伴う工事が立案・計画された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会において事業計画の確認を行った後、文化財保護法の諸手続の下、山口大学各構内が位置する地方公共団体(山口県および各市)の指導により、埋蔵文化財保護の立場から発掘・予備発掘・立会の三種の方法で調査を厳密に行っている。「周知の埋蔵文化財包蔵地」外に位置する大学関連施設(職員宿舎等)敷地内で地下掘削を伴う工事が実施される場合においても、埋蔵文化財の新規発見の可能性を考慮して、出来る限り工事掘削時に資料館員が確認調査を行っている。これらの調査に対する当館の現状の職員配置は、専任教員2名と教務補佐員1名、事務補佐員1名である。

上記の調査の結果で埋蔵文化財が確認された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会において、遺跡のさらなる現状変更を避けるべく、工事計画、工事設計の変更等で現状保存が可能であるかどうかについて密な協議を行い、保存方法を選定している。また、調査成果については地方公共団体への報告後、内業整理等を経て可能な限り迅速に発掘調査概報(本書)を刊行している。

上記の調査体制の下、平成20年度に当館が実施した大学構内における埋蔵文化財の調査は、下記の通り本発掘調査3件、予備発掘調査4件、立会調査4件の計11件であった。

表1 平成20年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区別	面積(m ²)	調査期間	本書掲載頁
本発掘	新教育研究棟設備関連工事	吉田	L-12~14 M-12・13	313	12月24~2月16日	23~42
	新教育研究棟新営工事	吉田	M・N-11・12	1,333	2月17日~4月24日	43~112
	動物医療センター改修III期工事	吉田	T-19 S-20	250	1月5日~3月19日	113~202
予備発掘	経済学部研究棟改修工事	吉田	L・M-19	予26 立119	予備発掘7月1~10日 立会年1月23・24・31日 2月5日	5~8
	新教育研究棟新営工事	吉田	M・N-11・12	473	12月1~20日 2月17~3月27日	9~22
	医学部総合研究棟改修II期工事	小串		9	7月9日~11日	216~219
立会	女子学生生活居舎新営その他工事	常盤		24	5月19日~27日	220~223
	国際交流会館B棟改修工事	吉田	N-22 O-22 N-23	457	5月15・26・30日 6月17日、8月20・25日 9月2・3日、10月7日	203~205
	サッカーグラウンド防球ネット取設工事	吉田	H-21・22、I-21	8.5	2月18日	206~208
	正門改修等工事	吉田	Q-15、S-18	174	3月30日~4月1日	209~214
	教育実践センター廻りフェンス取設その他工事	吉田	K-19	2	2月27日	220

吉田構内（本館、人文・教育・経済・理・農の各学部：山口県吉田1677-1、教育学部附属養護学校：同吉田3003所在）

平成20年度の埋蔵文化財調査は吉田構内に集中し、その件数は本発掘調査3、予備発掘調査2、立会調査4を数える。

大学会館北隣で計画された新教育研究棟新営に伴う本調査では、大学会館新営工事に伴う発掘調査成果により、古墳時代から古代に所属する遺構群の検出が見込まれたが、遺構としては14～16世紀を主体とする掘立柱建物跡19棟、溝18条、井戸2基、土壇18基、不明遺構4基、柱穴約700基が確認され、吉田の地における中世の集落構造の一端が明らかとなった。この集落は吉田構内本部2号館敷地において確認された区画溝を有する屋敷跡とともに集落を構成したものと見られるが、当該地については近世に耕池化され、集落は現在の大学本部周辺の台地上に集約したものと推定される。さらに大学会館敷地において確認された埋没谷の延長部も確認された。この度の調査によって、この谷が13世紀を下限とする時期に埋没が始まり、16世紀中に埋没が完了することが推定されるに至った。この他、谷中



写真1 吉田構内航空写真（南東から）



写真2 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校）
航空写真（東から）



写真3 白石構内（教育学部附属山口中学校）
航空写真（南から）



図1 山口大学吉田・白石構内位置図

にて縄文時代の低温地型貯蔵穴が1基確認されたことは特筆に値する。吉田遺跡において初めての発見であるとともに、山口県内でも稀少な事例と言える。

動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査では、第1・第2調査区でそれぞれ大きな成果を得るに至った。動物医療センター北側空閑地にあたる第1調査区では、約200㎡の調査区面積に200基の柱穴が密集して分布することが確認された。出土遺物により、当集落は室町時代に造営され、16世紀内には消滅することが推測される。近世の絵図にも当地に集落は描かれておらず、歴史史料を裏付ける調査結果となった。一方、動物医療センター西側空閑地にあたる第2調査区は、49㎡という狭小な調査面積であるにもかかわらず、古代の埋没谷の左肩部が検出され、埋土からは墨書須恵器が3点を含む奈良時代から平安時代を中心とする土器とともに、多量の木製品が出土した。

経済学部研究棟改修Ⅱ工事に伴う予備発掘調査では、自然河川とともに落ち込み埋土を確認したが、所属時期等を明らかにすることは出来なかった。経済学部周辺の地下では複雑に自然河川が埋没しており、周囲に遺存する微高地の全貌も未だ明らかではない。今後とも詳細な調査が必要である。

立会調査では、サッカーグラウンド防球ネット取設Ⅱ工事に伴って河川埋土とともに遺構埋土もしくは遺物包含層と見られる堆積層、ピットなどが確認されたが、いずれも詳細不明である。Ⅲ期改修工事に伴う立会調査は、新教育研究棟新営工事に伴う発掘調査成果により急速本発掘調査と同等の精度をもって実施したものであるが、多数の遺構を検出したものの、確認したピット群は概ね近世末以降のものと思われる。その他、教育実践センター廻りフェンス取設その他工事に伴う立会調査では、狭小な調査範囲ながらも縄文土器小片を含む土層1基が確認された。

白石構内 (教育学部附属山口市徳園: 山口市白石三丁目1-2、岡山小学校: 白石三丁目1、岡山中学校: 白石一丁目9番9号)

平成20年度、埋蔵文化財調査を要する開発工事等は計画されなかった。

小串構内 (医学部、同付属病院: 宇部市南小1丁目1-1)

予備発掘調査1件を実施した。医学部総合研究棟改修Ⅱ期工事に伴う予備発掘調査では、総合研究棟(保健学研究棟)東側空閑地に調査区を設け、現地表下約1.5m付近で旧耕土を確認した。小串構内北部域では、旧耕土下に近世の客土が存在し、以下に複数の遺物包含層が堆積するという共通の層序が確認されている。本調査周辺域も同様の堆積層が埋存するものと思われる。

常盤構内 (工学部: 宇部市常盤台2丁目16-1、尾山寮舎: 同上野中町2638-3号)

予備発掘調査1件を実施した。工学部女子学生寄宿舎新営その他工事に伴う予備発掘調査では、女子寄宿舎建物が谷の埋め立て地に当たることから調査対象より除外し、現状の常盤寮周囲に新規布設される配管ルート予定地2地点を調査対象とした。調査の結果、第1調査区では掘削は造成上内にとどまり、第2調査区では現地表下約50cmで削平された地山を検出した。

光構内 (教育学部附属光小学校、同光中学校: 光市豊福8丁目4番1号)

平成20年度、埋蔵文化財調査を要する開発工事等は計画されなかった。

平成20年度は特に吉田構内において重要な新知見を得るに至った。吉田構内は、近世から昭和の木学統合移転までその景観がほぼ変わらなかったものと推察されるが、今回構内北西～南に発達する台地2ヶ所(新教育研究棟予定地・動物医療センター北側空閑地)で中世集落を確認したことにより、農地拡大以前の農村集落構造の一端を明らかにすることができた。また、一昨年度に引き続き動物医療センター周辺地下に存する埋没谷を検出し、埋土から「主」「井」「女」などの文字が記された須恵器を確認したことは、今後当地に存在が推定される古代官衙を解明する上で貴重な資料となる。



図2 小串・常盤構内位置図



写真4 小串構内航空写真（南東から）



写真5 常盤構内航空写真（南から）



写真6 光構内航空写真（北東から）



図3 光構内位置図

第2節 吉田構内(吉田遺跡)の調査

1. 経済学部研究棟改修工事に伴う予備発掘調査・立会調査

調査地区 吉田構内L・M-19区
調査面積 約145㎡(予備発掘調査:約26㎡、
立会調査:約119㎡)
調査期間 予備発掘調査:平成20年7月1～10日、
立会調査:平成21年1月23、24、31日、
2月5日

調査担当 田畑直彦

調査結果

(1) 調査の経緯(図4、写真7・8)

吉田構内の経済学部研究棟の改修工事が決定した。耐震補強工事は建物内で行うため、地下の掘削はなかった。しかし、研究棟周囲において設備配管の取り替え・新設工事が計画された。

経済学部研究棟は吉田構内への統合移転の際、吉田遺跡調査団により設定された第V地区に位置する。同調査団によれば、幅1mの調査区を20m間隔に設けて調査したが、「黒色や暗青灰色のシロトと粘土や、薄い泥炭質の層からなり、遺構らしい遺構は見あたらなかった」とされる。しかし、概要報告しかされていないため、詳細は不明であった。

このため、埋蔵文化財資料館専門委員会の指すの下(発掘調査を要する工事計画として、平成20年3月5日埋蔵文化財資料館専門委員会承認)、埋蔵文化財資料館が予備発掘調査を行い、同調査の結果を受けて引き続き立会調査を行った。

(2) 予備発掘調査

予備発掘調査は、平成20年7月1～7日の間、研究棟周囲にA～Dの4ヶ所の調査区を設けて行った。調査面積はA・B調査区が約6㎡、C調査区約11㎡、D調査区約9㎡である。

調査区の掘削を行った結果、A・B調査区は共同溝の設置に伴う攪乱により、埋土が全て造成土であったため、ただちに埋め戻し、C・D調査区を中心に調査を行った。



図4 調査区位置図

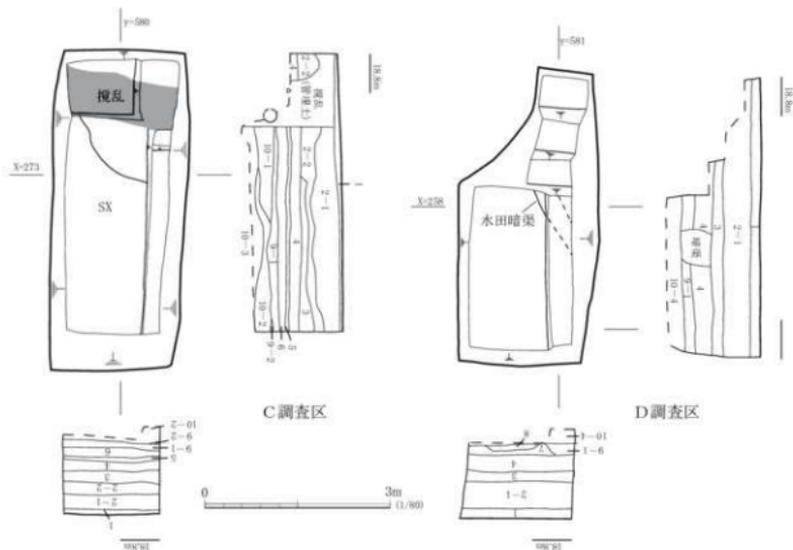


写真7 C調査区調査前全景(南から)



写真8 D調査区調査前全景(北から)

吉田橋内(吉田道路)の調査



- 1 表土 (マサ)
- 2-1 造成土
- 2-2 造成土 3 主体
- 3 旧粘土 1 暗オリーブ灰色 (2.5G/Y4/1) シルト
- 4 旧床土 1 オリーブ灰色 (10Y4/1) シルト
- 5 旧粘土 2 灰色 (7.5Y4/1) シルト
- 6 旧床土 2 オリーブ灰色 (10Y4/2) シルト
- 7 旧粘土もしくは旧床土 炭オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト

- 8 旧粘土もしくは旧床土 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘土に7を織状に含む
- 9-1 落ち込み埋土 オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト
- 9-2 落ち込み埋土 灰色 (5Y4/1) 細砂
- 10-1 地山 黄色 (5Y7/6) 粘土
- 10-2 地山 オリーブ黄色 (5Y6/4) 粘土
- 10-3 地山 青灰色 (5BG6/1) 粗砂 1cm大の礫を含む
- 10-4 地山 明青灰色 (5BG/1) シルト

図5 C・D調査区平面図・断面図



写真9 C調査区全景(北西から)



写真10 D調査区全景(北西から)

(3) 層位(図5、写真9・10)

基本層序は下記の通りである。

第1層 表土(マサ土)

第2層 造成土(

第3～8層 旧耕土及び床土

第9層 落ち込み埋土

第10層 地山(弥生時代以降の遺構面形成層)

C調査区では、第2層の下に第3層(旧耕土1)、第4層(旧床土1)、第5層(旧耕土2)、第6層(旧床土2)が連続して確認できたことから、統合移転前の水田面が2面存在したことが分かる。また、D調査区でも第4層の下に旧耕土もしくは旧床土と考えられる第7・8層が堆積しており、C調査区同様、水田面が2面存在したと考えられる。

第9～1層はC・D調査区全面で確認された。同層は水田の造成により削平を受けており、検出標高はC調査区が標高約17.3m、D調査区が約17.4mである。同層はD調査区から約50m南側に位置する資料館(東亜経済研究所)新営工事に伴う予備発掘調査区でも検出された落ち込みの埋土と考えられるが、今回層部を確認することはできなかった。

C調査区では10～1～3層が堆積しており、D調査区では10～4層のみを確認した。C・D調査区とも検出標高は約17.2mである。いずれも縄文時代以前の河川堆積に由来する土層と考えられる。

(4) 遺構

D調査区で旧水田暗渠を検出した以外に遺構は検出していない。

(5) 遺物

D調査区の第4層中から時期不明の上器片1点、近世の磁器底部片1点が出土した。第9層は遺物包含層の可能性が考えられたため、慎重に精査したが遺物は出土しなかった。この他、D調査区の排土から貝殻1点と薄片1点が出土したが、どの層から出土したものか確認することができなかった。

(6) 小結

今回の予備発掘調査では、落ち込みの埋土と考えられる土層を検出したが、層部を確認することができなかった。また埋土である第9層から遺物は出土しなかったため、調査区周辺において顕著な埋蔵文化財は存在しないと考えられる。

以上の調査結果を踏まえ、今後の掘削工事にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて、平成20年7月15日開催の埋蔵文化財資料館専門委員会(メール審議)で協議した結果、今回計画された掘削工事にあたっては立会調査で対応することとなった。

(7) 立会調査(写真11・12)

予備発掘調査の結果を受け、立会調査は平成21年1月23、24、31日、2月5日に行った。調査面積は約119㎡である。調査地点は予備発掘調査区に続く、E～Kの7地点である。

E地点は現地地表下約42cmまでが造成土であった。以下は河川堆積土と考えられる土層で、約42～97cmで灰色(10Y5/1)粗砂、約97～127cmで灰色(N4/0)シルトを検出した。F地点は現地地表下約49cmまでが造成土で、以下約49～58cmでオリブ色(5Y5/4)シルト(旧水田床土)、約58～85cmでオリブ色(5Y6/6)シルト(地山)を確認した。G地点は現地地表下約90cmまで掘削したが、全て造成土であった。H地点は現地地表下約28cmまでが表土・造成土で、以下約28～63cmで灰オリブ色(7.5Y6/2)シルト(旧水田床土)、約63～72cmで灰オリブ色(7.5Y6/2)シルト(旧水田耕土)、約72～82cmでオリブ灰色(10Y6/



写真 11 E地点土層断面(南から)



写真 12 H地点土層断面(南から)

2)シルト(旧水田床上)、約82～94cmで落ち込みの埋土と考えられる灰色(N4/0)シルト、約94～130cmで青灰色(5B6/1)シルト(地山)を確認した。I地点は現地表下約62cmまでが表土・造成土で、以下約62～74cmで暗緑灰色(10G4/1)シルト(旧水田耕土)、約74～94cmでオリーブ灰色(2.5GY5/1)シルト(旧水田床上)、約94～106cmでオリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト(旧水田耕土)、約106～119cmで落ち込み埋土と考えられる暗灰色(N3/0)シルト、約119～134cmで明緑灰色(10GY7/1)シルト(地山)を確認した。J地点は現地表下約60cmまでが造成土で、以下約60～78cmでオリーブ黄色(5Y6/3)シルト(旧水田床上)、約78～85cmで旧水田床土と暗灰色(N3/0)シルトのブロック土、約85～100cmで灰色(2.5GY6/1)シルト(旧水田床上)、約100～115cmで落ち込み埋土と考えられる暗灰色(N3/0)シルト、約115～130cmで明緑灰色(10GY7/1)シルト(地山)を確認した。K地点は現地表下約72cmまでが表土・造成土で、以下約72～110cmで灰オリーブ色(7.5Y5/2)シルト(地山)を確認した。以上の地点から遺物は出土しなかった。

調査の結果、E地点で河川堆積土を検出した。また、H、I、J地点では予備発掘調査でも検出した落ち込みの埋土と考えられる土層を検出した。経済学部研究棟の南側は旧地形が北から南へ傾斜して落ち込み、湿地になっていたと推測される。しかし、統合移転直前まで存在した水田の造成により埋土上部が削平されている上、遺物が出土しなかったため、埋没時期は不明である。今後は経済学部研究棟の周囲における落ち込みの範囲を確認するとともに、埋土を精査して、埋没時期等を明らかにする必要がある。

〔註〕

- 1)小野忠烈編(1976)、山に大学吉田遺跡調査団(編)『吉田遺跡発掘調査概報』山口
- 2)田畑直彦(2010)「第1章第2節6 資料館(東亜経済研究所)新営工事に伴う予備発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』山口

2. 新教育棟新営工事に伴う予備発掘調査

調査地区	吉田橋内M・N 11・12区
調査面積	約473㎡
調査期間	平成20年12月1～20日、 平成21年2月17～3月27日
調査担当	田畑直彦
調査結果	

(1) 調査の経緯(図6、写真13・14)

吉田橋内の大学会館の北側敷地において、新教育棟(O-HARA 山口大学 就職支援施設)新営工事が決定した。大学会館敷地では縄文～近世の遺物包含層や古墳時代～中世の井戸等が検出され、多数の遺物が出土している。また、分布調査においても遺物の散布が確認されていることから、埋蔵文化財が存在することが確実視された。しかし、詳細な状況が不明であるため、埋蔵文化財資料館専門委員会の指示の下(発掘調査を要する工事計画として、平成20年9月26日埋蔵文化財資料館専門委員会承認)、埋蔵文化財資料館が予備発掘調査を行うこととなった。

調査はA～Dの4ヶ所の調査区を設けて行った。調査面積はA調査区約182.2㎡、B調査区約150㎡、C調査区約107㎡、D調査区約34㎡、合計約473㎡である。

(2) 調査の経過

調査開始直後から、各調査区では遺構・遺物が多数検出された。以上の結果を受けて平成20年12月10日に開催された埋蔵文化財資料館専門委員会で協議した結果、建設計画の大幅な変更が困難であるため、本発掘調査を行うことが決定された。また、担当部局の配慮により、埋蔵文化財の保護を図るべく敷地面積が縮小された。以上の決定を受け、この段階での記録作業は開発対象から外れたA・B調査区の東部のみ限定し、埋め戻した。その後、本発掘調査に併行し、平成21年2月17日～3月27日に埋め立て造成部分のA～D調査区西部を再度掘削し、記録作業を行った。なお、造成土の厚いA調査区西部は2段階掘りを行ったが、それでも壁面が随所で著しく崩壊した。同じ場所を再掘削すると、さらに壁面の崩落が進行し、大学会館北側の擁壁が崩落する恐れが生じたため、調査区はやや北

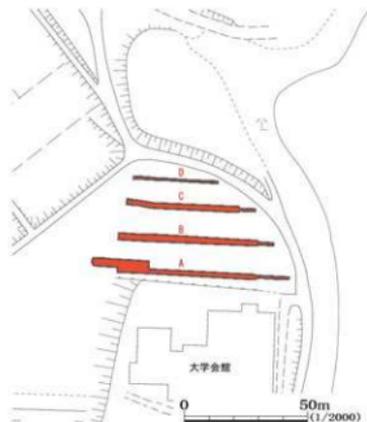


図6 調査区位置図



写真13 敷地東部調査前風景(北西から)



写真14 敷地西部調査前風景(北から)

吉田橋内(吉田道路)の調査

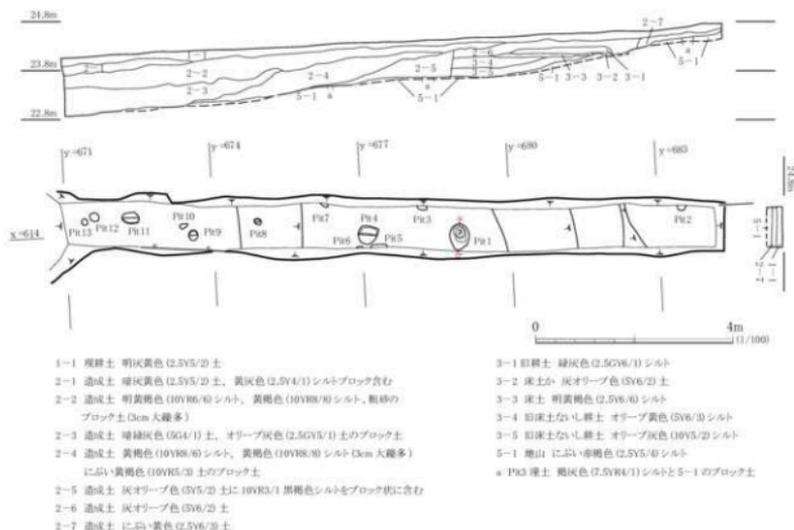


図7 A調査区東部平面図・断面図

側にあたる本発掘調査区の西戦延長部分を再現することとし、矢板を打って掘削・記録作業を行った。また、この際の調査では、地山までの掘削は一部にとどめた。以下の報告では本発掘調査区と重複する箇所については割愛し、同調査区と重複しない箇所について行う。

(3) 層位・遺構(図8～13、写真15～29)

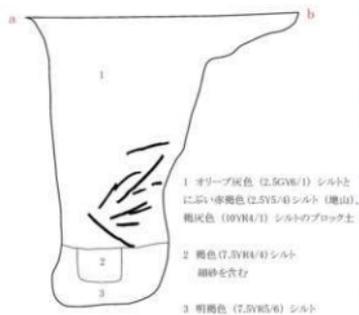
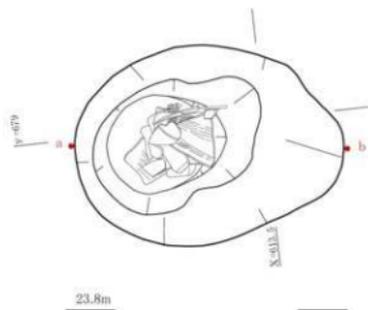
基本層序は下記の通りである。

- 第1層 表土(現耕土)
- 第2層 造成土
- 第3層 旧耕土及び床土
- 第4層 遺物包含層(B調査区のみ)
- 第5層 地山(弥生時代以降)

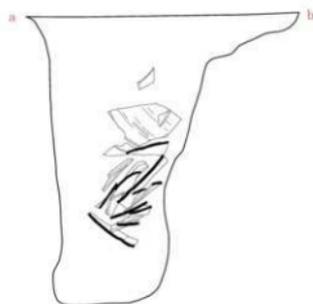
予定地は姫山の支脈から張り出す洪積段丘の西側傾斜面に位置する。統合移転前までは棚田が存在し、統合移転後は造成され牧草地となっていたが、現地表面においても東部と西部で4mを超える高低差があった(A調査区東端:24.8m、同調査区西端:約20.2m)。なお、遺物包含層である谷の埋土はV層とし、層名は各調査区毎に付した。以後、詳細は各調査区ごとに述べる。

A調査区東部

調査区は東から西へ傾斜している。調査区東端の現地表面の標高は約24.8m、西端は約24.1mで、約0.7mの高低差がある。Y=679以西は大学会館新営に伴う発掘調査区と重複するため、第3層はY=679～682付近でのみ残存する。そのような状況ではあったが、調査区内において柱穴を13基検出した。Pit1は長径約54cm、短径約41cm、深さ約59cmを測る。柱抜き取り後に瓦質土器の鏝が破碎された状態で廃棄されていた。祭祀行為に伴うものであろう。遺構確認を目的とした調査であるため、その他の柱穴



23.8m



0 50cm
 1 (1/10)

図8 A調査区Pit1平面図・断面図



写真15 A調査区Pit1土器出土状況1 (北西から)



写真16 A調査区Pit1土器出土状況2 (北西から)



写真17 A調査区Pit1柱痕・堀方土層断面 (西から)

吉田橋内(吉田道路)の調査

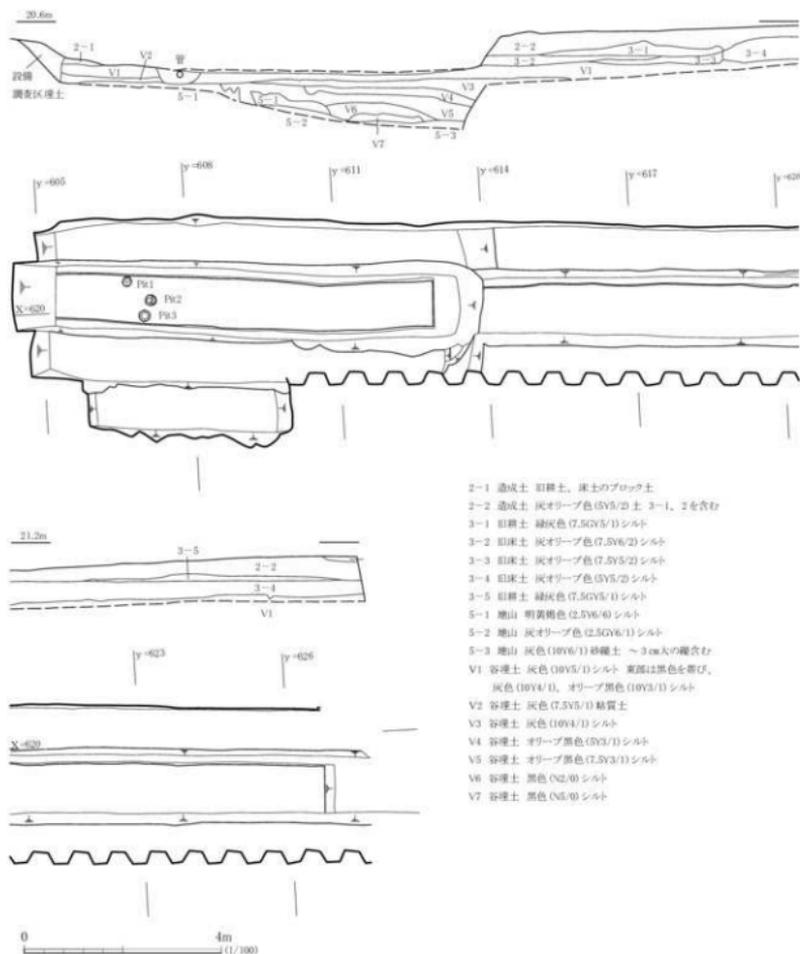


図9 A調査区西部平面図・断面図

は完掘していないが、大半が中世の柱穴と考えられる。

A調査区西部

調査区の全面が予定地の東部及び大学会館敷地から派生する谷の中に位置する。統合移転後の造成は盛土で行われたため、第3層は良好に遺存していた。第3層以下には谷埋土が堆積する。旧地形はY-608付近から緩やかに落ち込んでおり、Y-614付近において、谷埋土の層厚は約0.8mを測る。これより東側については掘削を上面にとどめたため、詳細は不明であるが、東側にかけてさらに落ち込

吉田橋内(吉田道路)の調査



図 10 B 調査区東部平面図・断面図

むものと推測される。谷埋上のうち、V-1層からは上石器罎、碗、白磁碗、青磁碗、青磁皿片等が出土した。一方、V-3~5層からは弥生土器蓋・甕片、鉄石が出土したほか、上層断面中に弥生土器の胴部片が含まれていることを確認した。以上から、谷の埋積が長期に渡って進行したことがうかがえるが、調査面積が狭小であるため、今後、周辺の調査による検討が必要である。遺構としては、調査区西端部で直径約20~22cm、深さ約2~10cmの柱穴を3基検出し、このうちPit3からは上石器小片が1点出土している。

B調査区東部

基本層序はA調査区東部と同じである。ただし、統合移転時の造成による削平のため、第3層はY-672以西でのみ残存していた。調査区内ではY=672付近で約0.7mの高低差を持つ段を確認した。1段低い西側で第3層が残存していることから、この段は棚田造成に伴うものと考えられる。また第4層は谷埋土の可能性があり、段に伴う削平により西部への連続性が確認できなかったため、遺物包含層として扱った。なお、同層は微細な土器片を含んでいることを確認したのみで、詳細な時期は不明である。調査区内では柱穴3基、溝4条を検出したが、掘削は行っていない。遺構のうち、SD3・4は木田峠梁である。

B調査区西部

第2層の直下には旧耕上(第3-1層)、旧床上(第3-2層)が残存していた。また第3-2層の直下にはV-1~4層が順次堆積していた。地山である第5-1層の検出標高は調査区東部で約20.0m、調査区西部で約19.3mであり、旧地形は東から西へ傾斜していることが確認できた。また、調査区西端部ではV-2層が西側に落ち込んでおり、調査区外にかけてさらに旧地形が落ち込むものと推測される。V-

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

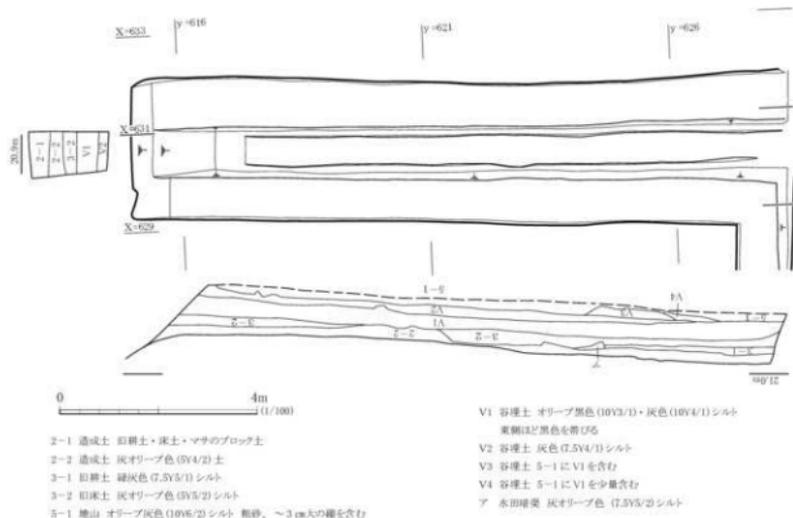


図 11 B調査区西部平面図・断面図

1層からは土師器、須恵器、青磁、瓦質土器片が出土している。

C調査区西部

統合移転時の削平が著しいため、第3層は調査区東端部で僅かに残存するに過ぎず、調査区の大半では第2-2・3層の直下で地山である第5-1・2層を検出した。調査区東部の第5-1層の検出標高は約20.7m、西部における第5-2層の検出標高は約20.3mである。第5-1層上で検出したのは掘乱のみであり、遺構は皆無であった。壁面及び床面清掃時に瓦質土器片が2点出土している。

D調査区西部

調査区東部では、第2層の下に第3層が残存していたが、調査区西部では統合移転時の削平により第3層は遺存していなかった。なお、V-1・2層については、本発掘調査時の所見から谷の埋積土と位置づけている。調査区東端部における第5-1層の検出標高は約22.2m、削平を受けていない西部における標高は約20.8mである。調査区東部では第5-3・5層上に層厚約5～20cmのV-1層が堆積していたが、Y=639付近からV-1層の直下にV-2層が堆積し、Y=638付近からは第5-3層が西側へ緩やかに落ち込んでいる状況を確認した。V-1層からは瓦質土器片、土師器片、V-2層からは青磁碗片が出土している。

遺構としては、柱穴14基、溝4条を検出した。また、V-1層上面でPit7を検出し、谷埋土上にも遺構が存在することを確認した。これらの遺構については掘削を行っておらず、SD1周辺の遺構検出時に須恵器杯蓋片が出土したに過ぎないため、詳細な時期は不明である。本発掘調査時の所見を参考にと、大半が中世の遺構である可能性が高い。

吉田橋内(吉田道路)の調査

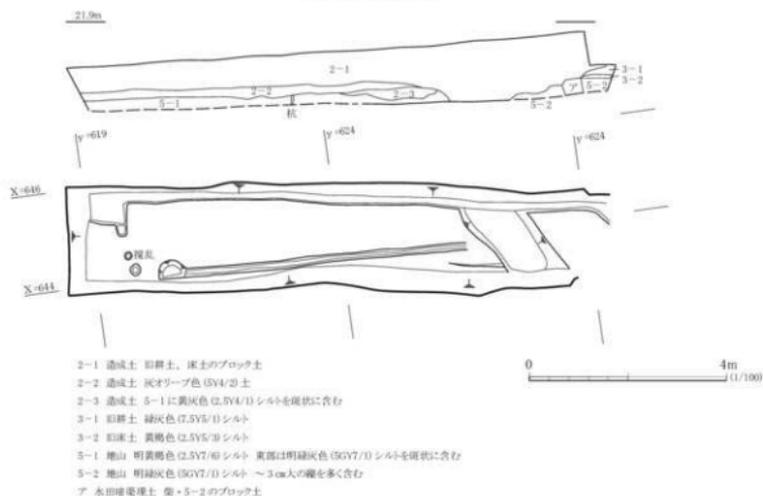


図 12 C調査区西部平面図・断面図

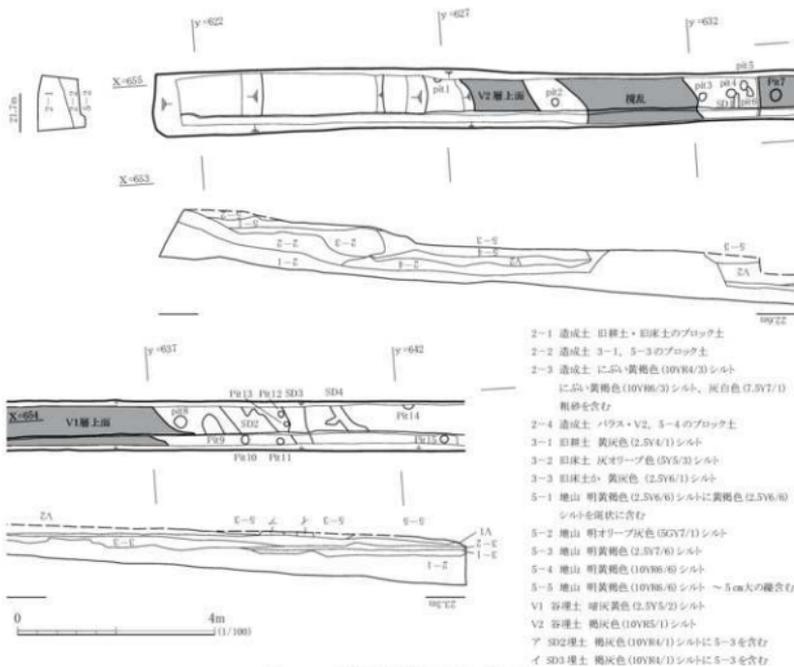


図 13 D調査区西部平面図・断面図



写真18 A調査区全景（東から）



写真19 B調査区全景（東から）



写真20 C調査区全景（東から）



写真21 D調査区全景（東から）



写真22 A調査区東部北壁土層断面(南東から)



写真23 A調査区西部北壁土層断面(南東から)



写真24 A調査区西端部北壁土層断面(南西から)



写真25 B調査区東部全景(西から)



写真26 B調査区西部全景(北東から)



写真27 C調査区西部全景(南東から)



写真28 D調査区西部全景(東から)



写真29 D調査区SD1他検出状況(北から)

(4) 遺物(図14、写真30・31、表2、3)

A調査区出土遺物

1はPit1出土の瓦質土器鍋である。外面にはススが付着する。胴部上半にはタテハケ、胴部下半には格子目叩きを施す。一方胴部内面はヨコハケ、右上がりのハケを施す。口縁部形態が岩崎編年⁴のVIA古～新形式に近似していることから、16世紀後半に位置づけられる。2・3・17は谷埋土(V-3～5層)出土遺物。2は弥生時代中期の垂下口縁壺の口縁部である。口縁部に1条単位の山形文を施す。3は弥生時代後期後半～終末期の甕の底部である。外面に僅かにハケメを観察できるが、風化が激しい。17は砥石。上下端は欠損するが、4面を使用する。4～9は谷埋土(V-1層)出土遺物である。4は土師器甕の口縁部～胴部、5は土師器椀の底部である。6は土師器坏で底面は糸切りを施す。7は須恵器坏蓋である。8は同安曇系青磁碗の口縁部、9は同安曇系青磁皿の底部である。

B調査区出土遺物

10・11は谷埋土(V-1層)出土遺物。10は白磁碗の底部。外面は露胎であるが、内面全体に施釉し、見込みに1条の圏線を施す。11は瓦質土器の焙烙で、口縁部内面を肥厚させる。

D調査区出土遺物

12は谷埋土(V-2層)出土の龍泉窯系青磁碗の胴部片、13は谷埋土(V-1層)出土の瓦質土器足鏡の口縁部である。14は遺構検出時出土の須恵器坏蓋の天井部で、扁平な宋珠椀みを持つ。15、16は山耕土・床土出土遺物。15は龍泉窯系青磁碗の口縁部、16は底部である。

(5) 小結

今回の予備発掘調査の結果、A調査区東部・B調査区東部、D調査区西部では柱穴・溝等の遺構を検出した。掘削を行った遺構はごく一部であるが、大半が中世の遺構と考えられる。一方、A調査区西部、B調査区西部、D調査区西部では谷埋土を検出した。谷埋土には弥生土器から16世紀後半の瓦質土器を含んでいたが、検出時・清掃時等の混入と思われるものを除き、近世以降の土器は含まれていなかった。一方、A調査区西部では谷埋土最下層から弥生土器のみが出土した。しかし、小面積の調査で土器の出土量も少ないため、現時点では、堆積開始時期に関する判断は差し控えたい。

以上、今回の予備発掘調査で新教育棟敷地及びその周辺には、濃密に埋蔵文化財が分布することが明らかとなった。

【註】

- 1) 瓦村吉行(1985)「第2章 吉田橋内大学会館新営に伴う発掘調査1、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報Ⅲ』山口
- 2) 玉塚直彦(2004)「付録Ⅱ 吉田橋内農学部附属農場の分布調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報ⅤⅥ・ⅤⅦ』山口
- 3) 前掲註1参照
- 4) 岩崎仁志(2007)『山陽西部における中世の上製煮沸具—美防・長門を中心に—』『中世土器の基礎研究21』高橋(大阪)

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

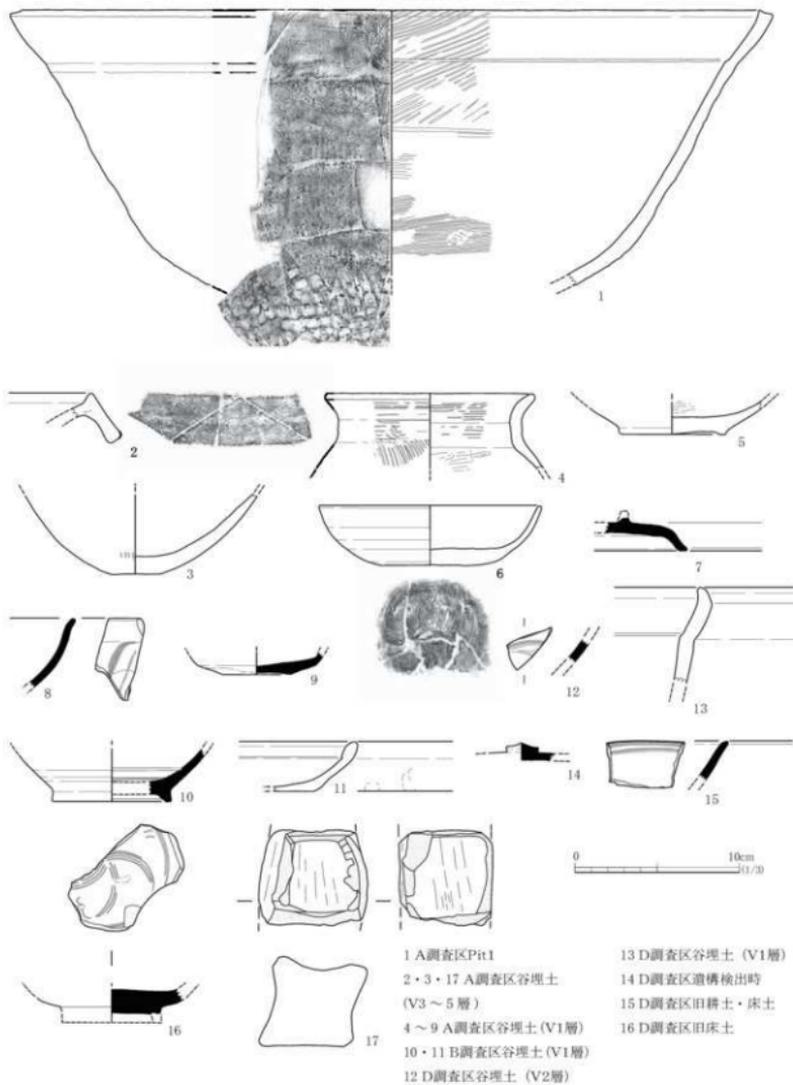


図14 出土遺物実測図

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



1-1
A調査区Pit1



1-2
A調査区Pit1



2
A調査区谷埋土 (V3~5層)



4-1
A調査区谷埋土 (V1層)



5-1
A調査区谷埋土 (V1層)



3
A調査区谷埋土 (V3~5層)



4-2
A調査区谷埋土 (V1層)



5-2
A調査区谷埋土 (V1層)



6-1
A調査区谷埋土 (V1層)



7-1
A調査区谷埋土 (V1層)



8-1
A調査区谷埋土 (V1層)



6-2
A調査区谷埋土 (V1層)



7-2
A調査区谷埋土 (V1層)



8-2
A調査区谷埋土 (V1層)

写真30 出土遺物①

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



9-1
A調査区谷埋土 (V1層)



10-1
B調査区谷埋土 (V1層)



11-1
B調査区谷埋土 (V1層)



9-2
A調査区谷埋土 (V1層)



10-2
B調査区谷埋土 (V1層)



11-2
B調査区谷埋土 (V1層)



12-1
D調査区谷埋土 (V2層)



13
D調査区谷埋土 (V1層)



15-1
D調査区旧耕土・床土



12-2
D調査区谷埋土 (V2層)



14
D調査区遺構検出時



15-2
D調査区旧耕土・床土



16-1
D調査区旧床土



17-1



17-2



17-3



16-2
D調査区旧床土



17-4

A調査区谷埋土 (V3~5層)

写真 31 出土遺物②

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

表2 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	調査区	遺構	器種	部位	法量(cm)		胎土	備考
					①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面		
1	A	Pt1	瓦質土器 鍋	口縁部 ～胴部	①(46.4)	①②灰色(N5/0)	0.1～4mmの砂粒を 多く含む	
2	A	谷埴土 (V3～5層)	弥生土器 壺	口縁部		①②にぶい、黄褐色 (10YR6/3)	0.1～3mmの砂粒を 多く含む	
3	A	谷埴土 (V3～5層)	弥生土器 甕	底部	②2.8	①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1～3mmの砂粒を 多く含む	
4	A	谷埴土 (V1層)	土師器 甕	口縁部		①②にぶい、黄褐色 (10YR6/4)	0.1～2mmの砂粒を 多く含む	
5	A	谷埴土 (V1層)	土師器 椀	底部	②6.6	①黄褐色(2.5Y5/3) ②にぶい、黄色(2.5Y6/3)	0.1～3mmの砂粒を 多く含む	
6	A	谷埴土 (V1層)	土師器 坏	口縁部 ～底部	①(13.5)②(6.0) ③(3.7)	①②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1～4mmの砂粒を 多く含む	
7	A	谷埴土 (V1層)	須恵器 坏蓋	天井部		①②灰色(N6/0)	0.1～1mmの砂粒を 少量含む	
8	A	谷埴土 (V1層)	青磁 碗	口縁部		素地 灰白色(5Y7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y6/2)	精良	同安窯系
9	A	谷埴土 (V1層)	青磁 皿	底部	②(4.1)	素地 灰白色(5Y7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y6/2)	精良	同安窯系
10	B	谷埴土 (V1層)	白磁 碗	底部	②(7.2)	素地 灰白色(5Y7/2) 釉 灰オリーブ色(7.5Y6/3)	精良	
11	B	谷埴土 (V1層)	瓦質土器 焙烙	口縁部 ～底部	③2.9	①明褐色(7.5YR7/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1～3mmの砂粒を 少量含む	
12	D	谷埴土 (V2層)	青磁 碗	胴部		素地 灰白色(5Y8/2) 釉 灰オリーブ色(7.5Y6/2)	精良	
13	D	谷埴土 (V1層)	瓦質土器 足鍋	口縁部		①②灰色(5Y6/1)	0.1～3mmの砂粒を 多く含む	
14	D	遺構 検出時	須恵器 坏蓋	天井部		①②灰色(N5/0)	0.1～1mmの砂粒を 少量含む	
15	D	旧耕土・ 床土	青磁 碗	口縁部		素地 灰色(10Y6/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y5/3)	精良	龍泉窯系
16	D	旧床土	青磁 碗	底部		素地 灰色(10Y7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y5/2)	精良	龍泉窯系

表3 出土遺物(石器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	地区	遺構	器種	法量(cm)	重量(g)	材質	備考
17	A	谷埴土 (V3～5層)	砥石	最大長5.8 最大幅6.6 最大厚5.4	310.6	砂岩	4面使用

3. 新教育棟設備関連工事に伴う本発掘調査

調査地区 吉田橋内L 12～14区、M 12・13区

調査面積 約313㎡

調査期間 平成20年12月24～平成21年2月16日

調査担当 山畑直彦

調査結果

(1) 調査の経緯(図15、写真32)

新教育棟新営工事に伴い、設備配管の新設工事が決定した。工事は本部2号館から新たに電気・給排水・ガス管を布設するほか、将来の施設整備に備えて正門方向へも配管工事を行うもので、総延長は約100mに及ぶ。また、B・C区周辺では正門等改修工事に伴い、道路新設に伴う掘削工事も計画された。

工事予定地及びその周辺では、これまでに吉田遺跡調査団による第1地区D区(41)の調査、当館による本部2号館新営に伴う発掘調査、大学会館排水管布設に伴う発掘調査、農学部附属農場E7園場排水管布設に伴う立会調査、本部裏給水管布設に伴う発掘調査が行われており、多数の遺構・遺物が確認されていることから、ルート内における埋蔵文化財の存在が確認された。このため、埋蔵文化財資料館専門委員会(平成20年9月26日・12月10日開催)の指示の下、当該工事に伴う本発掘調査を行うことになった。

(2) 調査の経過

調査区が長いため、調査区を南側からA区、B区、C区の3区に大別して報告を行う。機械掘削は12月24日にA区南端部から北へ向けて開始し、年末年始を挟んで1月5日に終了した。この際、A区で多数の柱穴、B区北端部からC区西部に至る広範囲で谷を検出し、埋土が遺物包含層であることを確認した。このため、谷の堆積状況を詳しく把握することを優先させることとし、以後の遺構検出から実測に至る作業はC区から南に向けて進めることとした。

1月は雪のない小雨の降る日が多かったため、床面がしばしばぬかるみ、作業は難航したが、2月13日に遺構の掘削が終了した。また、2月15日には全ての実測作業が終了し、2月16日に調査区の埋め戻



図15 調査区位置図



写真32 調査前風景(南西から)

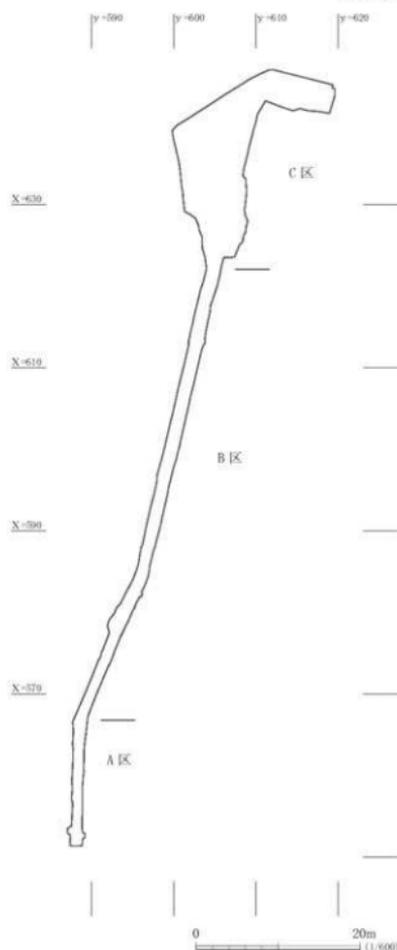


図 16 調査区設定図

し作業を行った。

(3) 層位・遺構(図17～24、写真33～54)

基本層序は下記の通りである。調査区で第4層は存在しないが、混乱を避けるため、層序は第2・4項で報告する新教育棟敷地の予備発掘調査・木発掘調査に準拠した。

第1層 統合移転後(近年)の造成土・耕土

第2層 統合移転時から本部2号館新営前後の造成土

第3層 旧耕土及び床土

第5層 地山(弥生時代以降の遺構面形成層)

調査区は本部2号館が建つ洪積段丘上から北側に向けて下降する低地にかけて位置する。地下の状況は各区により異なるため、以後、詳細は各区毎に述べる。

【A区】

本部2号館の北側に隣接する。統合移転前までは水田として利用されていたが、統合移転後は飼料間等に利用されていた。また、本部2号館新営後から順次埋め立てられ、駐車場として利用されていた。

調査区の南端部では攪乱により、第3層は残存していなかったが、これより南側では第2層の下で旧耕土である第3-1層、旧床土である第3-2層を検出した。また、X-559付近までは第3-1・2層の直下で第5-2・3層を検出し、これより南では部分的に第5-1層を検出した。第5層の検出標高は約20.8～20.9mである。

遺構は第5層上面で柱穴を54基、土城を1基検出した。遺構は南部に集中しており、切り合いも顕著に認められた。

SK1(図17・写真34・35)

大学会館排水管布設に伴う調査ですすでに大半が調査されている。また、調査区外に広がるため、全体規模は不明である。埋土は第5-1層に黄灰色(10YR4/1)シルトを斑状に含む。最大幅は約104cm、遺構面からの深さは約12cmである。出土遺物はない。

柱穴群(図17・写真34～37)

Pit1～54を検出した。これらの柱穴の直径は約10～40cm、遺構面から底面までの深さは約3～40cmで、10cmを越えるものが主体である。埋土は黄灰色(10YR4/1)シルトに遺構面である第5層を部分的に

吉田橋内(吉田道路)の調査

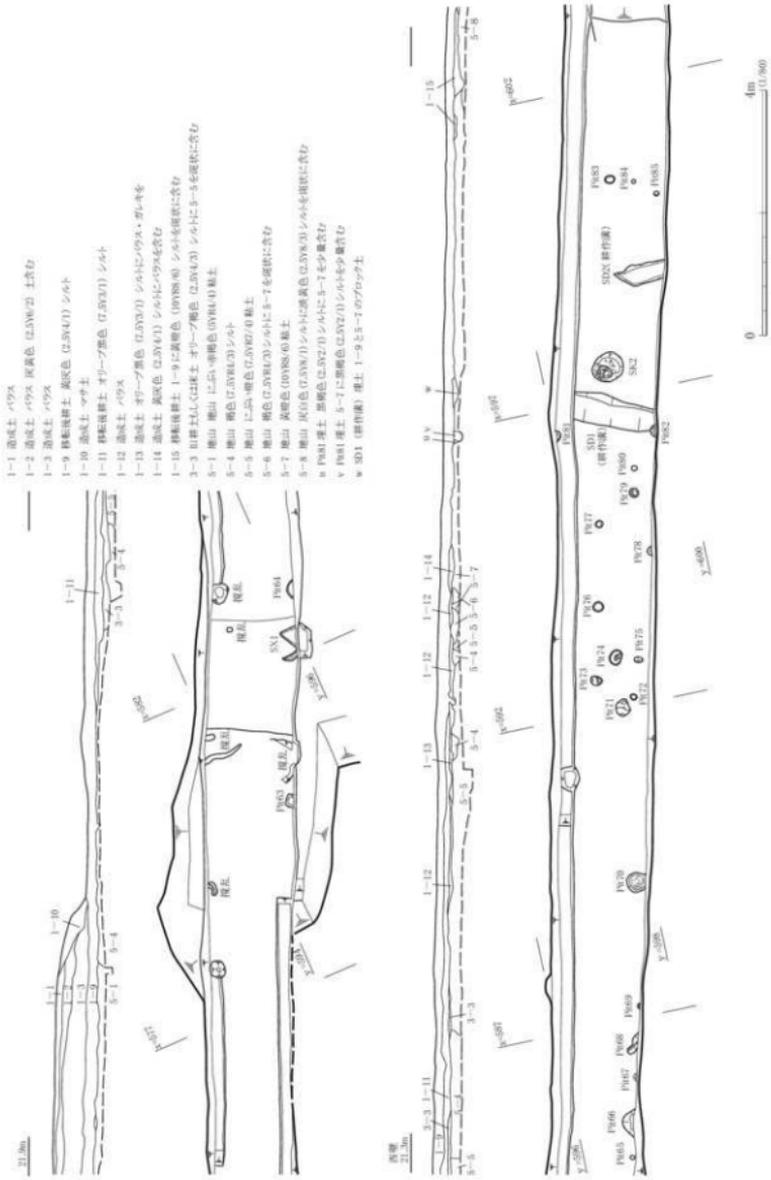


図 18 調査区平面図・断面図2

交えるものが多い。また、Pit4、7、8、13、15、16、20、24～36、38～44、51、53から土師器片を主体として少量の須恵器、白磁、青磁、瓦質土器、陶器片が出土している。出土土器の主体は土師器皿片と考えられること、瓦質土器片が出土している柱穴(Pit16・25・26)も見られることから、14～16世紀代の柱穴が中心かと思われた。しかし、Pit25のように瓦質土器足綱の脚部と近世以降の陶器片(上瓶)が出土している柱穴も存在する。また、出土土器がいずれも小片であることを考慮すると、これらの柱穴は14世紀から近世までの時期幅を持つてとらえざるを得ない。

【B区】

X=580以南はA区と同様、駐車場として利用されていたが、X=580以北は統合移転後、飼料園となり、近年は牧草地として利用されていた。現地表下から遺構面までの深さは浅い箇所では15cm前後である。また、第3層は部分的に残存するに過ぎず、北端部を除く大半の箇所では第1層の直下で第5層が検出された。以上から、統合移転後に大規模な削平を受けたと考えられる。遺構は第5層上面で溝7条、土壇2基、不明遺構1基、柱穴80基を検出した。なお、北端部で検出した谷については、C区と合わせて報告する。

溝(図18・20・21・写真38～41)

SD1～7を検出した。このうち、SD1～4・7は耕作溝で、中世以前の遺構と考えられるのはSD5・6である。SD5の最大幅は154cm、検出面からの深さは最深部で18cm、同溝底の標高は20.22mで、西-東の流路方向を持つ。出土遺物はない。SD6の最大幅は334cm、検出面からの深さは最深部で16cm、同溝底の標高は19.95mで、南東-北西方向の流路方向を持つ。断面形が緩やかであることから谷に伴う落ち込みの一部であった可能性もある。埋土は灰色(7.5Y4/1)シルトで、須恵器胴部片、スラグ片、土師器皿底部片が出土している。

土壇(図19・写真42・43)

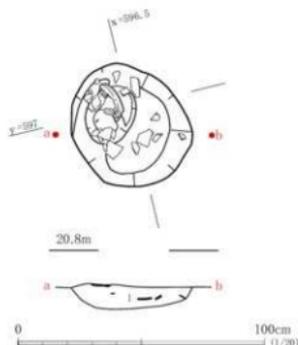
SK2、3を検出した。SK2は直径約49cm、検出面からの深さ約10cmで、底面の標高は20.56m。埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルトと第5～8層とのブロック土である。埋土からは近世の摺鉢片、瓦質土器片が出土している。SK3は谷埋土で検出した。幅約50cm、長さ約68cm、検出面からの深さ約8cm、底面の標高は20.01m。埋土は灰色(2.5Y4/1)シルトである。遺物は出土していない。

柱穴群(図18・20・写真38・39)

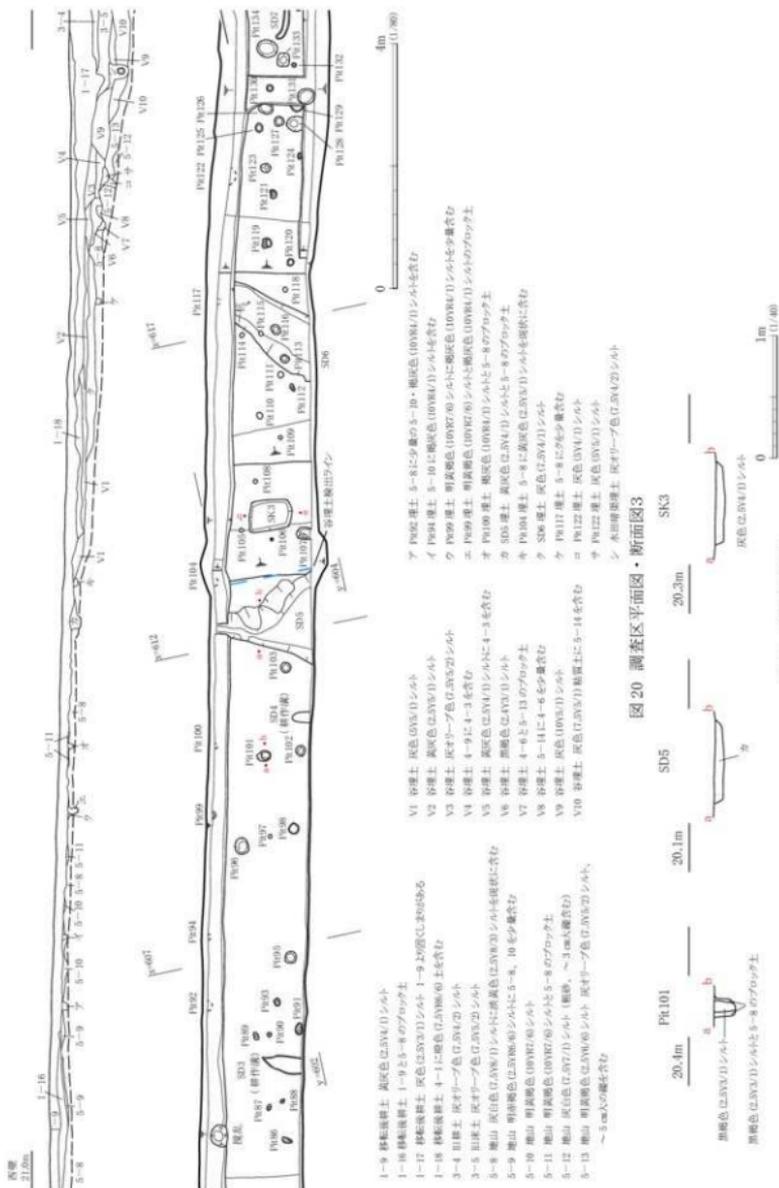
Pit55～134を検出した。直径約10～34cmで、検出面からの深さは10cm以下のものが主体である。いずれの柱穴からも遺物は出土しなかった。なお、谷の中で検出した柱穴はすべて谷埋土除去後に検出したが、色調が谷埋土と近似していたため、谷埋土との前後関係を確認することができなかった。これらの柱穴は削平を受けていること、他遺構の状況から、大半は近世以降に所属する可能性が高い。

【C区】

B区同様、統合移転後は飼料園として利用されていた。調査区は道路新設工事に伴う削削予定範囲にも対応したため、不整形を呈する。南部では第1層の直下で第3層を検出したが、東北部では第3層は残存せず、第1層の直下で第5層を検出しており、統合移転時の削平が顕著であったことがうかがえる。谷埋土はB区北端部のX=614からC区のX=610付近において第3層の直下で検出した。検出標高は



1 黒褐色(2.5Y3/1)シルトと第5～8層とのブロック土
図19 SK2平面図・断面図



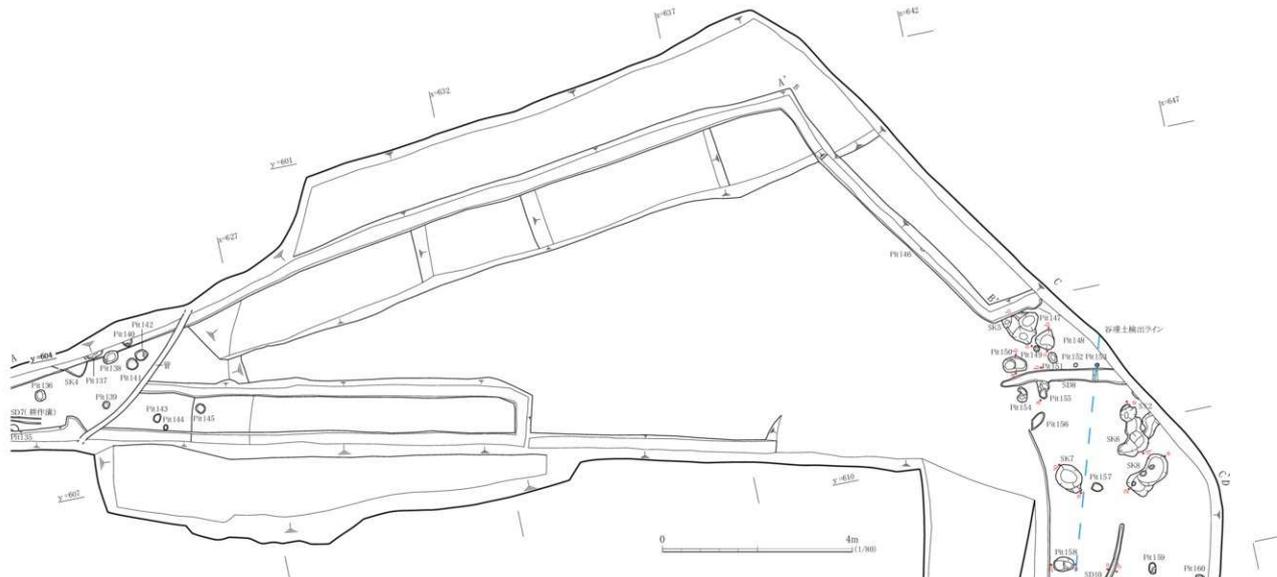
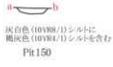
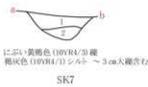


図22 調査区平面図4

19.9m



20.0m



20.1m



20.3m



図23 遺構断面図2

吉田橋内(吉田道路)の調査

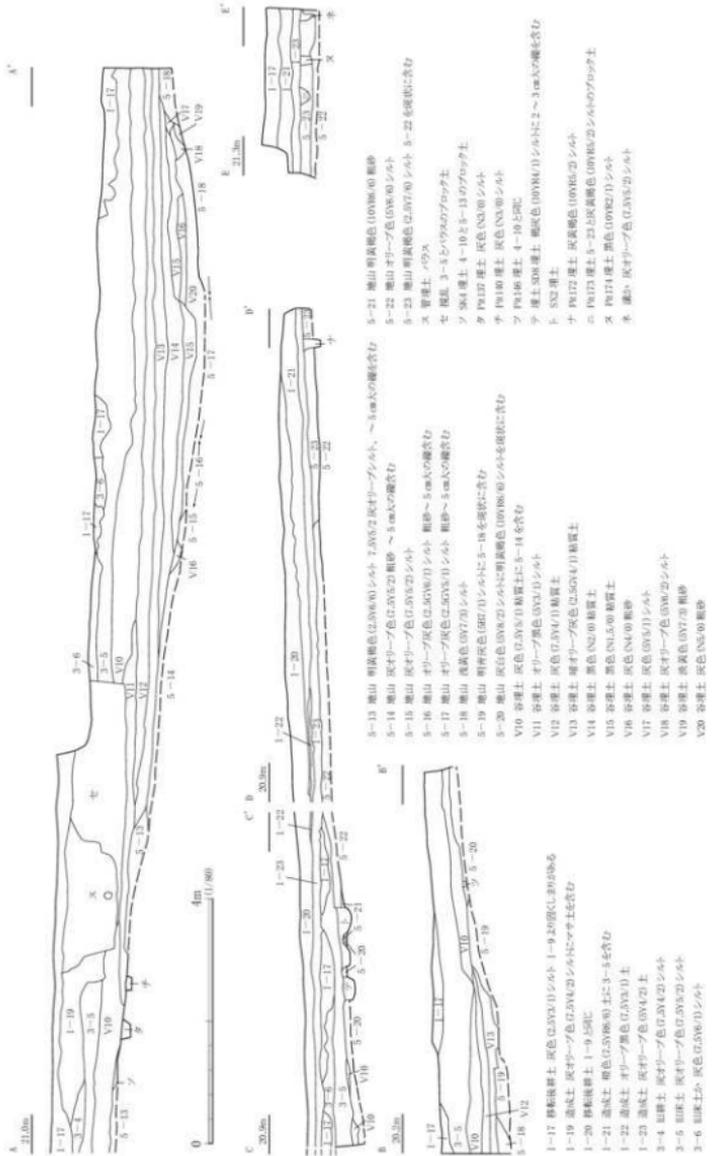


図24 調査区断面図 4

X=614付近で約20.5m、X=640付近で約19.7mである。なお、道路新設工事の掘削深度が谷理土上面付近にとどまることが判明したため、谷理土の掘削は工事掘削深度の深い西壁沿いの配管ラインと東壁沿いの一部でのみ行った。弥生時代以降の遺構面である第5層の検出標高はX-614付近で約20.5m、X-365.6付近(谷最深部)で約18.0m、X-640付近で約19.6mである。谷理土はV-10~20層に分層されるが、このうち、V-10・12~13層からは土師器(坏・椀)、須恵器、緑釉陶器、青磁、鉄釘、砥石が出土している。土器はいずれも小片であるが、瓦質土器を含まない。また、V-14・15層からは底面付近を中心として、古墳時代中期の土師器がまとまって出土している。以上から、古墳時代中期以後、中世にかけて谷の堆積が進行したと考えられる。

第5層上面で検出された遺構は溝6条、上城6基、柱穴40基、不明遺構1基である。なお、北東部では、上層からの染みこみが顕著であったため、遺構面をやや掘り下げた状態で検出した。

溝(図22・23・写真48~50・54)

SD7~12を検出した。このうち、近~現代の耕作溝であるSD7・11・12以外の溝について報告する。SD8は検出長約2.6m、最大幅約30cm、検出面からの深さは最深部で約20cm、同底面の標高は19.5mである。底面レベルはほぼ平坦であるが、北-南方向の流路方向を持つと考えられる。土師器皿の底部小片が出土している。SD9・10は南東-北西方向の流路方向を持つ溝である。SD9は検出長約95cm、最大幅約70cm、検出面からの深さは最深部で約10cm、同底面の標高は19.6mである。須恵器甕の口縁部小片が出土している。SD10は検出長約4.2m、最大幅約24cm、検出面からの深さは最深部で約12cm、同底面の標高は19.79mである。土師器椀の高台部分の小片、須恵器小片が出土している。

SD8~10の時期は不明であるが、恐らく中世の遺構と考えられる。また、付近の柱穴の分布から孤立柱建物の区画溝であった可能性がある。

土壇(図22・23・写真48~53)

SK4~9を検出した。このうち、全形を検出できたのはSK5~8である。SK5は長軸84cm、短軸72cmで、検出面からの深さは15cm、底面の標高は19.26m。SK6は長軸106cm、短軸68cm、検出面からの深さは15cm、底面の標高は約19.5m。溝もしくは土壇と推測されるSX2を切り込んでいる。北側の柱穴状の落ち込みは別遺構の可能性はあるが、断面で識別できなかったため、同一遺構として扱った。SK7は長軸68cm、短軸48cm、検出面からの深さは30cm、底面の標高は19.45m。SK8は長軸96cm、短軸44cm、検出面からの深さは19cm、底面の標高は19.54m。なお、底面からは深さ13~24cmの位置まで杭が3本打ち込まれていた。

遺物は極めて少なく、SK5・7・8及び、SK6に切り込まれたSX2から土師器小片が少量出土しているに過ぎない。しかし、東北部に検出したSK5~9については溝と埋土が近似することから、中世の遺構である可能性が高い。

柱穴群(図22・写真48~50・54)

Pit135~174を検出した。直径約12~42cm、検出面からの深さは4~28cmで、10cmを越えるものが多い。なお、谷の中で検出した柱穴は谷理土除去後に検出したが、B区同様、埋土が近似していたため、谷理土との前後関係を確認できなかった。

Pit159~162はその位置関係から、孤立柱建物の一部である可能性が考えられる。なお、Pit143から近世の磁器口縁部小片、Pit144から土師器微細片が出土しているほかは、遺物は出土していない。恐らく中~近世の柱穴が主体と推測される。



写真33 調査区全景(南西から)



写真34 A区遺構検出状況(南から)



写真35 A区西壁土層断面(南東から)



写真36 A区柱穴半截状況(東から)



写真37 A区Pit42土器出土状況(東から)



写真38 B区SK2付近遺構検出状況(南東から)

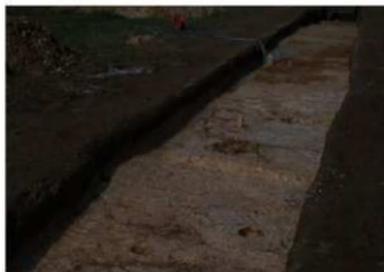


写真39 B区SK2付近遺構完掘状況(南東から)



写真40 B区北端部西壁土層断面(南東から)



写真41 B区SD5土層断面(東から)



写真42 B区SK2土層断面(東から)



写真43 B区SK3土層断面(北から)



写真44 C区調査風景(南東から)



写真45 C区西壁土層断面(南東から)



写真46 C区北東部(南西から)



写真47 C区西端部北壁土層断面(南から)



写真48 C区北東部遺構検出状況(東から)



写真49 C区北東部遺構完掘状況(東から)



写真50 C区SD8他土層断面(北から)



写真51 C区SK6土層断面(南から)



写真52 C区SK7土層断面(北から)



写真53 C区SK8土層断面(南西から)



写真54 C区SD9・10完掘状況(南西から)

(4) 遺物(図25、写真55～57、表4・5)

調査区からは土師器、須恵器、緑釉陶器、輸入磁器(白磁、青磁)、近世国産陶器、砥石、鉄釘等が出土している。遺構出土遺物は少なく、谷埋出土遺物が大半を占める。以下、主要な遺物について報告する。

遺構出土遺物

1はA区Pit24出土の土師器皿で、底面に糸切り痕を持つ。2、3はA区Pit25出土土器である。2は瓦質土器足跡の脚部。3は近世国産陶器の上瓶口縁部で、内外面に透明釉を施す。Pit25からは他に土師器、須恵器の小片が出土している。4は口弁の白磁碗口縁部である。5はPit42出土の土師器皿で、底面に糸切り痕を持つ。6はSK2出土の近世の国産(須佐唐津系か)陶器播鉢である。口縁部を折り曲げて肥厚させる。内面には4条単位の卸目が密に施される。これに類似した播鉢はメディア原墓センター敷地(旧教養部複合棟)第1号井戸からも出土している。SK2からは他に佐野焼の甕と推測される瓦質土器片も出土しているが、いずれも小片で図化できない。7はSD6出土の土師器皿の底部である。風化が激しく調整は不明。

谷埋出土遺物

8～14はV 14・15層出土の土師器である。8は壺の口縁部で口縁部外面にタタミガキ、内面にヨコナデを施す。また、接合面で剥離している。9は壺の口縁～胴部で、口縁部内外面にヨコナデ、胴部内面にケズリを施す。10は小型丸底甕の胴部～底部で、胴部内面にケズリを施す。11は甕の口縁部。口縁部内外面にヨコナデを施す。胴部の調整は摩滅により不明。12～14は高杯の坏部である。内外面に左上がりのハケを施した後ヨコナデを施し、口縁部を折り曲げによって外反させる。12は坏部が直線的に外反し、13は緩やかに外反する。14は坏部下半のみの破片で、脚部との接合面で剥離している。以上の土師器は古墳時代中期(5世紀)頃に比定でき、時期的なまとまりを持つことから、谷埋没の開始時期を示す土器と位置づけられよう。

15～21はV-13層出土土器である。15は弥生時代後期後半～終末期の複合口縁壺の頸部で1条の貼付突帯を持つ。他の土師器と比較して摩滅が目立つことから、混入したものと考えられる。16は古代の土師器甕の口縁部である。17は須恵器甕の胴部である。外面にタタキ、内面にヨコナデを施す。18～20は土師器椀底部である。18は武部がやや外面に張り出し、底面に縦方向の板ナデを施す。19、20は高台を持つ。21は緑釉陶器の底部で、内外面に施釉する。見込みには沈線を1条施し、トチンの痕跡が残る。30はV-13層出土の砥石である。4面を使用し、先端には研磨による縦条痕が顕著に残る。石質は片岩である。

22、23はV-12層出土土器で、高台を持つ土師器椀の底部である。23は外面にヨコミガキを施す。

24～27はV-10・12層出土土器である。24・25は高台を持つ土師器椀の底部。26は緑釉陶器で、内外面に施釉する。高台が剥離しており、風化が激しい。27は龍泉窯系青磁碗の胴部片である。31はV-10・12層出土の鉄釘である。錆が顕著で上部を欠損する。

V-10・12、13層出土土器には瓦質土器が含まれていないことから、V-10層までは瓦質土器が出現するとされる13世紀前半以前に堆積した可能性がある。ただし、時期の判別が困難な土師器小片も見られるため所定はできない。詳細は周辺の調査を含め、今後の検討が必要であろう。

調査区壁面清掃時出土遺物

28は土師器椀の底部である。29は龍泉窯系青磁碗の底部で、見込みに1条の沈線を施す。

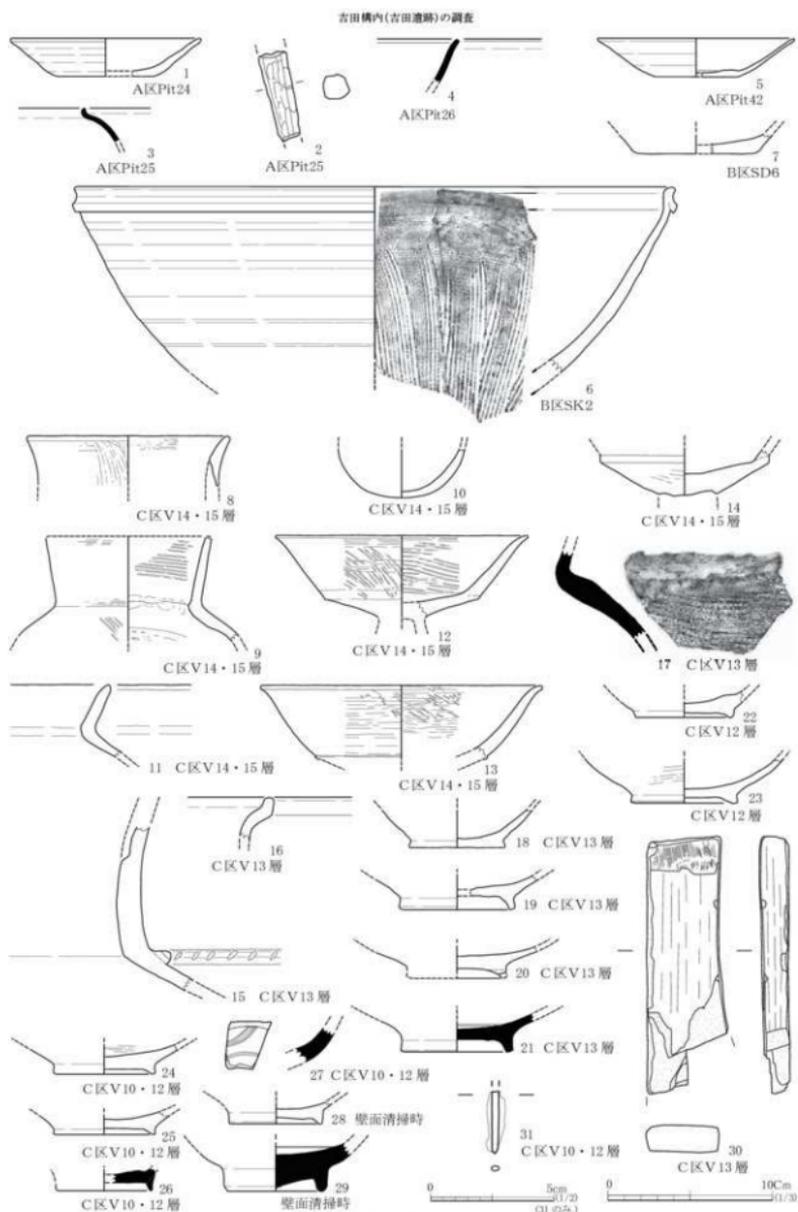


図25 出土遺物実測図

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



1
A区Pit24



3-1
A区Pit25



4-1
A区Pit26



2
A区Pit25



3-2
A区Pit25



4-2
A区Pit26



6-1
B区SK2



6-2
B区SK2



5
A区Pit42



8
C区V-14・15層



9-1
C区V-14・15層



7
C区SD6



10
C区V-14・15層



9-2
C区V-14・15層

写真 55 出土遺物①

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



11
C区V-14・15層



13
C区V-14・15層



17-1
C区V-14・15層



12
C区V-14・15層



14
C区V-14・15層



17-2
C区V-13層



15
C区V-13層



18
C区V-13層



20
C区V-13層



16
C区V-13層



19
C区V-13層



22
C区V-13層



21-1
C区V-13層



23-1
C区V-12層



24
C区V-10・12層



21-2
C区V-13層



23-2
C区V-12層



25
C区V-10・12層

写真 56 出土遺物②

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



26-1

C区V-10・12層



27-1

C区V-10・12層



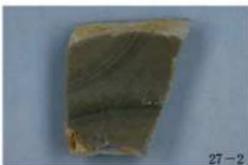
28

C区壁面清掃時



26-2

C区V-10・12層



27-2

C区V-10・12層



31

C区V-10・12層



29-1

C区壁面清掃時



29-2

C区壁面清掃時



30-1



30-2



30-3

C区V-13層

写真 57 出土遺物③

吉田構内(吉田遺跡)の調査

表4 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物番号	地区	遺構	器種	部位	法量(cm)		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
					①口径②底径③器高				
1	A	Pl24	土師器 皿	口縁部 ～底部	①(11.6)②(5.8) ③2.3		①②灰白色(2.5Y8/2)	0.1～1mmの砂粒を含む	
2	A	Pl25	瓦質土器 足輪	脚部			①灰白色(2.5Y8/1)	0.1～1mmの砂粒を含む	
3	A	Pl25	陶器 土瓶	口縁部			素地 灰白色(5Y8/2) 釉 灰白色(5Y8/2)	精良	
4	A	Pl26	白磁 碗	口縁部			素地 灰白色(2.5GY7/1) 釉 オリーブ灰色(2.5GY7/1)	精良	
5	A	Pl42	土師器 皿	口縁部 ～底部	①(6.0)②(5.0) ③3.3		①②淡黄色(2.5Y8/2)	0.1～1mmの砂粒を少量含む	
6	B	SK2	陶器 播鉢	口縁部 ～胴部	①(36.6)		素地にぶい橙色(7.5YR7/3) 釉 灰褐色(7.5YR4/2)	0.1～3mmの砂粒を少量含む	
7	B	SD6	土師器 皿	底部	②(7.8)		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい黄褐色(10YR7/2)	0.1～3mmの砂粒を含む	
8	C	V14・15層	土師器 壺	口縁部	①(12.4)		①②暗灰黄色(2.5Y8/2)	0.1～1mmの砂粒を含む	
9	C	V14・15層	土師器 壺	頸部 ～胴部			①暗灰黄色(5YR6/6) ②にぶい黄褐色(10YR5/3)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
10	C	V14・15層	土師器 壺	胴部 ～底部			①橙色(2.5Y5/2) ②にぶい黄褐色(10YR6/3)	0.1～2mmの砂粒を多く含む	
11	C	V14・15層	土師器 甕	口縁部			①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②灰黄褐色(10YR6/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
12	C	V14・15層	土師器 高坏	坏部	①(15.4)		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1～3mmの砂粒を含む	
13	C	V14・15層	土師器 高坏	坏部	②(17.1)		①浅黄色(2.5YR7/3) ②灰白色(2.5Y8/3)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
14	C	V14・15層	土師器 高坏	坏部			①灰黄褐色(10YR5/2) ②灰黄褐色(10YR4/2)	0.1～4mmの砂粒を少量含む	
15	C	V13層	弥生土器 壺	頸部			①にぶい黄褐色(10YR7/4) ②にぶい橙色(2.5YR7/4)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
16	C	V13層	土師器 甕	口縁部			①②浅黄褐色(10YR8/4)	0.1～3mmの砂粒を含む	
17	C	V13層	須恵器 甕	頸部 ～胴部			①青灰色(5PB5/1) ②青灰色(5PB6/1)	0.1～2mmの砂粒を含む	
18	C	V13層	土師器 椀	底部	②5.8		①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②灰オリーブ色(5Y6/2)	0.1～3mmの砂粒を含む	
19	C	V13層	土師器 椀	底部	②(7.0)		①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②褐色(10YR6/1)	0.1～3mmの砂粒を含む	
20	C	V13層	土師器 椀	底部			①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②灰白色(2.5Y8/2)	0.1～3mmの砂粒を含む	
21	C	V13層	緑釉陶器 椀	底部	②6.8		素地 灰白色(5Y8/1) 釉 暗緑色	精良	
22	C	V12層	土師器 椀	底部	②5.8		①淡黄色(2.5Y8/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/4)	0.1～2mmの砂粒を含む	
23	C	V12層	土師器 椀	底部	②6.4		①淡黄色(2.5Y7/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)	0.1～2mmの砂粒を含む	
24	C	V10・12層	土師器 椀	底部	②6.2		①②灰白色(10YR8/2)	0.1～3mmの砂粒を含む	
25	C	V10・12層	土師器 椀	底部	②6.2		①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②明褐色(7.5YR5/6)	0.1～2mmの砂粒を含む	
26	C	V10・12層	緑釉陶器 椀	底部			素地 淡黄色(2.5Y8/3) 釉 淡緑色	0.1～0.5mmの砂粒を少量含む	
27	C	V10・12層	青磁 碗	胴部			素地 灰色(N7.0) 釉 オリーブ灰色(10Y4/2)	精良	龍泉窯系
28	C	聖面清掃時	土師器 椀	底部	②5.7		①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1～1mmの砂粒を含む	
29	C	聖面清掃時	青磁 碗	底部	②(6.3)		素地 灰白色(5Y7/1) 釉 オリーブ灰色(10Y5/2)	精良	龍泉窯系

表5 出土遺物(石器・鉄器)観察表

遺物番号	地区	遺構	器種	法量(cm)	重量(g)	材質	備考
30	C	V13層	砥石	最大長15.8 最大幅5.0 最大厚1.8	265.3	片岩	4面使用
31	C	V10・12層	釘	最大長2.5 最大幅0.3 最大厚0.2	1.6	鉄	一部欠損

(5) 小結

今回の調査において、A区では中世～近世の柱穴を多数検出した。A区の状況から、調査区に隣接する駐車場では遺構が濃密に分布していることが予測されるため、今後の開発行為にあたっては、埋蔵文化財の保護に注意が必要である。

B区では北端部を除き、統合移転時に大規模な削平を受けていることが判明した。検出した遺構の大半は近世以降のものと考えられる。また、B区の状況から、B区西部に隣接する空地も一定程度の削平を受けている可能性が高い。

B区北端部からC区にかけては谷を検出した。谷は学生会館敷地・第2・4項で報告する新教育棟敷地から連なるもので、調査区西側へさらに広がっていることを確認できた。谷理上のV-14・15層からは古墳時代中期の土師器がまとまって出土していることから、谷の埋没は古墳時代中期に始まると考えられる。一方、谷理上の上部は一定の削平を受けていると考えられるため、埋没完了時期は不明である。ただし、V-13層～V-10層までの出土土器には瓦質土器が含まれていなかったことから、V-10層までは13世紀前半以前に堆積した可能性が考えられる。

C区東北部においては溝、土壇、柱穴を検出した。これらの遺構は中世に属すると考えられるが、出土土器が少量であるため、詳細な時期、遺構の性格は不明である。今後周辺の調査を踏まえた検討が必要であろう。

なお、C区における道路新設工事においては、工事掘削深度が谷理上の上面付近にとどまることから判明したこと、谷以外に顕著な遺構が検出されなかったことから、それ以上の掘削は行わず、工事施工時に立会調査を行うことになった。

【註】

- 1) 河村吉行(1990)「付録Ⅱ 吉田橋内本部2号館新営に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報X』,山口
- 2) 豆谷和之(1996)「付録Ⅰ 吉田遺跡第1地区D区の調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報XⅡ』,山口
- 3) 河村吉行(1985)「第7章 吉田橋内学生会館敷地水管布設に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報Ⅳ』,山口
- 4) 河村吉行(1988)「第5章第1節4 農学部附属農場B7区場排水管布設およびB6置場進入路拡幅に伴う立会調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報Ⅶ』,山口
- 5) 豆谷和之(1993)「第2章 吉田橋内本部蔵給水管布設に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報XⅢ』,山口
- 6) 前掲223
- 7) 河村吉行(1988)「吉田橋内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報Ⅷ』,山口
- 8) 岩崎仁志(2007)「北島西部における中世の土製煮沸具—灰函・灰門を中心に—」『中世土器の基礎研究21』,高橋(大阪)
- 9) 河村吉行(1985)「吉田橋内学生会館新営に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口
- 10) 前掲註8

4. 新教育棟新営工事に伴う本発掘調査

調査地区 吉田橋内M・N 11・12区
 調査面積 約1333㎡
 調査期間 平成21年2月17～平成21年4月24日
 調査担当 山畑直彦
 調査結果

(1) 調査の経緯(図26)

第2項で報告したように、予備発掘調査の結果を埋蔵文化財資料館専門委員会(平成20年12月10日開催)で協議した結果、建設計画の大幅な変更が困難であるため、盛土部分を除く敷地の大半について本発掘調査を行うことになった。

(2) 調査の経過

予備発掘調査では各調査区から多数の柱穴・溝、土壌が検出されたことから、掘立建物等の遺構が多量存在することが予想された。本発掘調査ではこれらの遺構の調査を優先するため、遺物包含層・谷堆積土については遺構が確認された箇所を除き、機械による掘削を行った。

調査は前項で報告した設備関連工事に伴う本発掘調査終了後の翌日、2月17日に開始し、併行して造成上の厚い調査区南壁における欠板の設置作業を2月18～21日にかけて行った。また、地形に沿って遺構が分布することが予想されたため、真北から約45°東に傾く軸を基準とした地区設定を行い、機械掘削終了後、3月10日に杭の設置作業を行った。機械掘削は造成土・耕土が薄い調査区北東部は比較的順調に進んだ。しかし、造成土の厚い調査区西部では、使用したクローラーダンプの運搬量が限られていたこともあり、掘削が滞った。

遺構の検出、掘削、実測作業は標高の高い調査区北東部から西へ向かって順次行い、4月17日までにはほぼ終了した。以後、4月18日に空掘・空測を行い、4月20～24日に埋め戻し作業を行った。

(3) 基本層序(図29～32、写真65～75)

基本層序は下記の通りである。

- 第1層 表土(現耕土)
- 第2層 造成土
- 第3層 Ⅲ耕土及び床上
- 第4層 遺物包含層(調査区北東部のみ)
- 第5層 地山(弥生時代以降)

調査区は姫山の支脈から振り出す洪積段丘の西側傾斜面に位置する。現地表においても、調査区北東部では標高約24.2m、調査区南西部では標高約21.2mで、約3mの高低差がある。統合移転前までは棚田であったため、調査区北東部では地山が段状に造成されていた。また、統合移転時の造成では、標高の低い調査区西側を埋め立てたため、調査区南西部においては第2層の厚さが1.3～1.4mに達している。第3層は調査区全面で確認された。第4層は調査区北東部でのみ確認した。谷埋上である可能性もあるが、棚田の造成により土層の連続性が確認できなかったため、遺物包含層としてとらえた。



図26 調査区位置図

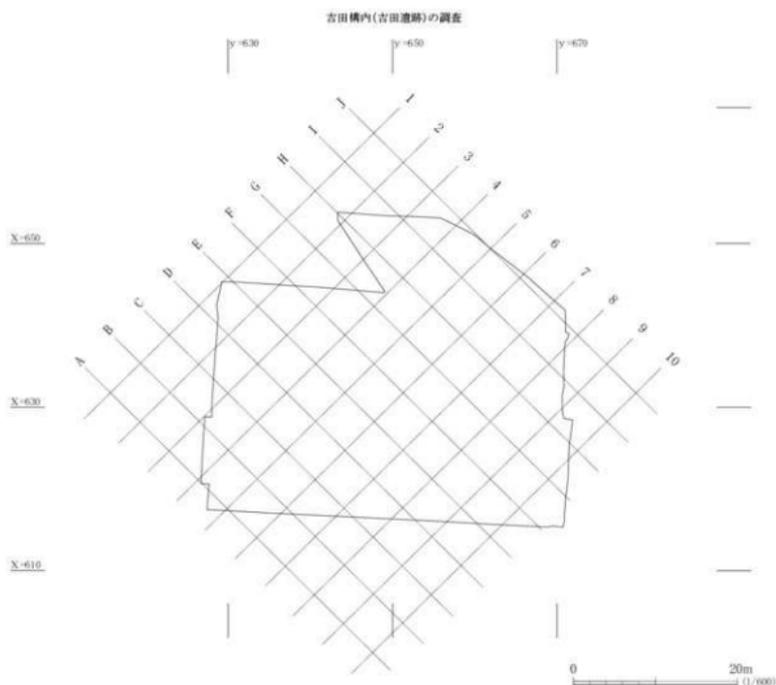


図 27 調査区設定図

谷埋土は第2・3項同様、V層としている。V層は調査区北壁では、I-I'断面東端のY-649以西、調査区南壁ではY-661.2以西で検出している。棚田の造成による削平を受けているため、本来はさらに東に広がっていたと考えられる。谷は調査区中央部において、X=625以南、Y=636~650付近において楕円状に落ち込んでいる。最深部のSU1南側における標高は約18.9mで、北部と約2m、東部と約2.2m、西部と約1.5mの標高差が認められた。この付近のV層の層厚は最大で約110cmである。V-5~V-8層までの出土上器には13~16世紀の瓦質上器片を多数含んでいたが、以下の上層からは出土せず、時期差が認められた。そこで、V-8層までを上層、以下を下層として記述を進める。下層うち、地山直上の最下層では粗砂層も多く認められた。また、黒色シルト・粘質土からは木製品が多数出土しており、流水状態から滞水状態となって堆積が進行した状況がうかがえる。また、下層のV-17層は北側ほど色調が淡くなる。その変化が漸移的であるため分層することができなかったが、第2項で報告した予備発掘調査区B調査区西部では、同一層から足鍋口縁部が出土していることから、本来は分層できた可能性が高い。上層は灰色シルト・褐色シルトを主体としており、砂層はない。下層堆積後の流れ込みにより堆積したものと考えられる。地山である第5層は、調査区北東部では黄褐色もしくは橙色系シルトが主体であるが、調査区南西部においては灰色系の色調で、粗砂や5cm程度の礫を含むものが多い。

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



図 28 調査区平面図



- 2-4 礫土 オリーブ褐色 (G55.2) 土まき-16のブロック土
- 2-5 礫土 オリーブ褐色 (G55.0) 土まき-3-16のブロック土
- 2-6 礫土 ヤマト土-1のブロック土
- 3-16 粗粒土 オリーブ褐色 (G55.0) シェルト
- 3-17 粗粒土 灰オリーブ褐色 (G55.3) シェルト
- 3-18 粗粒土 オリーブ褐色 (G55.3) シェルト
- 3-19 粗粒土 灰オリーブ褐色 (G57.0) シェルト
- 3-20 粗粒土 緑灰色 (G50.5) シェルト
- 3-21 粗粒土 灰オリーブ褐色 (G55.2) シェルトと土まき-20のブロック土
- 3-22 粗粒土 暗緑灰色 (G55.0) シェルト
- 3-23 粗粒土 オリーブ褐色 (G50.5) シェルト
- 3-24 粗粒土 灰オリーブ褐色 (G55.2) シェルト
- 3-25 粗粒土 オリーブ褐色 (G56.5) シェルト
- 3-26 粗粒土 灰土 (G55.0) シェルト
- 3-27 粗粒土 3-19と同じ
- 5-9 礫土 灰オリーブ褐色 (G56.2) シェルト
- 5-10 礫土 灰土 (G55.0) シェルト
- 5-11 礫土 灰土 (G55.0) シェルト
- 5-12 礫土 暗灰色 (G55.0) シェルト
- 5-13 礫土 灰土 (G57.0) シェルト 灰黄色 (G55.3) シェルトと
原状に含む 粗砂、～2m Aの層を含む
- 5-14 礫土 暗灰色 (G55.6) 粗砂
- 5-15 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-16 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-17 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-18 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-19 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-20 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-21 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-22 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-23 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-24 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-25 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-26 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-27 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-28 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-29 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-30 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-31 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-32 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-33 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-34 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-35 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-36 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-37 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-38 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-39 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-40 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-41 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-42 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-43 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-44 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-45 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-46 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-47 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-48 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-49 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-50 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-51 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-52 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-53 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-54 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-55 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-56 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-57 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-58 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-59 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-60 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-61 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-62 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-63 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-64 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-65 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-66 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-67 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-68 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-69 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-70 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-71 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-72 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-73 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-74 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-75 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-76 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-77 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-78 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-79 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-80 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-81 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-82 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-83 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-84 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-85 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-86 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-87 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-88 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-89 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-90 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-91 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-92 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-93 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-94 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-95 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-96 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-97 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-98 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-99 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト
- 5-100 礫土 暗灰色 (G56.6) シェルト

図 30 調査区断面図 2

吉田橋(吉田道路)の調査

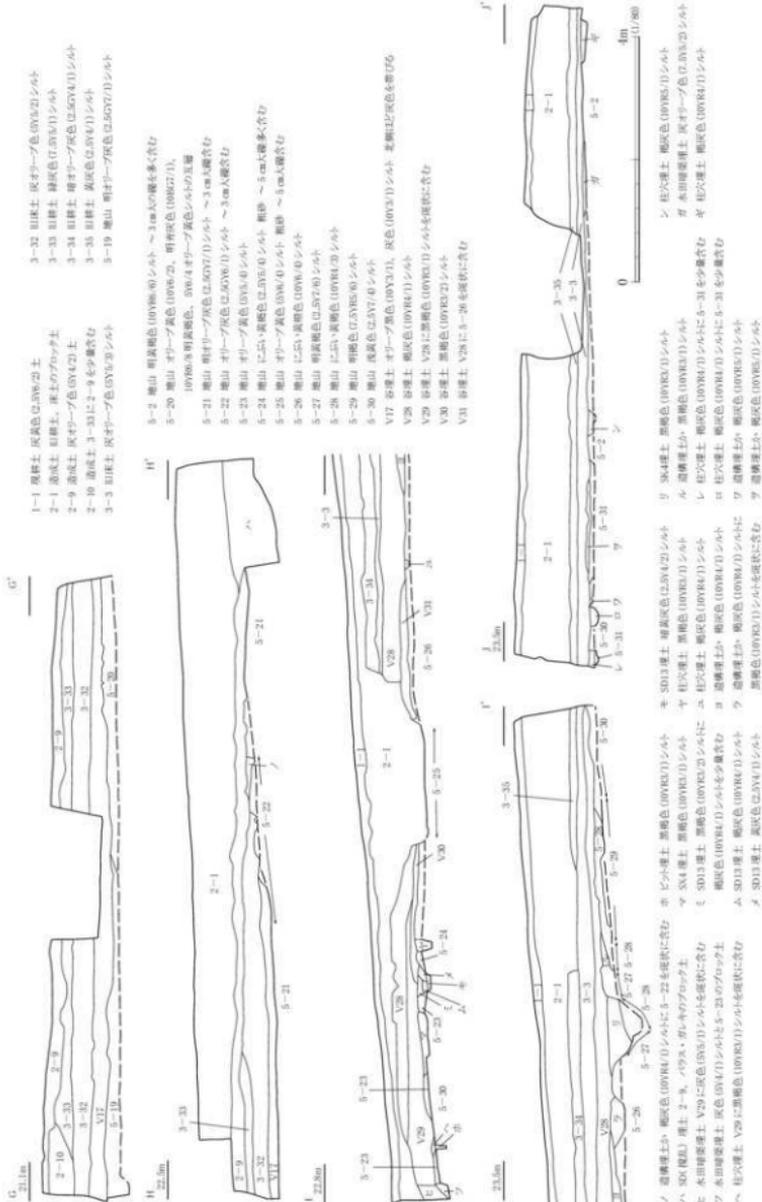


図 32 調査断面図面 4

(4) 遺構(図28、図33～49、写真60～64、76～112)

調査区においては縄文時代の貯蔵穴1基、時期不明のものを含むが、11～16世紀を主体とする掘立柱建物跡19棟、溝18条、井戸2基、土壇18基、不明遺構4基、柱穴約700基を検出した。また、統合移転直前まで存在した棚田に伴う水田暗渠群、井戸1基、統合移転後に掘削された攪乱溝などを検出した。なお、調査時において、遺構は各地区ごとに番号を付していたが、報告にあたり、柱穴を除く遺構については通し番号を付した。以下、順を追って報告する。

【縄文時代の遺構】

SU1(図33・写真76)

今回検出した唯一の縄文時代の遺構である。谷が楕円状に落ち込む1～6区北斜面に位置する。直径約85cm、検出面からの深さ約55cm、底面の標高は19.35mである。遺構検出前に降雨により谷の斜面が崩落して埋土の一部が流失した上、谷清掃時に埋土がぬかるんだ状態で踏み込むなどしてしまったため、遺構検出後、上層断面は底部付近でしか確認することができなかった。確認できた限り、失われた埋土の大半は黒褐色(2.5Y3/1)シルトであった。同層からはドングリのほか、縄文時代晩期の深鉢胴部片が1点出上している。

【中世の遺構】

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は調査区北東部を中心に19棟検出した。水田暗渠、統合移転後の攪乱により少なからず削平をうけているため、実際にはさらに多くの掘立柱建物跡が存在したと考えられる。建物の棟方向は地形の制約を受けているため、北西～南東に棟方向を持つものが多い。国土地理院の北を基準とすると、これらは①N36°～42°WであるSB3～6、10～13、15～17と、②N49°～55°WであるSB1、7、14、19に大別できる。一方、北東～南西に棟方向を持つものは、③N50°～55°EのSU2、9と、④N38°EのSB8、18に大別される。よって、掘立柱建物跡は棟方向がほぼ直交する①と③、②と④からなるグループに分けることができる。

前者のグループの柱穴からは11～16世紀の瓦質土器片が出上している。一方、後者のグループの柱穴からは、土師器碗、皿、須恵器片等が出土するが、瓦質土器片を含まない。以上を考慮すると、両グループは建物の時期を反映している可能性がある。ただし、同方向もしくは直交する棟方向の掘立柱建物跡が重複する箇所が多い。また、建物間の距離を考慮すると、さらに小時期が存在したのは確実に、19棟のうち、同時期に存在した掘立柱建物跡は少なかつたと推測される。なお、各掘立柱建物からは、遺物が出土していないか極めて少ないものが多いため、詳細な時期比定は困難である。以下、各掘立柱建物跡について報告する。



- 1 黒褐色(2.5Y3/1)シルト 取含む
- 2 黄褐色(2.5Y6/1)シルト 取、明黄褐色(2.5Y7/6)シルト(埋土)を含む

図33 SU1平面図・断面図

SB1(図34・写真61)

調査区外へ広がるため、全体規模は不明であるが、桁行3間(6.5m)以上、梁行1間(2.1m)、床面積13.7㎡以上の規模を持つ。棟方向はN49°Wである。各柱穴の規模は直径約26～40cmで他と比較してやや大きい。柱穴埋土は他が褐灰色(10YR4/1)シルトが主体であるのに対して、黒褐色(10YR3/1)シルトのもの(1-3区Pit2・5、1-4区Pit1)も見られる。1-4区Pit4から土師器片が2点、須恵器片が各1点出土しているほか、出土遺物はない。柱穴の規模、埋土、出土遺物から、古代以前に位置づけられる可能性がある。

SB2(図34・写真61)

桁行2間(3.8m)、梁行1間(2.2m)、床面積は8.36㎡を測る。棟方向はN55°Eである。H-4区Pit6から龍泉窯系青磁碗片、土師器、須恵器小片、H-5区Pit5から瓦質土器片が出土している。

SB3(図34・写真62)

南東隅の柱穴は水田暗渠により破壊されたと考えられる。桁行2間(4.2m)、梁行1間(2.5m)、床面積は10.5㎡に復元できる。棟方向はN37°Wで、SB4～7と重複する。G-6区Pit4から摩滅した土師器碗底部片、土師器片、G-6区Pit2から土師器皿口縁部小片が出土している。

SB4(図35・写真62)

桁行2間(3.9m)、梁行1間(2.1m)、床面積は8.19㎡を測る。棟方向は、N37°Wで、SB3・5～7と重複する。G-6区Pit15では柱が残存していた。柱穴からの出土遺物はない。

SB5(図35・写真62)

南東隅の柱穴は溝群7、II 6区Pit16が重複しているため、確認できなかった。桁行1間(3.0m)、梁行1間(2.1m)、床面積は6.3㎡に復元できる。棟方向はN38°Wで、SB3～4・6・7と重複する。G-5区Pit1から瓦質土器胴部片、G-5区Pit8から土師器片が出土している。

SB6(図35・写真62)

梁行南側柱穴の一部が水田暗渠により破壊されている。桁行2間(4.8m)、梁行2間(3.8m)、床面積は18.24㎡に復元できる。棟方向はN42°Wで、SB3～5、7と重複する。G-6区Pit7から土師器片、G-6区Pit6から土師器微細片が出土している。

SB7(図36・写真62)

南東隅の柱穴は水田暗渠により破壊されたと考えられる。桁行2間(4.8m)、梁行2間(4.7m)、床面積は22.6㎡に復元できる。棟方向はN52°Wで、SB3～6・8と重複する。G-5区Pit13から土師器皿底部、G-5区Pit14からは土師器片、須恵器片が出土している。

SB8(図36・写真62)

北西隅の柱穴は水田暗渠により破壊されたと考えられる。桁行3間(5.5m)、梁行1間(3.6m)、床面積19.8㎡に復元できる。棟方向はN38°EでSB7と重複する。F-5区Pit2、F-6区Pit1から土師器片、須恵器片が出土している。

SB9(図35・写真63)

桁行2間(3.9m)、梁行1間(3.2m)で、建物中央にも柱穴を有する。床面積は12.48㎡である。棟方向はN50°Eで、SB10と重複する。柱穴からの出土遺物はない。

SB10(図37・写真63)

桁行2間(3.7m)、梁行2間(2.9m)、床面積10.73㎡を測る。棟方向はN42°Wで、SB9と重複する。G-7区Pit6から瓦質土器鉢鉢口縁部、G-8区Pit11から土師器片が出土している。

SB11(図37・写真63)

桁行西側中央の柱穴は攪乱により破壊されたと考えられる。桁行2間(5.1m)、梁行2間(3.6m)、床面積18.36㎡を測る。棟方向はN36°WでSB12・13と重複する。F-8区Pit14から土師器片が出上している。

SB12(図38・写真63)

梁行西側の柱穴は攪乱により破壊されたと考えられる。桁行2間(5.4m)、梁行2間(3.6m)、床面積19.44㎡に復元できる。棟方向はN37°Wで、SB11・13と重複する。柱穴からの出土遺物はない。

SB13(図38・写真63)

梁行西側の柱穴は攪乱により破壊されたと考えられる。梁行西側は判然としませんが、桁行3間(4.8m)、梁行2間(3.0m)、床面積14.4㎡に復元できる。棟方向はN40°Wで、SB11、12と重複する。F-7区Pit9、G-8区Pit6から土師器片が出上している。

SB14(図39・写真61)

一部が調査区外であるが、桁行4間(8.9m)、梁行1間(北西部)/2間(南西部・3.7m)、床面積32.93㎡に復元できる。棟方向はN50°Wで、SB15・16と重複する。

棚田の造成により桁行西側を中心に削平を受けているが、桁行東側の柱穴は直径約43～52cmとやや規模が大きい。柱穴からは、H-4区Pit9から土師器片が1点出土しているのみである。

SB15(図39・写真61)

一部が調査区外であるが、桁行3間(9.1m)、梁行2間(4.4m)で、桁行南西面に庇(1.04m)を持つ。床面積は40.04㎡に復元でき、今回検出した中で最大の掘立柱建物跡である。棟方向はN36°Wで、SB14・16と重複する。G-2区Pit9から土師器碗底部片、G-3区Pit11から土師器皿口縁部片、G-3区Pit16から須恵器、土師器片、H-3区Pit12から土師器片、F-3区Pit6から土師器椀口縁部・底部片が出上している。

SB16(図40・写真61)

一部が調査区外であるが、桁行3間(8.4m)、梁行1間(3.4m)、床面積28.6㎡に復元できる。棟方向はN39°WでSB14・15と重複する。柱穴からの出土遺物はない。

SB17(図40・写真64)

E-F-3・4区に位置する。桁行2間(4.6m)、梁行2間(3.4m)、床面積15.64㎡を測る。棟方向はN40°Wである。F-3区Pit9から土師器片、F-4区Pit16から須恵器片、F-4区Pit17から土師器、須恵器片が出上している。

SB18(図41・写真64)

E-3・4区、D-4区に位置する。桁行2間(5.0m)、梁行2間(3.7m)、床面積18.5㎡を測る。棟方向はN38°Eである。D-4区Pit3から土師器片が出上している。

SB19(図41・写真64)

北西隅の柱穴は棚田による造成で破壊されたと考えられる。桁行2間(4.7m)、梁行4.2m、床面積19.74㎡の総柱建物に復元できる。棟方向はN51°Wである。D-3区Pit2から焼土塊、E-3区Pit2から土師器碗底部片、土師器片が出上している。

吉田橋内(吉田道路)の調査

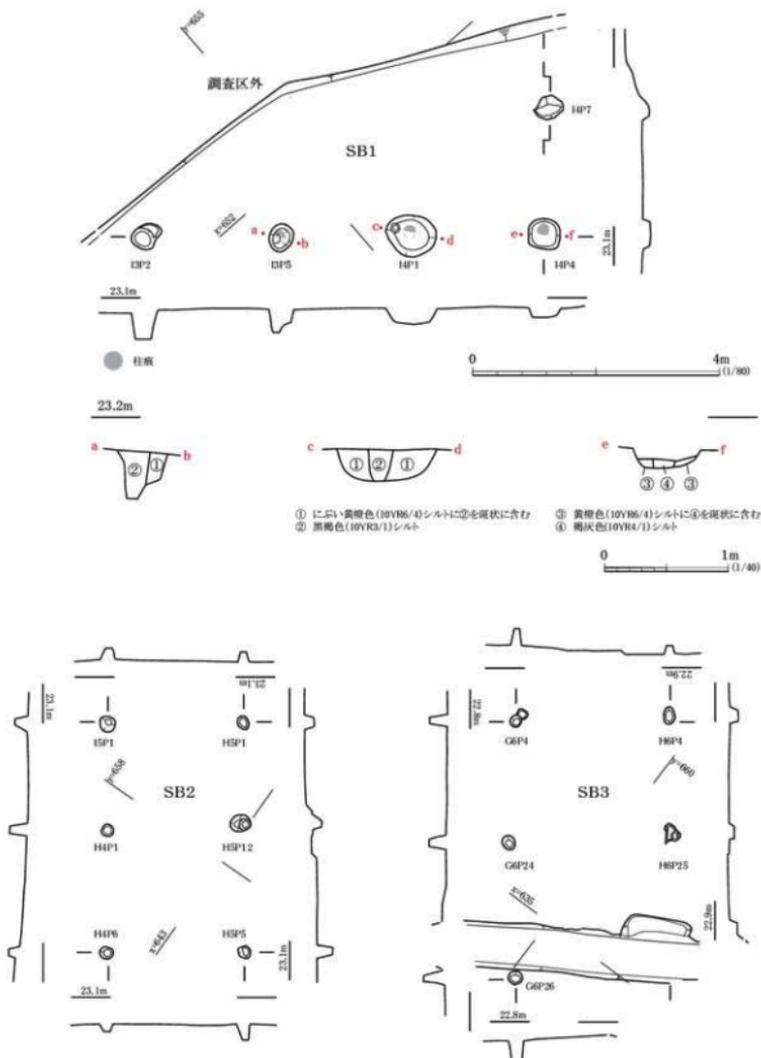


図 34 SB1~3平面図・断面図

吉田橋内(吉田道路)の調査

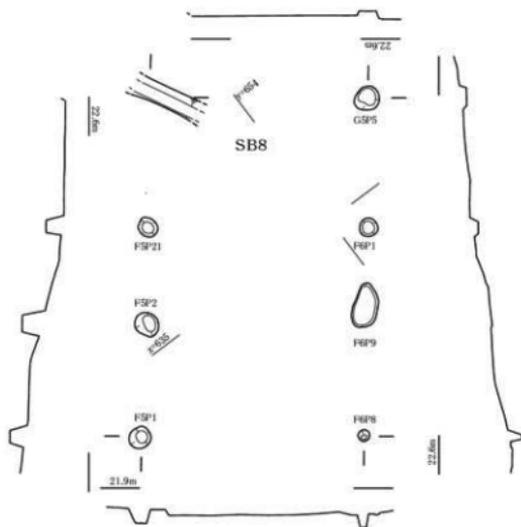
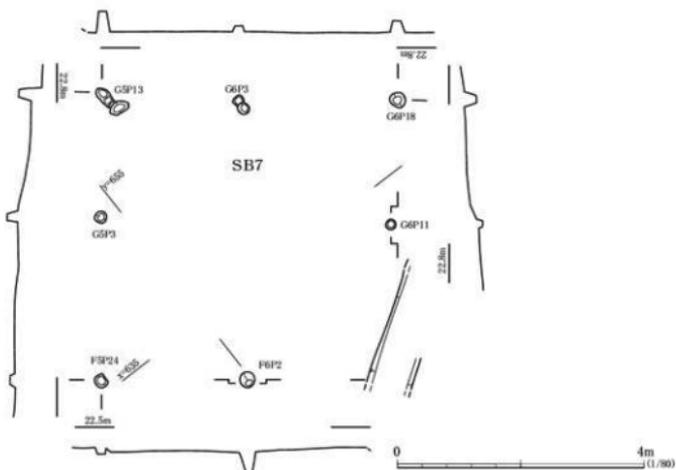


図 36 SB7・8平面図・断面図

吉田橋内(吉田道路)の調査

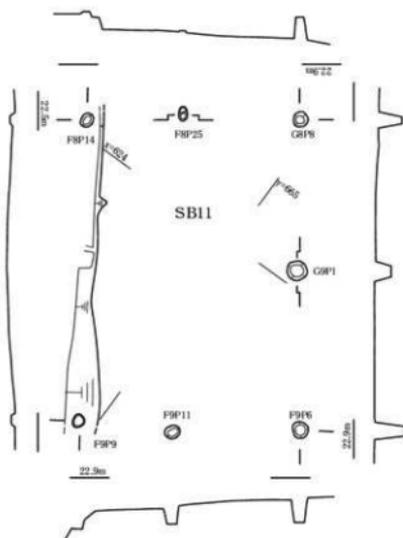
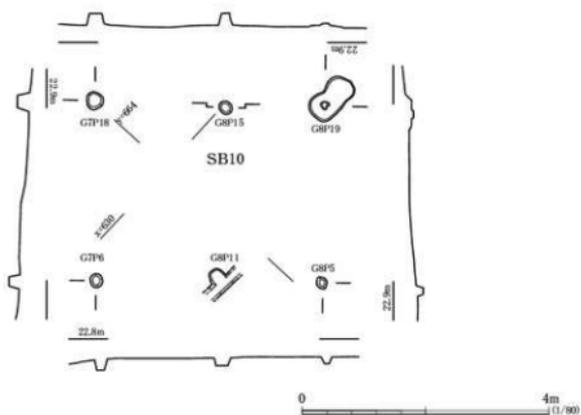


図 37 SB10・11 平面図・断面図

吉田橋内(吉田道路)の調査

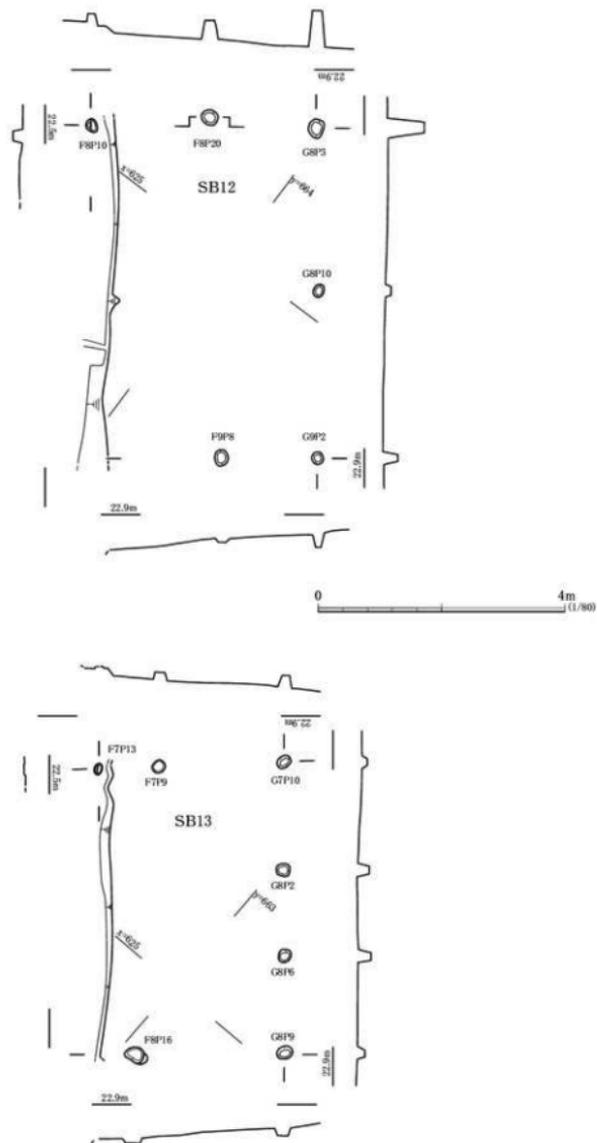


図 38 SB12・13 平面図・断面図

吉田橋内(吉田道路)の調査

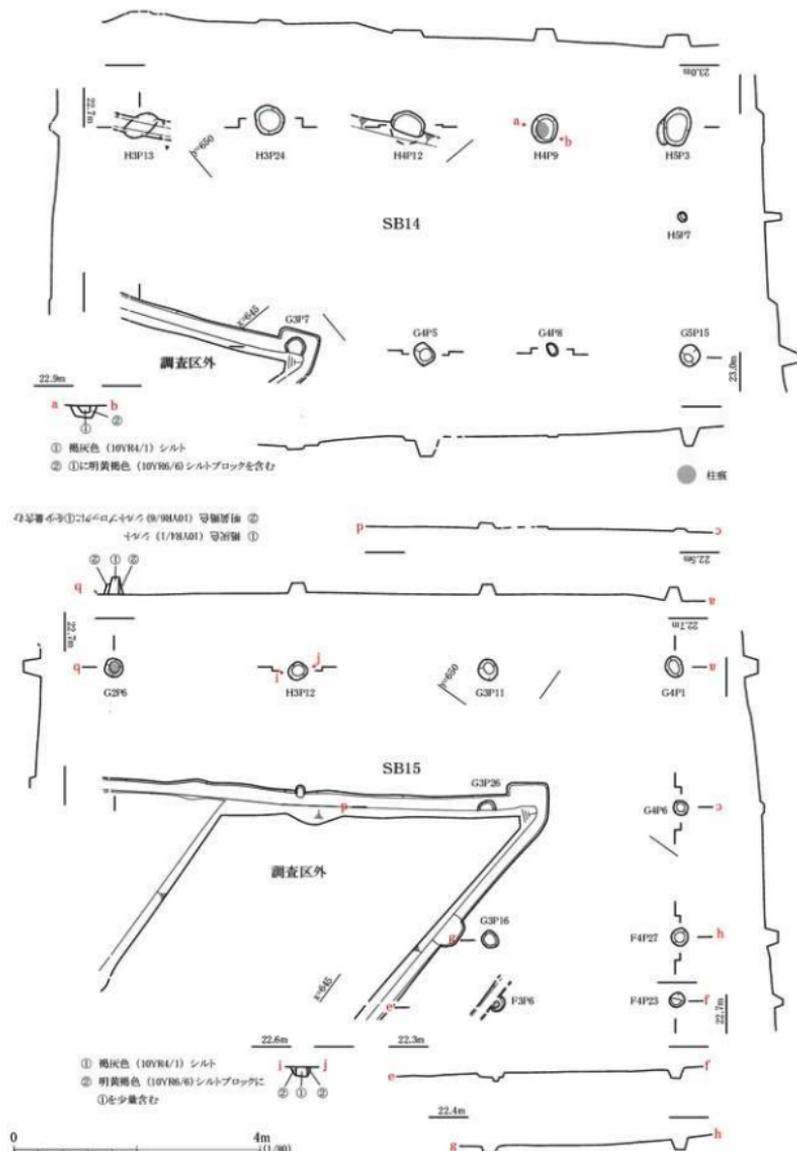


図 39 SB14・15 平面図・断面図

吉田橋内(吉田道路)の調査

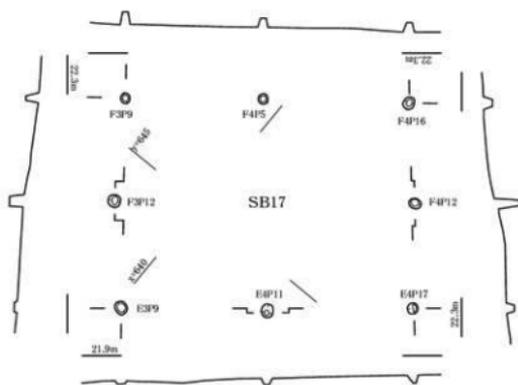
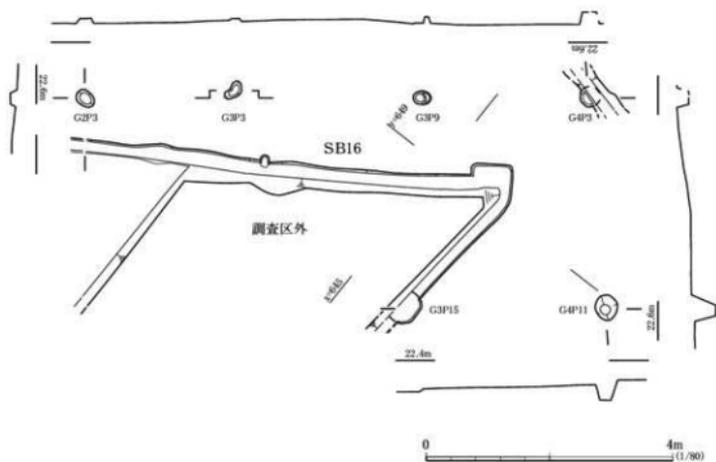


図 40 SB16・17 平面図・断面図

吉田橋内(吉田道路)の調査

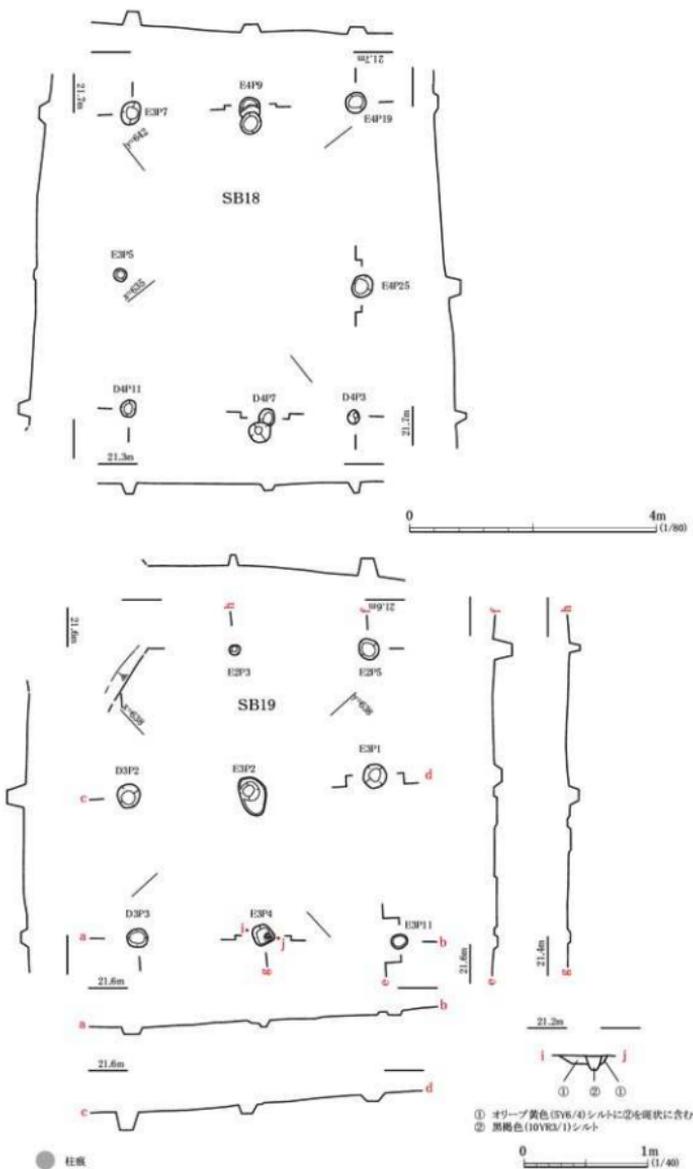


図41 SB18・19平面図・断面図

溝

溝群、溝18条が検出された。以下、主要な溝について報告する。いずれの溝からも出土遺物は少ない。遺物が出土している溝埋土には土師器片、須恵器片、瓦質土器片、白磁片など時期幅のある遺物を含むが、近世以降の土器は出土していない。以上から、溝の所属時期は主に14～16世紀と考えられるが、詳細は不明である。

溝群(図42・写真81～85)

SB3～9周辺において、溝が多数検出された。しかし、棚田造成及び水田時渠による削平により、これらの溝は複数箇所で途切れた状態であった。このため、これらの溝が本来連続するものか、別のものなのかを含め、元の形状を明らかにすることができない。以上の事情により、以下の報告ではこれらの溝を溝群として一括し、検出した溝に番号を付して報告を行う。

検出された溝は1、3～6、7、4・8～10、11～14、15、16～19の6列でほぼ併行する。比較的残りのよい8北端から10南端までの長さは約14.2mである。流路方向は北東～南西で溝群8北端の溝底検出高は約22.8m、溝群10南端の溝底検出高は約22.6mである。埋土は灰色系シルトに地山を含む単一層で、検出面から溝底までの深さは約2～14cmである。溝の埋土のうち、2・9から土師器、須恵器片、4から土師器碗底部片、須恵器片、瓦質土器足鋤、同揃鉢の口縁部片、11から土師器片、12、13から瓦質土器底部片が出土している。以上の土器はいずれも小片・少量のため、時期を判断する根拠に乏しいが、4、12における瓦質土器片の存在から14～16世紀に属するものが多いと推測される。

検出された溝はいずれも主軸方向がSB3～6と近似するほか、4は後述するSD2、4と同様にL字状に屈曲する。また、溝群周辺にはSB3～6の他、柱穴が密集しており、溝を切る柱穴や溝埋土の下から検出された柱穴も見られる。以上から、検出された溝は掘立柱建物に合わせて掘削された区画溝であった可能性が高い。

SD1(図43・写真87)

調査区の北部、SB1の南側に位置し、南端部は途切れた状態で検出した。検出長は239cm、幅約10～17cmで、検出面からの深さは約3cm。溝底の標高は北部で22.69m、南部で22.72mである。埋土から土師器片が出土している。

SD2(図43・写真89)

調査区の北東壁西側に位置する。北部、南部の一部が水田暗渠により破壊されている。北部の一部がL字状に屈曲する。検出長は303cm、幅33～107cmで、検出面からの深さは1～6cm。溝底の標高は北部で23.79m、南部で23.82mである。埋土からは土師器碗片、瓦質土器片が出土している。その形状から掘立柱建物の区画溝であった可能性が高い。

SD3(図43・写真63)

調査区東部、SB9・10の南東側に位置し、南端部は途切れた状態で検出した。検出長は305cm、幅約34～58cmで、検出面からの深さは3～6cmである。溝底の標高は北部で22.68m、南部で22.66mである。瓦質土器足鋤口縁部片が出土している。

SD4(図43・写真88)

調査区南東部、SB11～13の東側に位置する。L字状に屈曲する溝で、各先端部は途切れた状態で検出したほか、屈曲部をSK11に切られる。検出長は578cmで、幅約5～60cm、検出面からの深さは2～14cm。溝底の標高は北部で22.54m、南部で22.47mである。埋土からは土師器片、須恵器片、瓦質土器足鋤口縁部、白磁碗底部片が出土している。SB11～13とは約42～78cmしか離れていないことから関連は

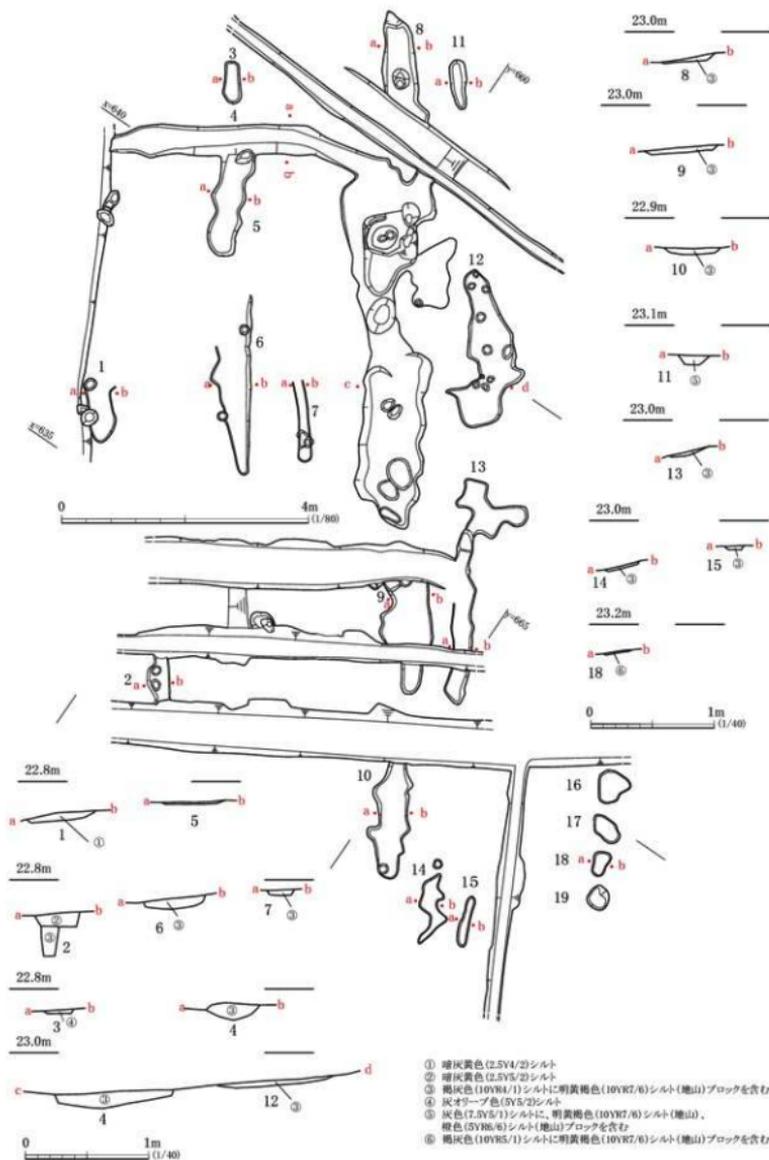


図 42 溝群平面図・断面図

考えにくい、約5.4m南西側にはSE2も存在することから、掘立柱建物、井戸等の施設を囲む区画溝であった可能性が高い。

SD5(図43・写真72)

調査区の南東部に位置し、南部は調査区外となる。検出長は450cmで、幅約20～52cm、検出面からの深さは5～13cm。溝底の標高は北部で21.95m、南部で21.98mである。埋土からは瓦質土器片、土師器皿底部片が出土している。

SD6(図43・写真72)

調査区の南東部に位置し、南部は調査区外となる。検出長は280cmで、幅約32～45cm、検出面からの深さは3～13cm。溝底の標高は北・南部で21.55m、中央付近(e-f断面)で21.47mである。埋土からは瓦質土器片、土師器皿底部片が出土している。

SD7(図43・写真90)

調査区の東部、SD3の東側に位置する。検出長は120cmで、幅約16～33cm、検出面からの深さは12cm。溝底の標高は22.76mである。埋土から瓦質土器片が1点出土している。

SD8(図43・写真88)

調査区の南東部、SD4の南西側に位置する。検出長は180cmで、幅約24～55cm、検出面からの深さは2～10cm。溝底の標高は22.49～22.53mである。埋土から瓦質土器片が1点出土している。

SD9(図44・写真92)

調査区の中央部SB17と18の間に位置する。北部が土壇状に落ち込むが埋土は南部と同一であった。検出長は340cmで、幅約19～72cm、検出面からの深さは5～24cm。溝底の標高は22.19～22.40mである。北部から、弥生土器もしくは土師器と考えられる胴部片が出土している。

SD10(図44・写真64)

調査区中央部、SB18の南東側に位置する。検出長は230cmで、幅約44～60cm、検出面からの深さは3～10cm。溝底の標高は北東部で21.05m、南西部で21.01mである。出土遺物は無い。

SD11(図44・写真64)

調査区北西部、SB19と重複して位置する。北部をSX1、SB19(E-3区Pit2)に切られる。検出長は414cmで、幅約39～77cm、検出面からの深さは1～6cm。溝底の標高は北部で21.09m、南部で20.96mである。埋土から土師器片1点が出土している。

井戸

2基の井戸が検出された。

SE1(図45・写真93)

調査区南西部の南壁寄りにおいて、谷埋土(V-17層)を掘削中に検出された。このため、どの層から掘り込まれたものかは不明である。しかし、SE1付近のV-17層は層厚約20cm、その上層のV-5層は層厚25～30cmであることから、統合移転前の構田の造成により、大半はすでに削平されていたと見られる。曲物の上面を確認した段階で掘削を止め、上面を精査したところ、谷埋土よりもわずかに茶褐色を呈して粘性のある屈方の埋土、黒褐色(2.5Y3/1)シルトを検出した。屈方の長軸は76cm、短軸は71cmで、中心に直径約48cmの曲物が据えられていた。検出面からの深さは17cm、底面の標高は20.1mである。曲物内の埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトで、この埋土をはじめ、底面、屈方埋土から土師器片、須恵器片が出土している。しかし、これらはいずれも遺構面であるV-17層に含まれていたもので、遺構の時期を示すものではないと考えられる。残存状況を参考とすると、SE1は少なくともV-5層から掘りこまれてい

吉田橋内(吉田道路)の調査

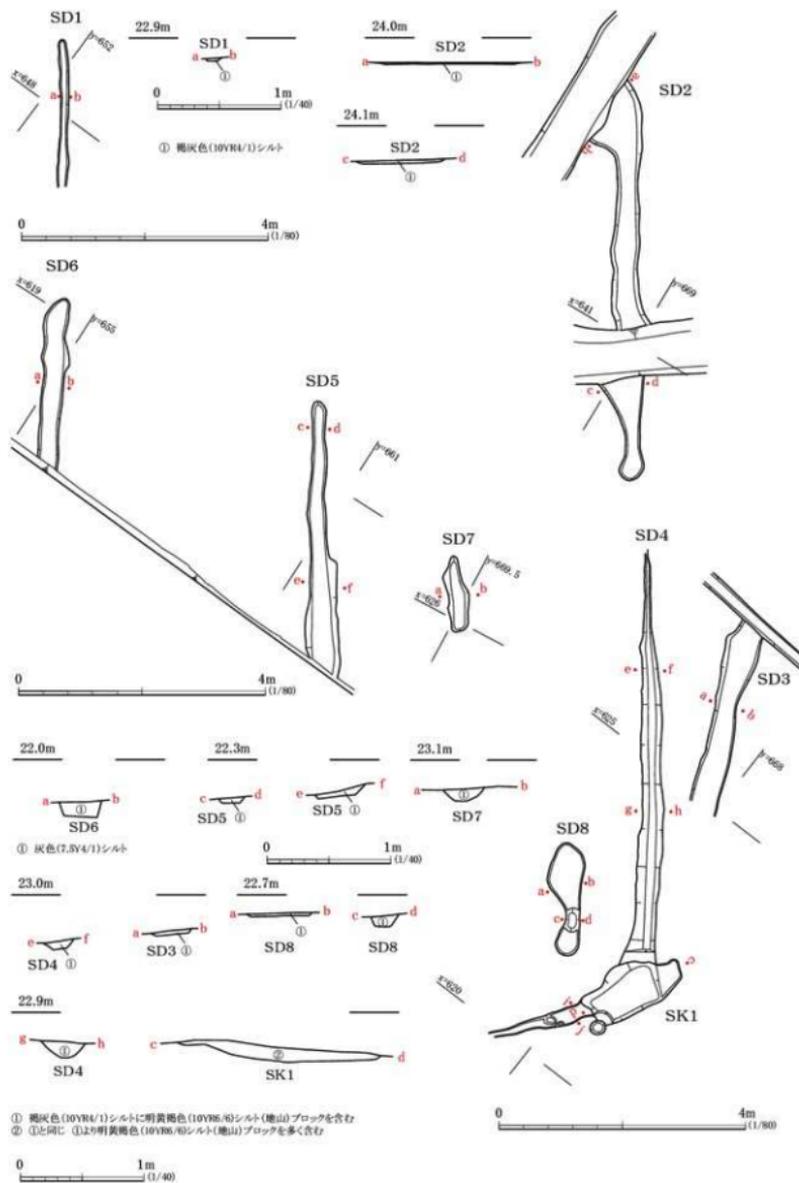
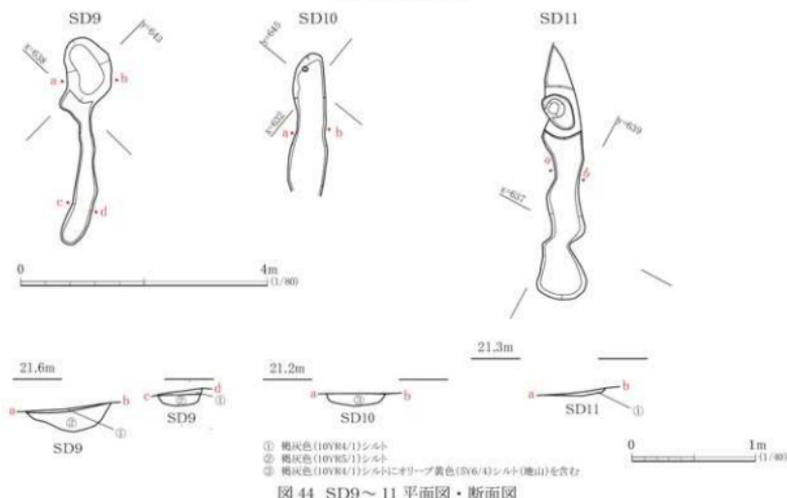


図 43 SD1~8・SK1平面図・断面図

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



たとえられるため、所属時期は同層が堆積した16世紀以後と推測される。

SE2(図45・写真94～96)

調査区南東部において検出した石組みの井戸で、北東部側は水田暗渠・攪乱により削平を受けている。検出時に確認した堀方の平面形は攪乱によりやや不整形を呈するが、本来は隅丸長方形であったと推測される。長軸186cm×短軸177cmの規模で、長軸方向は北東～南西である。石組みには河原石を使用しており、上部が一部崩れた状態であった。また、東側は堀方が2段になっていたほか、裏込めに灰色粘土を使用していた。石組みの内法は上部で115cm前後と推測される。下部の内法は62～68cmである。底面には曲物桶を設置する。検出面の標高は22.10～22.15mで、検出面からの深さは128cm以上である。第6層まで掘削を行い、記録作業を行っていたところ、石が崩落し、安全上の観点から直ちに埋め戻さざるを得なかったため、記録作業を完全に行うことができなかった。

埋土のうち、第4層からは瓦質土器拵鉢口縁部、第5層からは曲物柄杓、青磁碗片、植物遺体、第6層からは土師器皿、曲物片、用途不明木製品、植物遺体等の遺物が出土している。土師器皿・瓦質土器拵鉢の特徴から14世紀に属するものと考えられる。

なお、北西隅・南隅に位置する柱穴から覆土が付属していた可能性があるが、SE2北東側は攪乱により遺構が失われているため、詳細は不明である。また、位置関係からSB11～13との関連が考えられるが、SB11～13からは土師器小片しか出土しておらず、詳細な時期が不明であるため、断定はできない。

土壌

18基の土壌を検出した。以下主要なものについて報告する。

SK1(図43・写真88)

調査区南東部でSD4を切った状態で検出された。また、南隅は柱穴に切られている。長軸169cm、短軸86cm、検出面からの深さは最深度で15cm。同底面の標高は22.5mである。底面は東部で高く、西側にかけて落ち込んでいる。埋土からは土師器片、瓦質土器足轆脚部が出土している。

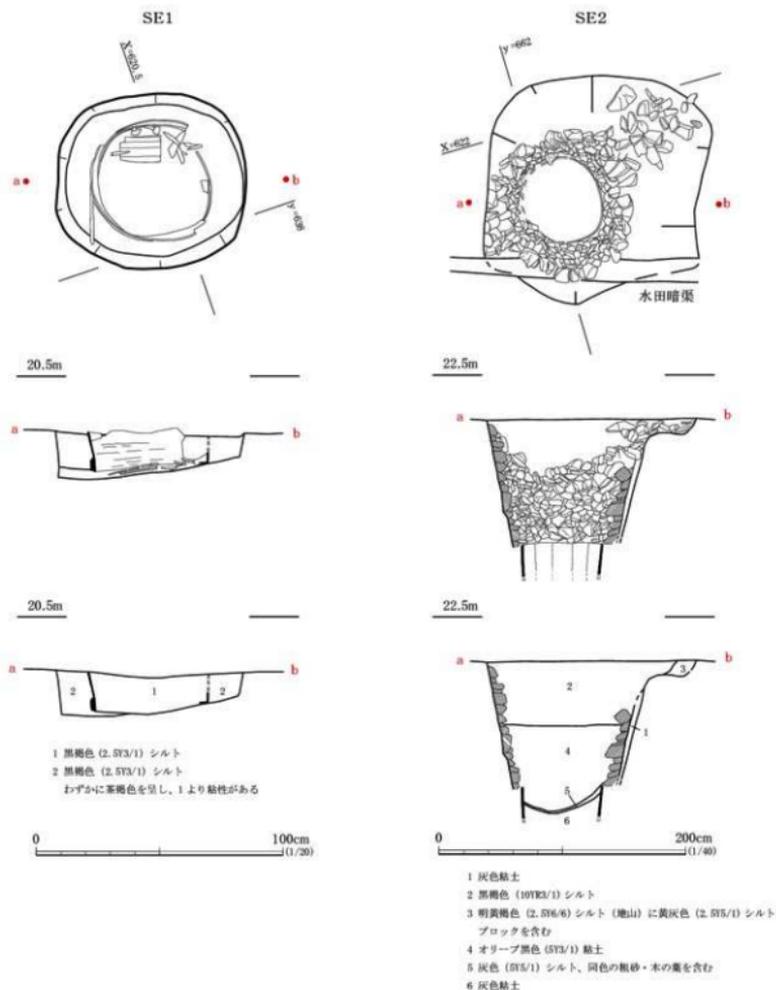


図 45 SE1・2平面図・断面図

SK2(図46・写真97)

調査区北東部、S12南側の東壁沿いで検出された。調査区外に広がるため全形は不明。長軸122cm、短軸58cm、検出面からの深さは最深部で34cm。回底面の標高は23.43mである。坩土は黒褐色(10YR3/1)シルトで、周辺の遺構埋土がいずれも灰色系であるのと異なる。出土遺物はないが、埋土の色調から古代以前の遺構の可能性がある。

SK3(図46・写真98)

調査区の南東部にSB10と重複して検出された。また、南東隅をSB9(G-7区Pit28)に切られる。長軸125cm、短軸85cm、検出面からの深さは最深部で8cm、同底面の標高は22.37mである。埋上からの出土遺物はない。

SK4(図46・写真99)

調査区北部、SB17の北側に位置する。調査区外に広がるため全形は不明。予備発掘調査のC調査区内に位置しており、やや掘り下げた状態で検出した。長軸190cm、短軸124cm、検出面からの深さは最深部で37cm、同底面の標高は21.42mである。埋土は黒褐色(10YR3/1)シルトで、周辺の遺構埋土がいずれも灰色系であるのと異なる。出土遺物はないが、埋土の色調から古代以前の遺構の可能性がある。

SK6(図46・写真100)

調査区北西部、SB19の北側に位置する。水田暗渠に切られる。長軸320cm、短軸220cm、検出面からの深さは最深部で25cm、同底面の標高は20.96mである。また、底面で深さ5~16cmの柱穴を8基検出した。土壇埋土、柱穴埋土からの出土遺物はない。

SK8(図47・写真101・102)

調査区の北東部、SB1とSB14の間に位置する。遺物包含層である第4-1層上面から掘り込まれていることを確認したが、埋土の色調が近似していて検出が困難であったため、第4-1層掘削後に検出作業を行った。長軸320cm、短軸220cm、検出面からの深さは最深部で42cm、同底面の標高は22.35mである。底面は東部で高く、西側にかけて落ち込んでいる。埋土は褐灰色(10YR4/1)シルト・明黄褐色(2.5Y7/6)シルト(地山)・オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルトのブロック土の単一層である。同層からは土師器片、須恵器片、瓦質土器鉢鉢胴部片が出土している。また、床面中央から西部では臥せられた状態の土師器皿が1点、自然石が2点出土している。以上の状況から人骨は出土しなかったものの、土壇墓の可能性が高い。瓦質土器、土師器皿の特徴から15~16世紀に属するものと考えられる。

不明遺構(落ち込み)

4基の不明遺構を検出した。このうち、SX1~3について報告する。

SX1・2(図46・写真103)

調査区北西部、SB19と重複して検出された。SD11を切っているが、SX2のほか、SB19を構成するE-3区Pit1、11に切られる。不整形を呈しており、長軸521cm、短軸239cm、検出面からの深さは最深部で7cm、同底面の標高は21.14mである。埋土からは木片1点が出土しているのみである。性格は不明であるが、整地層もしくは雨水等の浸食による自然地形の落ち込みであった可能性がある。

SX2は長軸223cm、短軸207cm、検出面からの深さは最深部で約6cm、同底面の標高は21.13mである。また、底面で深さ11~16cmの柱穴を2基検出した。SX2、柱穴埋土から遺物は出土していない。

SX3(図46・写真104)

調査区北部、SB15、16の北側で検出した。中央を柱穴及び水田暗渠に切られるほか、棚田造成時の削平を受けている。調査区北部に広がるため、全形は不明である。長軸335cm、短軸191cm、検出面からの深さは最深部で14cmで、同底面の標高は22.07mである。埋土は黒褐色(10YR3/2)シルトに明黄褐色(10YR6/6)シルトブロックを含む。また、北壁断面では黒褐色(10YR3/2)シルトの埋土を確認している。出土遺物はなく性格は不明であるが、埋土の色調から古代以前の遺構の可能性がある。

柱穴群

約700基の柱穴が検出された。柱穴の大半は第5層上面で検出されたが、北東部においては遺物包

合層である第4-1層、中央部においては谷埋土上層を検出面として柱穴が検出された。谷埋土上で検出した柱穴の埋土は谷埋土と色調・土質が近似しており、検出が困難であったため、今回報告したものの以外にも谷埋土から掘りこまれた柱穴が存在した可能性がある。なお、調査区壁面においても精査を行ったが、谷埋土を掘り込む柱穴は存在しなかった。また、調査区南西部の柱穴は検出面からの深さが5cm未満のものが多く、一部は染みこみもしくは凹みに谷埋土が残存していたものであった可能性がある。以下、遺物が出土している柱穴2基、谷埋土、第4-1層上面で検出された柱穴について報告する。

G-7区Pit26(図48・写真106)

溝群2底面で検出した。長軸18cm、短軸16cm、検出面からの深さは26cmである。底面近くからは土師器皿の底部が伏せられた状態で出土している。

H-7区Pit5(図48・写真107)

長軸26cm、短軸18cm、検出面からの深さは26cmである。埋土上位から青磁碗底部が出土している。

谷埋土上で検出された柱穴(図49・写真108・109)

調査区中央部の土層観察用畦を精査中に、谷埋土上面を検出面として、D-6区Pit4、E-6区Pit12、13の3基の柱穴が検出された。柱穴の直径は14~26cm、検出面からの深さは10~20cmである。D-6区Pit4から瓦器椀口縁部1点、土師器片2点、E-6区Pit12から土師器片2点が出土している。検出面は灰黄色褐色(10YR4/2)シルトで、土師器、須恵器、瓦質土器片を含む。また、これらの柱穴も谷埋土で、土師器片、瓦質土器足鍋脚部等含む灰色(5Y4/1)、褐色(10YR4/1)シルト等に覆われている。検出層及びその上層とも前述した谷埋土上層に相当する。以上から、これらの柱穴は14~16世紀に属すると思われる。

第4-1層上面で検出された柱穴(図49・写真110)

調査区北東部の第4層上面でH-6区Pit1、2を検出した。Pit2上面では検出時に土師質こね鉢が張りついた状態で出土し、Pit1埋土からも同一個体が出土している。なお、写真110では、Pit1がPit2を切っているが、土師質こね鉢を取り上げ後、再度上面を精査した結果、Pit2がPit1を切っていたことが判明した。Pit1は長軸32cm、短軸22cm、Pit2は長軸42cm、短軸36cmでいずれも検出面からの深さは2cmである。遺物を検出した第4-1層は岩崎編年Ⅲ型式古段階と考えられる瓦質土器足鍋口縁部を含むことから、Pit1・2は15~16世紀に属するものと推測される。

【近世以降の遺構】(図28・写真111・112)

多数の水田暗渠と、井戸1基(SE3)を検出した。水田暗渠は北西-南東方向に流路方向を持つものと、北-南もしくは北東-南西方向に流路方向を持つものがある。後者は基幹となる暗渠であったようで、直径20cm程度の木材を敷き詰めていた。また、調査区北西部の水田暗渠の肩裾には護岸のための杭が多数打ち込まれていた。

暗渠には柴・素焼土管・陶管が使用されており、埋土から近世~現代の陶磁器類が出土している。なお、素焼土管には輪積みの痕跡と外面にハケメを施すものが見られた。恐らく土管木型を使用して製作されたもので、佐野焼である可能性が高い。

SE3は調査区北西部の水田暗渠西側に位置する素掘りの井戸で、水田に伴う施設と考えられる。直径約150cmである。崩落する危険性があったため完掘していないが、検出面からの深さは130cm以上あり、近~現代の陶磁器類・木製品等が出土している。

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

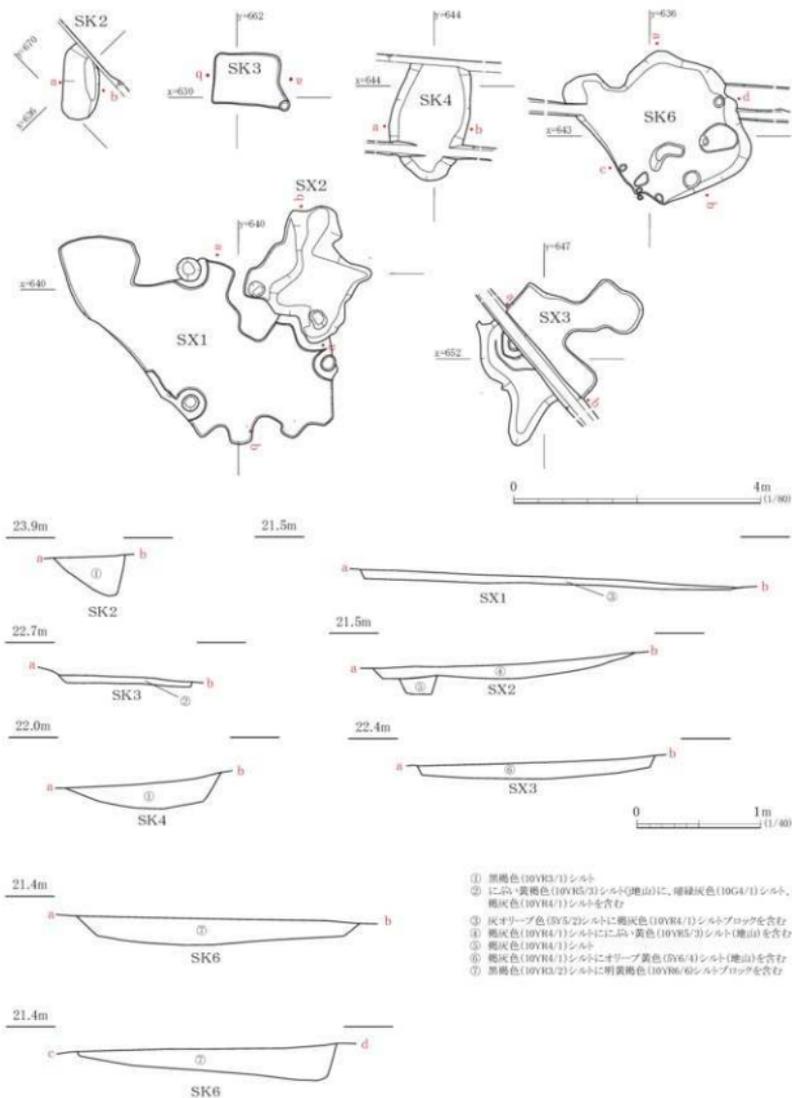


図46 SK2~4、6・SX1~3平面図・断面図

吉田橋内(吉田道路)の調査

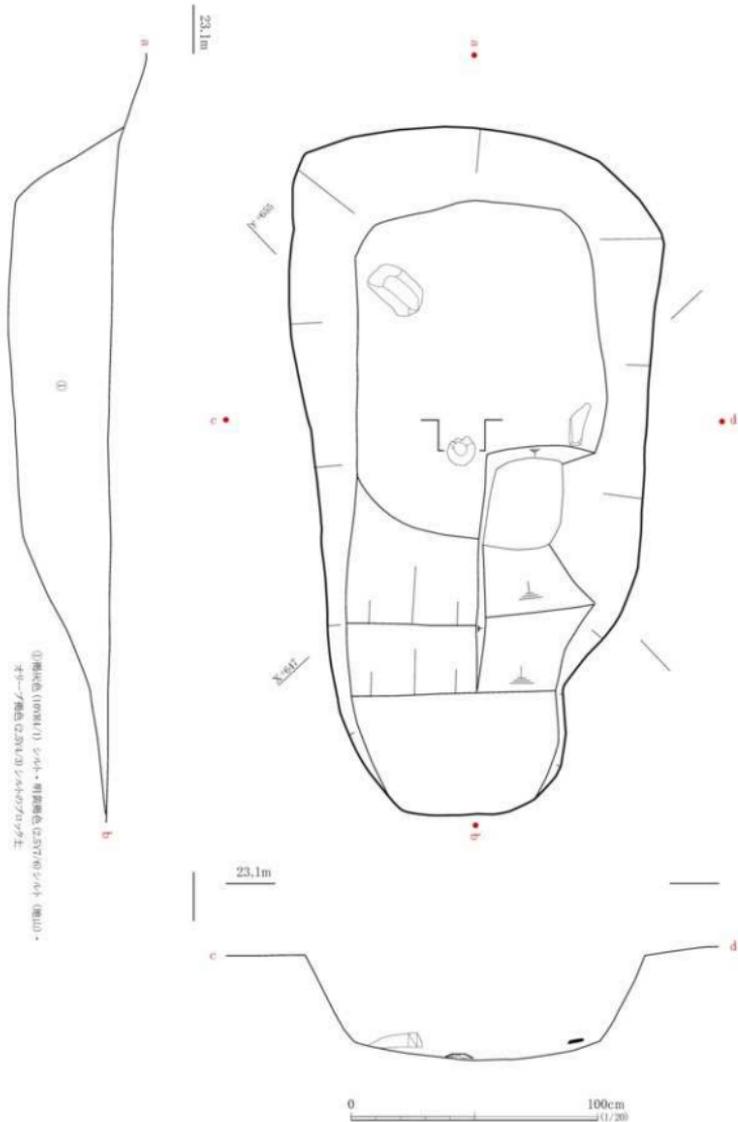


図 47 SK8平面図・断面図

吉田橋内(吉田道路)の調査

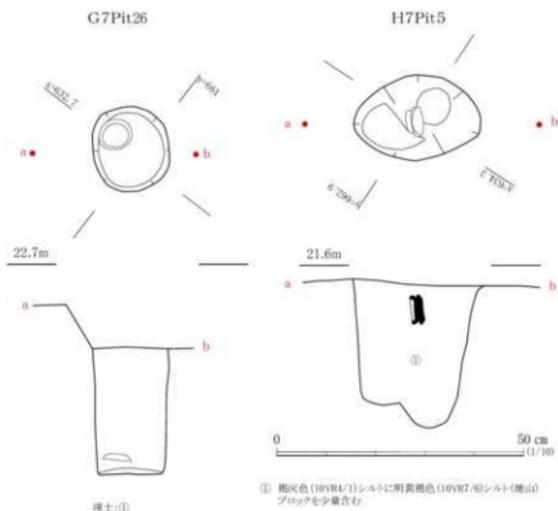


図 48 G-7 区Pit26、H-7 区Pit5、平面図・断面図

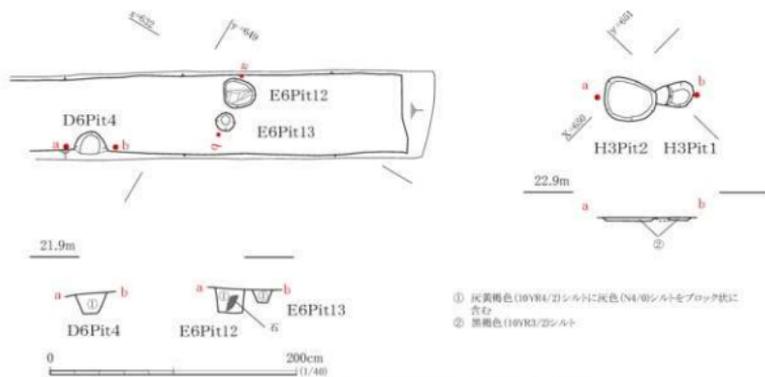


図 49 谷埋土・遺物包含層上面検出ピット平面図・断面図

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



写真58 調査区全景（北東から）



写真59 調査区全景（西から）

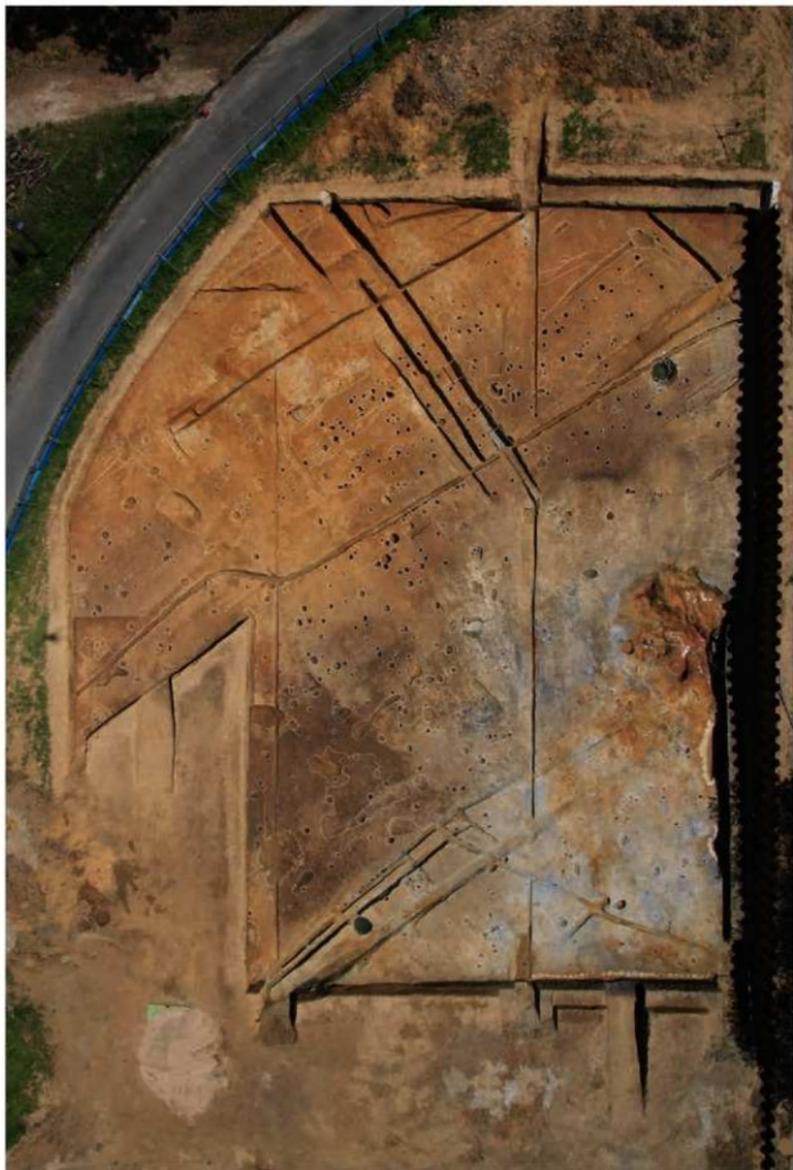


写真60 調査区全景（西から）



写真61 掘立柱建物跡分布状況1(南から)



写真62 掘立柱建物跡分布状況2(南から)



写真63 掘立柱建物跡分布状況3(南から)



写真64 掘立柱建物跡分布状況4(南から)



写真65 調査区北壁(I-I)土層断面(南東から)



写真66 調査区西壁(J-J)土層断面(南西から)



写真67 調査区北壁(A-A)土層断面1(南西から)



写真68 調査区北壁(A-A)土層断面2(南西から)



写真69 調査区北東壁(B-B)土層断面(南西から)



写真70 調査区東壁(C-C)土層断面(北西から)



写真71 調査区東部南壁土層断面(北東から)



写真72 調査区SD5・6付近南壁土層断面(北西から)



写真73 調査区西部南壁土層断面1(北東から)



写真74 調査区西部南壁土層断面2(北東から)



写真75 調査区西壁土層断面(南東から)



写真76 SU1土層断面(南から)



写真77 SB1 I-4区Pit1土層断面(西から)



写真78 SB2 H-4区Pit6土層断面(西から)



写真79 SB4 G-6区Pit15土層断面(南西から)



写真80 SB19 E-3区Pit2土層断面(南西から)



写真81 溝群北部検出状況(北西から)



写真82 溝群土層断面(北西から)



写真83 溝群4土層断面(北西から)



写真84 溝群9・13土層断面(南西から)



写真85 溝群11土層断面(南から)



写真86 調査区北部遺構検出状況(北西から)



写真87 SD1及び周辺Pit土層断面(北西から)



写真88 SD2土層断面(南から)



写真89 SD4・8・SK1土層断面(西から)



写真90 SD7土層断面(北西から)



写真91 SD8土層断面(北西から)



写真92 SD9土層断面(南から)



写真93 SE1土層断面(東から)



写真94 SE2曲物柄杓出土状況(北東から)



写真95 SE2土師器皿出土状況1(北東から)



写真96 SE2土師器皿出土状況2(北東から)



写真97 SK2土層断面(北西から)



写真98 SK3土層断面(北から)



写真99 SK4土層断面(南から)



写真100 SK6土層断面(南西から)

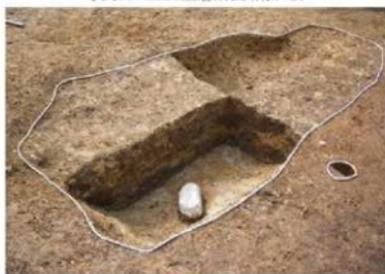


写真101 SK8土層断面(北から)



写真102 SK8遺物出土状況(北東から)



写真103 SX1土層断面(南東から)



写真104 SX2土層断面(北東から)



写真105 SX3土層断面(南から)



写真106 G-7区Pit26遺物出土状況(北西から)



写真107 H-7区Pit5遺物出土状況(北西から)



写真108 D-6区Pit4土層断面(南東から)



写真109 E-6区Pit12・13土層断面(西から)



写真110 H-6区Pit1・2遺物出土状況(南西から)



写真111 D-3区水田暗渠(南から)



写真112 C・D-4区水田暗渠(南西から)



写真113 矢板設置 (2月18日 西から)



写真114 機械掘削 (2月20日 北から)



写真115 調査区北東部掘削状況 (3月14日 北西から)



写真116 谷清掃状況 (3月26日 南から)



写真117 谷理土下層掘削状況 (3月28日 南東から)



写真118 遺構実測 (4月10日 北から)



写真119 遺構清掃状況 (4月18日 南東から)



写真120 空撮 (4月18日 南西から)

吉田構内(吉田遺跡)の調査
表6 掘立柱建物観察表

遺構番号	棟方向	規模(桁行×梁行)	面積()は復元値	出土遺物	備考
SB1	N49°W	3間(6.5m)×1間(2.1m)以上	13.7㎡以上	土師器、須恵器	一部調査区外
SB2	N55°E	2間(3.8m)×1間(2.2m)	8.36㎡	土師器、瓦質土器、青磁碗	
SB3	N37°W	2間(4.2m)×1間(2.5m)	(10.5㎡)	土師器	
SB4	N37°W	2間(3.9m)×1間(2.1m)	8.19㎡		
SB5	N38°W	1間(3.0m)×1間(2.1m)	(6.3㎡)	土師器、瓦質土器	
SB6	N42°W	2間(4.8m)×2間(3.8m)	(18.24㎡)	土師器	
SB7	N52°W	2間(4.8m)×2間(4.7m)	(22.6㎡)	土師器皿、須恵器	
SB8	N38°E	3間(5.5m)×1間(3.6m)	(19.8㎡)	土師器、須恵器	
SB9	N50°E	2間(3.9m)×1間(3.2m)	12.48㎡		
SB10	N42°W	2間(3.7m)×2間(2.9m)	10.73㎡	土師器、瓦質土器	
SB11	N36°W	2間(5.1m)×2間(3.6m)	18.36㎡	土師器	
SB12	N37°W	2間(5.4m)×2間(3.6m)	(19.44㎡)		
SB13	N40°W	3間(4.8m)×2間(3.0m)	(14.4㎡)	土師器	
SB14	N50°W	4間(8.9m)×1間/2間(3.7m)	(32.93㎡)	土師器	一部調査区外
SB15	N36°W	3間(9.1m)×2間(4.4m)	(40.04㎡)	土師器、土師器皿、須恵器	一部調査区外 桁行南西面に座(1.04m)
SB16	N39°W	3間(8.4m)×1間(3.4m)	(28.6㎡)		一部調査区外
SB17	N40°W	2間(4.6m)×2間(3.4m)	15.64㎡	土師器、須恵器	
SB18	N38°E	2間(5.0m)×2間(3.7m)	18.5㎡	土師器	
SB19	N51°W	2間(4.7m)×2間(4.2m)	(19.74㎡)	土師器、土師器坏、焼土塊	総柱建物

表7 溝・土坑・不明遺構観察表

()は残存幅

種類	遺構番号	平面形	規模(cm)			出土遺物	時期	備考
			長さ/長軸 (cm)	幅/短軸 (cm)	深さ (cm)			
溝	SD1		239	10~17	3	土師器		
溝	SD2		(303)	33~117	1~6	土師器、瓦質土器	暗渠に切られる	
溝	SD3		(305)	34~58	3~6	瓦質土器	暗渠に切られる	
溝	SD4		(578)	5~60	2~14	土師器、須恵器、瓦質土器 白磁底部	SK11に切られる	
溝	SD5		(450)	20~52	5~13	土師器皿、須恵器、 瓦質土器	一部調査区外	
溝	SD6		(280)	32~45	3~13		一部調査区外	
溝	SD7		120	16~33	12	瓦質土器		
溝	SD8		180	24~55	2~10	瓦質土器		
溝	SD9		340	19~72	5~24	土師器		
溝	SD10		230	44~60	3~10			
溝	SD11		(414)	39~77	1~6	土師器	柱穴・SX11に切られる	
溝	SD12		153	47~61	6			

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

種類	遺構番号	平面形	規模 (cm)			出土遺物	時期	備考
			長さ/長軸 (cm)	幅/短軸 (cm)	深さ (cm)			
溝	SD13		(109)	37	8			一部調査区外
溝	SD14		124	7~18	4			
溝	SD15		109	33	2	土師器		
溝	SD16		(175)	26~103	9	土師器、須恵器、瓦質土器		一部調査区外 暗渠に切られる
溝	SD17		124	21~46	6			
溝	SD18		105	32~44	15~23			
土壌	SK1	不整形	169	86	15	土師器、瓦質土器(足鏡)		
土壌	SK2	楕円形か	(122)	58	34			一部調査区外
土壌	SK3	不整形	125	85	8			柱穴に切られる
土壌	SK4	楕円形か	(190)	124	37			一部調査区外
土壌	SK5	不整形	(154)	84	15			柱穴に切られる
土壌	SK6	不整形	320	220	25			暗渠に切られる
土壌	SK7	不整形	(177)	103	10			暗渠に切られる
土壌	SK8	不整形	280	152	42	土師器皿		土壌墓か
土壌	SK9	隅丸方形か	(146)	82	16	土師器		一部調査区外
土壌	SK10	不整形	(90)	64	2	土師器		暗渠に切られる
土壌	SK11	不整形	133	82	19			柱穴に切られる
土壌	SK12	円形	89	83	5			
土壌	SK13	不整形	(93)	74	2			SE2に切られる
土壌	SK14	不整形	(119)	69	5	土師器		暗渠に切られる
土壌	SK15	隅丸方形	84	57	14			
土壌	SK16	楕円形	80	53	4			
土壌	SK17	円形	50	45	8			
土壌	SK18	不整形	105	48	5			
不明遺構	SX1	不整形	521	239	7			SD11を切る・SX2に切られる
不明遺構	SX2	不整形	223	207	12			SX1を切る
不明遺構	SX3	不整形	(335)	191	14			暗渠・柱穴に切られる
不明遺構	SX4	不整形	(104)	(20)	16			大半が調査区外

(5) 遺物(図50～56、写真121～131、表8・9)

【土器】

SU1出土土器

1は縄文時代晩期の深鉢胴部である。内外面に二枚貝による条痕を施す。

掘立柱建物跡出土土器

2はSB2・H-4区Pit6出土の龍泉系赤青磁碗。内面に草花文、見込みに連弁文を施す。3はSB6・G-7区Pit30出土の上師器杯。摩滅が激しく内外面の調整は不明。4はSB7・G-5区Pit13出土の上師器杯底部。底面は糸切りを施す。5はSB10・G-7区Pit6出土の播鉢口縁部。6はSB15・F-3区Pit6出土の土師器皿。摩滅でやや不明瞭であるが、底面中央を穿孔する。7はSB19・E-3区Pit2出土の土師器杯底部。摩滅が激しい。

溝群・その他の溝出土土器

8～10は溝群8出土。8は土師器碗底部。断面三角形の低い貼り付け高台を持つ。9は瓦質土器足鍋口縁部。外面にススが付着する。10は瓦質土器播鉢口縁部。11は溝群9出土の土師器杯。内外面に丹塗りを施す。12はSD3出土の瓦質土器足鍋口縁部。外面にススが付着する。岩崎編年Ⅲ型式古段階。13～15はSD4出土土器。13・14は瓦質土器足鍋口縁～胴部。13は外面にタテハケ、内面にヨコハケを施す。14は外面にススが付着する。岩崎編年Ⅵ型式新段階。15は白磁皿の底部。見込みに1条の沈線を施す。16はSD8出土の羽釜口縁部。17はSD16出土の須恵器杯底部。高台の内端が下方に突出して接地する。18はSD17出土の上師器皿底部。底面は糸切りである。

井戸出土土器

19、20はSE1出土土器。19は土師器杯ないし碗の口縁部。20は土師器碗の底部である。

21～24はSE2出土土器。21、22は第6層出土の上師器杯。内外面にクロコ痕を顕著に残す。底面はいずれも糸切りである。形態から14世紀に属するものと考えられる。13は第5層上面出土の青磁碗の胴部。同層からは曲物柄杓も出土している。14は第4層出土の瓦質土器播鉢口縁部である。ヨコナデにより口縁部を若干肥厚させ、口唇部を面取りする。内面には5条単位の節目を持つ。口縁部内面に肥厚帯を持たない特徴から、14世紀に属するものと考えられる。

土壇出土土器

25はSK1出土の足鍋脚部。26はSK8底面出土の土師器皿である。摩滅が激しいが内外面にクロコ痕を残す。底面は糸切りである。

柱穴出土土器

27はG-7区Pit24出土の土師器皿。28はG-7区Pit26出土の土師器皿底部である。29・30はH-7区Pit5出土土器。30は青磁碗底部で見込みに印花文を施す。30は瓦質土器壺の胴部。外面に格子目タタキを施す。31はD-6区Pit4出土の瓦器碗口縁部。外面はヨコナデにより凹む。摩滅により調整が判然としないが、内面に暗文状のミガキを施す。32は土師質のこね鉢。口唇部を面取りして、2条の沈線を施す。口縁部内面にも1条の沈線を施す。胴部外面はナデ調整に伴う指頭痕が顕著に残る。内面にはヨコハケを施す。

谷埋土下層出土土器

33～53は谷埋土下層出土土器。33は弥生時代終末期の長頸壺の口縁部～頸部である。頸部外面にタテミガキを施し、胴部内面の先端には接合時の指頭痕が顕著に残る。34は弥生時代後期～終末期の葦底部で、35は弥生時代中期の甕底部。34・35とも風化が激しく調整は不明。36～42は古墳時代の前

～中期の土師器。36は直口壺。外面・口縁部内面にヨコミガキ、胴部内面にケズリを施す。37・38は甕。口縁部内外面にヨコナデ、胴部外面にタテハケ、胴部内面にケズリを施す。38は外面にススが付着する。39は高杯坏部、40～42は高杯脚部である。43は須恵器長頸壺の頸部～胴部である。頸部・胴部最大径の位置に2条の沈線を施す。頸部先器がやや強く外反することから、有段の口縁部を持つと考えられる。44は須恵器甕胴部。45～49は土師器坏。45・48は内底面にヘラ記号を施す。また底面はヘラ切り後、縦方向の板ナデを施す。49は底面糸切りである。これらは周防国府跡の編年を参考にすると、10～11世紀に属するものと考えられる。50・51は土師器椀底部である。50は断面長方形の高台、51は端面が丸味を帯びた断面三角形の高台を持つ。52は土師器皿である。口縁部は丸く、底面はヘラ切り後に板ナデを施す。53は土師器台付皿の底部で、底面は糸切りである。

谷理土上層出土土器

54～85は谷理土上層出土土器。54は弥生時代後期～終末期の甕である。口縁部は短く折り曲げて外反させ、内外面にヨコナデを施す。胴部外面にはタテハケ、内面にはケズリを施す。55～62は古墳時代前～中期の土師器である。55～58は壺である。57の内面調整が摩滅で不明なほかは、外面にタテハケ・内面にケズリを施す。60は高杯坏部で、直線的に外反し、屈曲部接合部で剥離している。61、62は高杯脚部である。いずれも摩滅が激しい。61は脚部と坏部を凹板充填技法で接合する。62は内面にケズリを施す。63～67は須恵器である。63は甕の頸部で内外面にヨコナデを施す。64は高杯脚部で、胴部近くに1条の沈線を施す。65は坏蓋器部である。端部を丸くおさめ、屈曲部に2条の沈線を施す。還元・焼成は不良である。66は坏底部である。低い高台を底部と胴部の屈曲部に貼り付ける。67は坏底部で、底面にヘラ切り痕を持つ。須恵器は、他に甕胴部片等が出土しているが小片が多く、土師器、瓦質土器と比較して出土量は少ない。

68、69は緑釉陶器である。68は素地が土師質で貼付高台を持つ。摩滅が激しいが、内外面に部分的に釉が残る。69は素地が須恵質で内外面に部分的に釉が残る。73～85は瓦質土器である。73は羽釜の口縁部。74～79は足鍋の口縁部である。これらは前掲の岩崎編年Ⅱ型式(74)、Ⅲ型式古(75～77)、Ⅲ型式新(78)、Ⅳ形式(79)のものがあ、时期的には14世紀後半から16世紀後半までのものを含む。80・81は足鍋の脚部である。81は端部を屈曲させる獸脚である。82は描鉢口縁部で、内面に2条単位の節目を施す。83は白磁で玉縁の口縁部を持つ。84、85は龍泉窯系青磁碗の口縁部である。84は外面に垂弁文を削り出す。85は内面に草花文を施す。

H-2～4区第4-1・2層出土土器

86は瓦質土器羽釜の口縁部。上端を欠損するが、口縁部に接して鈔が貼り付けられる。87は瓦質土器足鍋口縁部である。岩崎編年Ⅲ型式古に属するものか。

調査区清掃時・遺構検出時出土土器

88は須恵器坏底部。高台をやや底部中心よりに貼り付け、高台の内端面が接地する。89は土師器坏底部で、底面は糸切りである。90は白磁碗の口縁部。内面に1条の沈線を施す。91は瓦質土器描鉢。内面に4条単位の節目を施す。92は足鍋の脚部で、端部を屈曲させる。

耕土(第3層)・排土表探土器

93は白磁皿の底部。94は龍泉窯系青磁碗底部である。内面に1条の沈線を施す。高台内は磨胎である。95は須恵器甕の口縁部～胴部である。外面には自然釉が付着する。他に耕土からは土師器、瓦質土器、近世陶磁器等が出土している。

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

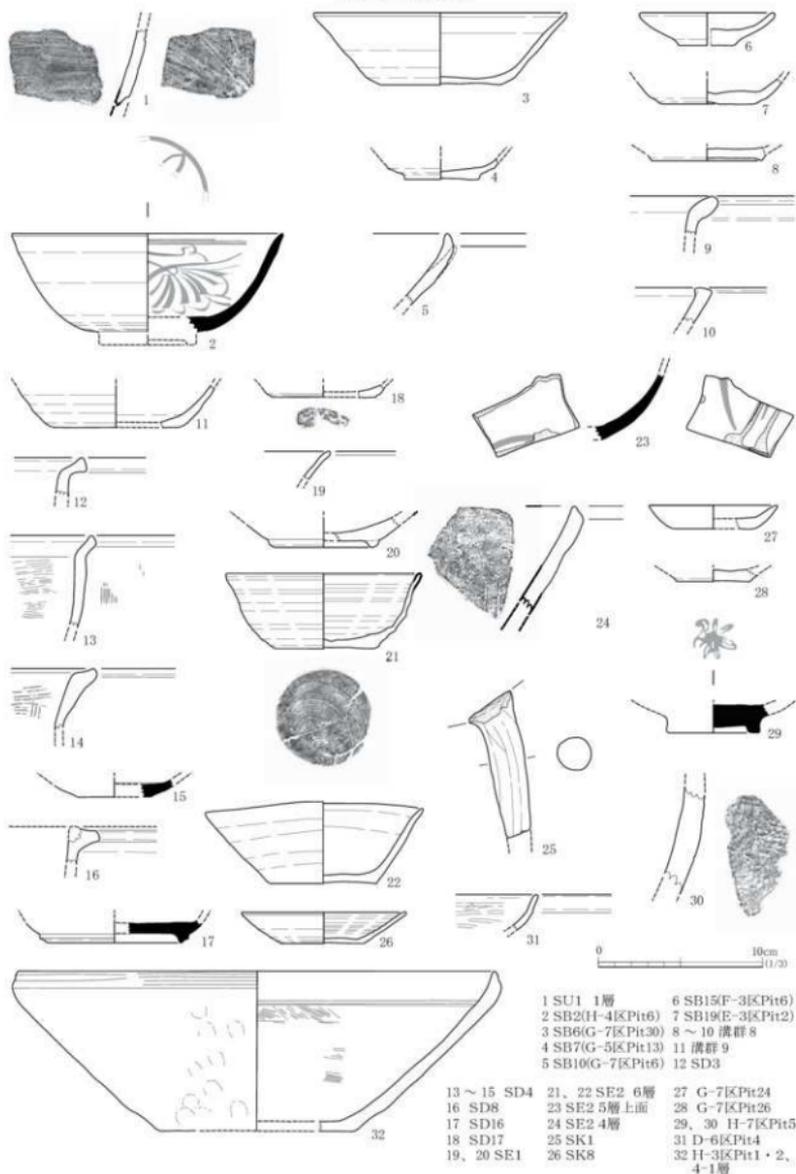


図 50 出土遺物実測図 (土器①)

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

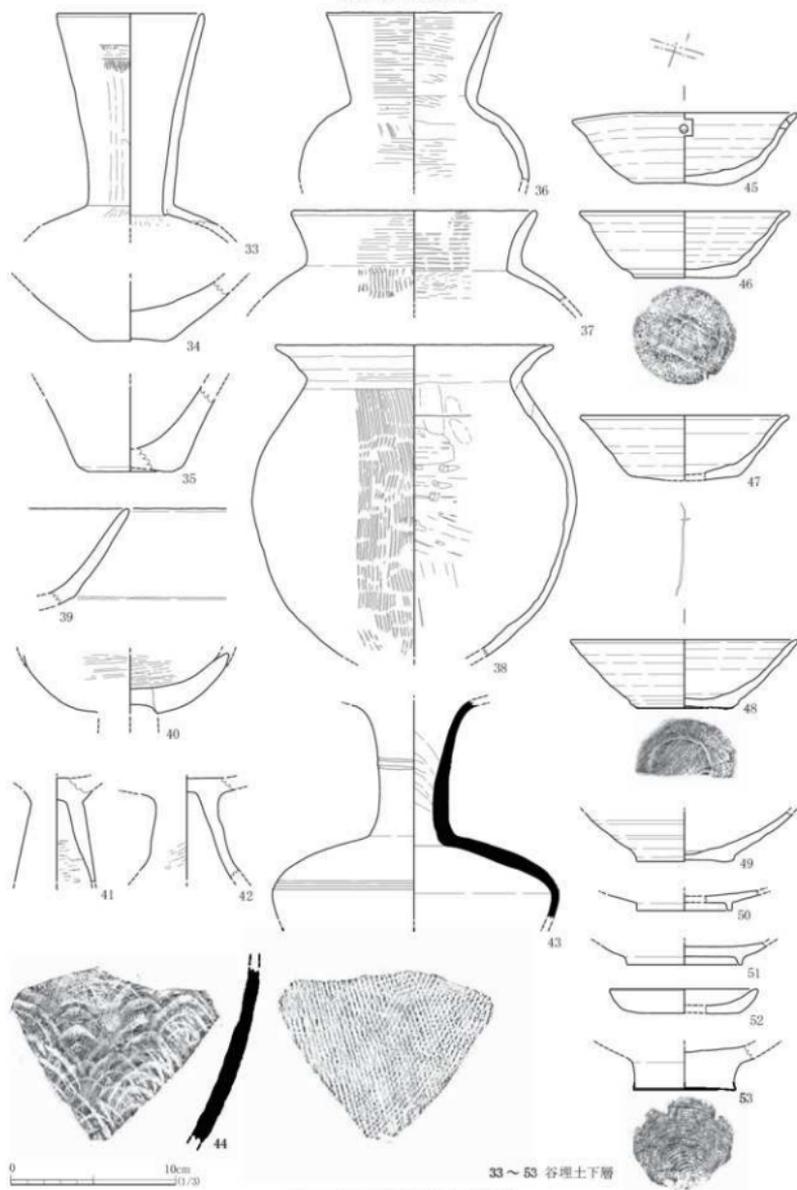


図 51 出土遺物実測図(土器②)

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

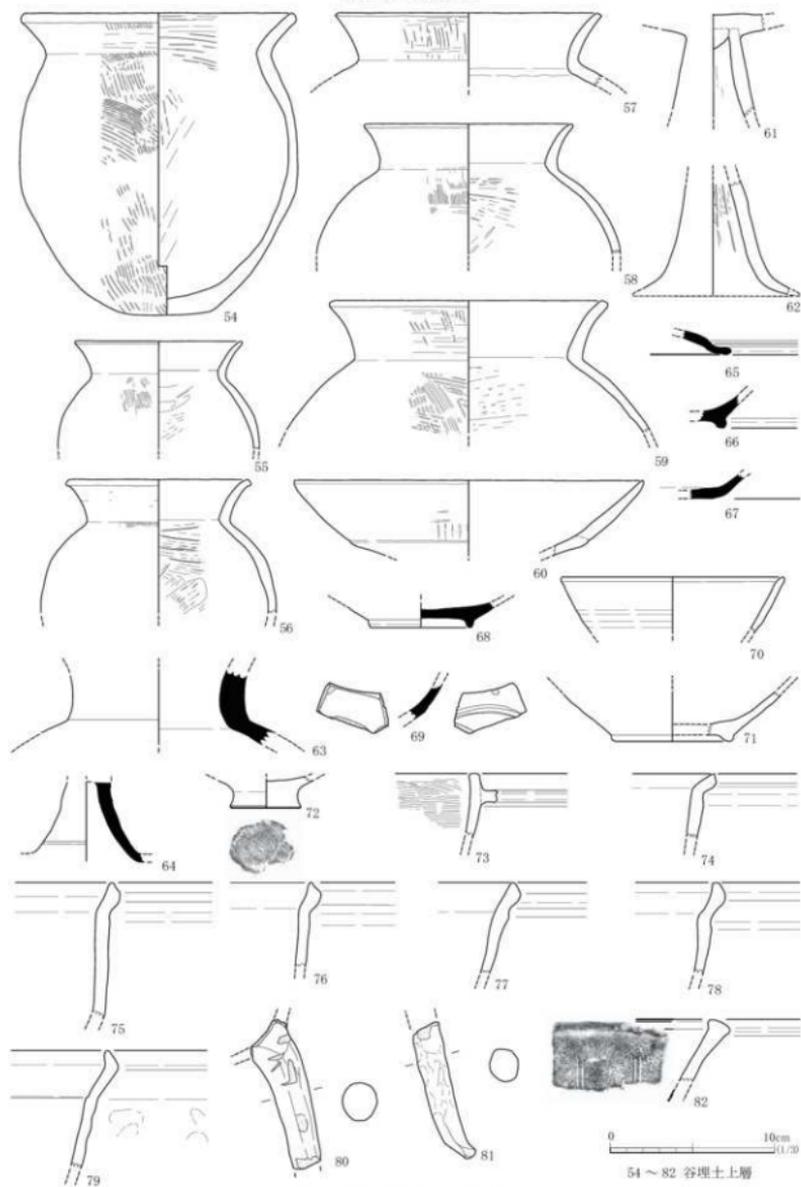


図 52 出土遺物実測図(土器③)

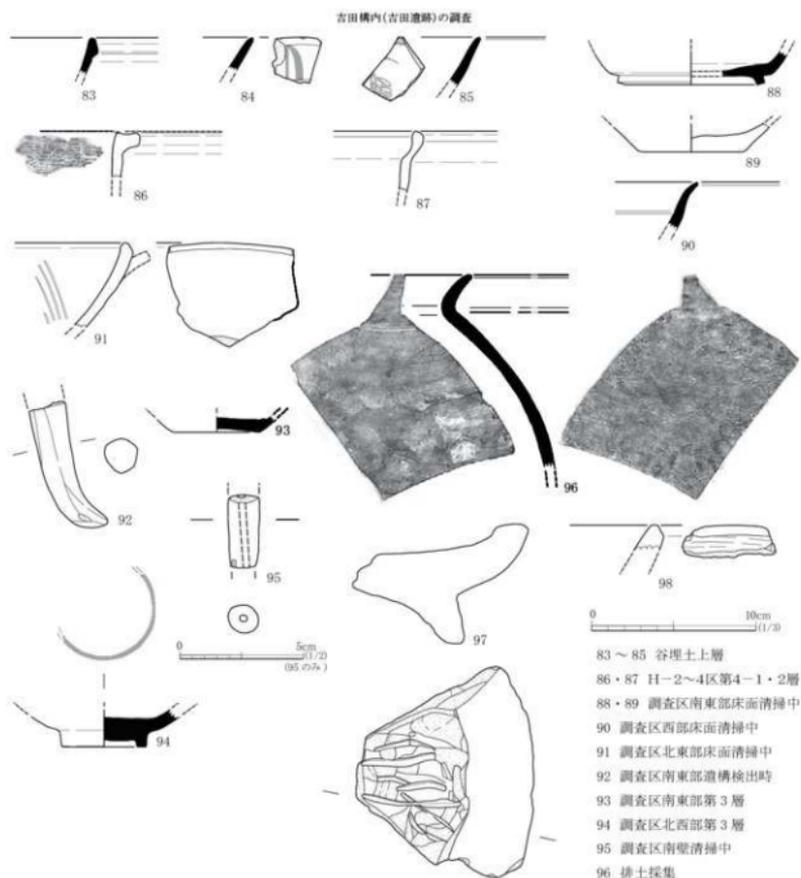


図 53 出土遺物実測図(土器④・土製品・石器)

【土製品】

95は調査区南壁清掃中に出土した上鉢である。上・下端部を欠損する。

【石製品】

97は谷埋土下層(庇面)出土の石臼の上臼片である。全体的に風化が激しい。3溝4条とこれに斜交する割溝と見られる溝2条が彫られるが、後者は摩滅のため判然としない。また、供給口・挽き手孔は残存しない。復元径は28.8cmで、石質は砂岩である。98は調査区南東部清掃中に出土した。滑石製石鍋口縁部か。口唇部はやや凹ませて面をとる。内外面とも摩滅するが、外面に施されたヨモギガキが確認できる。

【木製品】

木製品の分類・部位の名称等は主に『木器集成図録 近畿古代篇』²⁷⁾に準拠する。

SB4・G-6区Pit15出土木製品

99は柱。腐食が激しい。ほとんど加工されなかったようであり、節や枝の一部を残す。残存長は28.4cm、最大径は10.9cmである。

SE2第5層上面出土木製品

100は曲物柄杓の身、101は同柄杓の底である。両者は組み合わせられた状態で出土したが、上・下端部の一部と身の側板の綴じ合わせ部が破損しており、身と底の結合もはずれていた。取り上げ後、身は固定しなければ広がる恐れがあり、実測が不可能であったことから、実測に先行して保存処理を行った。遺物写真は保存処理後のものである。身の側板の綴じ合わせは1箇所である。綴じ合わせ部は図の左から向かって3列認められる。前列は最上段で樺皮が残存するが、これより下は欠損する。中列は綴孔が8箇所残存する。後列は最上段に樺皮が残存し、これより下に綴孔が2箇所残存する。内面には縦平行線及び斜格子のケビキを入れており、柄孔は身の手前が正方形、奥が長方形を呈する。身と底との結合は5箇所から打ち込んだ木釘で行っている。

谷埋土下層出土木製品

102～122は谷埋土下層出土。102は連歯下駄である。板目材の木表を上面にしておく。左半分を欠損しており、現存部も台と歯の境界部分で破損する。前臺は台の中央付近、後臺は歯の内側にあげられている。前臺周辺には指の痕跡が残る。現存長22.5cm、幅7.3cm、最大高5.9cmである。103は皿。白木の挽物で内外面に轆轤口を残す。横木取りで椗目。復元口径17.4cm、器高4.1cm、底径8.4cm。

104は曲物の側板綴じ合わせ部付近の破片である。綴孔が2箇所残存しており、内面には縦方向・斜方向のケビキを入れる。他にも曲物の断片は多数出土している。105～107は円形曲物の蓋の一部である。105は3箇所で結合孔が残存する。また、2箇所で樺皮紐が残存する。内面においては図中央の結合孔で樺皮紐の間に側板の一部が残存するほか、側板の痕跡が残る。復元径は16.6cm、厚さ0.6cm。106は2破片からなり、間を欠損する。結合孔が1箇所に残存し、内面には側板の痕跡が残る。また、外面には墨書がある。赤外線写真から何らかの文字と考えられるが、間を欠損するため、1字もしくは2字であるかを含め、詳細は不明である。復元径は17.1cm、厚さ0.5cm。107は人型器で、中央部でも折損する。現状で木釘による4箇所の結合孔が残存する。復元径38.8cm、厚さ1.0cm。108、109は長方形曲物の底板の一部。108は結合孔が1箇所に残存する。残存長14.5cm、幅3.0cm、厚さ0.35cm。109は全長32.1cm、幅6.4cm、厚さ0.4cmで、結合孔が2箇所に残存する。

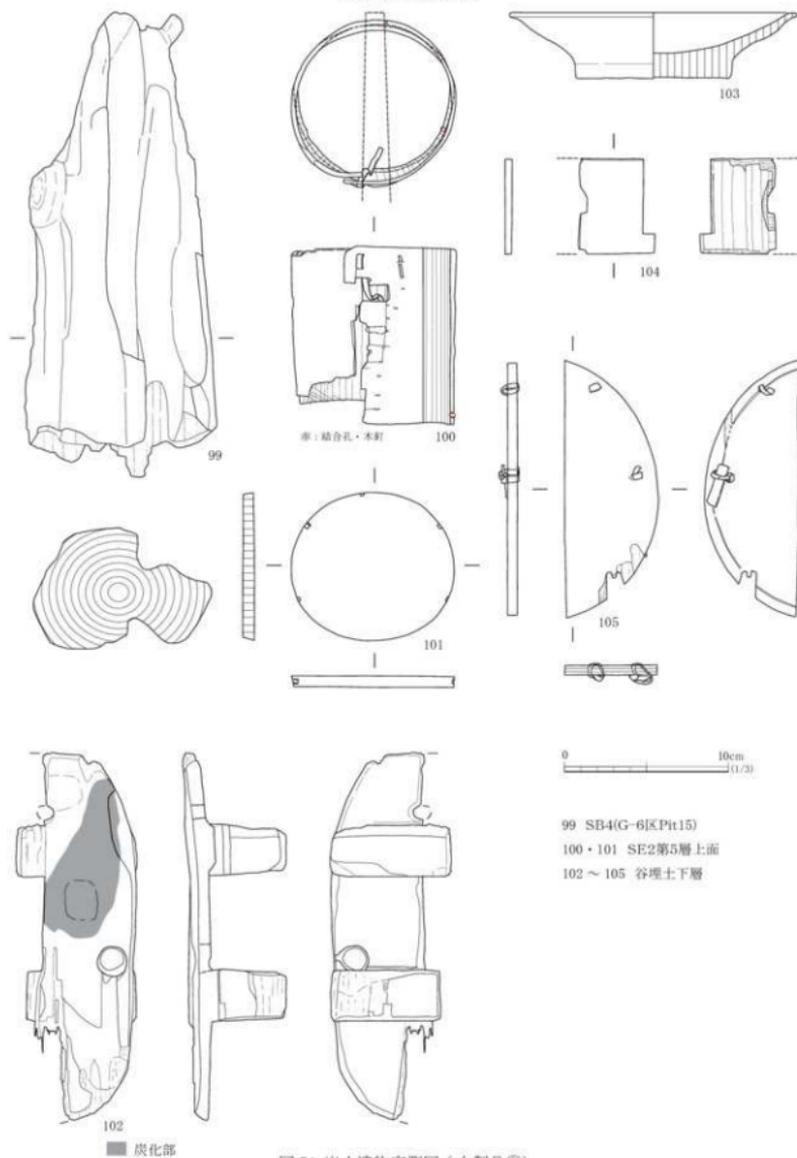
110～114は蓋の一部で、復元径は10.4cm(110)～15.3cm(112)、厚さ0.55cm(111)～1.2cm(112)である。115・116は椀扇の一部か。115は要孔、2孔一対の綴目孔の一部が残存する。残存長17.0cm、幅1.4cm、厚さ0.25cm。116は2孔一対の綴目孔の一部が残存する。残存長10.6cm、幅、厚さは116と同数値。117・118は松明灯か。いずれも先端が尖り炭化している。同様な木片は他にも多数出土している。

119～120は不明部材。いずれも断面方形の棒状の部材に2箇所の釘孔と見られる孔がある。121は厚さ0.4cmの板の先端を三角形に尖らせる用途不明品。122は板材。残存長41.1cm、幅6.1cm、厚さ0.85cm。

埴土表採木製品

123は皿。白木の挽物で内外面に轆轤口を残す。横木取りで椗目。復元口径17.7cm、器高4.6cm、底径9.7cm。表採時に黒褐色粘質土が付着していたことから、谷下層出土の可能性が高い。

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



99 SB4(G-6区Pt15)
100・101 SE2第5層上面
102～105 谷埋土下層

図 54 出土遺物実測図(木製品①)

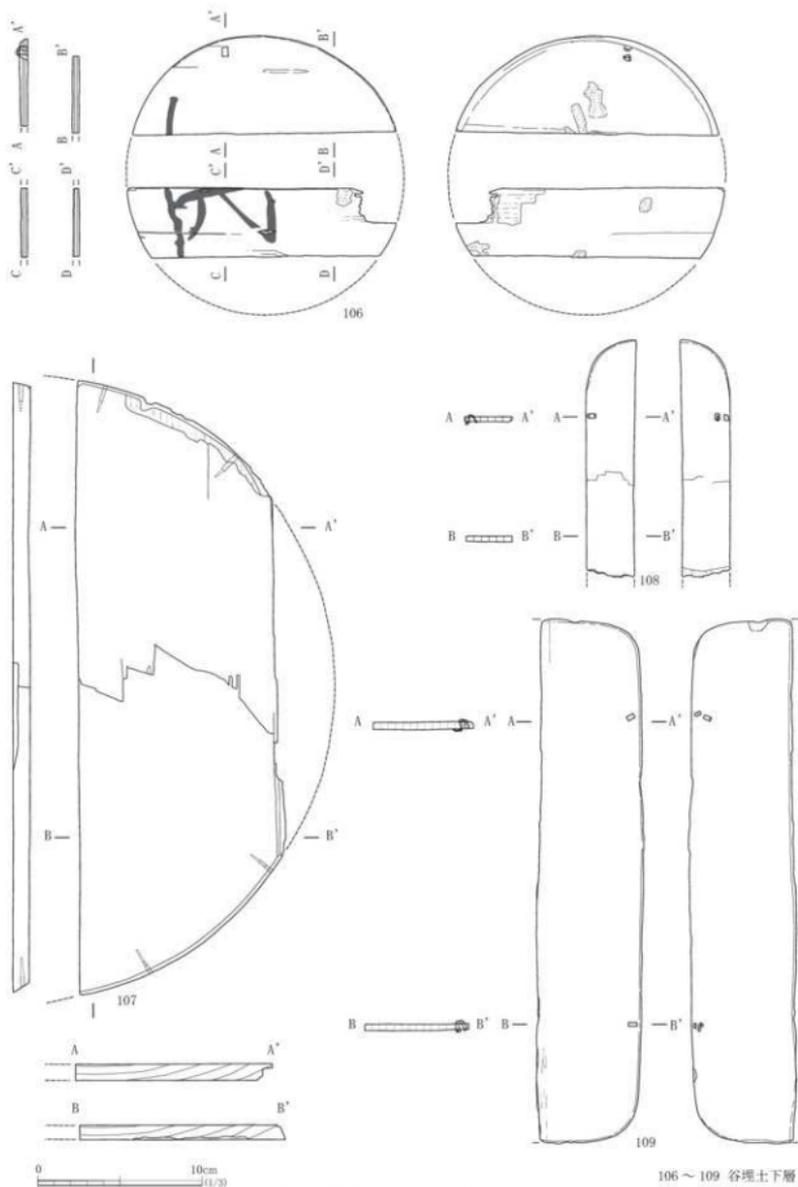


図 55 出土遺物実測図(木製品②)

106 ~ 109 谷裡土下層

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

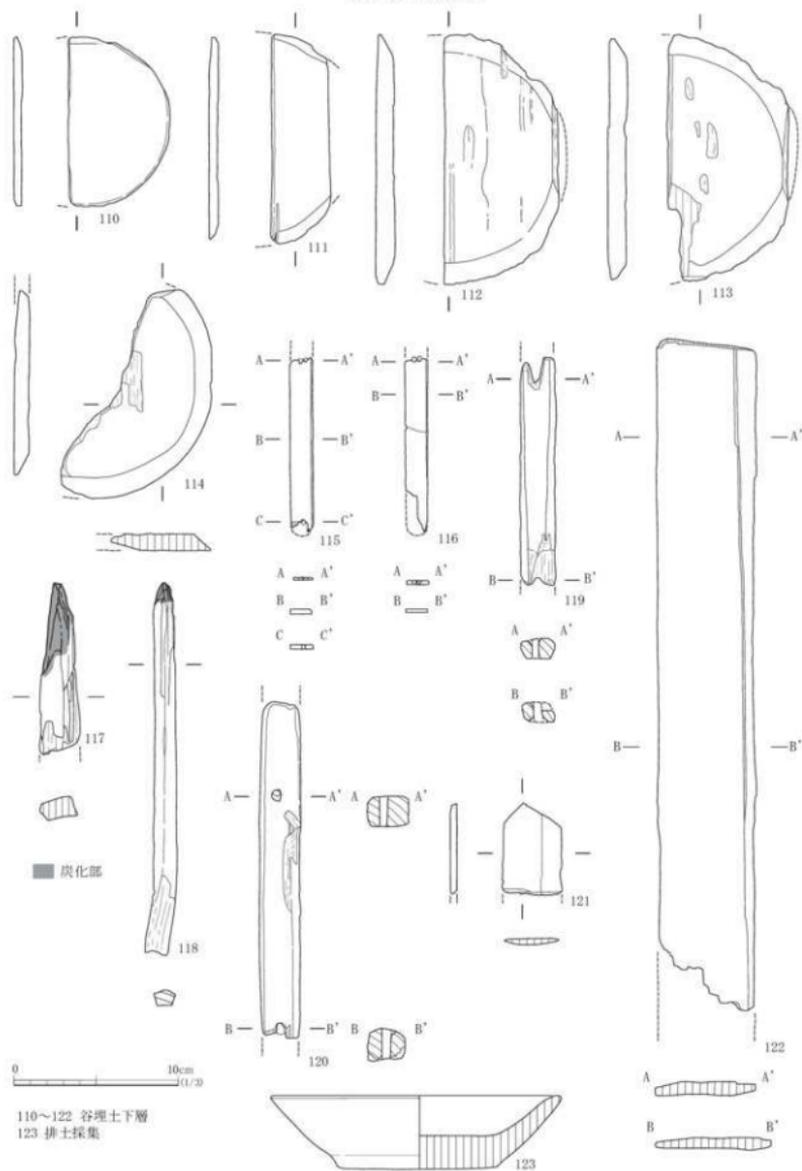


図 56 出土遺物実測図(木製品③)

(6) 小結

谷について

谷は調査区北東部以西で検出された。調査区中央部の落ち込み部は大学会館敷地から連続するものとみられる。同敷地では地山がX=584付近から落ちこんでおり、今回調査区ではX=625以南で落ち込むことから、落ち込み部の南北幅は約41mであることが判明した。また、同敷地北部の谷底面の標高は20.8m前後であったが、約11m北西側に位置する今回調査区の底面は最も低い箇所¹³で18.9mで、約1.9mの高低差がある。また、大学会館敷地においては、谷の緩斜面から古墳時代中期の完形の高杯が出土していること、同時期の井戸が見られることから、該期から谷の埋没が開始されたとされる。しかし、今回調査区の谷埋土層は、出土土器からこれより新しく、瓦質土器を含まないことから、13世紀前半以前に堆積した可能性が高い。また、上層は13～16世紀後半の土器を含むが近世以降の土器を含まない。以上から、谷は古墳時代中期以後も場所によっては浸食を繰り返しつつ、16世紀後半にかけて埋没したと推測される。

遺構について

今回の調査で、縄文時代の貯蔵穴1基、時期不明のものを含むが、14～16世紀を主体とする掘立柱建物跡19棟、溝18条、井戸2基、土壇18基、不明遺構4基、柱穴約700基を検出した。また、統合移転直前まで存在した欄田に伴う水田畝畷群、井戸1基を検出した。

縄文時代の低湿地型貯蔵穴であるSU1は、確実なものとしては1基にとどまった。通常は群集して存在することを踏まえ、SU1周辺で検出されたが、深さが4～14cmと浅く、遺物も出土しなかったSK15～17についても貯蔵穴であった可能性がある。また、谷の開折作用によって削平された可能性も考えられよう。

中世の掘立柱建物は棟方向から、A: N36°～42°WであるSB3～6、10～13、15～17とほぼこれに直交するN50°～55°EのSB2、9、B: N49°～55°WであるSB1、7、14、19とほぼこれに直交するN38°EのSB8、18の2グループに分けることができる。Aグループの掘立柱建物の柱穴からは14～16世紀の瓦質土器片が出土している。一方、Bグループの掘立柱建物の柱穴に柱穴からは、土師器椀、皿、須恵器片等が出土するが、瓦質土器片を含まなかった。以上から、両グループは建物の時期を反映している可能性があるが、遺物は小片かつ量が少ないため、詳細な時期決定を行うことができなかった。しかし、SE2、土壇草の可能性が高いSK8、掘立柱建物跡の区画溝と見られる溝群やSD4・5など、比較的遺物が多く出土した遺構は、いずれも14～16世紀の土器を含んでいたため、掘立柱建物跡を含め、この時期の遺構が主体であったと考えられる。また、谷埋土を掘りこむ井戸(SE1)や柱穴が見られたことから、谷下層堆積後は埋積が進行するにつれ、谷埋土も次第に生活面となったことがうかがえる。

調査区周辺では本部2号館敷地で16世紀後半の井戸をはじめ、多数の柱穴が検出されている¹⁴。立地上は、本部2号館から第2学生食堂敷地にかけてはまとまった平坦面が見られることから、傾斜地に位置する本調査区周辺は集落の縁辺部に位置づけられる。これらの集落跡は、13世紀から戦国期にかけて平川地域を支配していた恒富氏・吉田氏との関連も考えられるため、今後周辺の調査を踏まえて検討を行う必要がある。

近世以後になると、調査区付近一帯は水田化され、集落は本部1・2号館周辺に集約されたと考えられる。なお、本部2号館から第2学生食堂敷地は、古代において吉田遺跡における中心的な地域であったと考えられるが、今回調査区では古代に位置づけられる確実な遺構は存在しなかった。ただし、中世の遺構や谷埋土からは8～9世紀の須恵器が少量出土するほか、須恵器小片が出土する柱穴が多数

見られたことから、古代の遺構が削平された可能性も考慮すべきであろう。

遺物について

今回の調査では縄文時代晩期から16世紀後半の土器が出土した。縄文土器はSU1から出土した深鉢胴部片1点のみである。弥生土器の量は少なく、摩滅したものが多く、量的にやや多いのは古墳時代中期の土師器で、谷埋土下層・土層から出土している。第2学生食堂敷地では該期の堅穴住居跡、大学会館敷地では井戸が検出されていることから、調査区内においても集落が存在した可能性が高い。古代の土器は小破片で量も少ないが、谷埋上・中世の遺構・水田耕上等から8～9世紀の須恵器坏等が出土している。谷埋土下層からは10～11世紀の土師器坏が出土し、下駄・皿・円形曲物・蓋等多数の木製品が出土したことも注目される。これらの木製品については、出土土器の状況から、10～13世紀前半の時間幅でとらえておきたい。輸入磁器は白磁、龍泉窯系青磁が出土している。大学会館敷地からは破片総数数百点以上出土したとされるが、今回調査区からは、可能性がある小片、耕上等からの山上土器を含めても30点に満たなかった。その他、溝、井戸、土壇、柱穴等の遺構、谷埋土上層からは13～16世紀後半の土器が多数出土した。

今回の発掘調査は限られた期間ではあったが、吉田遺跡における中世集落の事態を知る上で、多大な成果を得ることができた。調査区で検出した谷や掘立柱建物等の遺構は調査区隣接地にさらに広がっているとみられることから、今後とも埋蔵文化財の保護に十分な注意が必要である。

【註】

- 1) 岩塚仁志(2007)「止馬西部における中世の土製漆器具—足防・兵門を中心に—」『中世土器の基礎研究21』,高橋(大阪)
- 2) 大林達夫(2010)「第Ⅷ章 考察(1) 10～11世紀中頃までの土器編年」『河内国府発掘調査報告1』,府研(山口)
- 3) 奈良国立文化財研究所(1985)『木簡集成図録 近畿古代篇』,奈良
- 4) 河村吉行(1985)「吉田橋内大学会館新営に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口
- 5) 前掲註4 前掲報告では「古墳時代前期」とされているが、現在の編年観では古墳時代中期に位置づけられる。
- 6) 河村吉行(1990)「付論Ⅱ 吉田橋内木部2号館新営に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報Ⅱ』,山口
- 7) 森田幸一(1985)「足防国吉敷郡言目における古代・中世の探検—吉田遺跡をめぐる諸問題—」『山口大学埋蔵文化財資料館(編)』山口大学橋内遺跡調査研究年報Ⅳ』,山口
- 8) 谷本和之(1994)「付論Ⅰ 吉田遺跡第1地塊E区の調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報Ⅱ』,山口
- 9) 前掲註4
- 10) 前掲註7

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



1-1
SU1第1層



2-1
SB2(H-4区Pit6)



3
SB6(G-7区Pit30)



1-2
SU1第1層



2-1
SB2(H-4区Pit6)



4
SB7(G-5区Pit13)



5
SB10(G-7区Pit6)



7
SB19(E-3区Pit2)



9
溝群8



6
SB15(F-3区Pit6)



8
溝群8



10
溝群8



11
溝群9



13
SD4



15-1
SD4



12
SD3



14
SD4



15-2
SD4

写真 121 出土遺物(土器①)

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



16
SD8



18
SD17



20
SE1(第1層)



17
SD16



19
SE1(第1層)



23
SE2(第5層上面)



24
SE2(第4層)



27
G-7区Pit24



29-1
H-7区Pit5



25
SK1



28
G-7区Pit26



29-2
H-7区Pit5



30
H-7区Pit5



31-1
D-6区Pit4



35
谷埋土下層



34
谷埋土下層



31-2
D-6区Pit4



39
谷埋土下層

写真 122 出土遺物(土器②)

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



21
SE2 第6層



36-1
谷埋土下層



36-2
谷埋土下層



22
SE2 第6層



28
SK8



32-1
H-3区Pit1・2、第4-1層



32-2
H-3区Pit1・2、第4-1層



33
谷埋土下層



38
谷埋土下層



43
谷埋土下層



37
谷埋土下層



40
谷埋土下層

写真 123 出土遺物(土器③)

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



41
谷埋土下層



46
谷埋土下層



44-1
谷埋土下層



42
谷埋土下層



49
谷埋土下層



44-2
谷埋土下層



50
谷埋土下層



56
谷埋土下層



57
谷埋土上層



51
谷埋土下層



55
谷埋土下層



60
谷埋土上層



61
谷埋土上層



63
谷埋土上層



65
谷埋土上層



62
谷埋土上層



64
谷埋土上層



66
谷埋土上層

写真 124 出土遺物(土器④)

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



67～82 谷埋土上層

写真 125 出土遺物（土器⑤）

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



83-1
谷埋土上層



84-1
谷埋土上層



85-1
谷埋土上層



83-2
谷埋土上層



84-2
谷埋土上層



85-2
谷埋土上層



86
H-2~4区第4-1・2層



88
調査区南東部床面清掃中



90-1
調査区西部床面清掃中



87
H-2~4区第4-1・2層



89
調査区南東部床面清掃中



90-2
調査区西部床面清掃中



91
調査区北東部床面清掃中



93
調査区南東部第3層



94-1
調査区北西部第3層



92
調査区南東部遺構検出時



95
調査区南壁清掃中



94-2
調査区北西部第3層

写真 126 出土遺物(土器⑥・土製品)

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



45-1
谷埋土下層



59
谷埋土上層



45-2
谷埋土下層



56
谷埋土上層



58
谷埋土上層



47
谷埋土下層



96-1
排土表採



97-1
谷埋土下層



48-1
谷埋土下層



96-2
排土表採



97-2
谷埋土下層



48-2
谷埋土下層



57
谷埋土上層



98-1
調査区南東部床面清掃中



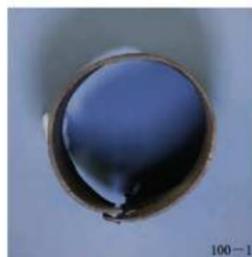
98-2
調査区南東部床面清掃中



55
谷埋土上層

写真 127 出土遺物(土器⑦・石製品)

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



99 SB4(G-6区Pit15)
100・101 SE2 第5層上面
102・104・105 谷埋土下層

写真 128 出土遺物(木製品①)

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



106 赤外線写真(部分)



写真 129 出土遺物(木製品②)

106 ~ 109・110 谷埋土下層

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



写真 130 出土遺物(木製品③)

古田橋内(古田遺跡)の調査



103・118・120・121 谷埋土下層
123 排土表探

写真 131 出土遺物(木製品④)

吉田構内(吉田遺跡)の調査

表8 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
1	SU1 第1層	縄文土器 深鉢	胴部			①灰黄褐色(10YR5/2) ②褐色(10YR5/1)	0.1~1mmの砂粒を含む	
2	SB2 H-4区Pn6	青磁 碗	口縁部 ~底部	①(16.6)		素地 灰白色(10YR7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y5/1)	精良	龍泉窯系
3	SB6 G-7区Pn30	土師器 坏	口縁部 ~底部	①(15.4)②(7.4) ③4.4		①②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1~2mmの砂粒を含む	
4	SB7 G-5区Pn13	土師器 坏	底部	②(4.0)		①灰色(7.5Y4/1) ②褐色(10YR5/1)	0.1~3mmの砂粒を含む	
5	SB10 G-7区Pn6	瓦質土器 こね鉢	口縁部			①灰黄色(2.5Y7/2) ②にぶい・褐色(7.5YR7/4)	0.1~3mmの砂粒を含む	
6	SB15 F-3区Pn6	土師器 皿	口縁部 ~底部	①(8.2)②(3.4) ③2.0		①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~2mmの砂粒を含む	
7	SB19 E-3区Pn2	土師器 坏小	口縁部 ~底部	②(5.6)		①にぶい・黄褐色(10YR7/4) ②浅黄褐色(10YR8/3)	0.1~5mmの砂粒を含む	
8	溝群 8	土師器 坏	底部	②(6.7)		①灰黄色(2.5Y8/3) ②青灰色(5PB6/1)	0.1~2mmの砂粒を含む	
9	溝群 8	瓦質土器 足鉢	口縁部			①灰黄色(2.5Y4/1) ②オリーブ黄色(5Y6/3)	0.1~5mmの砂粒を多く含む	
10	溝群 8	瓦質土器 楕鉢	口縁部			①②暗灰色(N3/0)	0.1~1mmの砂粒を含む	磨減激しい
11	溝群 9	土師器 坏	底部	②(7.8)		①赤褐色(10YR6/8) ②淡黄色(2.5Y8/4)	0.1~1mmの砂粒を含む	外面丹塗り
12	SD3	瓦質土器 足鉢	口縁部			①黒褐色(10YR3/1) ②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1~2mmの砂粒を含む	外面スス付着
13	SD4	瓦質土器 足鉢	口縁部			①にぶい・黄褐色(10YR6/3) ②浅黄褐色(10YR8/3)	0.1~2mmの砂粒を含む	
14	SD4	瓦質土器 足鉢	口縁部			①②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1~2mmの砂粒を含む	
15	SD4	白磁 皿	底部	②(4.4)		素地 灰白色(5Y8/1) 釉 浅黄色(5Y7/3)	精良	
16	SD8	瓦質土器 羽釜	口縁部			①灰色(5Y4/1) ②灰色(5Y6/1)	0.1~1mmの砂粒を含む	
17	SD16	須臾器 坏	底部	②(8.2)		①②灰色(N6/0)	0.1~4mmの砂粒を少量含む	
18	SD17	土師器 皿	底部	②(6.2)		①②にぶい・黄褐色(10YR7/3)	0.1~5mmの砂粒を含む	
19	SE1 第1層	土師器 坏	口縁部			①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~1mmの砂粒を含む	
20	SE1 第1層	土師器 坏	底部	②(6.6)		①灰黄色(2.5Y6/2) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	0.1~1mmの砂粒を含む	
21	SE2 第6層	土師器 坏	口縁部 ~底部	①11.9②6.0③4.6		①②褐色(5YR7/8)	0.1~0.5mmの砂粒を含む	
22	SE2 第6層	土師器 坏	口縁部 ~底部	①6.2~6.8 ②12.4~13.3③5.0		①にぶい・褐色(7.5YR7/4) ②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1~3mmの砂粒を含む	外底面磨減
23	SE2 第5層上面	青磁 碗	胴部			素地 灰白色(10YR7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y5/2)	精良	龍泉窯系
24	SE2 第4層	瓦質土器 楕鉢	口縁部			①②灰色(N7/0)	0.1~3mmの砂粒を含む	
25	SK1	瓦質土器 足鉢	脚部			①灰色(5Y4/1) ②にぶい・黄色(2.5Y6/3)	0.1~2mmの砂粒を含む	
26	SK8	土師器 皿	口縁部 ~胴部	①10.0②5.1③1.9		①②灰白色(10YR8/2)	0.1~3mmの砂粒を含む	磨減激しい
27	G-7区Pn24	土師器 皿	口縁部 ~底部	②(7.6)②(4.5)③1.5		①②褐色(7.5YR6/6)	0.1~3mmの砂粒を含む	磨減激しい
28	G-7区Pn26	土師器 皿	底部	②4.5		①褐色(7.5YR7/6) ②にぶい・黄褐色(10YR7/4)	0.1~2mmの砂粒を含む	磨減激しい
29	H-7区Pn5	青磁 碗	底部	②5.5		素地 灰白色(2.5Y7/1) 釉 明緑灰色(10GY7/1)	精良	龍泉窯系
30	H-7区Pn5	瓦質土器 甕小	胴部			①②灰色(7.5Y6/1)	0.1~3mmの砂粒を含む	
31	D-6区Pn4	瓦器 椀	口縁部			①暗灰色(N3/0) ②灰色(7.5Y5/1)	精良	
32	H-3区Pn1・2, 第4-1層	土師質 こね鉢	口縁部 ~底部	①29.0②11.6③9.8		①②褐色(5YR7/6)	0.1~3mmの砂粒を含む	
33	谷埋土 下層	弥生土器 甬	口縁部 ~胴部	①(8.8)		①にぶい・黄褐色(10YR7/4) ②にぶい・黄褐色(10YR6/4)	0.1~3mmの砂粒を含む	
34	谷埋土 下層	弥生土器 甬	底部	③(5.2)		①にぶい・褐色(7.5YR7/4) ②にぶい・黄褐色(10YR7/2)	0.1~8mmの砂粒を多く含む	磨減激しい

吉田構内(吉田道路)の調査

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	備考
				①口径②底径③器高	①外面 ②内面				
35	谷理土下層	弥生土器 甕	底部	②6.4		①にぶい黄褐色(10YR7/4) ②黒褐色(10YR3/1)	0.1~5mmの砂粒を多く含む		
36	谷理土下層	土師器 壺	口縁部~胴部	①(10.6)		①灰白色(5Y7/1) ②灰オリーブ色(5Y6/2)	0.1~3mmの砂粒を含む		
37	谷理土下層	土師器 甕	口縁部~胴部	①(14.9)		①にぶい黄褐色(10YR5/3) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.1~5mmの砂粒を多く含む		
38	谷理土下層	土師器 甕	口縁部~胴部	①(16.9)		①灰黄褐色(10YR6/2) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)	0.1~6mmの砂粒を多く含む		
39	谷理土下層	土師器 高坏	坏部			①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~3mmの砂粒を含む		
40	谷理土下層	土師器 高坏	坏部			①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1~1mmの砂粒を含む		
41	谷理土下層	土師器 高坏	脚部			②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.1~3mmの砂粒を含む		
42	谷理土下層	土師器 高坏	脚部			①②にぶい浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~3mmの砂粒を含む		
43	谷理土下層	須恵器 長頸壺	頸部~胴部			①②灰色(N7/0)	0.1~2mmの砂粒を含む		
44	谷理土下層	須恵器 甕	胴部			①灰色(N5/0) ②灰色(N6/0)	0.1~1mmの砂粒を少量含む		
45	谷理土下層	土師器 坏	口縁部~底部	①13.7②6.3③4.4		①灰黄色(2.5Y7/2) ②浅黄褐色(10YR8/3)	0.1~3mmの砂粒を含む		
46	谷理土下層	土師器 坏	口縁部~底部	①(12.8)②6.4③4.1		①浅黄色(2.5Y7/3) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.1~3mmの砂粒を含む		
47	谷理土下層	土師器 坏	口縁部~底部	①(12.7)②(6.5)③4.0		①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~3mmの砂粒を含む		
48	谷理土下層	土師器 坏	口縁部~底部	①13.8②6.6③4.2		①②にぶい黄褐色(10YR7/4)	0.1~3mmの砂粒を含む		
49	谷理土下層	土師器 坏	胴部~底部	②6.1		①にぶい褐色(5YR7/3) ②明褐色(7.5YR7/2)	0.1~3mmの砂粒を含む		
50	谷理土下層	土師器 椀	底部	②(5.8)		①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰黄色(7.5YR6/2)	0.1~1mmの砂粒を含む		
51	谷理土下層	土師器 椀	底部	②(7.0)		①浅黄褐色(10YR8/3) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~1mmの砂粒を含む		
52	谷理土下層	土師器 皿	口縁部~底部	①9.0②(6.0)③1.5		①②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1~3mmの砂粒を含む		
53	谷理土下層	土師器 台付皿	底部	②6.2		①②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1~3mmの砂粒を含む		
54	谷理土上層	弥生土器 甕	口縁部~底部	①(16.7)②(5.0)③18.5		①浅黄褐色(10YR8/3) ②黄灰色(2.5Y6/1)	0.1~6mmの砂粒を多く含む		
55	谷理土上層	土師器 甕	口縁部~胴部	①(10.2)		①②褐色(2.5YR6/8)	0.1~3mmの砂粒を多く含む		
56	谷理土上層	土師器 甕	口縁部~胴部	①(10.8)		①明赤褐色(5YR5/6) ②褐色(5YR6/6)	0.1~3mmの砂粒を多く含む		
57	谷理土上層	土師器 甕	口縁部~胴部	①(16.2)		①にぶい黄褐色(10YR7/4) ②淡黄色(2.5YR/4)	0.1~3mmの砂粒を多く含む		
58	谷理土上層	土師器 甕	口縁部~胴部	①(12.8)		①にぶい黄褐色(10YR6/4) ②褐色(7.5YR7/6)	0.1~1mmの砂粒を多く含む		
59	谷理土上層	土師器 甕	口縁部~胴部	①(16.9)		①褐色(7.5YR7/6) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	0.1~5mmの砂粒を多く含む		
60	谷理土上層	土師器 高坏	坏部	①(22.2)		①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~3mmの砂粒を含む		
61	谷理土上層	土師器 高坏	脚部			①②浅黄褐色(10YR8/4)	0.1~1mmの砂粒を含む		
62	谷理土上層	土師器 高坏	脚部			①褐色(7.5YR7/6) ②褐色(5YR7/6)	0.1~3mmの砂粒を含む		
63	谷理土上層	須恵器 甕	頸部~胴部			①②灰色(N5/0)	0.1~1mmの砂粒を含む		
64	谷理土上層	須恵器 高坏	脚部			①②灰色(N6/0)	0.1~1mmの砂粒を含む		
65	谷理土上層	須恵器 坏蓋	口縁部			①灰黄褐色(10YR6/2) ②明褐色(5YR7/2)	0.1~2mmの砂粒を含む	摩滅激しい	
66	谷理土上層	須恵器 坏	底部			①②灰色(5Y6/1)	0.1~1mmの砂粒を含む		
67	谷理土上層	須恵器 坏	底部			①②灰白色(N7/0)	0.1~2mmの砂粒を含む		
68	谷理土上層	緑釉陶器 椀	底部	②(6.2)		素地 灰白色(2.5Y8/2) 釉 オリーブ灰色(10Y6/2)	0.1~1mmの砂粒を少量含む	土師質 摩滅激しい	
69	谷理土上層	緑釉陶器 椀か	胴部			素地 灰白色(2.5Y8/2) 釉 灰オリーブ色(7.5Y6/2)	精良	須恵質	

吉田構内(吉田遺跡)の調査

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm)		色調		粘土	備考
				①口径②底径③器高	①外面 ②内面				
70	谷理土上層	土師器 椀	口縁部	①(13.6)	①灰白色(2.5Y8/2) ②灰白色(2.5Y8/1)	0.1~2mmの砂粒を含む			
71	谷理土上層	土師器 椀	底部	②(7.4)	①浅黄褐色(7.5YR8/4) ②にぶい褐色(7.5YR7/4)	0.1~3mmの砂粒を含む			
72	谷理土上層	土師器 台付皿	底部	②(4.3)	①浅黄色(2.5Y7/4) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~2mmの砂粒を含む			
73	谷理土上層	瓦質土器 羽釜	口縁部		①灰色(5Y6/1) ②灰色(5Y5/1)	0.1~4mmの砂粒を含む			
74	谷理土上層	瓦質土器 足鉢	口縁部		①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②黄灰色(2.5Y6/1)	0.1~3mmの砂粒を含む			
75	谷理土上層	瓦質土器 足鉢	口縁部		①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②浅黄色(2.5Y7/4)	0.1~4mmの砂粒を含む			
76	谷理土上層	瓦質土器 足鉢	口縁部		①灰色(7.5Y5/1) ②灰色(7.5Y6/1)	0.1~3mmの砂粒を含む			
77	谷理土上層	瓦質土器 足鉢	口縁部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②淡黄色(2.5Y8/3)	0.1~3mmの砂粒を含む			
78	谷理土上層	瓦質土器 足鉢	口縁部		①灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y6/1)	0.1~2mmの砂粒を含む			
79	谷理土上層	瓦質土器 足鉢	口縁部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②灰色(7.5Y5/1)	0.1~3mmの砂粒を含む			
80	谷理土上層	瓦質土器 足鉢	脚部		①黄灰色(2.5Y6/1) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~3mmの砂粒を含む			
81	谷理土上層	瓦質土器 足鉢	脚部		②2.5Y8/3淡黄色	0.1~3mmの砂粒を含む			
82	谷理土上層	瓦質土器 播鉢	口縁部		①灰色(10Y5/1) ②灰色(10Y6/1)	0.1~2mmの砂粒を含む			
83	谷理土上層	白磁 碗	口縁部		素地 灰白色(10Y8/1) 釉 灰白色(7.5Y7/1)	精良			
84	谷理土上層	青磁 碗	口縁部		素地 灰白色(2.5Y7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y5/2)	精良	龍泉窯系		
85	谷理土上層	青磁 碗	口縁部		素地 灰白色(2.5Y7/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y5/2)	精良	龍泉窯系		
86	H-2~4区 第4-1・2層	瓦質土器 羽釜	口縁部		①②灰白色(N7/0)	0.1~3mmの砂粒を含む			
87	H-2~4区 第4-1・2層	瓦質土器 足鉢	口縁部		①黄灰色(2.5Y4/1) ②にぶい黄褐色(10YR6/3)	0.1~3mmの砂粒を含む			
88	調査区南東部 床面清掃中	須臾器 坏	底部	②(9.0)	①灰色(N5/0) ②灰色(N6/0)	0.1~1mmの砂粒を含む			
89	調査区南東部 床面清掃中	土師器 坏	底部	②6.4	①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~2mmの砂粒を含む			
90	調査区西部 床面清掃中	白磁 碗	口縁部		素地 灰白色(7.5Y8/1) 釉 灰白色(7.5Y7/1)	精良			
91	調査区北東部 床面清掃中	瓦質土器 播鉢	口縁部		①灰色(7.5Y5/1) ②灰オリーブ色(5Y5/2)	0.1~3mmの砂粒を含む			
92	調査区南東部 遺構検出時	瓦質土器 足鉢	脚部		①灰白色(10YR8/2)	0.1~3mmの砂粒を含む			
93	調査区南東部 第3層	白磁 皿	底部	②5.2	素地 灰白色(7.5Y8/1) 釉 灰白色(10Y7/1)	精良			
94	調査区北西部 第3層	青磁 碗	底部	②5.2	素地 灰色(N6/0) 釉 オリーブ灰色(5GY6/1)	精良	龍泉窯系		
96	排土表探	須臾器 壺	口縁部 ~脚部		①灰色(7.5Y6/1) ②灰白色(7.5Y7/1)	0.1~0.5mmの砂粒を僅かに含む			

表9 出土遺物(土製品・石器)観察表

法量()は複元値

遺物番号	遺構・層位	器種	法量(cm)	重量(g)	材質	備考
95	調査区南壁清掃中	土錘	残存長3.0 最大幅1.3	5.5	粘土	上・下端部を欠損
97	谷理土下層	石臼	径(28.8)残存高7.3	590.6	砂岩	上臼 摩滅激しい
98	調査区南東部 床面清掃中	石錘小	最大厚1.2	27.1	滑石	

吉田構内(吉田遺跡)の調査

表10 出土遺物(木器)観察表

法量()は複元値

遺物番号	遺構・層位	器種	法量(cm)	材質	備考
99	SB4 G-6KPt15	柱	残存長28.4 最大径10.9	針葉樹	腐食激しい
100	SE2 第5層上面	曲物柄杓 身	短径9.7、長径10.0 高さ11.0 最大厚0.35	針葉樹	100と同一個体
101	SE2 第5層上面	曲物柄杓 身の底部	短径9.1 長径9.9 厚さ0.7	針葉樹	99と同一個体
102	谷理土 下層	下駄	最大長22.5 残存幅7.3 最大高5.9	針葉樹	約1/2残存
103	谷理土 下層	皿	口径(17.4) 底径8.4 器高4.1	針葉樹	挽物
104	谷理土 下層	曲物 結合部	残存長4.7 残存幅5.8 厚さ0.4	針葉樹	
105	谷理土 下層	円形曲物 蓋	径(16.6) 残存長8.3 残存幅5.7 厚さ0.6	針葉樹	結合孔3箇所残存 2箇所で紐が残存
106	谷理土 下層	円形曲物 蓋	径(17.1) 厚さ0.5	針葉樹	接合しない2破片・間が欠損 結合孔(紐)1箇所残存 墨書
107	谷理土 下層	円形曲物 蓋	径(38.8) 残存長37.7 残存幅12.5 厚さ1.0	針葉樹	結合孔(木釘)4箇所残存
108	谷理土 下層	長方形曲物 底板	残存長14.5 残存幅3.0 厚さ0.35	針葉樹	結合孔(紐)1箇所残存
109	谷理土 下層	長方形曲物 底板	残存長32.1 残存幅6.4 厚さ0.4	針葉樹	結合孔(紐)2箇所残存
110	谷理土 下層	蓋	径(10.4) 残存長10.3 残存幅6.2 厚さ0.6	針葉樹	
111	谷理土 下層	蓋	径(14.0) 残存長12.8 残存幅3.1 厚さ0.55	針葉樹	
112	谷理土 下層	蓋	径(15.3) 残存長15.3 残存幅7.0 厚さ1.2	針葉樹	
113	谷理土 下層	蓋	径(15.2) 残存長15.1 残存幅7.4 厚さ1.1	針葉樹	
114	谷理土 下層	蓋	径(15.2) 残存長12.8 残存幅7.4 厚さ1.0	針葉樹	
115	谷理土 下層	楡扇か	残存長17.0 最大幅1.4 厚さ0.25	針葉樹	要孔(1孔)、縦目孔(2孔)残存
116	谷理土 下層	楡扇か	残存長10.6 最大幅1.4 厚さ0.25	針葉樹	縦目孔か(2孔)残存
117	谷理土 下層	松明灯か	残存長10.5 最大幅2.4 厚さ1.1	針葉樹	
118	谷理土 下層	松明灯か	残存長22.8 最大幅1.5 厚さ0.9	針葉樹	
119	谷理土 下層	不明部材	残存長13.9 最大幅2.1 厚さ1.25	針葉樹	釘孔か、2箇所残存
120	谷理土 下層	不明部材	残存長20.6 最大幅2.5 厚さ1.9	針葉樹	釘孔か、2箇所残存
121	谷理土 下層	用途不明	残存長5.7 最大幅3.6 厚さ0.4	針葉樹	
122	谷理土 下層	板材	残存長41.1 最大幅6.1 厚さ0.85	針葉樹	
123	排土表採	皿	口径(17.7) 底径9.7 器高4.6	針葉樹	谷理土下層出土か、挽物

5. 農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査

調査地区 吉田構内T 19区・S 20区

調査面積 約250㎡

調査期間 平成21年1月5日～3月19日

調査担当 横山成己・藤野好博

(1) 調査の経緯(図57、写真132・133)

吉田構内南端部に位置する農学部附属動物医療センターの改修Ⅲ期工事が計画されたことを受け、埋蔵文化財の破壊が予想されるセンター北側空き地(第1調査区)と、浄化槽が新設される西側空き地(第2調査区)において、本発掘調査を実施する運びとなった。

両調査区の距離は約70mを測るが、各地において確認された埋蔵文化財の内容が大きく異なるため、本書ではそれぞれに項を立てて報告を行うことにする。

(2) 第1調査区

1. 調査の経緯

当地点は動物医療センター改修工事と直接の関係はないが、本学開発部局より建物建設工事重機導入のため、建設地点周域を現地表より約1m掘削する必要があるとの相談を受けた。

動物医療センター周辺域では、改修Ⅰ期・Ⅱ期工事に伴う発掘調査成果ばかりでなく、第1調査区の北に隣接する地においても、昭和61年に実施された農学部附属農場農道整備に伴う立会調査で多数の柱穴群と溝が確認されていた⁹¹ため、まずは掘削予定範囲全域を調査対象範囲と定め、平成20年12月5日に遺構の分布確認の為の予察調査を行った。その結果、調査対象地全域に密に遺構が遺存し、遺構面までの深度も極めて浅いことが確認されたため、開発部局と再度の調整を行うこととなった。その結果、開発工事は予定地西側のみを対象とし、東側は現地保存することが決定され、年の替わった1月5日より本発掘調査を実施することとなった。このため、東側の予察調査部分も継続して調査を実施したため、調査区は東側に柵を向けた羽子板状



図 57 調査区位置図



写真 132 調査区周辺風景(南東上空から)



写真 133 第1調査区調査前遠景(南西から)

を呈している。便宜的に東側トレンチ部を第1調査区東地区、西側本発掘範囲を西地区と命名した。

調査の経過に関しては、1月5日から1月7日までを重機による表土掘削、1月8日から9日にかけてを遺構検出・検出写真撮影、1月13日から2月4日までを遺構掘削・遺構測量、2月5日から2月6日にかけてを調査区内清掃・完掘写真撮影・調査区平面・断面測量に当てた。

【註】

- 1) a:横山成己・藤野好徳(2010)「農学部附属畜産病院改修1期1事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』,山口
- b:横山成己(2011)「農学部附属動物医療センター改修II期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成19年度—』,山口
- 2) 河村吉行(1987)「農学部附属畜産病院改修に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報VI』,山口

2. 基本層序(図58、写真140・141)

調査前の現地表はほぼ平坦に造成されながらも緩やかに南から北へと降下していたが、遺構面となる地山を検出した結果、従来の地形は東南東から西北西に緩やかに降下していることが明らかとなった。遺構面で見ると、東地区東端部は標高およそ30.6m、西地区北西端部は標高およそ29.8mを測り、その比高は約0.8mとなる。遺構面を計測した等高線から見ると、自然地形としては調査区以南はより高所であった可能性が高いが、現状で調査区の南に隣接する動物医療センター敷地と遺構面との比高が約1m存在するため、動物医療センター新営に伴い調査区南側地盤が大幅にカットされたものと想像される。しかし動物医療センター新営時の埋蔵文化財調査記録が不十分であることから、調査区周辺域の旧地形の復元は困難なものとなっている。

また、当調査地は従前動物医療センター教職員の駐車場として活用されていたが、調査区東地区東端部では、駐車場整備のため敷かれたと見られるバラス混じりの表土(10cm厚)直下が地山となり、すでに遺跡の破壊が進行していたことを伺い知ることができる。

基本層序については以下の通りである。

第1層 表土(層厚10～40cm)

地山の傾斜に比例し東南東から西北西に向かい厚く堆積する

第2層 ぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土(層厚4～6cm)

本学統合移転前の旧耕土と見られるが、西地区にしか遺存しない

第3層 ぶい黄褐色(10YR6/4)砂質土(層厚4～20cm)

東地区と西地区境界部の攪乱のため不連続層となっているが、東地区③と西地区④を同一層と見なす

第4層 地山 東地区 黄褐色(10YR5/6)と明黄褐色(2.5YR5/6)の互層

西地区 黄褐色(10YR5/6)と明黄褐色(2.5YR5/6)砂土の互層

明赤褐色(2.5YR5/6)砂礫土 1～10cmφの礫少量に混ざる

黄褐色(10YR5/6)と明黄褐色(2.5YR5/6)砂土の互層 0.5～1cmφの礫少量混ざる

明黄褐色(2.5YR6/6)砂礫土 0.5～5cmφの礫少量混ざる

東・西地区境界部の攪乱坑は基本層序第3層を掘り込んでおり、坑底面より植物繊維の腐蝕物も確認されたため、比較的新しい時期のものと推測される。また西地区西部には従来調査区西隣にある大倉

古田橋内(古田遺跡)の調査

- ① 表土
- ② にぶい・黄褐色 (10YR5/3) 粘質土 (田耕土)
- ③ にぶい・黄褐色 (10YR5/4) 砂質土 (②と同層)
- ④ 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 (SP147 埋土)
- ⑤ 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 炭化物少量混入 (SP177 埋土)
- ⑥ 2 黄褐色 (10YR5/6) と明赤褐色 (2.5YR5/6) の砂土の互層 (地山)
- ⑦ 3 明赤褐色 (2.5YR5/6) 砂土 (名) ~ 10 cm の薄少量混入 (地山)
- ⑧ 4 ⑦-2 と同質であるが 0.5 ~ 1 cm の薄少量混入 (地山)
- ⑨ 5 明黄褐色 (2.5YR/6) 砂土 (名) 0.5 ~ 5 cm の薄少量混入 (地山)

- ① 表土
- ② 造成土
- ③ にぶい・黄褐色 (10YR6/4) 砂質土
- ④ 埋土層 1
- ⑤ 埋土層 2
- ⑥ 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 (SD1 埋土)
- ⑦ 1 黄褐色 (10YR5/6) と明赤褐色 (2.5YR5/6) の互層 (地山)



図 58 第1調査区平面図・断面図

の付設建物が存在したため、基礎杭による攪乱を受けている状況であった。その他、西地区南端部にはかつて実験動物を埋葬したらしき坑も複数確認されている。

〔註〕

1) 橋正成己(2007)「吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」,『山口大学埋蔵文化財資料館(編)山口大学埋蔵文化財資料館年報 平成17年度-』,山口

3. 遺構(図58~64、写真134~167)

調査区全域を通じて、ピット208基、溝1条が検出された。その他、検出されたピット群を切る形で座標軸にほぼ平行・直交する複数の溝が確認されたが、これは耕作に伴う鋤溝と見なされる。旧耕土(基本層序第2層)下に存する基本層序第3層が土質から水田床土とは思われないため、統合移転前の当地は畠地だった可能性が高い。

確認されたピット群は調査区内で分布の粗密を示している。すなわち東地区では東端部にピットの集中が見られるが、以西にはピットは確認されず、西地区に至り再びピット群が出現する。先に東地区の削平について触れたが、最も高所にある東端部で比較的良好にピットが遺存していることから見て、この間に柱穴等の遺構が存在したとは想定しがたい。また、東地区ピット空白地のほぼ中央にあたる地点に1条の溝(SD1)が検出されている。西地区内にもまた遺構分布密度の粗密が見られる。最も分布が密であるのは西地区南東部域であり、西または北に進むほどピットの分布はまばらになる。また西地区北東隅部には遺構が存在しない。このような状況から推察すると、東地区はトレンチ調査であるため断言は避けるが、ピット群はあたかもSD1をはさみそれぞれ集団を持って分布しているかのように見える。

また、狭小な範囲に密に分布するピットであるが、重複が比較的不多いことも一つの特徴であり、重複関係にある遺構はの大半は2基のピットの切り合いである。個別ピットの断面観察から、これらは頭立柱建物の柱穴、または柵列と考えられることから、建造物建て替えに際しては意識的に場所をずらしたものと想像される。

この他、西地区南西隅部において当調査区では異質な重複関係を見せるピット群が確認される。当地点では5基のピットが重複しており、埋土の断面観察から柱穴と見なされるが、これに対応する柱穴群が確認できない。おそらく動物区療センター建設により削平された調査区南隣、または犬舎建設により削平された調査区西隣に対応する遺構が存在したものと想像されるが、確認することはできない。

以上が遺構分布状況の概要である。次に復元される建物跡や個別遺構に関して報告する。

【掘立柱建物跡】

狭小範囲に多数のピットが密集するため、1間×1間建物を想定すると根柢なく多数の小型建物が復元される可能性が高いため、本書では2間以上の桁行または梁行が復元される建物跡のみを対象に報告する。

SB1(図59、写真142~144)

西地区南東部に位置する北西-南東方向の掘立柱建物跡で、SP29、SP65、SP83、SP84が柱穴となる。SP84に対応する箇所には樹木が存在するため柱穴を検出できていない。柱間はそれぞれ約1mを測る。桁梁方向は不明であるが、SP65に対応する柱穴が存在しないことから、建物はさらに南西方向に延長していたものと推定され、2間×2間以上の建物が復元されるが、調査区南側はすでに削平を受けているため確認は不可能である。建物軸は座標北に対しN32°Eに振っている。

柱穴深度はSP29が0.34m、SP65が0.28m、SP83が0.26m、SP84が0.23mを測る。柱穴埋土の観察から



写真 134 第1調査区遺構検出状況（南西から）



写真 135 第1調査区遺構完掘状況（南西から）



写真 136 第1調査区西地区全景 (東から)



写真 137 第1調査区西地区西半部 (東から)



写真 138 第1調査区西地区東半部南側 (上空から)

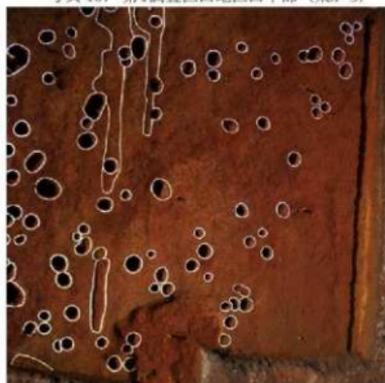


写真 139 第1調査区西地区東半部北側 (上空から)



写真 140 第1調査区西地区北壁断面 (南西から)



写真 141 第1調査区西地区北壁断面 (南東から)

は明確な柱根腐蝕土が確認されず、建物廃棄時に抜き取られたものと思われる。SP84からは内部より板石が検出された。当調査区では内部より板石が出土する柱穴が複数確認されているが、柱穴底面に敷かれた状態での出土はSP121の1例しか存在せず、板石の用途を安易には推定できない。多くは斜めもしくは縦に投入された状態で検出されており、柱穴埋め戻しに際し不足する土量を補うための行為であるかの印象を受ける。

SB2(図60、写真145～148)

西地区南側西寄りに位置する北西-南東方向の掘立柱建物跡で、SP129、SP145、SP153、SP155が柱穴となる。この建物跡も南側の削平により半壊しており、建物規模は不明である。建物軸は座標北に対しN24°Eに振っている。東西柱間2m、南北柱間2.2mを測り、SB1に比して柱間距離が長い。

柱穴深度はSP159が0.39m、SP145が0.47m、SP153が0.36m、SP155が0.31mを測る。SP129に底面付近には柱根が遺存しているが、腐蝕が著しく取り上げは不可能であった。その他の柱穴に柱根または柱根腐蝕土層は確認されず、遺存する柱穴ではSP129のみが地上面で切断され、他の柱材は抜き取られたものと推定される。

SB3(図61、写真149～153)

西地区南側西寄りに位置する北東-南西方向の掘立柱建物跡で、SP116、SP197、SP186、SP163、SP171が柱穴となる。SB2と重複する建物であるが、柱穴の切り合いもなく、出土遺物としてはSB2のSP145から土師器坏(図66-7)と瓦質土器体部片(図66-8)が、SB3のSP171から瓦質土器鍋口縁部片(図66-1)が出土しているものの、瓦質土器鍋口縁部形態に時期転が推定されるため、両者の先後関係を知り得ない。この建物も南側の削平により半壊しており、建物規模は不明である。建物軸は座標北に対しN24.5°Eに振っており、SB2と近似値をす。東西柱間が2.4m、南北柱間2.1mを測る。

柱穴深度はSP116が0.30m、SP197が0.24m、SP186が0.315m、SP163が0.32m、SP171が0.24mを測るが、SP197は後世の掘乱により南半部が破壊されている。断面観察では明確な柱根腐蝕土層が確認されず、SP186、SP163埋土に板石が投げ入れられていることから、柱材はいずれも建物廃棄後に抜き取られたものと推測される。

SB4(図62、写真154～156)

西地区北西部に位置する東南東-西北西の掘立柱建物跡で、桁行2間×梁行2間規模となる。SP147、SP149、SP200、SP161、SP184、SP181が柱穴となり、桁行柱間は2.88m、梁行柱間は約2mを測る。建物軸は座標北に対しN15°Eに振っている。

柱穴深度は半掘であるがSP147が0.16m、SP149が0.12m、SP161が0.2m、SP184が0.12m、SP181が0.08mを測る。ここでは掘立柱建物跡とするが、西調査区北域にて検出されるピットは総じて南域のものに比して深度が浅く、埋土も単一層のものが多く、柱穴であったとしても柵、小屋等簡易的な建造物に伴うものである可能性が高い。

またSP149-SP181軸間にピット3基(SP157、SP158、SP164)が存在する。SB4との関連は特定できないが、特にSP164は底面に強い粘質土層が堆積しており、上層埋土も他のピット埋土とは異質で地山土に見られる小礫等が混入していないことから、何らかの作業坑であった可能性を残す。

【ピット群】

ここでは、特徴的なピット群を報告する。

調査区西地区南西隅ピット群(図63、写真157・158)

前述した調査区南西隅に分布するピット群である。検出時にはSP172、SP173、SP175、SP176、SP177

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

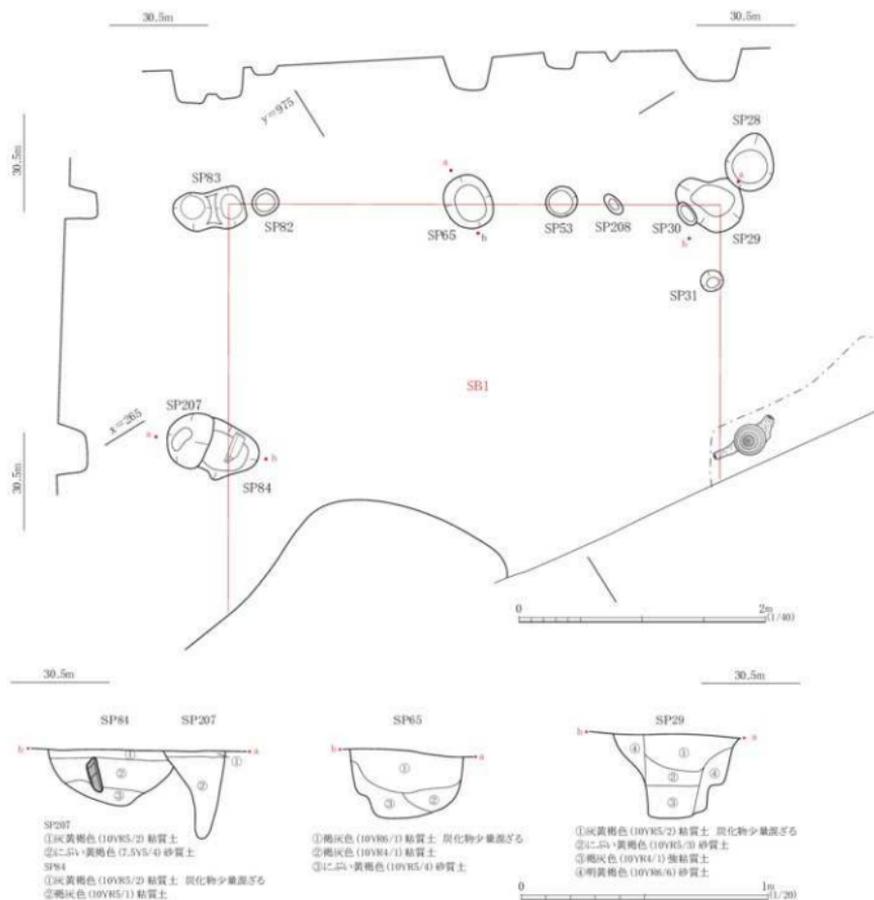


図 59 SB1平面図・断面図



写真142 SP84・207土層断面(北東から)



写真143 SP65土層断面(東から)



写真144 SP29土層断面(南東から)

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

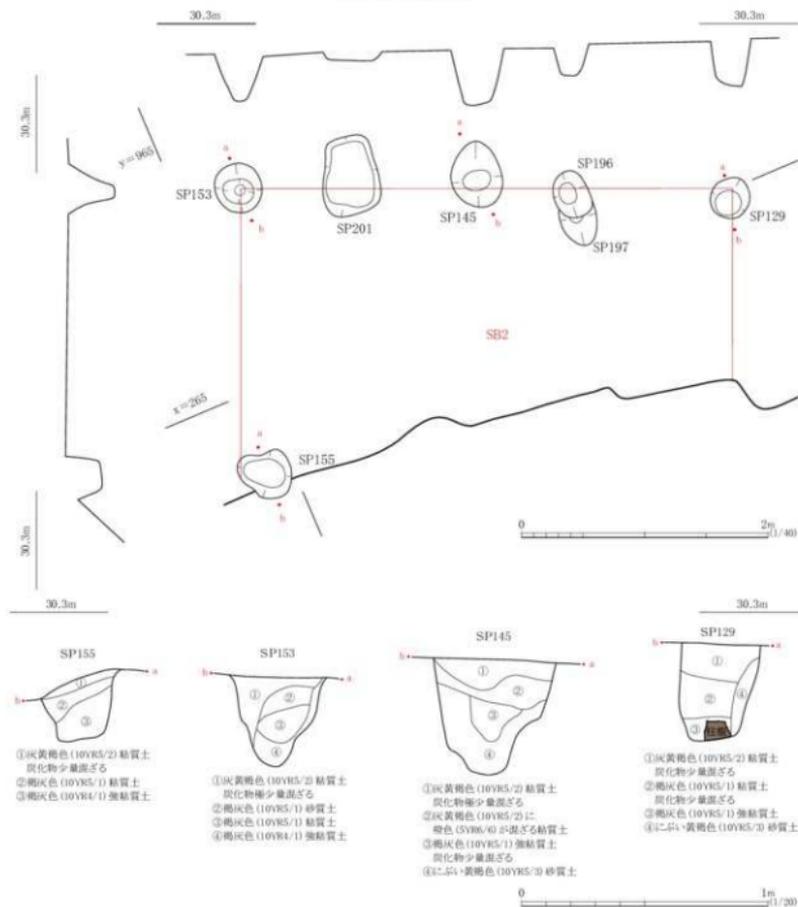


図 60 SB2 平面図・断面図



写真 145 SP155 土層断面
(東から)

写真 146 SP153 土層断面
(東から)

写真 147 SP129 土層断面
(東から)

写真 148 SP129 柱根遺存状況
(東から)

吉田橋内(吉田道路)の調査

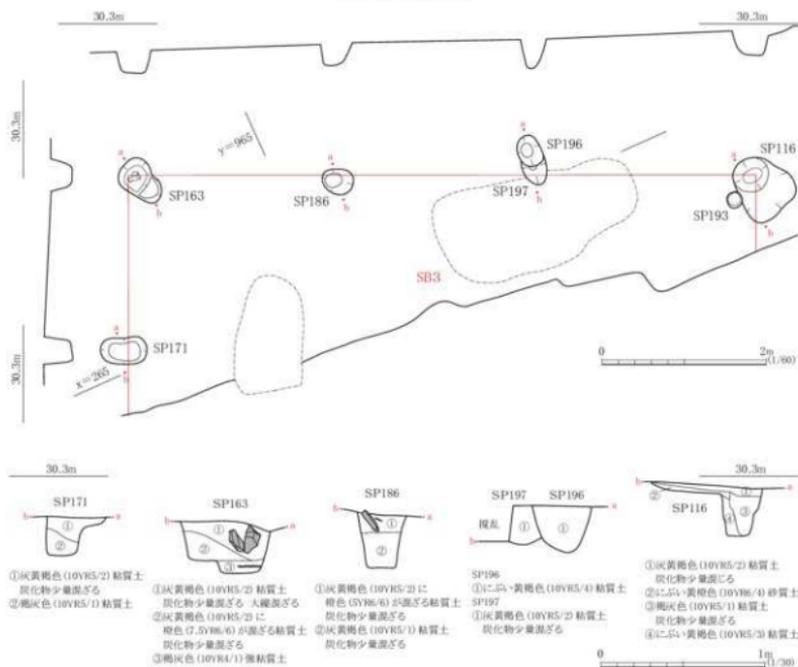


図 61 SB3平面図・断面図



写真 149 SP171 断面 (東から)



写真 150 SP163 断面 (北から)



写真 151 SP186 断面 (東から)



写真 152 SP196・197 断面 (南東から)



写真 153 SP116 断面 (北東から)

吉田橋内(吉田道路)の調査

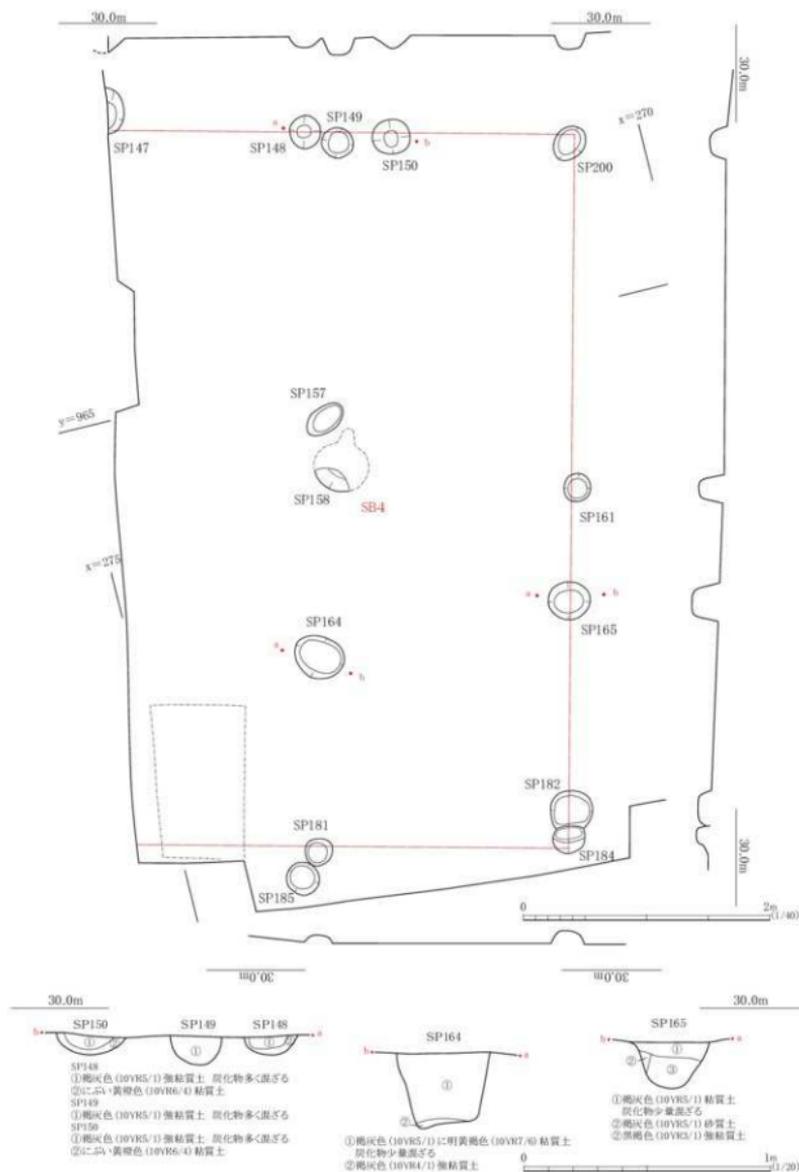


図 62 SB4平面図・断面図

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



写真 154 SP148-150 土層断面(東から) 写真 155 SP164 土層断面(南東から) 写真 156 SP165 土層断面(東から)

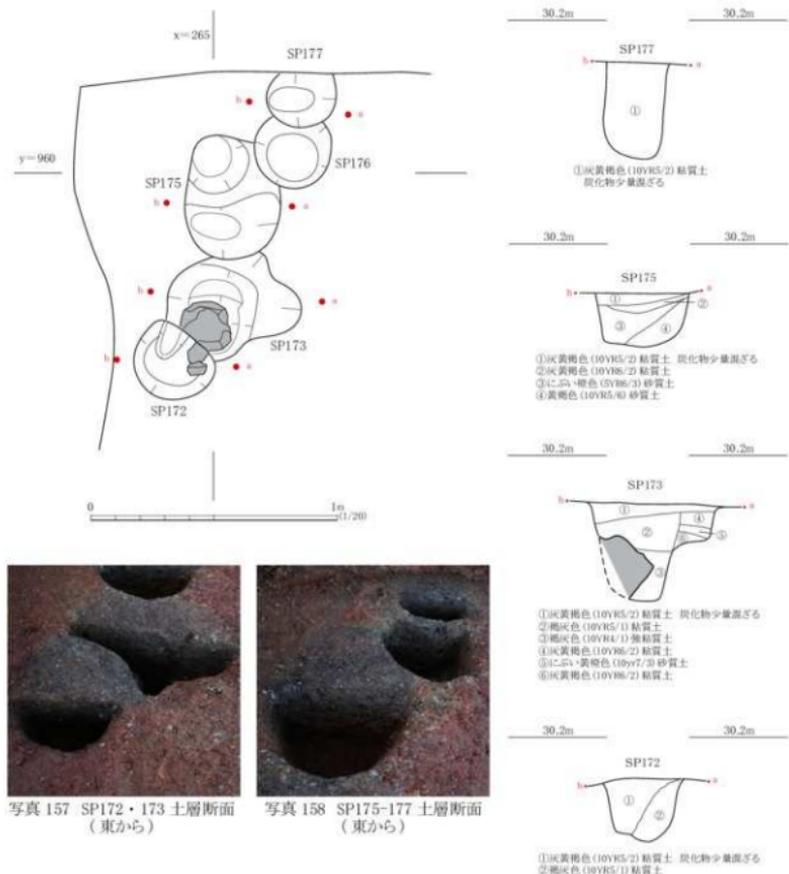


図 63 調査区西地区南西隅ピット群平面図・断面図

の5基のピットの重複と判断したが、遺構掘削の結果SP175は2基の切り合いであることが判明した。東方のものをSP175a、西方のものをSP175bとしておく。結果このピット群は6基のピットの切り合いとなる。

遺構埋土の上質が極めて似通っており、重複関係の判断に苦心したが、先後の順はSP173が最も古く、次いでSP175、次いでSP176、最後にSP177と続く。SP172に関してはSP173に後出することは確かであるが、他のピットとの関係は不明である。

各ピットの深度を見ると、SP172が0.24m、SP173が0.42m、SP175aが0.25m、SP175bが0.39m、SP176が0.22m、SP177が0.39mであり、0.4m内外と0.22～0.25mの2種に人別される。前述の如くこのピット群に建物跡として対応する遺構は確認されておらず、調査区南方から西方に延びる建物跡の北東両柱であった可能性が高いが、ここまでの重複を見せる柱穴は他に存在せず、集落構造を考える上で重要な遺構群となっている。

西地区中央部ピット群(図64、写真159～163)

西地区のほぼ中央部に位置するピット群である。

SP120はSP121に切られるピットで、直径0.32mの円形ピットである。断面形態は長い逆台形を呈し、底面までの深度は0.29mを測る。断面観察では柱根腐蝕上と見られる上層が確認されるため、柱の抜き取りは行われなかったものと考えられる。

SP121はおそらくSP92、SP111、SP187と1間×1間建物を構築するが、ここでは建物の詳細に触れない。SP120を切るピットで、平面形態は長軸0.44m×短軸0.4mの楕円形を呈する。断面形態は逆台形状を呈し深度は0.26mを測るが、中位で微弱な二段掘りを行っている。内部からは複数の板石が投げ込まれた状態で検出されている。

SP122は長軸0.27m×短軸0.23mの平面形態楕円形のピットで、断面形態は縦長の逆台形状を呈する。平面規模に比して深度が著しく深く、0.43mを測る。断面には明瞭に柱根腐蝕痕跡が残り、廃棄時に柱材が切断されたことが分かる。底面付近の柱根軸から径11cm程度の柱材が推測される。このような特徴を有するピットは主に西地区中央部から東南部にかけて散見される。

SP123はSP122の南東0.2m地点に位置する直径0.22mの円形ピットである。側面がほぼ垂直に掘り込まれており、底面は丸く凹む。ピットの深度は0.29mを測る。SP122同様明瞭に柱根腐蝕痕跡が残り、径12cm程度の柱材が推測される。

東地区東端部ピット群(図65、写真164～167)

東地区では東端部にのみピットが分布するが、トレンチ調査のため建物構造・規模等は復元できない。埋土は何れも褐灰色(10YR5/1)が基本となっており、上質にもさほど差が見られないことから、西地区同様に複数時代の遺構が混在するわけではなく、比較的短期間に建物の複数回の建て替えが行われた結果と推測される。確認したピットは12基であるが、この内特徴的なピットのみ報告する。

SP4は長軸0.36m×短軸0.29mの楕円形ピットである。検出時ピット中央に円形痕跡が見られたことから柱根痕跡かと思われたが、遺構掘削の結果その可能性は否定された。断面形態は開きの小さい逆台形状を呈し、深度0.25mを測る。埋土下層には他のピットに見られる如く板石が投げ込まれている。

SP8は長軸0.28m×短軸0.23mの楕円形ピットで、深度0.33mを測る。底面に柱根が遺存するが、腐蝕が著しく取り上げは断念した。遺存する柱根は径15cmほどであり、遺存が見られた他の柱根や柱根痕跡に比すとやや太めと言える。

他にも柱根痕跡が見られるピットや大ぶりの板石が投げ込まれたピットなど多数存在するが、本書では報告を省く。

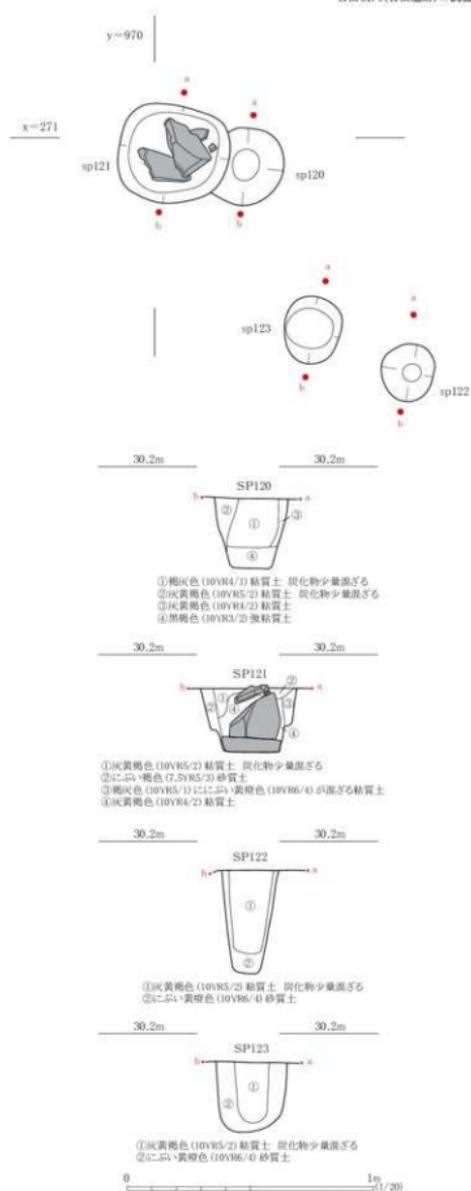


図 64 第1調査区西地区中央部ピット平面図・断面図



写真 159 SP120 土層断面 (東から)



写真 160 SP121 土層断面 (東から)



写真 161 SP121 完掘状況 (北から)



写真 162 SP122 土層断面 (東から)



写真 163 SP123 土層断面 (東から)

【標列】

標列a(図58、写真136・138・139)

西地区北東部を北西-南東方向に直列し、それに直交するように南東部を北東-南西に直列するピット群を、建物配置を取らないことから標列と推定し、標列aとする。

北西-南東方向ではSP133・189・199・86・59・37の柱穴列が、北東-南西方向ではSP15・19・22・26か27がこれに該当する。2列の交差地点が攪乱によって破壊されているために両者が一体のものか特定できないが、直交することからほぼ間違いのないと思われる。また、標列軸は座標軸に対しN30.5° E(E59.5° N)となり、SB1と近似値を示すことも注される。

用途に関しては、柱穴列のそれぞれ北東、南西方向の遺構が散漫になることから、居住域を区画する施設と見なしておく。

標列b(図58、写真136・139)

標列a北西-南東列の北東外側に位置する直列ピット群である。SP132・105・198・60・57・34・32がこれに該当する。両者の方向はほぼ一致し、併存したのか先後関係を有するのかわからない。

【溝】

SD1(図58)

東地区の中央やや西よりに検出されたもので、調査区内では唯一の溝となる。深さ0.02m～0.05mと極めて浅いため、重機掘削時に部分的に削り取ってしまったが、幅約0.3m、検出長約3.6mを測る。理上からは須恵器の小片しか出上っていないため時期の特定は困難であるが、南東-北西(およそE60° N)の走向であることから掘立柱建物SB1や標列との関連が想定される。

以上、確認した遺構の概要を記した。柱穴に対する建物検討や標列と見たピット群と溝SD1の関係、さらには西地区ピット群と東地区東端部ピット群との関係について更なる検討を要する。

また現状保存した東地区に関しては、現地表下わずか10cmで遺構面が露出するため、些細な現状変更でも遺構が破壊される状況にある。開発部局及び当該地の所轄部局との連絡を密にし、遺跡の保護に努めなくてはならない。

【注】

1) 岩崎(1999)「足跡再考」、財団法人正日興教育財団山田黒塚蔵文化財センター(編)『陶埴』第12号、山口

4. 遺物(図66、写真168～170、表11)

ほぼ半数のピットから遺物の出土を見たが、大半が土師器および須恵器の細片であり、図化可能な遺物は少ない。以下遺構ごとに出土遺物を報告する。

【SP6】1は土師器皿の底-体部片。底径6.6cmに復元される。口縁端部を欠失しているが現存部より大きくは立ち上がらないと思われる。全面風化のため調整は不明。灰白色を呈す。

【SP34】2は土師器杯の底-口縁部片。小片のため口・底径とも復元できない。器高1.0cm。器壁の薄い個体であり、底部から外反気味に体部が開き口縁に至る。口縁端部はやや稜を持ちつつ丸く収める。全面風化のため調整は不明。灰色を呈する。

【SP42】3は土師器皿の底-口縁部片。小片のため口・底径とも復元不可。器高0.9cm。いわゆる橙色系の土師器皿であり、器壁は厚く底部から湾曲して口縁を立ち上げ、口縁端部を丸く収める。

【SP81】4は青磁碗の口-体部片。比較的器壁が厚く、灰白色の素地で軸はオリーブ灰色に発色する。

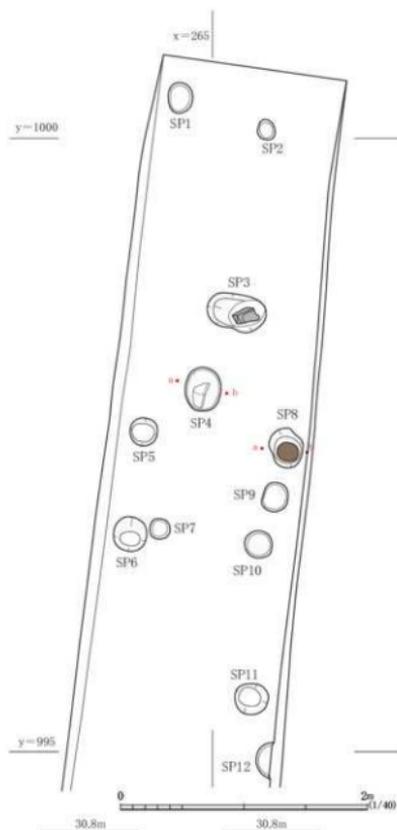


図 65 第1調査区東地区ピット群平面図・断面図



写真 164 第1調査区東地区ピット群 (東から)



写真 165 SP4 土層断面 (東から)



写真 166 SP8 土層断面 (東から)



写真 167 SP8 完掘状況 (東から)

内外面とも文様は確認されない。

【SP96】5は瓦質土器擂鉢口縁部片。口縁内面に隅丸三角形の粘土帯を貼り付ける。内面はヨコハケが明瞭に残り、外面は口縁部はナデ、残存部下端にはタテハケが見られる。内面の2ヶ所にそれぞれ2条の御目が遺存する。

【SP32】6は土師器杯の底-体部片。底部径は5.2cmに復元される。薄くシャープなつくりであり、平底のから直線的に体部が開く。全面が摩耗しており、糸切り痕は観察できない。浅黄褐色を呈す。

【SP145】7は土師器杯の口-底部片。口径5.2cm、底径3.2cmに復元される。器高0.9cm。平底から体部が直線的に開き、口縁端部は丸く収める。小型品であるが比較的丁寧なつくりである。灰黄色を呈す。8は須恵質焼成となっているが瓦質土器体部片である。外面に格子タタキ痕が残る。内面は摩耗により調整不明。鍋の底部付近の破片と見られるが、横断面の緩やかな弧から大型品と推測される。

【SP163】9は瓦質土器鉢口縁部片。口縁内面に断面半円形の粘土帯を貼り付ける。内面にかすかにヨコハケ状の調整が見られるが、摩耗が激しく詳細不明である。

【SP164】10は瓦質土器擂鉢口縁部片。口縁内面に扁平な半円形の粘土帯を貼り付ける。内面に3条の御目が遺存している。外面調整は摩耗により不明。

【SP171】11は瓦質土器鍋口-体部片。体部から「く」の字状に扇曲し口縁に至り、口縁端部を上方に拡張させる。内面は口縁から体部までヨコナデ痕が明瞭に残る一方、外面は口縁部にヨコナデが観察されるが体部は風化により不明。

【SP172】12は一見土師器杯であるが、底部外面につまみ状の粘上が付着している。杯として計測すると、口径6.9cm、底径6.0cmに復元される。器高0.9cm。平底から短く立ち上がり、口縁端部を丸く収める。内外面とも重ね焼かれた痕跡が明瞭に残る。灰白色を呈する。13は土師器杯の端部を丸く収めた口縁部片。内外面ともヨコナデによる調整が施されている。灰黄色を呈する。

【SP177】14は土師器杯の口-底部片。口径6.7cm、底径4.0cmに復元される。器高1.4cm。器壁は薄く、平底から体部が直線的に開き、口縁を尖り気味に収める。底部には糸切り痕が明瞭に残る。灰白色を呈す。15は突帯部片。瓦質土器羽釜の突帯か。

【SP178】16・17はともに土師器杯口縁部片。16はやや内湾気味に口縁に立ち上がり、端部を尖り気味に収める。にぶい黄褐色を呈す。17は直線的に口縁に至り、端部を尖り気味に収める。浅黄褐色を呈す。

【SP180】18は完形の土師器皿。3つ同じいわゆる椀色の皿であり、法量に比して厚めの器壁を有し、平底外面にはかすかに糸切り痕が見られる。底部内面中央は臍状に窪んでおり、体部は緩やかに扇曲して立ち上がり口縁を丸く収める。19は土師器杯口-底部片。底部から外反気味に体部が立ち上がり、口縁端部は鈍く面をとる。灰黄色を呈する。

平成18・19年度に実施した動物医療センター改修Ⅰ・Ⅱ期工事では、遺構や埋没谷、遺物包含層から古代に所属する多量の須恵器・土師器の出土を見た。平成20年度実施の第1調査区においては、安定的に居住空間が得られる台地上であることから古代の集落遺構の検出が予想されたが、予想に反し時期の推定可能な遺物は、上記に見ることくいずれも室町時代(14～16世紀)に該当するものであった。他の遺構から出土した同化不能な遺物も大半は中世土師器片と見られ、古代に遡る須恵器・土師器は極めて少量である。この状況から、第1調査区域において奈良～平安時代の集落または官衙が存在した可能性はほぼ否定される。

吉田橋内(吉田道路)の調査

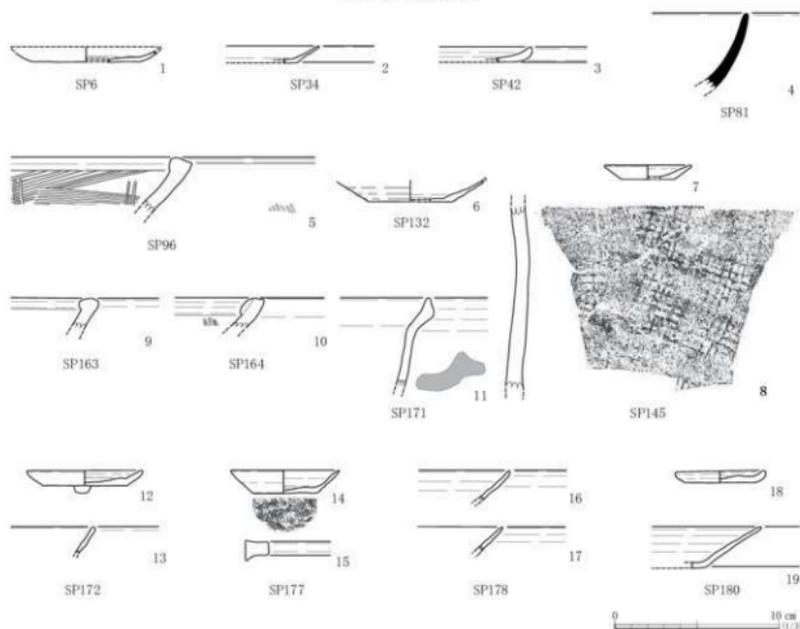


図 66 第1調査区出土遺物実測図



写真 168 第1調査区出土遺物①

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



写真 169 第1調査区出土遺物②

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



写真 170 第1調査区出土遺物③

表11 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	備考
				①口縁②底縁③趾高	④	①外面 ②内面			
1	SP6 埋土	土師器 皿	底部	②(6.6)		①②灰白色(7.5YR8/2)		1mm程の砂粒を極少量含む	
2	SP34 埋土	土師器 坏	口縁部 ～底部	③1.0		①②にふい黄褐色 (10YR7/3)		0.5mm以下の砂粒を含む	
3	SP42 埋土	土師器 皿	口縁部 ～底部	③0.9		①②橙色(7.5YR7/6)		0.5mm以下の砂粒を少量含む	
4	SP81 埋土	青磁 碗	口縁部			素地 灰白色(N8/) 軸裏 オリーブ灰色 (2.5Y6/1)		精緻	
5	SP96 埋土	瓦質土器 播鉢	口縁部			①②灰色(N3/)		2mm程の礫を極少量含む 1mm以下の砂粒を含む	
6	SP132 埋土	土師器 坏	底部	②(5.2)		①②浅黄褐色(10YR8/3)		1mm程の砂粒を含む	
7	SP145 埋土	土師器 坏	口縁部 ～底部	③0.9		①②灰黄色(2.5Y6/2)		精緻	
8	SP145 埋土 (最上層)	瓦質土器 鍋	体部			①灰白色(5Y7/1) ②灰白色(2.5Y8/1)		2～3mm程の礫を少量含む 1mm程の砂粒を多く含む	
9	SP163 埋土	土師器 鉢	口縁部			①にふい黄褐色(10YR7/3) ②にふい黄褐色(10YR5/3)		2mm程の礫を少量含む 0.5mm程の砂粒を多く含む	
10	SP164 埋土	瓦質土器 播鉢	口縁部			①②灰色(N4/)		1mm以下の砂粒を多く含む	
11	SP171 埋土	瓦質土器 鍋	口縁部			①灰白色(N7/) ②灰色(N6/)		1mm以下の砂粒を多く含む	
12	SP172 埋土	土師器 皿か	口縁部 ～底部	①(7.0)②(5.2) ③(1.0)		①②灰白色(2.5Y8/2)		精緻	底部突起は 他個体の融着、もしくは つまみを付け蓋とした 可能性あり
13	SP172 埋土	土師器 坏	口縁部			①にふい黄褐色(2.5Y6/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)		0.5mm以下の砂粒を少量含む	
14	SP177 埋土	土師器 坏	口縁部 ～底部	①(6.6)②(3.9) ③1.4		①②灰白色(10YR8/2)		0.5mm程の砂粒を多く含む	
15	SP177 埋土	瓦質土器 羽釜	跨部	幅(1.4) 厚み(0.8)		①橙色(2.5YR6/6)		2mm程の礫を少量含む 0.5mm程の砂粒を多く含む	
16	SP178 埋土	土師器 坏	口縁部			①②にふい黄褐色 (10YR7/4)		0.5mm程の砂粒を少量含む	
17	SP178 埋土	土師器 坏	口縁部			①②浅黄褐色(10YR8/3)		0.5mm程の砂粒を少量含む	
18	SP180 埋土	土師器 皿		①5.4②4.3③0.7		①②橙色(5YR6/8)		0.5mm程の砂粒を少量含む	ほぼ完形
19	SP180 埋土	土師器 坏	口縁部 ～底部	③2.5		①灰黄色(2.5Y7/2) ②黄灰色(2.5Y6/1)		1mm以下の砂粒を含む	

また遺構からは近世に下る土器資料も出土していないことから、当地では14世紀代に集落が形成され、16世紀中に廃絶したと思われる。

[註]

- 1) 横山成己・藤野好徳(2010)『農学部附属国家審判院改修二期工事に伴う本苑掘調査』, 山口市埋蔵文化財資料館(編)『山口市埋蔵文化財資料館年報 平成18年度』, 山口
- 2) 横山成己(2011)『農学部附属動物医療センター改修二期工事に伴う本苑掘調査』, 山口市埋蔵文化財資料館(編)『山口市埋蔵文化財資料館年報 平成19年度』, 山口

5. 小結(図67・68)

第1調査区では、中世集落が確認された。この集落は、出土遺物から14世紀代に成立し、16世紀中に廃絶したものと推定される。時代は降るが18世紀前半～中頃に作成された『地下上中絵図 古郡郡吉田村精図』(山口県文書館所蔵)においても該当地に集落は描かれていない。

およそ200～300年間の間に建造物は幾度も建て替えられたようで、200㎡の調査区に200基以上のピットが検出された。遺構の重複が少ないことから、建て替えに際しては建物建造場所を少しずつ移動させていたようである。

集落域は北方へは調査区西地区区内でほぼ収まるようであり、集落域を区画する柵状施設が存在していた可能性が高い。集落の北方に関しては耕作地が想像されるが、第1調査区北西約70m地点で実施した立会調査(図67)において、今回検出した遺構埋土と同様の土質が見られるピットを検出していることから、安易に集落域を推定することはできない。

また、東地区東端部においてもピットの集中分布を確認した。出土遺物や埋土の土質から西地区との時期差は想定されない。西地区集落域との間には微弱ながらも集落建物・柵列と方向を同一にする溝が検出されていることから、近隣地域に複数の集落、換言すれば屋敷地が計画的に造営されていた可能性を残す。

中世集落を考察する上でさらに広域に目を向けると、吉田遺跡の既往調査では、大学本部2号館敷地にて区画溝を有し屋敷跡を持つ屋敷跡が確認されているが、出土遺物によりこの屋敷は室町時代に成立し、江戸時代まで存続することが想定されている。また平成20年度に実施した新教育研究棟新営に伴う発掘調査においても中世集落が検出されている。この他、不確実ではあるが本学吉田地区への統合移転時に実施された吉田遺跡第Ⅱ地区(動物医療センター南西の現制料園)においても中世集落が存在した可能性が高い。

吉田遺跡においては、弥生時代以降近世まで継続的に定住生活の痕跡が認められるが、その中でも複数の空白期間が存在する。その一つが古代末から鎌倉時代にかけてである。当期間に所属する出土遺物は主として遺物包含層から出土するが、未だ明確な遺構群は確認できていない。その中でも、吉田遺跡第Ⅱ地区周辺は該当時期の集落が存在した可能性が高いと考えられる。

吉田遺跡第Ⅱ地区は、動物医療センター改修Ⅲ期第1調査区の南西方向約120m地点に位置する(図67)。両者の間には、動物医療センター南方から北西方向に走り、奈良時代から平安時代にかけての遺物を多量に包含する谷が存在するが、この谷は鎌倉時代にはすでに埋没を終えたものと推定される。つまり中世期の両調査区はこの埋没谷をはさむ丘陵台地上に位置することになる。

吉田遺跡第Ⅱ地区は、昭和41年(1966)8月に調査が開始され、同年12月には終了したものと推測される。この調査では現制料園(第1調査区)とともに動物医療センター敷地(第2調査区)に対しても発掘の平が加えられたようであるが、第2調査区に関しては残念ながら遺物包含層が図示されるに止まっている。第1調査区は比較的記録類が充実しているが、遺構分布図(図68)を見ると、調査区中央に南東北西方向の溝が走り、その溝をはさんで多数の柱穴、土壇が分布している。この溝に関しては、出土遺物に相当の時期幅があるが、主体は11世紀から14世紀に該当する遺物である。柱穴に関しては、遺構と遺物との正確な照合がとれないのが難点であるが、遺物を見る限りでは溝と同時期のものが主体を占めるかに思われる。

一方、動物医療センター改修Ⅲ期第1調査区では、前述のごとく13世紀以前に遡る遺構が確認されず、時期比定が可能な遺物は全て14世紀から16世紀に収まっている。以上の調査成果を見た場合、想

像をたくましくすれば、何らかの要因で第Ⅱ地区第1調査区が位置する丘陵上から、谷向かいの丘陵上へ集落が移動した可能性を指摘できる。

以上の調査成果から、吉田遺跡では室町期の集落が少なくともキャンパス北東部(大学本部～新教育研究棟)とキャンパス南東部(動物医療センター周域)の丘陵台地2ヶ所に存在したことが確実であり、キャンパス南東部の集落は耕地拡大にともない彼の地の集落に集約されたものと推察される。『地下上中絵図 占敷郡占田村精図』には現在の農学部附属農場棟周辺に5棟からなる集落が描かれている。この場所では統合移転時の昭和41年(1966)に牛舎新築に伴う発掘調査が実施されており、概報では中世住居跡の存在が指摘されている⁴⁷。その後正式な発掘調査報告を刊行しておらず、近隣地においても新たな知見が得られていないため詳細は不明であるが、中世集落の消長を復元する上で今後重要な地

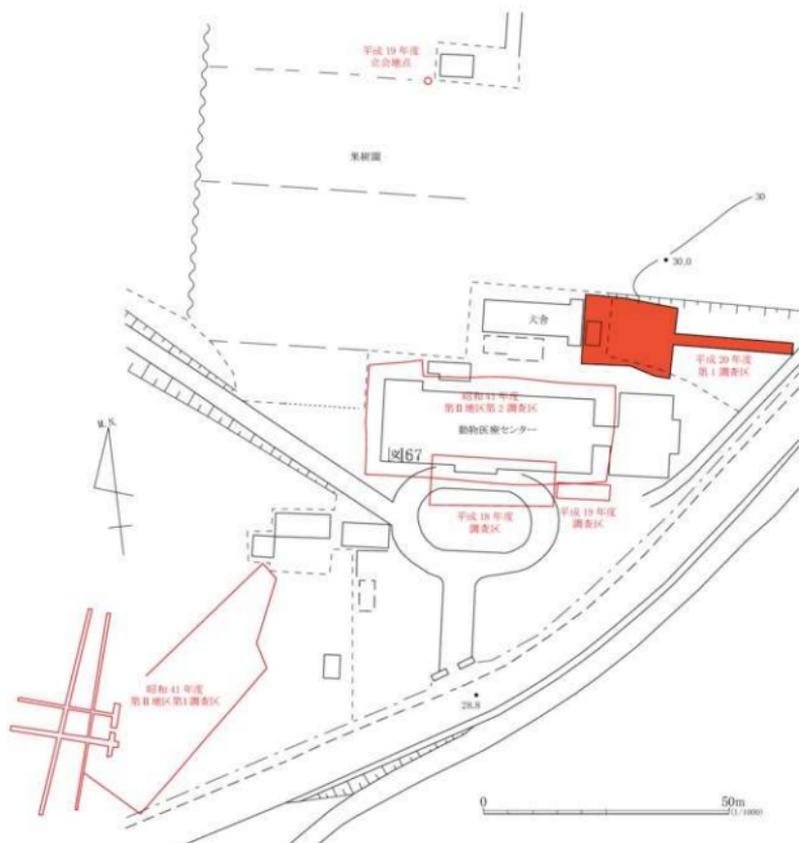


図 67 動物医療センター周辺調査区配置図

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

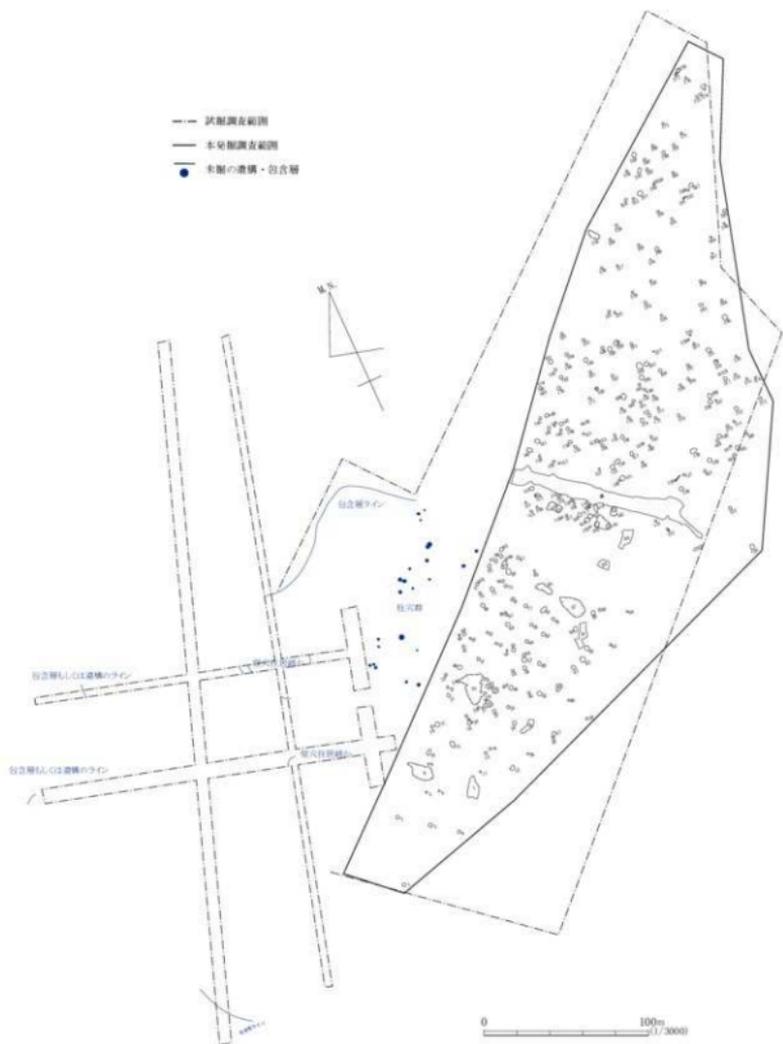


図 68 吉田遺跡第Ⅱ地区第1調査区平面図

域となるであろう。

一方『地下上申絵図 吉敷郡吉田村精図』に白壁の様子が描かれ、近世「坂本村」の中心部と目される大学本部2号館検出の屋敷跡は、室町時代に成立し江戸時代まで存続する。この場所には本学統合移転時まで集落が営まれており、室町時代以降農村の中心的存在であったことを示している。

吉田遺跡における中世期の様相は未だ不明確な部分が多く、今後に残された課題も山積している。動物医療センター周辺を含め、吉田橋内北東～南部に広がる丘陵台地上はさらなる集落の存在が想定されるため、開発工事等による地下の掘削に対しては慎重な対応が必要と言える。

[注]

- 1) 横山成己(2011)「農学部附属農場内電源施設工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成19年度—』, 山口。
- 2) 坂村吉行(1996)「吉田橋内本部2号館新築に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報Ⅳ』, 山口。
- 3) 本書所収
- 4) 横山成己(2007)「吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成17年度—』, 山口。
- 5) 横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属家畜病院改修1期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』, 山口。
- 6) 図示された遺物包含層は谷埋土最上層と推定される(前掲注3)。
- 7) 小野忠徳(1976)『山口大学橋内吉田遺跡発掘調査報告』, 『山口大学吉田遺跡調査開』, 山口。

(2) 第2調査区

1. 調査の経緯

改修工事に伴い浄化槽が新設される動物医療センター西側空閑地を第2調査区と定めた(図57)。第1調査区の西北西約70m地点に当たる。当地点は、平成14年度に実施し、古代に所属するものと推測される総柱建物を含む掘立柱建物群が検出され、遺物包含層および河川埋土中より刷書須恵器、製塩土器、輪刺口、銅鉾石等豊富な資料が出土した農学部解剖実習棟新築に伴う発掘調査区と、平成18年に実施し、古代の大型掘立柱建物とともに多量の須恵器・土師器を包含する埋没谷が確認された家畜病院(現動物医療センター)改修1期工事に伴う発掘調査区の間地点に位置する。既往の調査により少なくとも開発予定地に谷(田川)が埋存することが確実視されたため、予備発掘調査を省き本発掘調査に着手した。開発工事規模に伴い、調査区は南北7m、東西7mの正方形とした。

重機掘削は第1調査区の各種記録作業を行っていた2月5日より開始し、谷の埋土上面を検出した後は層位的に人力掘削を行った。谷埋土および遺構掘削を終了し、記録作業を終えたのは年度末も近い3月17日であり、翌18・19日に埋め戻しを行った。

[注]

- 1) a: 田畑忠彦(2002)「山口大学橋内吉田遺跡—農学部校舎改修(解剖実習棟新築)に伴う発掘調査報告—」, 山口考古学会(編)『山口考古』第22号, 山口。

- 5) 田原直彦(2004)「平成16年度山口大学構内遺跡調査の概要」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報 XVI・XVII』, 山口
- 2) 塚山成己・藤野好博(2010)「農学部附属畜産院改修1期工事に伴う本築掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報 平成18年度』, 山口

2. 基本層序(図69、写真187～190)

調査前の現地標高は約27.4mであり、南東-北西方向に緩やかに傾斜していた。調査により確認されたアスファルト下位の基本層序は以下の通りである。

第1層 造成土・砕石等(層厚約60cm)

第2層 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土(層厚約30cm)→遺物包含層1

調査区北端部のみ遺存し、大部分は大学造成時に削平されている

第3層 褐灰色(10YR4/1)に褐色(10YR4/4)が混ざる粘質土(層厚10～25cm)→遺物包含層2
部分的に大学造成時に削平されている

第4層 明黄褐色(2.5Y6/6)粘質土に灰色(N/5)粘質土が部分的に混ざる→地山

その他、調査区北部には東西方向に水道管が埋設されており、工事掘削により包含層と谷埋土、そして西端部においては地山を部分的に破壊している。

3. 遺構(図69、写真171～186)

遺構はピット3基、杭列1条、谷が確認された。

谷(NR1)(図69、写真171～184)

調査区の南東-北西を結ぶ位置に谷の左肩部を検出した(写真171)。検出面の標高は26.4～26.6mであり、南東が高く北西が低い。断面形態を見ると、左肩部より約30度の傾斜をもって降下しており、底面はほぼ平坦となる。調査区内において谷幅は肩部上端で約5m、底面で約3.4mを計測する。東壁断面では北端部で底面がやや上昇するかに見られるが(写真187)、これが谷底からの立ち上がりを示すものかは不明である。

埋土は6層に分かれ、以下の特徴を有する。

第1層(NR1L1) 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土に1～2mmφの白色礫が極少量混ざる

第2層(NR1L2) 黒褐色(10YR3/1)弱粘質土に0.5～2mmφの礫が少量混ざる

第3層(NR1L3) 第2層と同質であるが0.5～3cmφの礫が多量に混ざる

第4層 上下2層に細分される

上層(NR1L4上層) 黒褐色(2.5Y3/2)泥土に0.5～3cmφの礫が極少量混ざる(木製品多量に含む)

下層(NR1L4下層) 黒色(N/2)泥土(木製品・自然木多く含む)

第5層(NR1L5) 黒褐色(2.5Y3/2)泥土に灰黄色(2.5Y6/2)強粘質土が混ざる

第6層(NR1L6) 0.5～10cmφの砂礫層(水流堆積層)

この内第1～3層は部分的に谷肩部をオーバーフローした状態で検出されている。調査中、第1層掘削時より湧水を見たが、最下層に位置づけられる第6層に至っては激しい水流があり、現在まで地下水脈として機能し続けていることが確認された。第6層の層厚は最大で0.26mを測る。

第5層は肩部から谷底にかけての傾斜面に地山を取り込みながら流下・堆積したものであり、層中からは照香須恵器を含む若干の人工遺物が出土している。層厚最大0.26m。

最下層直上に堆積する第4層下層は、有機物が腐蝕したようで泥炭層状を呈している。層中より自然木および木製品が多く出土した(写真175～182)。出土資料に関しては後述するが、多くは成品ではなく加工痕を有した木材片であり、木製品の製作中に生じた不要部位等を谷中に廃棄した状態を示すものと考えられる。土器資料を包含しないこともこの層の特徴と言える。層厚約0.2mを測る。

第4層上層は土質的には下層と類似するが、下層に比して有機物の腐蝕痕跡が顕著ではない。層厚は最大で0.45mと埋土中最も厚く堆積するが、明確な水流痕跡は見られない。泥土であることから見て埋没当時は沼地であった可能性を残す。層中より多量の木製品が出土しているが、その状況は第4層下層と同様である。

第3層以上は、厳密には凹地と化した埋没谷の上面に形成された遺物包含層と言える。包含される遺物も時期的に下るものが増え、第1層では瓦質土器を少量含む。第1調査区小結で記述した第2調査区の南方に広がる丘陵台地部、吉田遺跡第Ⅱ地区出土の遺物群と時期的な類似を示すことから、南方台地部から流入した遺物群と推察される。

第2調査区南西約25mに位置する平成18年度調査区でも埋没谷は確認されている(図57)。確認された埋土は4層に分類されるが、上質から見て当調査区の第1～4層に対応するものと推定している。平成18年度調査区では谷埋土の下位にさらに堆積層が確認されたが、当調査区の谷埋土下は地山となっている。

一方、第2調査区北西16m地点に位置する平成14年度調査区においても河川跡が確認されたと報告されている¹¹²。未だ正式報告を行っていないため詳細は不明であるが、位置的に当調査区で検出した埋没谷の延長と見て間違いない。平成14年度調査では河道の右肩部が確認されており、今回の調査を合わせて谷(河道)の規模の概略が推定可能となった。

また、断面形態や埋土を観察する限りにおいて、谷は自然地形を利用しつつも人為的に整形された可能性が高いと考える。

杭列(図69、写真172・175・177)

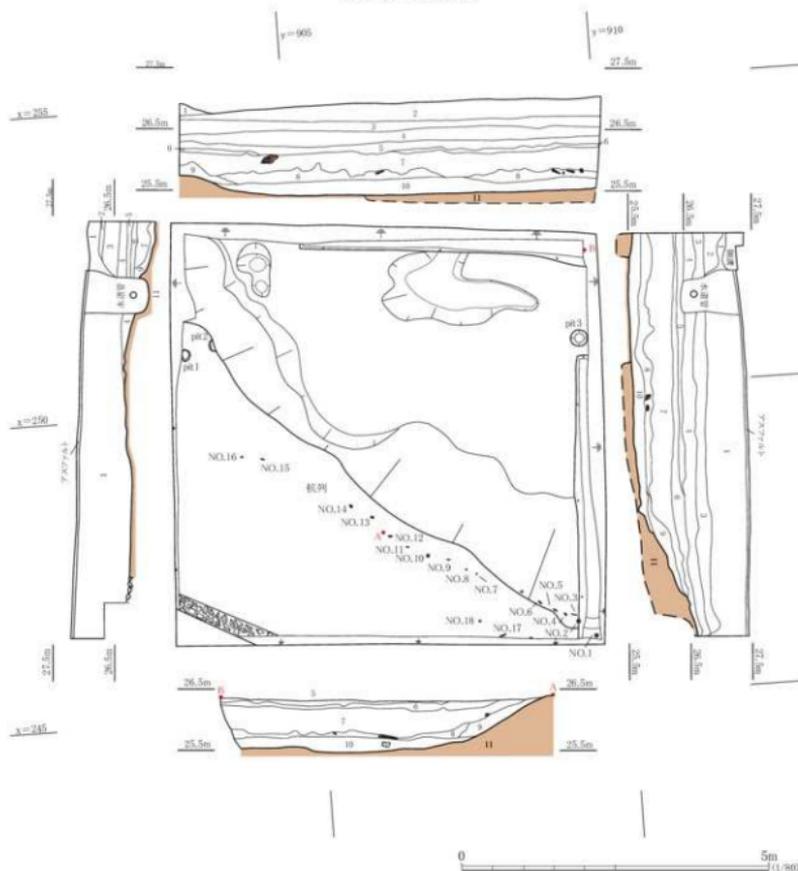
谷の右肩部に杭列が検出された。木製杭は谷の走向同様南東-北西方向に列しており、調査区南東隅部から直線距離にして約6.4mまでの範囲に確認した。杭・欠板合わせて18本が出土しているが、地山面上位はすでに欠失した状態にあった。

杭列の並びを見ると、NO.1～NO.6までは谷傾斜部内に設けられている¹¹³が、NO.7～NO.16は肩部上面より検出されている。また北西部の杭ほど谷肩部より南西方向に偏る傾向が見られる。この杭列は護岸施設と見なされるが、北西部の杭列は護岸の用をなさない位置に存在することから、谷肩部は北西ほど後世に流失、または削平を受けたものと推察される。杭の遺存部が比較的短い(打ち込みが浅い)こともその論拠となるであろう。従って、分布が薄くなる北西部の杭列およびNO.16地点より北西部においては、当初より杭が存在しなかったのではなく、後世に欠失したものと推測しておく。

ピット1・2(図69、写真185・186)

調査区北西端部に検出された。ピット1は西壁直下地山面にて検出されたもので、長軸19cm、短軸14cm以上の平面楕円形を呈する。深さ10cmを測り、埋土は単一で黒褐色(10YR3/1)強粘質土。遺物は含まれていなかった。ピット2はピット1の北東0.4mに位置する。径20cmの円形ピットであり、深さ8cmを測り、埋土は単一で褐灰色(10YR4/1)粘質土。こちらも遺物は含まれていなかった。また、ピット2は地山面で検出したが、埋土が谷の埋土とほぼ同質であったため、谷埋土上からの掘り込みである可能性を残す。この2基のピットに関しては、現状では谷との関係を明瞭にし得ない。

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



- 1 造成土・砕石等
- 2 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土…包含層1
- 3 褐灰色(10YR4/1)に褐色(10YR4/4)が混ざる粘質土…包含層2
- 4 黄灰色(2.5Y4/1)強粘質土に1～2mmの白色礫が少量混ざる…谷埋土1 (NR1L1)
- 5 黒褐色(10YR3/1)弱粘質土に0.5～2mmの礫が少量混ざる…谷埋土2 (NR1L2)
- 6 5と同色・同質であるが0.5～cmの礫が多量に混ざる…谷埋土3 (NR1L3)
- 7 黒褐色(2.5Y3/2)粘土に0.5～3cmの礫が極少量混ざる(木製品多量に含む)…谷埋土4上層 (NR1L4 上層)
- 8 黒色(N/2)粘土(木製品多く含む)…谷埋土4下層 (NR1L4 下層)
- 9 黒褐色(2.5Y3/2)粘土に灰黄色(2.5Y6/2)強粘質土が混ざる…谷埋土5 (NR1L5)
- 10 0.5～10cmの砂礫(水流堆積層)…谷埋土6 (NR1L6)
- 11 明黄褐色(2.5Y6/6)粘質土に灰色(N/5)粘質土が部分的に混ざる…地山

図69 第2調査区平面図・断面図

ピット3(図69、写真187・188)

調査区北東隅、谷底面にて検出された。前述の通り谷理土最下層は水流堆積による砂礫層で、調査中も激しい湧水を見た。ピット3はその砂礫層の下位、地山面にて検出されたが、湧水のため写真撮影および埋土の断面観察はできなかった。

ピット3の平面形態は径27cmのほぼ正円で、深さは13.5cmを測る。埋土は黒褐色粘質土。埋土中に遺物は含まれていなかった。当ピットに関しては上層からの掘り込みでないことを確認しており、積極的な根拠はないものの、不自然な平面形態と埋土の質から遺構の可能性のあるものとして記録しておく。

この他、谷底面には不整形な落ち込みが複数見られたが、これらは人為的なものではなく水流に起因するものと判断している。

【注】

- 1) 横山成己・藤野好博(2010)『農学部附属家畜病院改修1期工事に伴う本発掘調査』、山口大学学芸文化財資料館(編)『山口県立文化財資料館年報—平成18年度—』、山口
- 2) a: 田畑直彦(2002)『山口大学構内吉田遺跡—農学部校舎改修(解剖実習棟新築)に伴う発掘調査報告—』、山口考古学会(編)『山口考古』第22号、山口
- b: 田畑直彦(2004)『平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要』、山口大学学芸文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』、山口
- 3) 検列NO.6北西隣1ヶ所に噴口の痕跡が確認されている。

4. 遺物(図70～92、写真191～211、表12～14)

【土器類・土製品】

土器類には縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、製塩土器が、土製品には土錘が存在する。谷理土の下層から順を追って報告するが、第6層からは遺物の出土を見なかった。

谷理土第5層 NR11.5(図70)

個体数としては3点の須恵器が確認される。遺物は主として谷左岸傾斜部上位に堆積した第5層にめり込むように出土している(写真177)が、第4層土層中から出土した小片とも接合する。第4層堆積時に第5層から滑落した結果か、第4～5層がほぼ同時期に堆積したのか不明であるが、包含される遺物に明確な時期差が存在しないことから後者である可能性が高い。

1は須恵器高台付坏。底-体部境界のやや内側に扁平な高台を付ける。高台内端部で接地する。底部は上げ底状となっており、ヘラ切り後回転ナデ調整が施されている。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は弱く外反する。底部外面には墨書が見られる。一見「主」と読めるが(写真191の1-2)、縦棒は連続して一氣に引かれている。縦棒下端部の器面が凹んでいるために墨が及ばなかった可能性を考慮すると「卍」とも読める。2は1と器形・法量ともほぼ同様の特徴を有する須恵器高台付坏。1に比して体部が直立し、口縁の外反が強い。3は1・2に比して口径の小さい須恵器高台付坏。底-体部境界のやや内側に小ぶりの断面逆台形状の高台が付く。端部全面で接地する。体部はやや閉き気味に立ち上がるが大きく欠損しており、接合資料も確認されなかった。底部外面はヘラ切り後回転ナデ調整。体部内外面にも回転ナデ調整が施されている。

谷理土第4層 NR11.4(図71・72)

須恵器、土師器、製塩土器が存在する。

4～13は須恵器坏蓋。4はボタン状つまみを有する扁平な蓋である。天井部から肩を形成し口縁に降下する。口縁部は水平方向に拡張される。口縁部は内外面とも回転ナゲ調整、天井部外面は不定方向のナゲ、内面は直線的なナゲ調整が施される。5はほぼ完形に復元される蓋で、天井部に宝珠形のつまみを有する。4に比して器高が高く、平らな天井部から肩を形成し、外反気味に口縁部に降下させる。口縁端部は鳥嘴状に下垂させている。内外面ともに回転ナゲ調整が施される。他は蓋の小片であり、口縁を強く屈曲させ端部を下垂させるもの(6)や端部のみを下垂させるもの(7・8)、口縁内面にかえりを有するもの(9・10・11)が存在する。つまみは2種のものが確認できる。12は中央部を囲ませるボタン状つまみの刺障片である。13も同様にボタン状つまみ片であるが、こちらは中央部を突出させている。

14～23は須恵器坏。14は半損品であるが完形に復元可能であり、体部の歪みが大きい高台付坏である。1・2に比して長く外方に張り出す高台を有しており、貼り付け箇所もより内側となっている。高台貼り付け後、丁寧に回転ナゲ調整が施されている。体部は開きが少なく、ほぼ直線的に立ち上がる。体部調整は内外面ともに回転ナゲ。15は須恵器高台付坏のやや焼成不良品である。こちらも半損品であるが完形に復元可能である。断面方形の高台は底-体部境界のやや内側に付き、内端部で接地する。体部はやや外反気味に立ち上がる。体部は内外面とも丁寧な回転ナゲ調整が施されており、内面には部分的に縦方向のナゲも見られる。底部外面はへら切り後回転ナゲ調整、内面は不定方向の直線的なナゲ調整が施される。16も須恵器高台付坏。およそ3/4を欠失するが、高台の遺存状況が良いため完形復元した。器高・法量は1・2に似るが高台はやや幅細であり、底-体部境界にはっきりと稜が形成される。底部は丸底を呈し、高台とともに底部外面でも接地する。外反気味に開く体部を有する。この他、高台を有する底部片(17・18・19・20)を提示しておく。20・21は無高台半平底の坏底部片。20は底部外面へら切り無調整、内面は不定方向のナゲが観察される。21の底部外面には小さな「安」の墨書が見られる(写真195の21-2)。吉田遺跡の既往調査で確認された墨書はいずれも字体が太いという特徴があったが、当資料は細筆で小さく書かれている。字体の特徴としては、右のはらいを長く伸ばす。「安麻呂」等の人名が推測されるが字義は定かではない。22・23は坏体部片。23内面には墨書が残っている。

24・25は須恵器皿の底-口縁部片と見られる。両者とも口縁内外面に回転ナゲ調整が施されている。また25の口縁内端部には当資料が重ね焼かれたことを示す焼成痕跡が残っている。

26～29は須恵器高坏。26は長脚の高坏。坏部上半は欠失している。細身の脚部を有し、裾端部を下垂させ接地する。脚柱部内面にはしぼり痕が明瞭に残り、外面上半には1条の沈線が巡らされている。動物医療センター改修1期工事に伴う木発掘調査では、谷埋土の下位に堆積する遺物包含層I.6より、7世紀後半～8世紀初頭を主体とする上器群が出土している。層中に含まれる須恵器高坏は、当資料と同様の特徴を有しながらも、沈線は脚柱部のほぼ中位に巡らされており、坏部もより深い¹¹⁾。それぞれに伴出する須恵器から時期差を示す可能性が高く、注意が必要である。27は坏部を欠失するが脚部は完形に残る。26に比してやや低脚であり、脚柱部も太身となるが、やはり外面やや上位に沈線が巡らされている。裾端部を下垂させて接地させる。28は歪みの大きい裾部片。同様に端部を下垂させる。29は高坏の坏部口縁片と判断した。

30は器種不明の脚部片。太身の脚柱を有し、裾は大きく開き端部を下垂させている。内外面に回転ナゲ調整が施されている。内面裾部に「主」、その対面脚柱部に「井」の墨書が確認される(写真196の30-2)。1と異なり「主」の「」は独立して書かれている。「井」は「主」と同方向から書かれていることから、この2字の字義を合わせて何かを表しているものと想像される。谷への投棄を重視すれば、「主」は「つかさどる」、「井」は「用水」の意で、用水管理を意味しているのかも知れない。



写真 171 第2調査区遺構面検出状況（東から）



写真 172 谷埋土完掘状況（東から）



写真 173 谷埋土掘削風景 (東から)



写真 174 谷埋土掘削状況 (南西から)



写真 175 谷埋土 L6 上面検出状況 (東から)



写真 176 谷埋土 L6 直上木製品出土状況 (南東から)



写真 177 谷肩部須恵器出土状況 (東から)



写真 178 谷埋土 L6 直上木製品出土状況 (南から)



写真 179 木製品出土状況①(南東から)



写真 180 木製品出土状況②(南から)



写真 181 木製品出土状況③(南から)



写真 182 木製品出土状況④(南西から)



写真 183 土層確認アゼ断面①(西から)



写真 184 土層確認アゼ断面②(南西から)



写真 185 Pit1・Pit2半截状況 (南東から)



写真 186 Pit1半截状況 (東から)

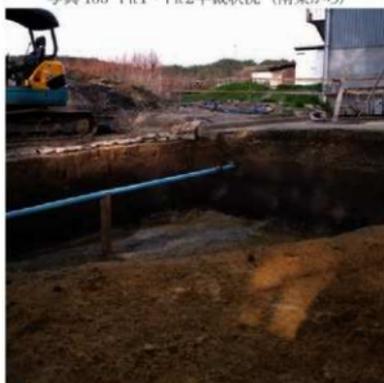


写真 187 調査区東・北壁土層断面 (南西から)



写真 188 調査区東壁土層断面 (南西から)



写真 189 調査区東壁南側土層断面 (北西から)



写真 190 調査区北壁土層断面 (南から)

31・32は須恵器甕。31は器壁の厚い口縁部片。口縁部部に面を形成する。内面には横ナデが見られるが、外面は灰が被っており調整が不明瞭である。内外面とも部分的に自然釉が付着する。32はやや焼成不良気味の頸-口縁部片。口縁端部を欠失する。外面頸部下端に沈澱が巡るようである。口縁内面には「A」のヘラ記号が見られる。内外面とも横ナデが施される。

33は平底の円蓋田楽部片と見られる。器壁7.5mmの体部に厚さ5mmの円蓋を重ね接合している。体部内面には当て具痕が残る。

34は土師器椀口縁-体部片。内湾する体部から口縁部を弱く外反させる。口縁端部は丸く収める。口縁内外面と底部内面に回転ナデが残るが、他は縦方向の丁寧なナデ調整が施される。体部の3/4を欠失するが、口径はおよそ14cm弱に還元される。

35・36は土師器杯。35は内外面とも赤色塗彩された杯で、平底状の底部から湾曲して体部に立ち上がり、口縁は外反する。口縁内端に沈澱を1条巡らしている。内面は風化が激しく調整が観察できないが、外面は口縁部付近に横ナデ、以下は密に横方向のミガキが施されている。全体の3/4を欠失するが、口径はおよそ19cmに還元される。36は口縁部の小片である。外面には横方向のミガキが、内面には横ナデ後左上がりの細いミガキが施される。

37・38は土師器甕。37は長胴の甕で、約3.5cm幅の粘土板を積み上げて成形されている。口縁端部の遺存状態が悪いため器の傾きが復元できないが、体部上半はやや内傾気味に窄まり、口縁を大きく外反させる形態と思われる。体部外面は縦方向、部分的に斜め方向のハケが密に施されている。内面は横ナデ。口縁部外面には横ナデが、内面には横方向のハケが施される。口縁外面にはスス痕が残る。38は37と異なり口縁下で体部が弱く膨らむ形態の甕である。口縁は短く外反し、端部に微傷ではあるが面が形成される。内外面とも横ナデが施されているが、体部外面には部分的に縦ハケが観察される。また外面には部分的にスス痕が残る。

39は第2調査区谷理上において唯一確認された美濃々浜式製塩土器。脚部下端片で、脚上半部と裾部を欠失する。脚柱部径は1.4cmを測る。

以上第5層、第4層出土土器の概要を記した。この内、3点の墨書須恵器が確認されたことは特筆に値する。文字が判読できる墨書土器として、古山遺跡ではこれまでに「³³富」「⁴¹官」の2例が確認されていたが、この度の調査でさらに「¹安」「¹井」の3例を加えることができた。

また前述したように、第5層出土須恵器は第4層出土の破片と接合する。この2層の堆積時期に関しては、一部須恵器に9世紀以降の特徴を有するもの(高台付杯3、蓋4・6など)が見られるが、主体は8世紀の前半から中頃と考えられる。

谷理上第3層 NR1L3(図73・74)

前述したが、第3層は検出した谷を部分的にオーバーフローしている。谷肩部杭列の存在から、人為的に整備された谷の肩部はさらに上方に存在していた可能性が考えられる。よって第3層は谷肩部がある程度流失した、または人為的に削平された後、第4層までの堆積で窪地となった一帯に堆積した遺物包含層として認識される。

第3層から出土した土器は何れも破片資料であり、完形復元可能なものは存在しない。内容としては土器類に須恵器、土師器、緑釉陶器、弥生土器が、上製品に上甕が確認される。

40～47は須恵器杯蓋。40・47はかえりを有する口縁部片である。小片であるが両者とも径10cm以下に還元されるようであり、須恵器杯C頸の蓋と見られる。42は焼成不良であるが器高の低い須恵器蓋の犬井-口縁部片。低い犬井部から屈曲して口縁に至り、口縁端部を鈍く下重させる。口縁端部は丸く収めて

古田橋内(古田道路)の調査

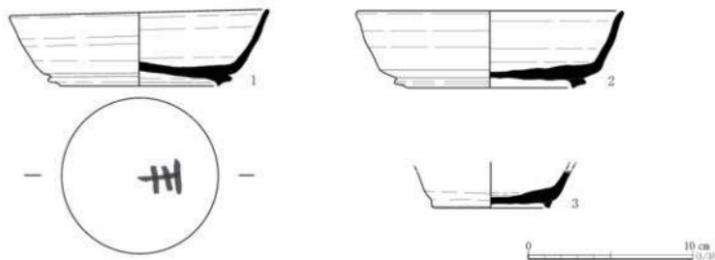


図70 第2調査区 NR1L5出土須恵器

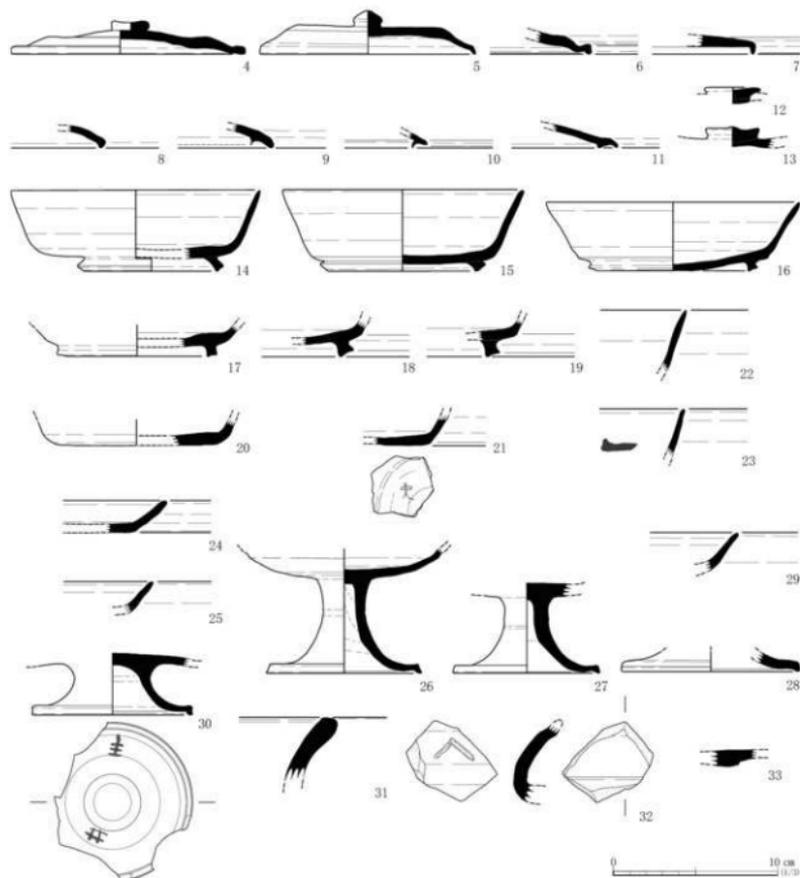


図71 第2調査区 NR1L4出土須恵器

いる。器面の風化が激しいが、口縁部のみ内外面とも回転ナデ、他は直線的なナデが施されているようである。43はドーム状の天井部を有する蓋の口縁部片と見られる。口縁端部を下垂させる。内外面とも回転ナデ調整。44は口縁下端が丸く肥厚する口縁部片。外面にヘラ状工具による刻線が見られるが、意図的なものかどうかは不明である。45は口縁端部を鳥嘴状に下垂させる口縁部片。口縁端部外面及び内面は回転ナデ調整が施されるが、天井-口縁部外面は無調整と見られる。46は44同様口縁下端を丸く肥厚させた口縁部片。内面に重ね焼き痕跡を留める。47はボタン状のつまみが付く天井部片。

48~55は須恵器高台付坯底部片。48が底-体部境界部に本身の高台が付くのに対し、49~50は断面方形で端部を凹ませる小ぶりの高台が底-体部境界やや内側に付く。52は断面方形細身の高台を有するが、端部の凹みはなくなり平坦化している。53・54は摩耗が激しいものの端部が丸みを帯びた高台が底-体部境界付近に若く。55は長く外方に開く高台を有する個体である。高台は約4/5を欠失するが、高台外径は8cm内外と推定される。高台端部を凹ませるが、内外両端で接地する。精緻な胎上が用いられ、焼成状況も良好な優品と言える。

56・57は須恵器無高台の坯底-体部片。56はやや厚めの台状底部を有する。体部は外方に大きく開く。底縁はヘラ切り後無調整、体部は内外面回転ナデ調整が施される。57も体部が大きく開く坯である。坯部外面に板目状の圧痕が残る。

58・59は須恵器坯体部片。58は直線的に体部から口縁に至り、口縁端部は尖り気味に丸く収める。内外面とも回転ナデ調整。59は口縁がわずかに外反し、端部を丸く収める。

60~62は須恵器高坏片。60は裾部片。脚柱部より「く」の字に強く屈曲させて裾部を張り出す。裾端部を尖り気味に下垂させ接地する。61は高坏坏部の口縁-体部片。坏底から外反気味に口縁が立ち上がる。小型高坏の坏部片と見られる。62も同様に高坏坏部の口縁-体部片。61に比して口縁が直線的に大きく開き、口径も大きい。

63は須恵器重類の底部片であろうか。無高台平底であるが、底部中央がやや上げ底状を呈する。底部外面は不定方向のナデおよびヘラ掻き、内面は不定方向のナデ調整。底-体部境界内外面のみ回転ナデ調整が施される。

64は須恵器壺または甕の口縁部片。口縁端部内側を断面三角形形状につまみ出している。内外面とも横ナデが施される。

65は小型甕又は平甕などの口縁部片と見られる。小片であるが口径7cm程度と推定される。外面に深緑色の自然釉がかかる。焼成時に生じたものであろうか、内外面とも器面に2mm程度の爆ぜ痕が多数残っている。

66は須恵器器種不明品。1.1cmの厚い器壁を有し、平行沈線3条により区画された2つの文様帯に波状文が充填されている。内面には横ナデが施される。横断面はかすかに弧を描くが、縦断面はほぼ平坦である。大型甕の頸部であろうか。

67は土師器坏。ロクロ水引き成形した坯底部外面に粘土を貼り足し台底を形成している。68は土師器高台付坯の底部片。ロクロ水引き成形した坯の底-体部境界に断面三角形の高台が付くが、半分は剥離している。底部外面には板状圧痕が見られる。69もほぼ同様の高台を有する土師器高台付坯底部片と見られる。70は土師器坯体部片か。内外面ともに赤色染彩が見られる。内面にわずかにミガキの痕跡が観察される。

71は土師器壺口縁部片。短く軽く外反する口縁を有する。内外面ともに風化しているが、外面頸部下にわずかにタテハケが残る。

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

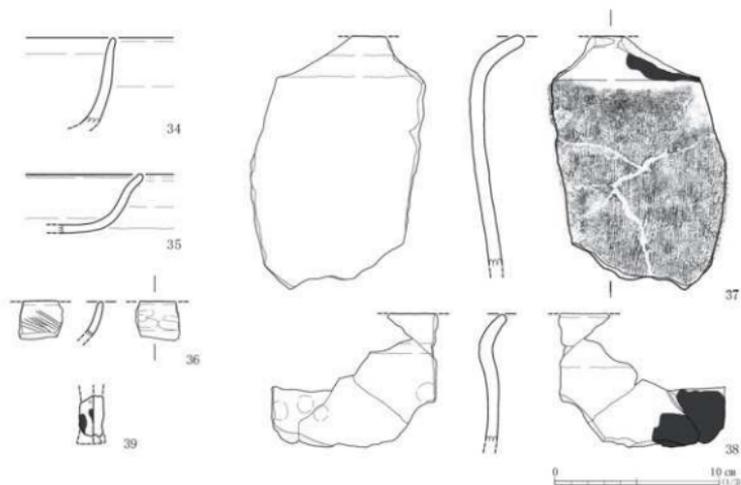


図 72 第2調査区 NR1L4出土土師器

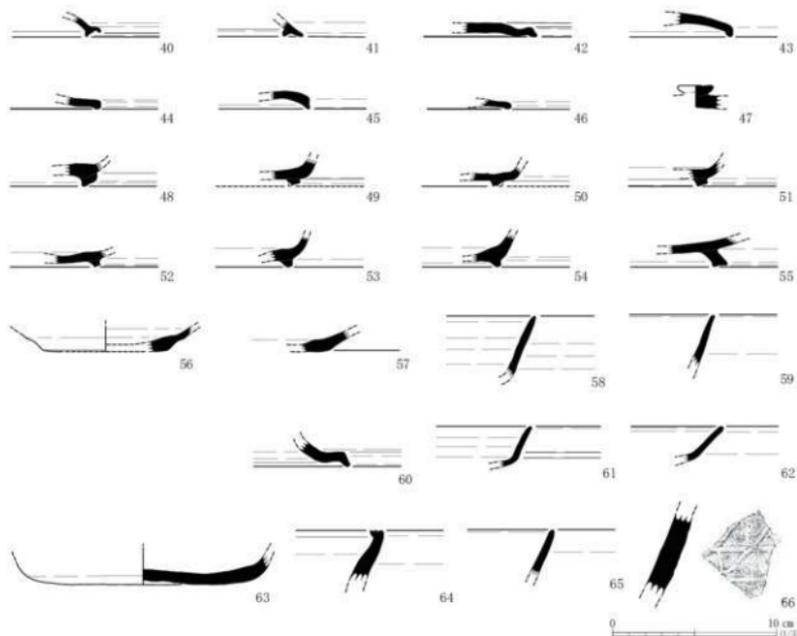


図 73 第2調査区 NR1L3出土須恵器

72は緑釉陶器片。内外面に深緑色の釉が遺存する。調整痕から底部付近の破片であることが分かり、高台杯碗と推される。

73は弥生土器甕底部片。底部は厚くやや上げ底となっている。調整は風化のため不明であるが、胎土には2mm程度の石英・長石等が多量に含まれている。弥生土器底部は第2調査区南方の台地上で実施された吉田遺跡第Ⅱ地区第1調査区の発掘調査においても複数出土しており、当堆積層の由来地を考える上でも重要な資料となっている。

74は上唇管状上鉢の半損品である。孔径約6.5mmを測る。

以上第3層出土土器類の概要を記した。当層の堆積年代に関しては、須恵器は小片が多く時期比定が困難であるが、かえりを有する蓋の口縁部片や高台など古手の資料が混ざりつつも、9・10世紀代の資料が主体となるように思われる。土器器についても台付杯や高台付杯の形態は10世紀以降のものであり、緑釉陶器の存在もこれを裏付ける。

谷理十第2層 NR1L2(図75)

第2層も第3層同様に比較的薄く堆積する遺物包含層である。

75～79は須恵器杯蓋。75はかえりを有する口縁部片。口縁部の処理は極めてシャープである。胎土は精緻で焼成も良好。小破片であるが、口径は13cm内外と推測される。76は端部を下垂させる口縁部片。口縁端部は丸く収める。内外面とも回転ナデ調整。77はボタン状つまみの付く天井部片である。内面にヘラ状工具による刻線が見られるが、意図的なものか不明である。78は形骸化した扁平なつまみが付く天井部片。つまみ径は3.2cmと巨大化するが、高さは2mm程度となる。79は蓋としたが杯底部である可能性を有す。外面に「Ⅹ」または「V」と見られるヘラ記号を有す。

80～90は須恵器高台付杯。80は約2/3を欠失するが完形に復元可能な資料である。底-体部境界のやや内側に、細身で外方に弱く張り出す高台が付く。高台端部は面を形成している。体部は直線的に立ち上がり、口縁はわずかに外反する。底部内外面は比較的丁寧なナデ調整が、体部内外面は回転ナデ調整が施されている。81は底-体部片。底-体部境界付近にやや外方に張り出す断面方形の小ぶりの高台が付く。高台は内端部で接地する。体部はほぼ開かず直線的に立ち上がるようである。内外面とも風化が激しく器面調整は不明。82も底-体部片。高台は底-体部片より内側に付く。高台端部は凹み、外端部は大きく外方に拡張されている。底部高台付近及び体部内外面は回転ナデ、底部内面は不定方向のナデが施される。83～90は底部および高台の破片資料であるが、小片のため底径・高台径とも復元できない。幅広で低い高台が底-体部境界内側に付くもの(83)、断面方形で小ぶりの高台が底-体部境界付近に付くもの(84～87)、高台内端部が内方に擠み出されるもの(88)、底-体部境界に明確な稜が形成され、逆T字状に内外端部が擠み出された高台が付くもの(89)、断面三角形の小ぶりの高台が付くもの(90)が見られる。

91～93は無高台の須恵器杯。91は底-体部片で、平底の底部から開き気味に体部が立ち上がる。底部はヘラ切り後ナデ、体部は内外面とも回転ナデ調整が施される。92・93も同様の底-体部片である。

94は須恵器杯口縁-体部片。体部は外反気味に立ち上がり、口縁端部を丸く収める。95も口縁-体部片。直線的に開く体部から口縁部が軽く外反する。

96は須恵器高杯裾部として報告するが、復元径が16cm内外と見られるため、蓋の可能性を有す。端部を鳥嘴状に鋭く下垂させている。

97は須恵器短頸傘または鉢の口縁部片。膨らみをもつ体部から頸が窄まり短く外反して口縁に至る。口縁と体部の焼成具合に差が見られることから、蓋が被せられた状態で焼成されたものと思われる。

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

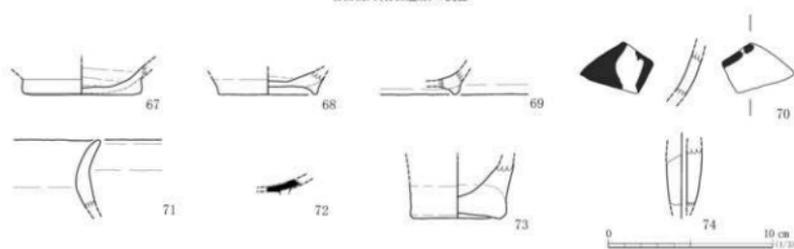


図74 第2調査区 NR1L3出土土師器・緑釉陶器・弥生土器・土製品

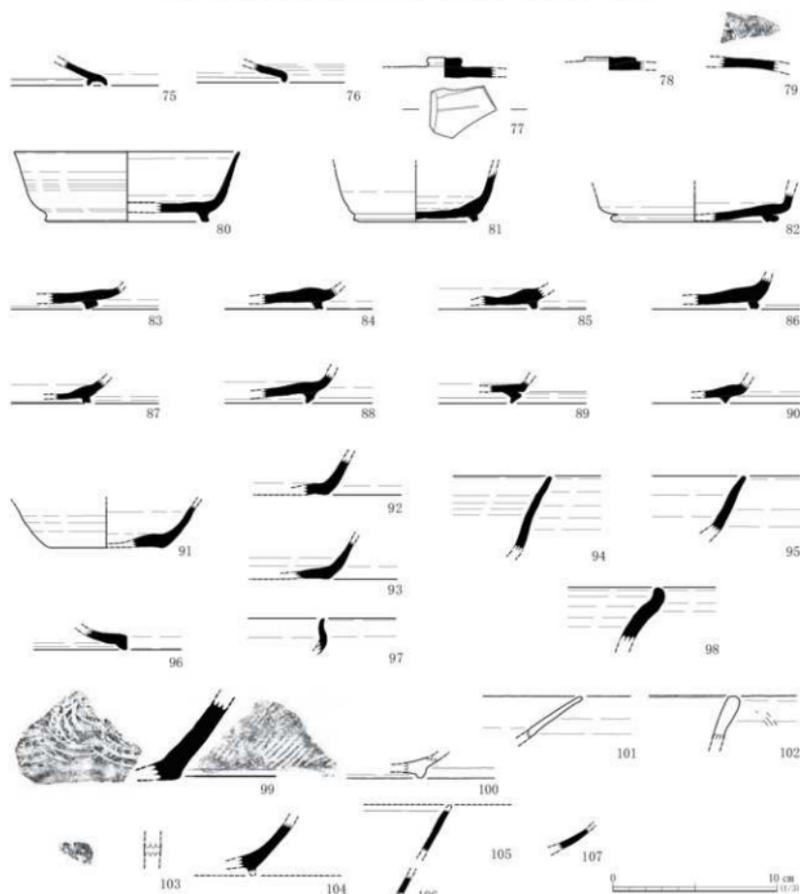


図75 第2調査区 NR1L2出土土器類

98・99は須恵器甕。両者ともに焼成不良で軟質となる。98は口縁部片。口縁上部を外反させた後上方に拡張させる。口縁内端を揃み出している。内外面とも横ナデを施す。99は底-体部片。体部外面には平行タタキ痕が、内面には同心円当て具痕が残る。

100は土師器坏底部片。底-体部境界に断面方形の高台が付く。101は土師器口縁-体部片。緩やかに外反しつつ口縁が大きく開くことから、皿と見られる。内外面とも丁寧な回転ナデ調整が施されている。102は土師器甕口縁部片。内外面に横ナデを施すが、外面に部分的に縦ハクが残る。

103は唯一確認された六連式製塩土器体部の小片。内面に細かな布目痕が残る。

104～106は緑釉陶器。104は椀の底-体部片と見られる。風化が激しいが、体部外面には深緑、底部外面と内面には薄緑の釉が残る。105は坏体部片であろうか。器壁の両面に深緑の釉が残る。

107は灰釉陶器片。底部付近の破片と見られる。

第2層の上器構成は第3層とさほどの相違を見せないが、古相の上器を含みつつもその比率はより低くなり、土師器皿、緑釉・灰釉陶器など新相を示す土器の比率が高くなるようである。

谷埋土第1層 NR1L1(図76)

埋土最上層で、第2・3層に比して厚く堆積する。須恵器、土師器、緑釉陶器、瓦質土器が見られる。

108・109は須恵器坏蓋。108は器高の低い蓋の天井-口縁部片で、天井部から屈曲して口縁に至る。口縁端部は欠失しているが、鳥嘴状の口縁を形成していたものと思われる。天井部にはヘラ状工具による平行する2条の刻線が見られる。109は口縁部片。口縁はほぼ水平に開き、口縁端部に明瞭な面を形成する。微弱であるが口縁下端部を下方に揃み出している。

110・111は須恵器高台付坏。110は底-体部片。底-体部境界に断面方形で小ぶりの高台が付く。体部はやや内湾しながら開くようである。111も底-体部片。底-体部境界やや内側に断面方形の高台が付くが、110に比して高台はやや太身である。体部はあまり開かず立ち上がるものと思われる。112は須恵器無高台坏で、平底から体部はやや外反して立ち上がる。底部外面はヘラ切り無調整と見られる。113も須恵器無高台坏だが、焼成不良品である。底部外面はヘラ切り後ナデ調整が施される。

114は須恵器高坏外部片と見られる。口縁は緩やかに外反しながら開き、口縁端部は丸く収める。体部との境界には段が形成されている。

115は須恵器甕または壺の口縁部であろうか。内湾する口縁を有し、端部を肥厚させている。外面には櫛掻き波状文が見られる。

116は須恵器系陶器甕の口縁-体部片。口縁は緩やかに外反し、口縁端部を内方に拡張させる。体部は球形に大きく膨らむようである。口縁部内外面は横ナデ、体部外面には格子タタキ、内部には同心円当て具痕が残る。

117は緑釉陶器椀の底部片。内外面とも風化が著しく、釉は摩滅した高台周囲にかすかに残る。

118は土師器皿もしくは椀の底部。内外面とも風化が激しいが、底部外面にかろうじて糸切り痕が観察できる。体部は大きく開くものと思われる。

119は瓦質土器羽釜の架帯と見られる。羽釜は吉田遺跡第Ⅱ地区第1調査区より複数出土している。その他の土器(図77)

谷埋土上面検出時、地山直上から出土した。120は縄文土器深鉢口縁部片。器面の風化が著しいが、外面に2枚貝条痕が残る。

【石器】(図78、表13)

谷埋土より3点出土している。詳細は図表を参照されたい。

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

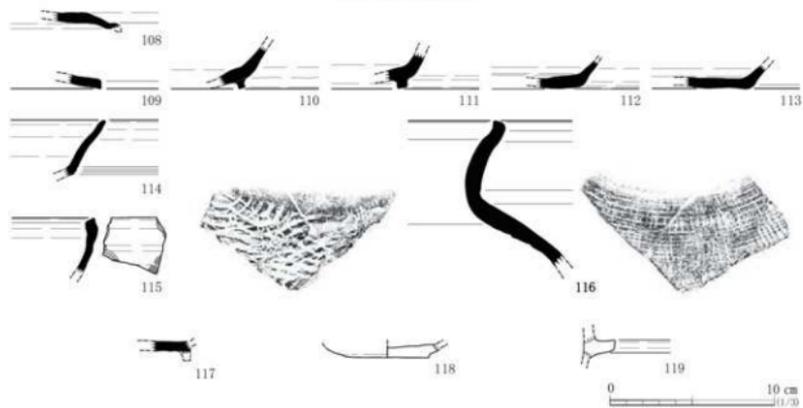


図 76 第2調査区 NR1L1出土土器類



図 77 第2調査区出土その他土器類

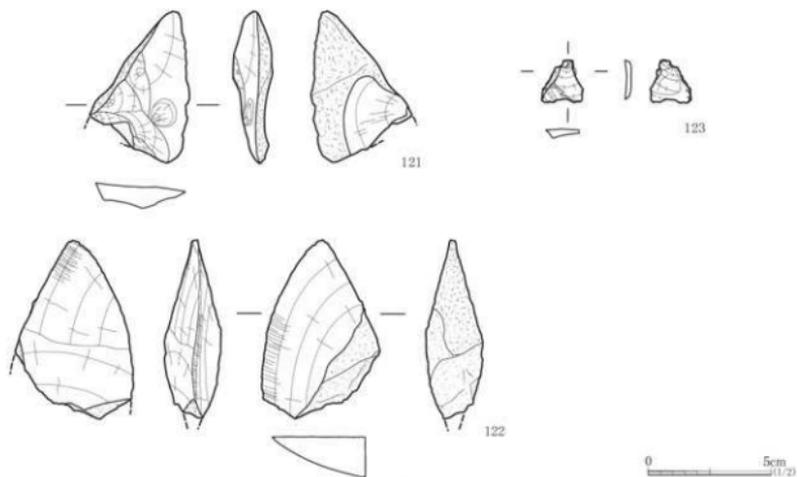


図 78 第2調査区出土石器類



写真 191 第2調査区出土遺物(土器類)①



写真 192 第2調査区出土遺物(土器類)②

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



写真 193 第2調査区出土遺物(土器類)③

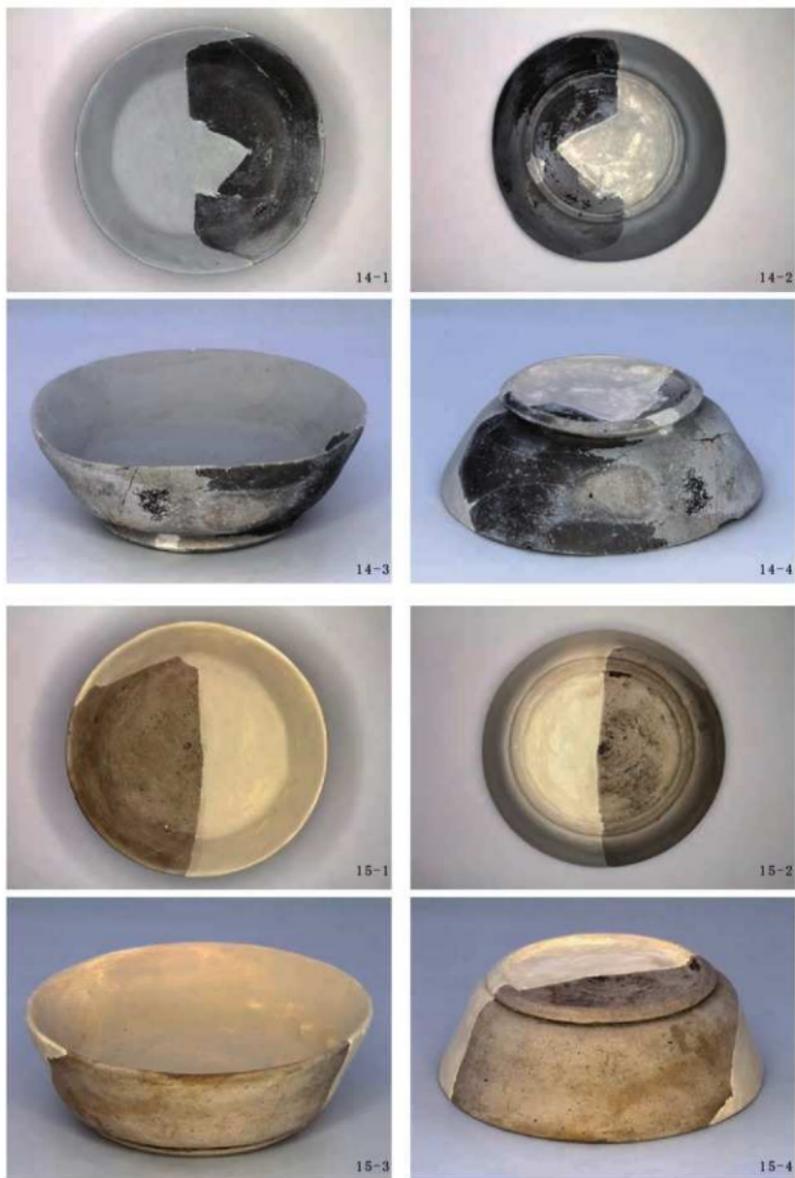


写真 194 第2調査区出土遺物(土器類)④



写真 195 第2調査区出土遺物(土器類)⑤



写真 196 第2調査区出土遺物(土器類)⑥

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



写真 197 第2調査区出土遺物(土器類)⑦

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



写真 198 第2調査区出土遺物(土器類)⑧

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



写真 199 第2調査区出土遺物(土器類)⑨

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



写真 200 第2調査区出土遺物(土器類)⑩

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



写真 201 第2調査区出土遺物(土器類)①

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

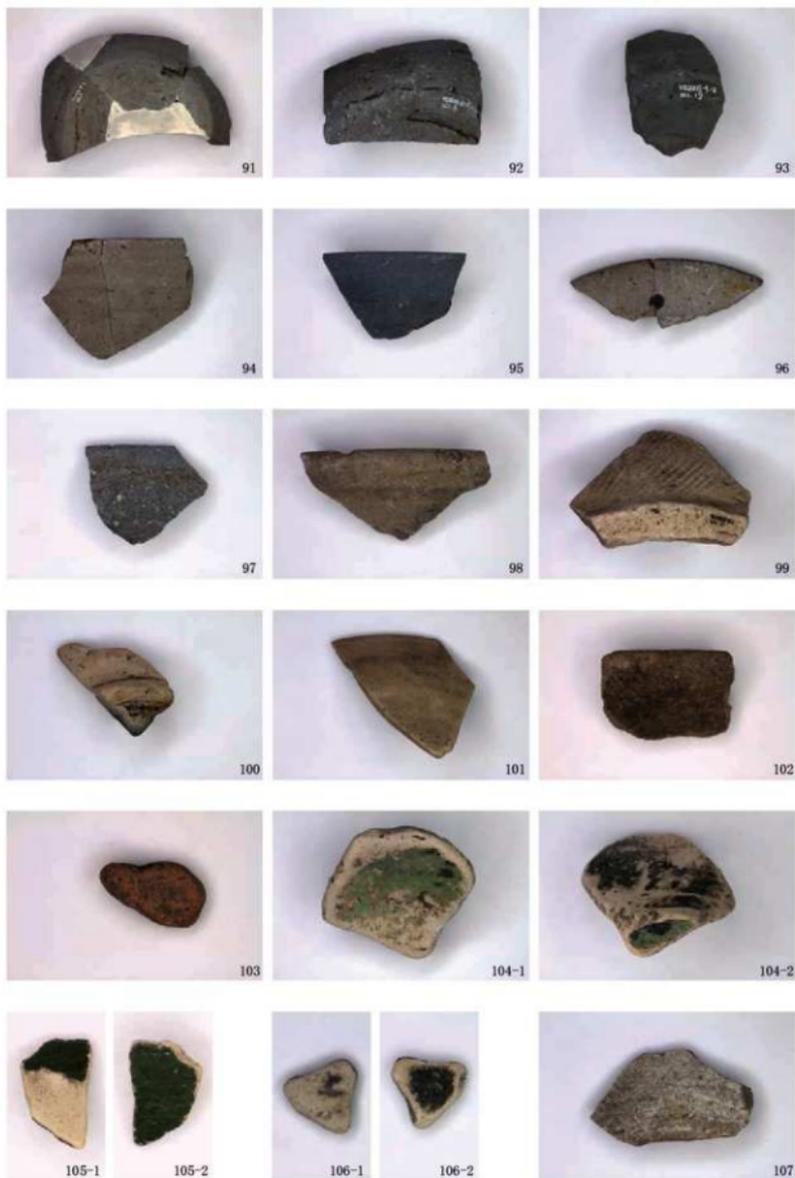


写真 202 第2調査区出土遺物(土器類)②



写真 203 第2調査区出土遺物(土器類)⑬・(石器類)

【木製品】

谷理土より大量の木製品が出土しているが、土器類と同様に谷理土第6層中からは出土を見なかった。谷理土の下層から順を追って報告を行う。

谷理土第6層直上NR1L6直上(図79・80)

第6層直上として遺物を取り上げたが、出土状況(写真176～182)に見るごとく第4層下層最下部に沈殿した状態で出土している。

124・125は不明棒状製品。断面円形であり、先端部に突起をつくり出している。124は先端より12.4cm、125は13.3cm地点にほぞ穴のような平面方形の掘り込みが見られる。124にはその他2ヶ所に全周する浅い抉りが設けられている。類似する棒状製品が平成18年度動物医療センター改修1期工事に伴う本発掘調査遺物包含層1.6からも出土しているが、断面形態は方形である。

126は円形曲物底板の半製品。側板を綴じる樹皮が1ヶ所に遺存する。残存径18.8cm、厚み0.6cm。

127は板材の一端を三角形に削り出し、他方を方形に加工したものである。中央両側面を抉り込んでいる。祭祀具であろうか。

128～133は板状製品もしくは板材。端部を斜めに切り落としている材が多い。

134は先端部が焼け焦げている。松明として使用されたものか。

135は片側端部と表裏面に面を形成する板状製品である。横断面は緩やかに弧を描いている。井戸枠などに用いられた桶側板の可能性を指摘できる。

136は断面楕円形の棒状製品。先端部は一部欠損するが、嘴状に加工されている。表皮は遺存していない。残長68.4cm。何かの柄として使用されたものであろうか。

137・138は角材。137はほぼ全面が焼け焦げている。断面形態は隅丸長方形。138は両端に手斧痕が明瞭に残る。

谷理土第5層 NR1L5(図81)

139は幅2cm、残長11.9cmのやや湾曲する板状製品。両端部を欠失する。140も板状製品。原形を保つ端部を見ると、1.5cm下に軸に直交する刻線を入れ、その地点まで幅1.0cmでコの字状に抉り込みを行っている。残存幅3.4cm、残長11.1cm。

谷理土第4層下層 NR1L4下層(図82・83)

141は円形曲物底板。半製品であり、破損部2ヶ所に極じ孔が残る。残存径17.7cm。厚み0.6cm。

142～144は板材。144は両端部、両側面とも斜めに切り落としている。

145は杭。両端部を欠失する。全面焼け焦げていることから、腐材の燃え残りと思われる。146は先端部のみ焼け焦げる。松明か。

谷理土第4層上層 NR1L4上層(図84～89)

埋土中最も多くの木製品が出土している。ここでは注意すべき木製品だけに言及する。

147は横斧柄。柄の大半と斧台前部を欠失する。斧台上部はやや凹み、下部は膨らんでいる。斧台と柄との角度は約75°を測る。

148は円形曲物の蓋または底板。外縁内側0.8cmの位置に刻線が残る。復元径は17cm弱となる。

149・150は木鍾。薙編みなどに用いられた鍾である。149は水平方向に半掘している。残長17.7cm。150はくびれ部で半掘している。木鍾については、吉田遺跡では初めて存在が確認された。

151は最大幅1.8cm、最大厚1.2cm、長さ43.2cmの棒状製品。片面の両角を削り取っているため、断面六角形状を呈している。端部は両端を斜めに切り取り山形に成形している。畜車の一種であろうか。

152は不明部材。最大幅8.6cm、最大厚2.1cm、全長43.9cmを測る。片側面は直線的に加工されるが一部に段を形成している。対する側面は3種の異なる角度で削り取られているため、庖丁形の平面形態を呈している。また片面に多数の擦痕が見られることから、最終的には作業板として用いられた廃棄されたものと思われる。

153～246は加工痕が観察される角材・板材・棒材の類を掲載した。大多数は未製品ではなく、何らかの木製品を製作する途中に生じた木材を谷に放棄したものと推測される。この内、166は両端部の両側面を削り落とした板状製品である。151同様斎申の可能性もある。167は欠損品であるが片側端部を両面より削り込んでいる。矢板であろうか。168は横幅9.5cm、縦幅11.7cm、最大厚0.5cmの板状製品。片面に段を形成している。217から229までは木筒の可能性もある板状製品。肉眼観察では墨書は確認できない。223は人為的に小孔が穿たれている。

247は1・2と同様の製品と思われる。挟り部で両端ともに折損している。裏面も剝離しているが、断面形態は円形に近い多角形となる。248も同様の製品と見られる。断面方形の棒状製品の1ヶ所にはぞ穴のような方形の掘り込みが見られる。

249は円形曲物の蓋または底板であろうか。欠損が著しいが、側縁部の一部が残る。表面は焼け焦げている。

250～255は杭。いずれも杭先を粗雑に加工する。250・252・254・255には表皮が遺存している。また250・254はほぼ全面が焼け焦げており、252も部分的な炭化が見られる。

256～281は片側端部もしくは両端部が炭化しているものを集めた。前者が主体である。ここでは松明として報告しておく。加工が丁寧な板状、棒状のものは不要となった製品の再利用であろう。281は細い小杭を再利用したものと思われる。

谷埋土第3層 NR1L3(図90)

282は板状製品。表裏面が部分的に欠失しているが、両端部は原面を保っている。全長14.2cm、幅1.7cm、最大厚0.8cmを測る。

283～288は板材。加工痕は残るが、大半は木製品製作途中に生じた廃材である可能性が高い。ただし286の片側端部には人為的なものと見られる切り込みがあり、何らかの製品であった可能性を残す。

289は断面凸レンズ形に加工された材である。残長11.9cm、幅3.0cm、最大厚1.5cm。

290～295は片側端部もしくは両端部が炭化しているものを集めた。これらも松明として報告しておく。第4層上層出土品同様、加工が丁寧な板状、棒状のものは不要となった製品の再利用であろう。

谷埋土第2層 NR1L2(図91)

296は板材。遺存する片側面は表裏面から削り込まれ、凸レンズ状の断面形態を示す。

297は板状製品。両面ともに肉眼では墨書等の存在を確認できなかった。299は両端を欠失するが、4面を比較的丁寧に加工した棒状製品。残長9.2cm、幅1.0cm、最大厚0.6cm。

298は全木製品中で唯一確認された竹製品である。片側端部に切断痕跡が見られる。

300～303は部分的に炭化した加工痕のある木材。燃料の燃え残り、または松明として使用されたものであろう。

304は表皮の剥がされた棒状製品。柄としての使用が考えられる。残長26.5cm、径2.0～2.3cm。

以上、谷埋土出土木製品の概要を記した。第1層からは木製品の出土を見なかった。これらの資料に関しては、現在まで水漬け保管を行っているが、保存処理を実施すると同時に樹種の同定、赤外線カメラによる墨書等の存否確認を行う予定である。

吉田橋内(吉田道路)の調査

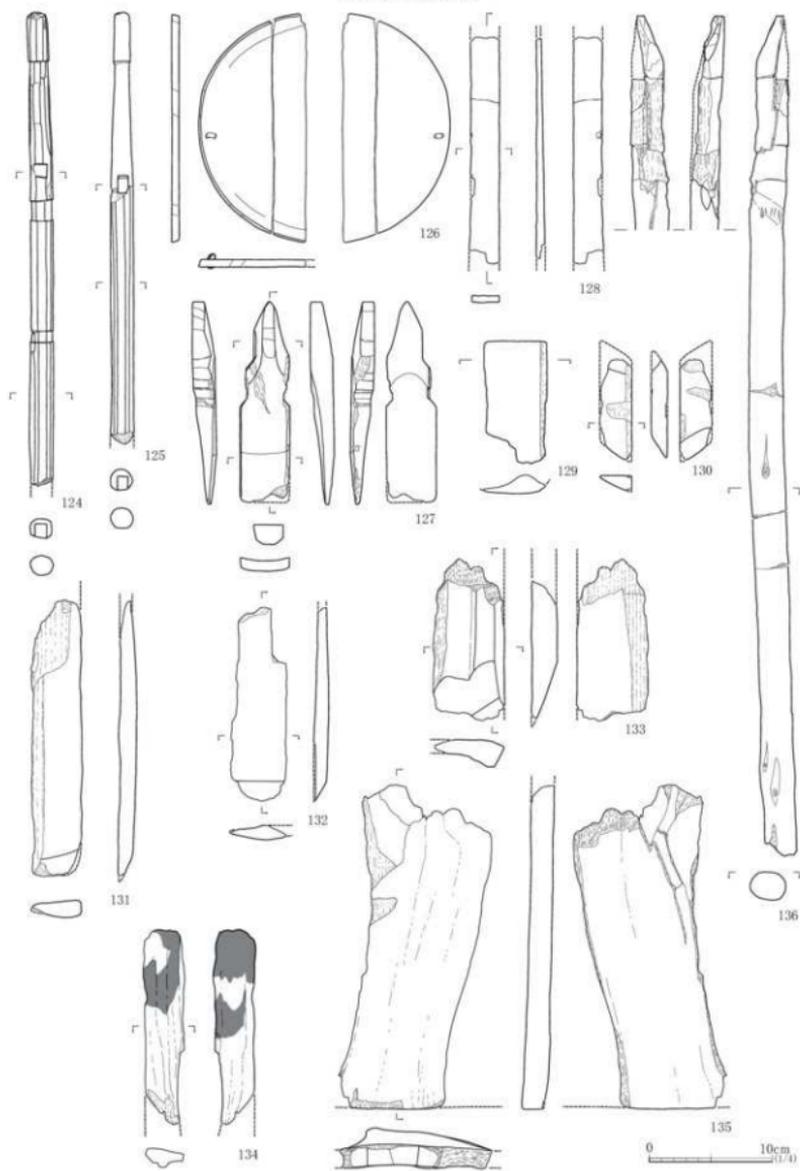


図 79 第2調査区 NR1L6直上出土木製品①

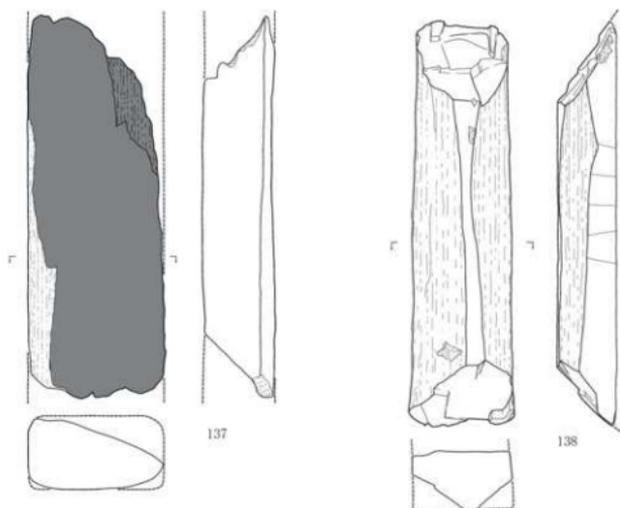


図80 第2調査区 NR1L6直上出土木製品②

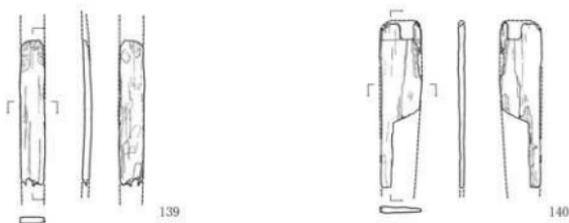


図81 第2調査区 NR1L5直上出土木製品

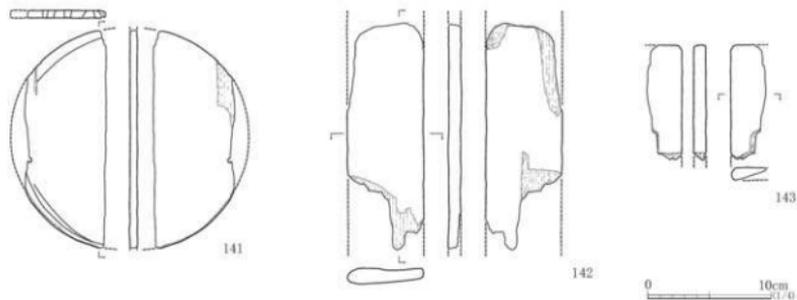


図82 第2調査区 NR1L4下層出土木製品①

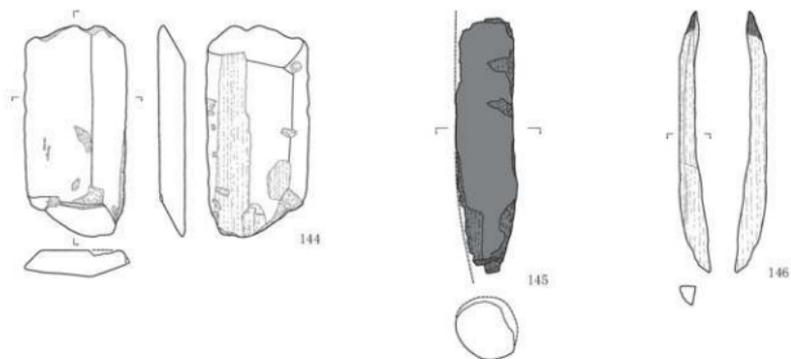


図 83 第2調査区NR1L4下層出土木製品②

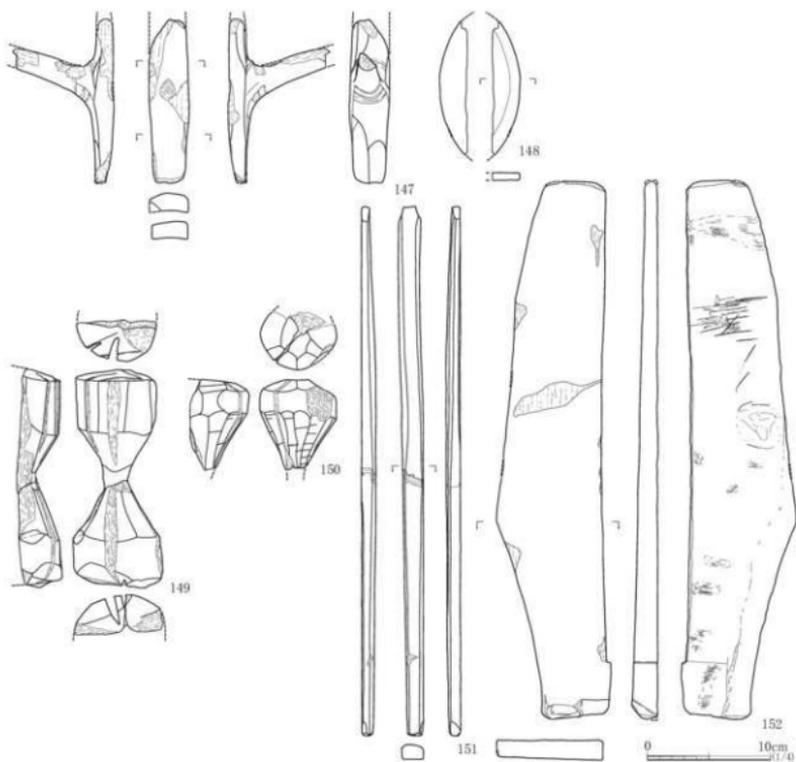


図 84 第2調査区NR1L4上層出土木製品①

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

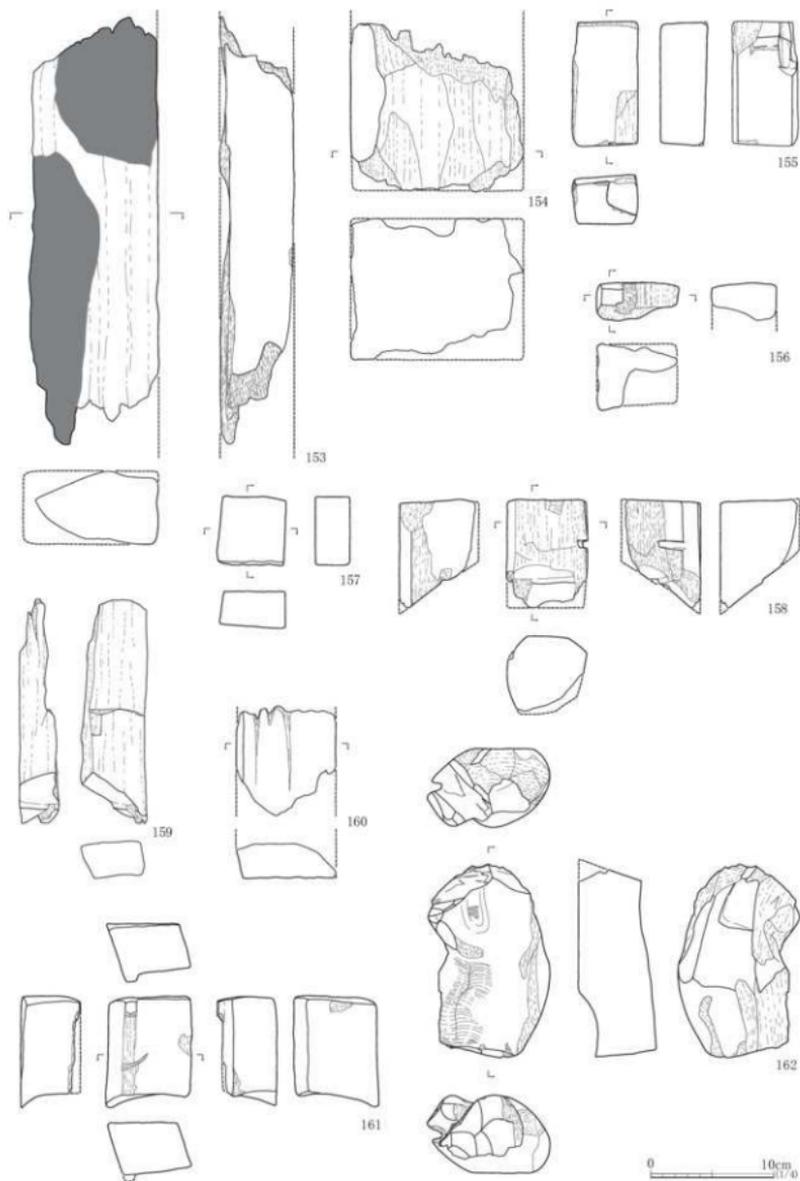


図 85 第2調査区 NR1L4 上層出土木製品②

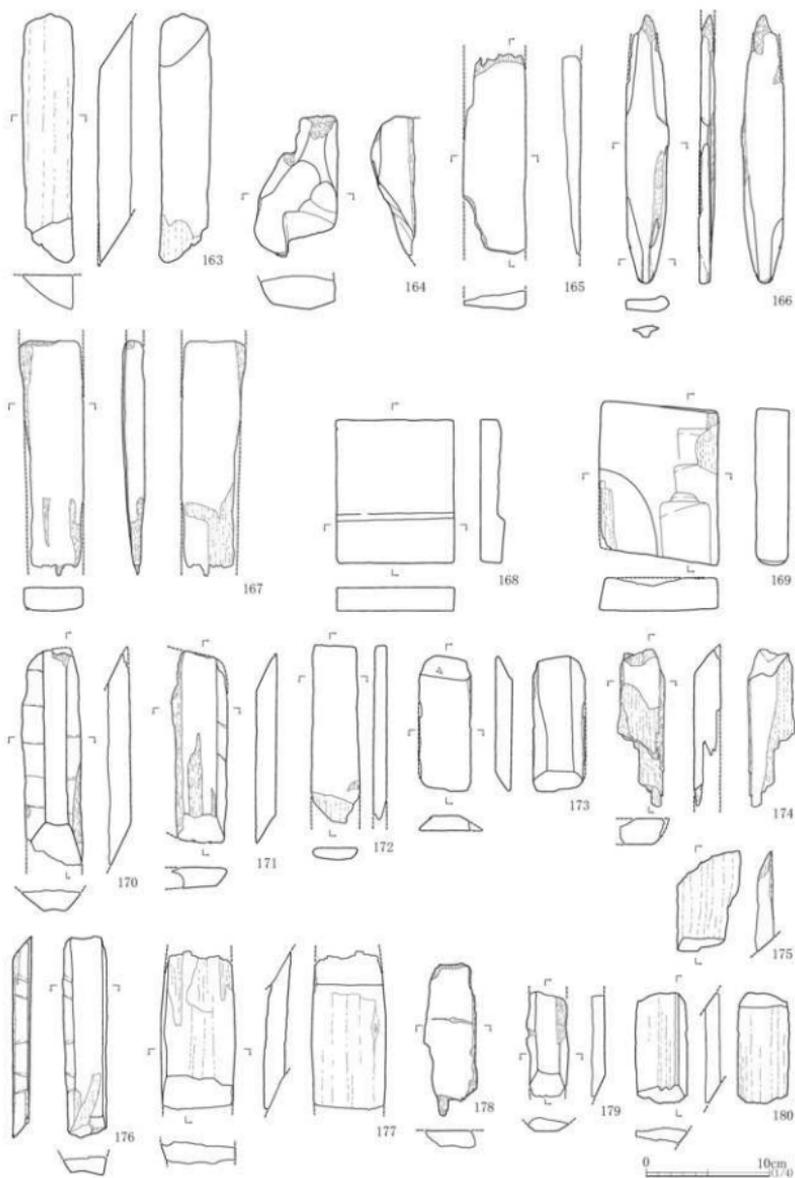


図 86 第2調査区 NR1L4 上層出土木製品③

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

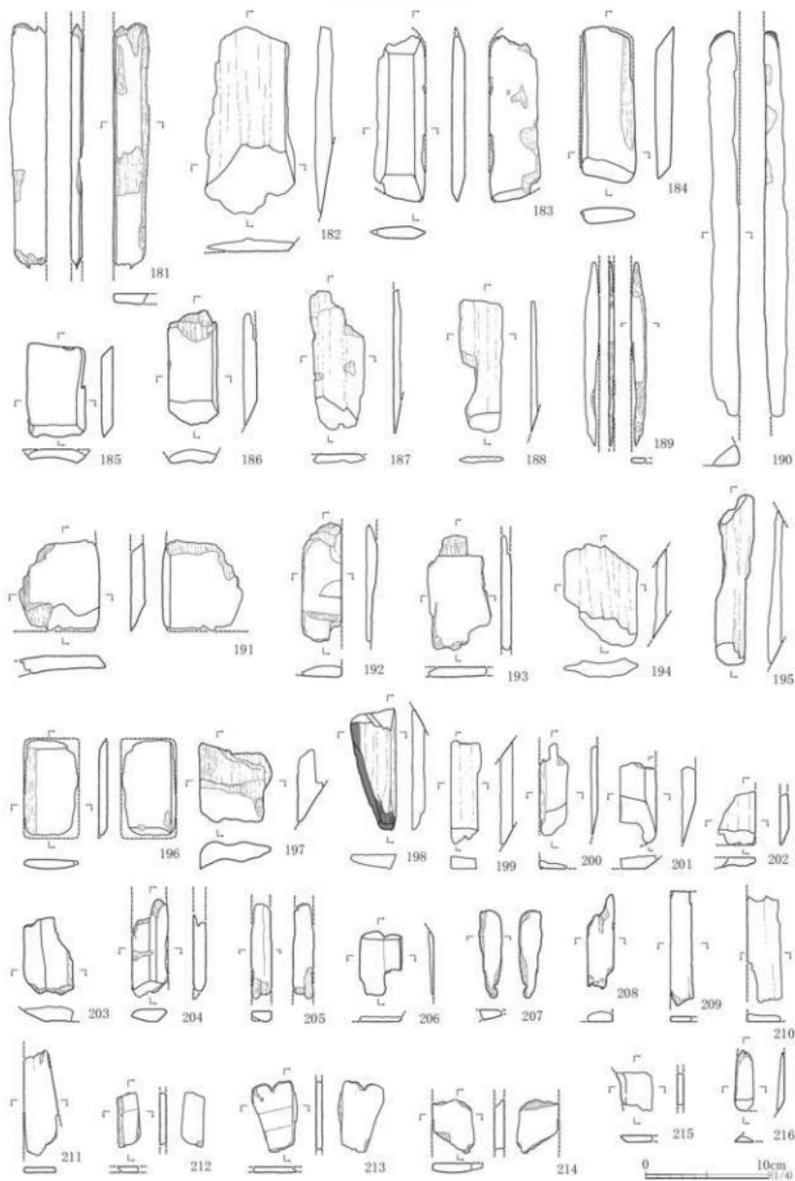


図 87 第2調査区 NR1L4 上層出土木製品④

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

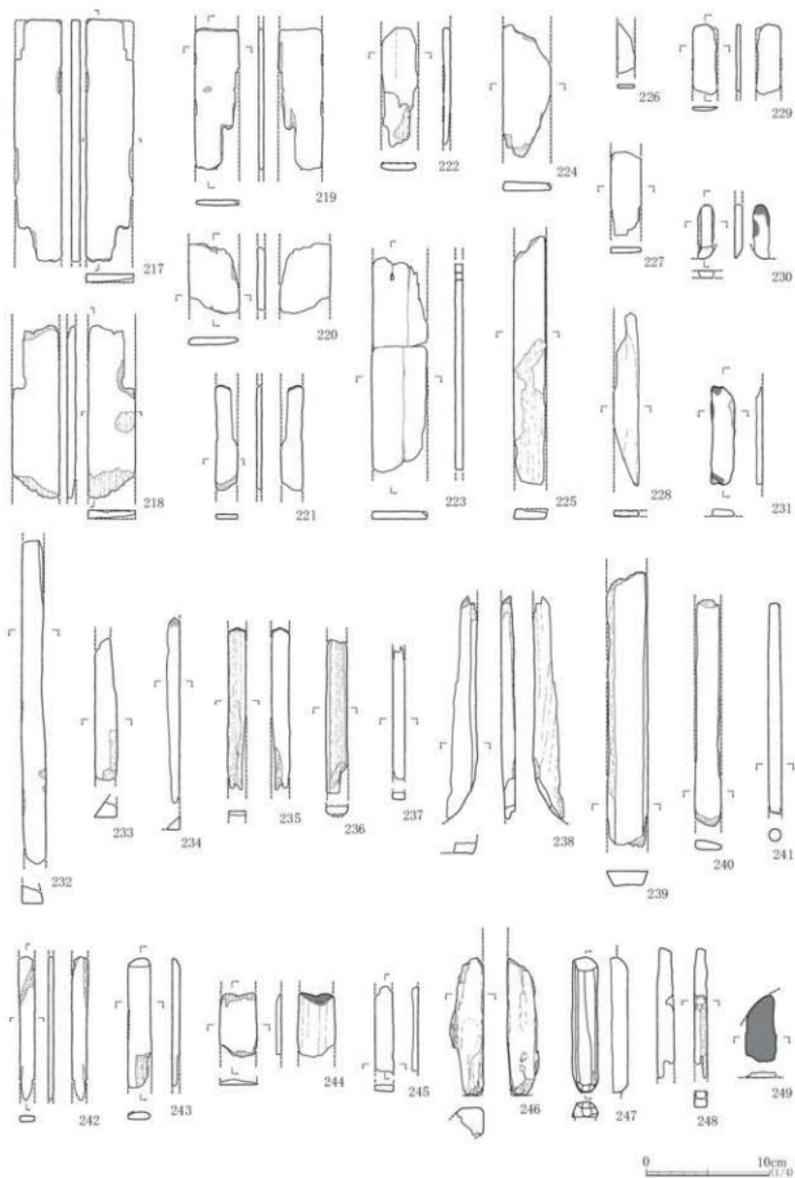


図 88 第2調査区 NR1L4 上層出土木製品⑤

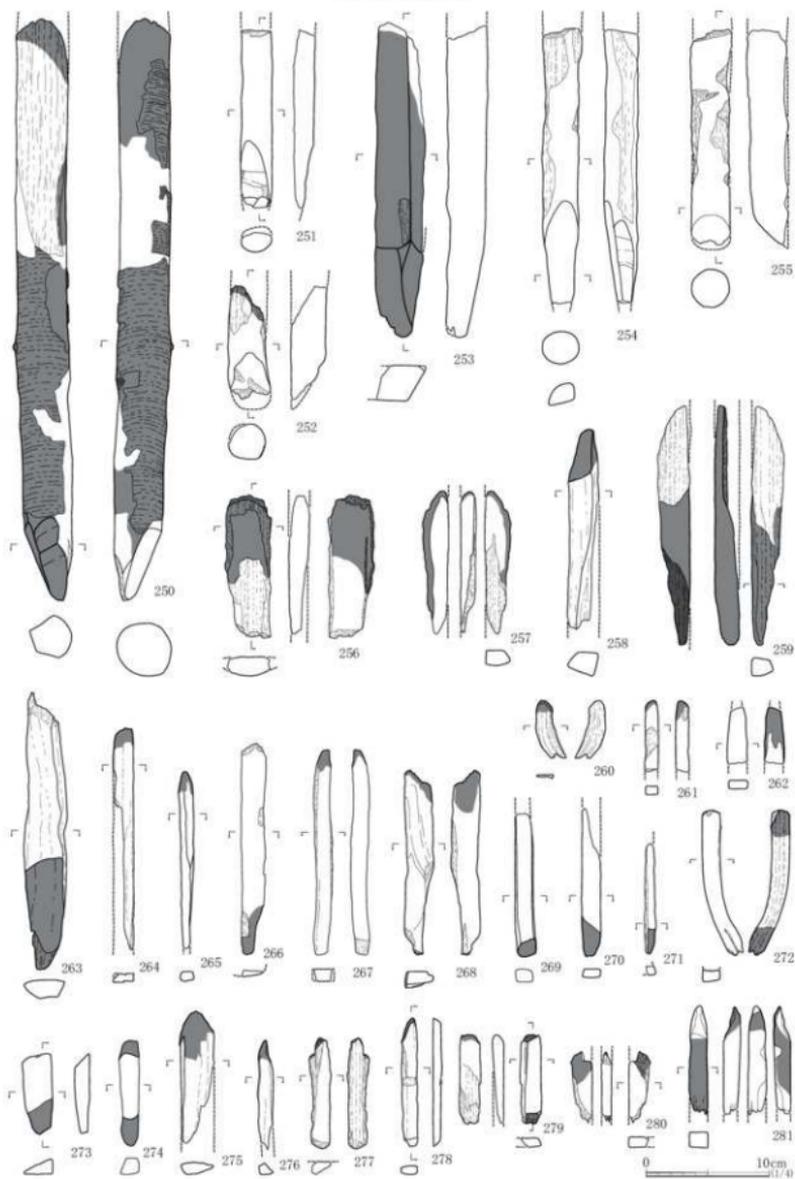


図 89 第2調査区 NR1L4 上層出土木製品④

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

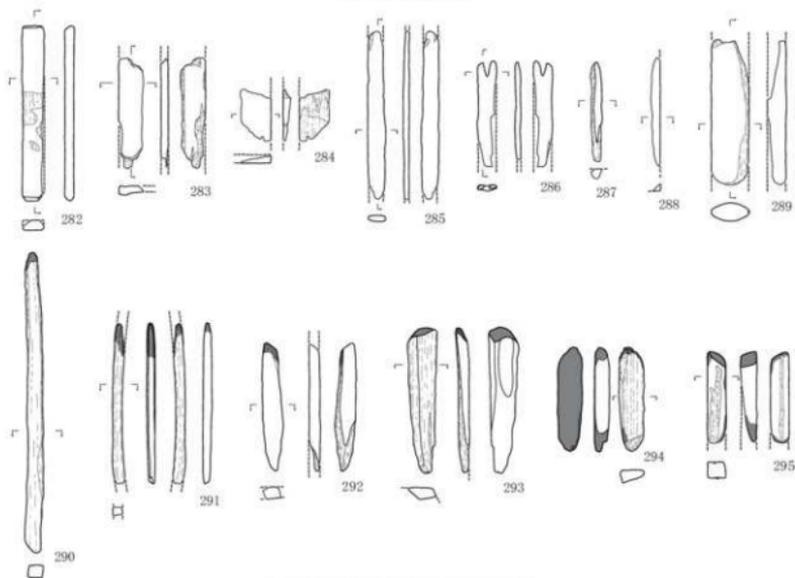


図90 第2調査区 NR1L3出土木製品

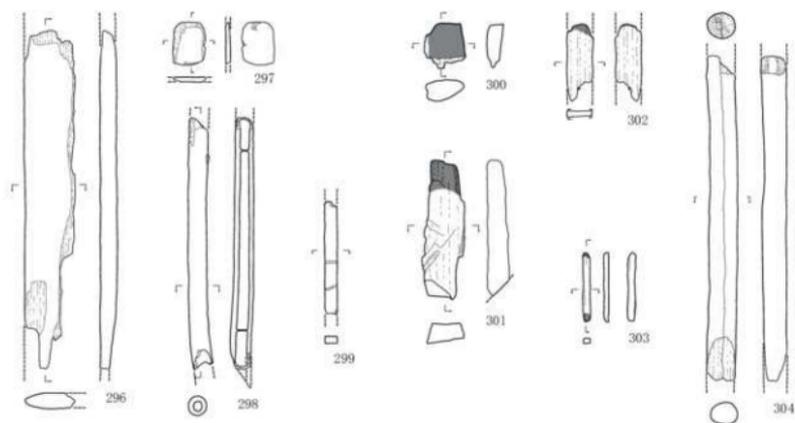


図91 第2調査区 NR1L2出土木製品

0 10cm
1/4

谷肩部杭列(図92、写真211)

調査終了時、谷肩部に検出された杭列(図69)の抜き取りを行った。土中に遺存した木質の状態は極めて良好であった。以下に各杭の特徴を記す。

305(杭列NO.1)は角杭。手斧による成形痕が明瞭に残る。断面は五角形を呈する。残長25.8cm、最大幅5.0cm。306(杭列NO.2)も角杭。305に比してやや太めの材を用いている。断面は五角形を呈する。残長23.0cm、最大幅5.9cm。307(杭列NO.3)は矢板と見られる。抜き取り途中で先端部を破損させてしまった。残長17.0cm、最大幅8.6cm、最大厚0.7cm。308(杭列NO.4)は断面不整形であるが、欠損した上部で板状になるものと想像される。残長14.5cm、最大幅5.3cm。309(杭列NO.5)は矢板。板材の両側面を削り板先としているが、原面をとどめていない。残長14.2cm、最大幅4.7cm、最大厚0.6cm。310(杭列NO.6)は杭先に厚みを持つが上部が板状となっていることから矢板と見られる。残長26.7cm、最大幅6.4cm、最大厚3.2cm。311(杭列NO.7)は杭先のみ遺存していた。先端部は取り上げ時の破損である。断面が台形状を呈している。これも矢板であろうか。残長11.7cm、最大幅1.6cm。312(杭列NO.8)は角杭。断面は五角形を呈する。残長30.2cm、最大幅6.9cm。313(杭列NO.9)は矢板。板材の両側を削り込んで板先としている。残長18.2cm、最大幅4.9cm、最大厚2.2cm。314(杭列NO.10)は角杭。断面は方形を呈す。上部に至るほど断面長方形になることから、矢板である可能性も残す。315(杭列NO.11)も矢板であろうか。断面形態が五～六角形状を呈しているがやや扁平な杭である。残長13.8cm、最大幅4.3cm。316(杭列NO.12)は杭先しか遺存していないがその形状から矢板と考えられる。断面は角形の扁平な板材を両側面から鋭く削り込み杭先としている。残長8.7cm、最大幅3.0cm。317(杭列NO.13)は角杭または矢板。断面五角形を呈する。残長16.7cm、最大幅4.6cm、最大厚2.8cm。318(杭列NO.14)は角杭。発見された杭・矢板の中では最も地中深くに打ち込まれていた。杭先は比較的鈍く、上部の断面は長方形を呈する。残長32.3cm、最大幅5.9cm、最大厚4.1cmを測る。319(杭列NO.15)は矢板。板材を両側面から緩やかに削り板先とする。残長19.3cm、最大幅5.5cm、最大厚1.8cm。320(杭列NO.16)も矢板と見られる。先端部はすでに腐蝕していた。残長9.6cm、最大幅3.6cm、最大厚2.0cm。321(杭列NO.17)は矢板と推定されるが、杭列の中でも比較的遺存状態が悪いもので、ほぼ全面に腐蝕が進行していた。残長13.0cm、最大幅8.5cm、最大厚1.0cm。322(杭列NO.17)は取り上げ時に杭先を破損してしまった。杭先しか遺存していないため断定できないが、杭列中唯一の丸杭である可能性を残す。棒材の片面のみ削り杭先としている。残長6.7cm、最大径2.3cm。

[註]

- 1) 墨書に関しては本学人文学部の橋本義則教授に相談いただいた。動物医療センター改修工期事に伴う本発掘調査出土の他の墨書資料についても同様である。
- 2) 横山成己・櫻野好博(2010)『豊字部内藤家南病院改修1期工事に伴う本発掘調査』、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口埋蔵文化財資料館年報—平成18年度—』、山口
- 3) 杉原和恵(1988)『墨で文字を書きこんだうつわ—発掘の報告—』、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、止
- 4) 主編立彦(2004)『平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要』、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』、山口
- 5) 横山成己(2007)『吉田遺跡第Ⅱ地区の調査』、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成17年度—』、山口
- 6) 註2の64頁遺物番号533。

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

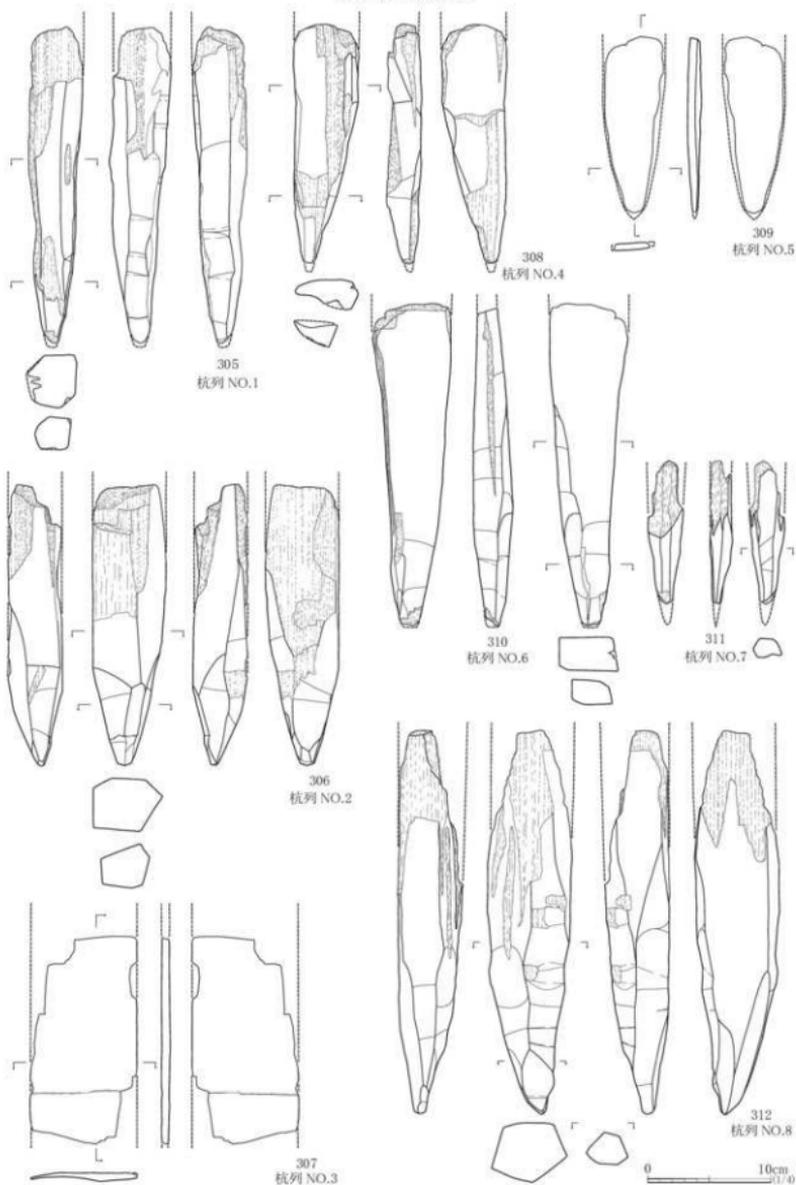


図92 第2調査区NR1肩部木製杭①

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

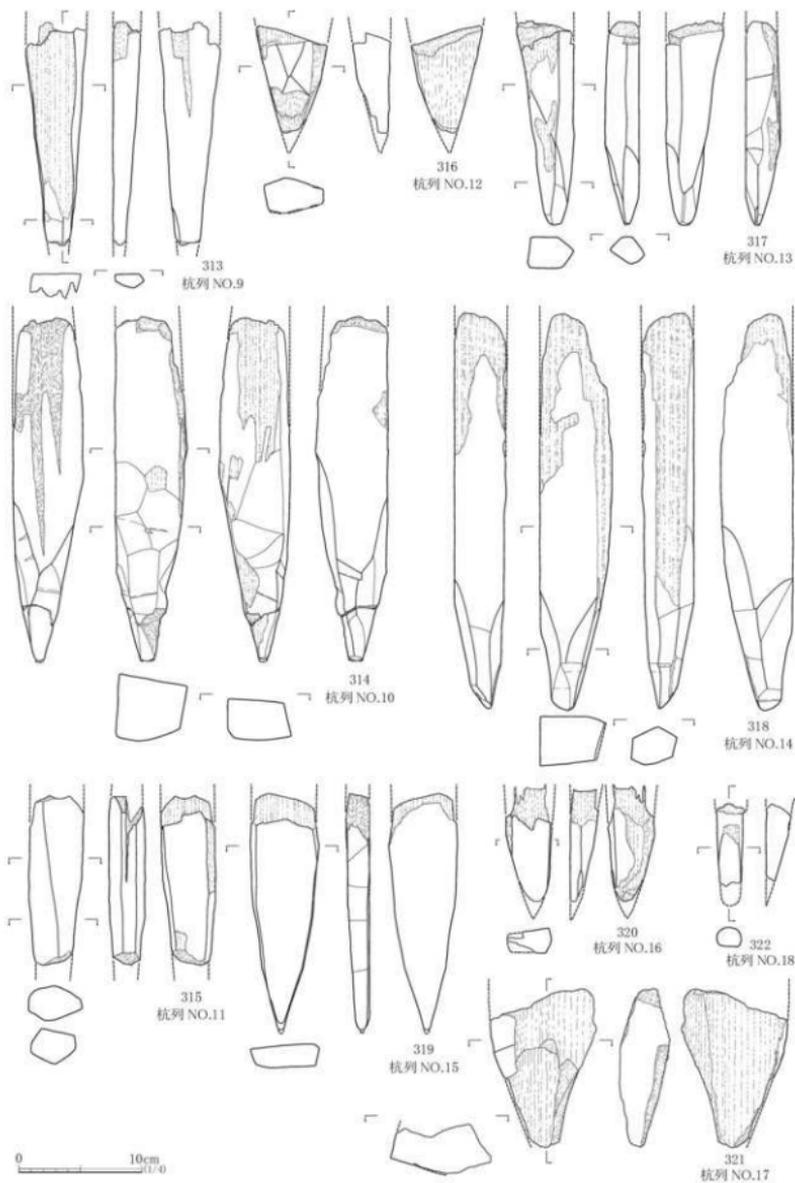


図93 第2調査区NR1肩部木製杭②

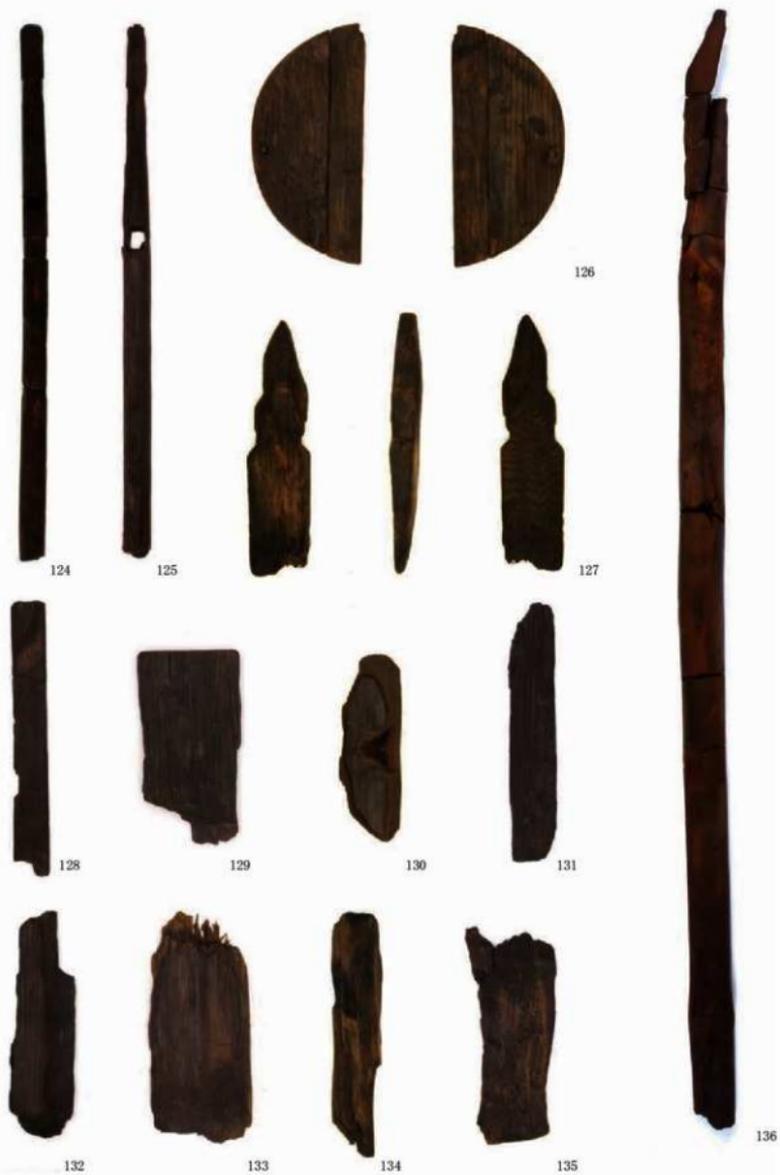


写真 204 第2調査区出土遺物(木製品)①

古田橋内(古田遺跡)の調査



写真 205 第2調査区出土遺物(木製品)②



写真 206 第2調査区出土遺物(木製品)③



写真 207 第2調査区出土遺物(木製品)④

吉田橋内(古田道路)の調査



写真 208 第2調査区出土遺物(木製品)⑤



写真 209 第2調査区出土遺物(木製品)④

古田橋内(古田遺跡)の調査



写真 210 第2調査区出土遺物(木製品)⑦

古田橋内(古田遺跡)の調査



写真 211 第2調査区出土遺物(木製品)⑧

吉田構内(吉田遺跡)の調査

表12 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	備考
				①口縁②底径③器高	④4.7	①外面 ②内面			
1	NR1 L5直上	須恵器 高台付坏身		①15.6②9.46 ③4.7		①灰色(N6/)②灰色(N5/)		2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む	底部外面に「主」の墨書
2	NR1 L5直上	須恵器 高台付坏身		①16.0②8.1 ③4.7		①灰色(N6/)②灰色(N5/)		2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む	
3	NR1 L5直上	須恵器 高台付坏身	体部一 底部	②6.7		①灰色(10Y6/1)②灰色(N6/)		1mm以下の砂粒を含む	
4	NR1 L4	須恵器 坏蓋	天井部 ～ 口縁部	①15.0③2.1 つまみ径 2.3		①青灰色(SB6/1)②青灰色(SPB5/1)		1mm以下の砂粒を少量含む	
5	NR1 L4	須恵器 坏蓋	口縁部	①13.0③2.7 つまみ径 1.8		①明青灰色(SPB7/1)②青灰色(SPB6/1)		精緻	
6	NR1 L4	須恵器 坏蓋	口縁部			①青灰色(SB5/1)②青灰色(SPB5/1)		1mm以下の砂粒を多く含む	
7	NR1 L4	須恵器 坏蓋	口縁部			①明青灰色(SPB7/1)②灰白色(N5/)			
8	NR1 L4	須恵器 坏蓋	口縁部			①青灰色(SPB6/1)②青灰色(SB6/1)		1mm以下の砂粒を多く含む	
9	NR1 L4	須恵器 坏蓋	口縁部			①②灰色(SY5/1)		0.5mm以下の砂粒を少量含む	
10	NR1 L4	須恵器 坏蓋	口縁部			①②灰色(N7/)			
11	NR1 L4	須恵器 坏蓋	口縁部			①②明青灰色(SPB7/1)			
12	NR1 L4	須恵器 坏蓋	天井部	つまみ径 3.8		①②灰色(N7/)		0.5mm程の砂粒を少量含む	
13	NR1 L4	須恵器 坏蓋	天井部	つまみ径 3.6		①灰色(N6/)②灰白色(N7/)		1mm以下の砂粒を多く含む	
14	NR1 L4	須恵器 高台付坏身	口縁部一 底部	①15.1②8.0 ③5.0		①②灰色(N7/)		1mm以下の砂粒を少量含む	
15	NR1 L4	須恵器 高台付坏身	口縁部一 底部	①15.0②(9.0) ③5.0		①②灰黄色(2.5Y7/2)		1mm以下の砂粒を少量含む	
16	NR1 L4	須恵器 高台付坏身	口縁部一 底部	①15.4②(9.2) ③4.2		①②青灰色(SPB6/1)		1mm以下の砂粒を含む	
17	NR1 L4	須恵器 高台付坏身	底部	②(8.6)		①②灰色(N7/)		1mm以下の砂粒を少量含む	
18	NR1 L4	須恵器 高台付坏身	底部			①灰色(N5/)②黒褐色(10YR3/2)		1mm以下の砂粒を多く含む	
19	NR1 L4	須恵器 高台付坏身	底部			①②明青灰色(SPB7/1)		1mm程度の砂粒を少量含む	
20	NR1 L4	須恵器 坏身	底部	②(10.0)		①②灰色(N6/)		0.5mm以下の砂粒を多く含む	
21	NR1 L4	須恵器 坏	底部			①②灰色(N7/)		2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む	底部外面に「安」の墨書
22	NR1 L4	須恵器 坏身	口縁部			①灰色(N6/)②灰白色(N7/)		2mm程の礫を少量含む 0.5mm以下の砂粒を少量含む	
23	NR1 L4	須恵器 坏身小	口縁部			①灰白色(N7/)②明黄灰色(SP7/1)		0.5mm以下の砂粒を多く含む	
24	NR1 L4	須恵器 皿	口縁部一 底部	③2.0		①②灰色(N6/)		2mm程の礫を少量含む 0.5mm以下の砂粒を少量含む	
25	NR1 L4	須恵器 皿	口縁部			①②灰白色(N7/)		2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を極少量含む	
26	NR1 L4	須恵器 高坏	坏部一 脚部	②(9.2)		①②灰白色(N7/)		1mm程の砂粒を極少量含む	
27	NR1 L4	須恵器 高坏	坏部一 脚部	②8.8		①②明青灰色(SPB7/1)		0.5mm程の砂粒を極少量含む	
28	NR1 L4	須恵器 高坏	脚部	②(10.6)		①②灰色(N6/)		1mm以下の砂粒を少量含む	
29	NR1 L4	須恵器 高坏小				①②灰白色(N7/)		2mm程の礫を少量含む	
30	NR1 L4	須恵器 高坏	坏部一 脚部	②(9.6)		①②青灰色(SPB6/1)		1mm以下の砂粒を多量に含む	脚部内面に「主・井」の墨書
31	NR1 L4	須恵器 甕	口縁部			①②灰白色(N7/)		1mm以下の砂粒を含む	
32	NR1 L4	須恵器 甕	頸部			①②灰白色(2.5Y7/1)		0.5mm以下の砂粒を含む	内面にヘラ記号あり
33	NR1 L4	須恵器 平瓶小	体部			①灰色(N6/)②明青灰色(SPB7/1)		1mm程の砂粒を極少量含む	

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	備考
				①口縁②底縁③器高		①外面	②内面		
34	NR1 L4	土師器 椀	口縁部			①②灰白色(2.5Y8/2)	0.5mm程の砂粒を極少量含む		
35	NR1 L4	土師器 坏A	口縁部			①②にぶい黄褐色(10YR6/3)	精緻		全面に赤色顔料を施す
36	NR1 L4	土師器 坏C	口縁部			①②にぶい黄褐色(10YR6/3)	0.5mm程の砂粒を多量に含む		
37	NR1 L4	土師器 甕	口縁部 - 体部			①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②にぶい黄褐色(10YR6/4)	1mm以下の砂粒を多く含む		外面付付着
38	NR1 L4	土師器 甕	口縁部 - 体部			①暗灰色(10YR4/1) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	0.5mm以下の砂粒を多く含む		外面付付着
39	NR1 L4	美濃ハ浜式製塩土器	脚部			①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.5mm程の砂粒を少量含む		
40	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①②青灰色(5PB6/1)	精緻		
41	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①②明青灰色(5PB7/1)	0.5mm以下の砂粒を少量含む		
42	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①②灰白色(2.5Y8/2)	2mm程の礫を少量含む 0.5mm程の砂粒を多く含む		
43	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	1mm以下の砂粒を極少量含む		
44	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	0.5mm程の砂粒を多く含む		
45	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①青灰色(5PB6/1) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の砂粒を少量含む		
46	NR1 L3	須恵器 坏蓋	口縁部			①明青灰色(5PB7/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mm程の砂粒を少量含む		
47	NR1 L3	須恵器 坏蓋	天井部	つまみ径 2.2		①②明青灰色(5PB7/1)	0.5mm以下の砂粒を少量含む		
48	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①青灰色(5PB7/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を少量含む		
49	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①灰色(10Y4/1) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の砂粒を少量含む		
50	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①青灰色(5PB5/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を少量含む		
51	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の砂粒を含む		
52	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の砂粒を少量含む		
53	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の砂粒を少量含む		
54	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①灰色(N4/) ②灰色(5Y6/1)	0.5mm以下の砂粒を少量含む		内面と底部が摩滅
55	NR1 L3	須恵器 高台付坏身	底部			①②灰白色(N8/)	2mm程の礫を少量含む		
56	NR1 L3	須恵器 坏	底部	②(7.6)		①②灰色(N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む		
57	NR1 L3	須恵器 坏	底部			①②灰色(7.5Y6/1)	2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む		外面に板目痕あり
58	NR1 L3	須恵器 坏	口縁部			①②灰色(N6/)	1mm以下の砂粒を少量含む		
59	NR1 L3	須恵器 坏	口縁部			①②灰色(N6/)	1mm以下の砂粒を含む		
60	NR1 L3	須恵器 高坏	脚部			①②灰白色(N7/)	精緻		
61	NR1 L3	須恵器 高坏	口縁部			①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	2-3mm程の礫を極少量含む		
62	NR1 L3	須恵器 高坏	口縁部			①灰白色(5Y7/1) ②灰色(N6/)	2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む		
63	NR1 L3	須恵器 壺か	底部			①②灰色(N6/)	2-3mmの礫を少量含む 1mm以下の砂粒を少量含む		
64	NR1 L3	須恵器 壺	口縁部			①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を極少量含む		
65	NR1 L3	須恵器 壺か	口縁部			①灰オリーブ色(5Y6/2) ②灰色(N6/)	精緻		外面に自然釉付着
66	NR1 L3	須恵器 器種不明	体部			①灰色(5Y7/1) ②灰白色(N7/)	2-3mmの礫を少量含む 1mm以下の砂粒を少量含む		平行線文、波状文あり
67	NR1 L3	土師器 台付坏	底部	②(7.2)		①②暗灰黄色(2.5Y5/2)	1mm以下の砂粒を含む		
68	NR1 L3	土師器 高台付皿	底部	②(5.8)		①②浅黄色(2.5Y7/3)	1mm以下の砂粒を多く含む		
69	NR1 L3	土師器 坏小	底部			①②灰黄色(2.5Y6/2)	1mm程の砂粒を多く含む		
70	NR1 L3	土師器 坏小	体部			①②にぶい黄褐色(10YR7/4)	1mm以下の砂粒を多く含む		内外面に赤色顔料が残る
71	NR1 L3	土師器 甕	口縁部			①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	2mm程の礫を少量含む 0.5mm以下の砂粒を多く含む		

吉田構内(吉田遺跡)の調査

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口縁②底面③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
72	NR1 L3	緑釉陶器 椀	底部		釉 暗緑灰色(7.5GY4/1) 素地 浅黄色(2.5Y7/3)	精緻		底部にケズリ調整あり
73	NR1 L3	弥生土器 甕	底部	②5.2	①②灰黄色(2.5Y7/2)	2-3mmの礫を多く含む 2mm以下の砂粒を多く含む		
74	NR1 L3	土鉢			①②灰黄色(2.5Y6/2)	1mm以下の砂粒を多く含む		
75	NR1 L2	須恵器 坏蓋	口縁部		①②灰白色(N8/)	1mm以下の砂粒を極少量含む		
76	NR1 L2	須恵器 坏蓋	口縁部		①②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の砂粒を含む		
77	NR1 L2	須恵器 坏蓋	天井部	つまみ径 2.2	①灰黄色(2.5Y7/2) ②明青灰色(5PB7/1)	2mm程の礫を極少量含む 1mm以下の砂粒を少量含む		
78	NR1 L2	須恵器 坏蓋か	天井部	つまみ径 3.2	①灰白色(N7/) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を含む		
79	NR1 L2	須恵器 坏蓋か	体部		①②灰白色(N7/)	1mm以下の砂粒を含む		外面にヘラ記号か
80	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	口縁部-底部	①(13.6)②(8.2) ③4.3	①②灰色(N6/)	精緻		
81	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部	②(6.9)	①灰色(10Y5/1) ②灰色(7.5Y6/1)	1mm以下の砂粒を含む		
82	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部	②(8.8)	①青灰色(5B6/1) ②灰色(N6/)	2mm程の礫を極少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む		
83	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部		①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を含む		
84	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部		①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を少量含む		
85	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部		①②灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の砂粒を少量含む		
86	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部		①明青灰色(5PB7/1) ②灰色(N6/)	1mm以下の砂粒を多く含む		
87	NR1 L2 側溝	須恵器 高台付坏身	底部		①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む		
88	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部		①②灰白色(N7/)	1mm以下の砂粒を少量含む		
89	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部		①②灰色(N6/)	1mm以下の砂粒を少量含む		
90	NR1 L2	須恵器 高台付坏身	底部		①②灰色(N4/)	1mm以下の砂粒を含む		
91	NR1 L2	須恵器 坏身	底部	②6.9	①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の砂粒を少量含む		
92	NR1 L2	須恵器 坏身	底部		①②灰色(10V6/1)	2-3mmの礫を含む 1mm以下の砂粒を少量含む		
93	NR1 L2	須恵器 坏身	底部		①②灰色(10V6/1)	0.5mm程の粗粒砂を少量含む		
94	NR1 L2	須恵器 坏身	口縁部		①灰白色(2.5Y7/1) ②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の砂粒を多く含む		
95	NR1 L2	須恵器 坏身	口縁部		①②青灰色(5PB5/1)	2mm程の礫を少量含む		
96	NR1 L2 側溝	須恵器 高坏	脚部		①②灰白色(2.5Y7/1)	1mm以下の砂粒を少量含む		
97	NR1 L2	須恵器 短頸壺か	口縁部		①②青灰色(5PB5/1)	2mm程の礫を含む 1mm以下の砂粒を含む		
98	NR1 L2	須恵器 甕	口縁部		①②灰黄色(2.5Y6/2)	1mm以下の砂粒を少量含む		
99	NR1 L2	須恵器 甕か	底部		①②灰黄色(2.5Y6/2)	1mm以下の砂粒を多く含む		
100	NR1 L2	土師器 高台付坏	底部		①②浅黄褐色(10YR8/3)	精緻		
101	NR1 L2 側溝	土師器 皿	口縁部		①②浅黄色(2.5Y7/3)	精緻		
102	NR1 L2	土師器 甕	口縁部		①にぶい、黄褐色(10YR5/3) ②にぶい、黄褐色(10YR6/3)	2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む		
103	NR1 L2	六連式製塩土器	体部		①②にぶい、褐色(7.5YR5/4)	1mm以下の砂粒を少量含む		内面に布目圧痕
104	NR1 L2 側溝	緑釉陶器 椀	底部		釉 暗オリーブ灰色(5GY4/1) 素地 灰白色(2.5Y8/2)	1mm以下の砂粒を含む		風化が目立つ
105	NR1 L2	緑釉陶器 坏か	体部		釉 暗緑灰色(7.5GY4/1) 素地 灰白色(2.5Y8/2)	精緻		
106	NR1 L2	緑釉陶器片			釉 暗緑灰色(7.5GY4/1) 素地 灰白色(2.5Y8/2)	精緻		
107	NR1 L2	灰釉陶器 皿か	体部		①②灰白色(2.5Y8/1)	精緻		
108	NR1 L1	須恵器 坏蓋	口縁部		①②灰白色(N7/)	2-3mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む		
109	NR1 L1	須恵器 坏蓋	口縁部		①灰白色(N7/) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の砂粒を少量含む		
110	NR1 L1	須恵器 高台付坏身	底部		①②灰色(7.5Y6/1)	2mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を多く含む		

吉田構内(吉田遺跡)の調査

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	備考
				①口縁②底縁③器高	①外面 ②内面	① ②	① ②		
111	NR1 L1	須恵器 高台付坏身	底部			①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)		1mm以下の砂粒を少量含む	
112	NR1 L1	須恵器 坏身	底部			①灰白色(N7/) ②灰色(N6/)		2-3mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を極少量含む	
113	NR1 L1	須恵器 坏身	底部			①暗灰色(N3/) ②灰白色(SY7/1)		1mm以下の砂粒を含む	
114	NR1 L1	須恵器 高坏か	口縁部			①灰白色(N7/) ②灰色(SY6/1)		1mm以下の砂粒を少量含む	
115	NR1 L1	須恵器 甕か	口縁部			①灰色(SY5/1) ②灰白色(N7/)		1mm以下の砂粒を少量含む	外面に櫛描波状文あり
116	NR1 L1	須恵器系陶器 甕	口縁部 一体部			①暗灰色(N3/) ②灰白色(SY7/1)		1mm以下の砂粒を少量含む	
117	NR1 L1	緑釉陶器 椀	底部			釉 緑灰色(7.5GY5/1) 素地にふい、黄黄色 (10YR7/3)		1mm以下の砂粒を極少量含む	
118	NR1 L1	土師器 皿	底部	②5.0		①②にふい、黄褐色 (10YR6/4)		精緻	底部外面に 糸切り痕
119	NR1 L1	瓦質土器 羽釜か	体部			①灰黄褐色(10YR5/2) ②黒褐色(2.5Y3/1)		2-3mm程の礫を少量含む 1mm以下の砂粒を少量含む	
120	NR1 アゼ川 (赤褐色土)	縄文土器 深鉢	口縁部			①にふい、黄色(2.5Y6/4) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)		1mm以下の砂粒を 非常に多く含む	

表13 出土遺物(石器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構	器種	法量(cm)		備考
121	NR1 L4	削器か	残存長(6.2) 幅(4.1) 厚み1.6		石材の原面が残る 砂岩か
122	NR1 L2	削器か	残存長(7.3) 幅(4.8) 厚み2.3		石材の原面が残る 流紋岩か
123	NR1 L2	剥片	残存長1.8 幅1.7 厚み0.3		姫島産黒曜石か

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

表14 出土遺物(木製品)観察表

質量()は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
124	NRI L6直上	不明	残長38.6 径1.8	125と同一個体か
125	NRI L6直上	不明	残長35.2 径1.8	先端部はNRI L4出土 124と同一個体か
126	NRI L6直上	円形曲物底板	残存径18.8 厚み0.6	半損品 榑皮結合曲物B
127	NRI L6直上	祭祀具か	長さ16.4 幅4.0 厚み2.0	
128	NRI L6直上	板状製品	残長18.4 残幅2.3 厚み0.7	
129	NRI L6直上	板材	残長10.0 幅5.1 厚み1.5	
130	NRI L6直上	板材	残長8.2 幅3.6 厚み1.3	
131	NRI L6直上	板材	残長22.5 残幅4.0 厚み1.4	
132	NRI L6直上	板材	残長15.7 残幅4.5 厚み1.2	
133	NRI L6直上	板材	残長13.2 残幅5.8 厚み2.2	
134	NRI L6直上	松明	残長15.9 残幅3.1 残厚1.5	端部炭化
135	NRI L6直上	不明	残長26.4 残幅12.8 厚み2.0	
136	NRI L6直上	柄か	残長68.4 幅2.9	片側端部に加工痕あり 側面に凹みあり
137	NRI L6直上	角材	残長31.2 残幅10.8 残厚5.7	表面炭化
138	NRI L6直上	角材	残長33.0 幅8.1 残厚4.7	
139	NRI L5直上	板状製品	残長11.9 残幅2.0 厚み0.6	
140	NRI L5直上	板状製品	残長14.1 残幅3.4 厚み0.5	片面端部付近に直交方向の切込み痕(深さ約2mm)
141	NRI L4下層	円形曲物底板	残長17.7 残幅6.7 厚み0.6	半損品
142	NRI L4下層	板材	残長18.5 幅6.7 厚み1.0	
143	NRI L4下層	板材	残長9.3 残幅2.9 厚み1.0	
144	NRI L4下層	板材	残長17.1 幅8.3 厚み2.1	
145	NRI L4下層	杭	残長20.7 径(4.7)	表面全体が炭化
146	NRI L4下層	松明か	残長21.3 残幅1.3 残厚1.5	端部炭化
147	NRI L4上層	横弁柄	基部残長13.5 幅3.2 厚み1.7 柄部残長6.5 径2.1	弁台装着部・握り基部欠失
148	NRI L4上層	円形曲物蓋・底板	残長10.9 残幅2.3 厚み0.6	
149	NRI L4上層	木鎌	長さ17.7 残幅(径)7.3 残厚3.3	裏面欠失
150	NRI L4上層	木鎌	残長7.2 幅(径)6.2 残厚4.8	半損
151	NRI L4上層	不明	残長43.2 幅1.8 厚み1.2	両端部両側面を斜めに切り落とす
152	NRI L4上層	不明	長さ43.9 幅8.6 厚み2.1	片面を作業板として使用か
153	NRI L4上層	角材	残長34.5 残幅10.0 残厚6.0	表面炭化
154	NRI L4上層	角柱	残長13.5 幅14.5 厚み11.5	柱材か
155	NRI L4上層	角材	長さ10.2 幅5.4 厚み4.0	
156	NRI L4上層	板材	残長3.1 幅6.5 厚み5.4	
157	NRI L4上層	角材	長さ5.6 幅5.6 厚み3.0	
158	NRI L4上層	角材	長さ8.8 幅6.5 残厚6.4	一側面に溝 建築部材を切断か
159	NRI L4上層	角材	残長18.1 残幅5.3 残厚3.2	
160	NRI L4上層	角材	残長9.0 幅8.1 残厚2.8	
161	NRI L4上層	角材	残長9.1 幅6.8 厚み4.8	
162	NRI L4上層	切断面のある木材	残長15.2 幅10.0 厚み6.3	
163	NRI L4上層	板材	残長20.4 残幅4.1 残厚2.8	両端部に切断面
164	NRI L4上層	板材か	残長11.4 残幅6.7 残厚3.6	
165	NRI L4上層	板材	残長16.3 幅5.0 残厚1.5	
166	NRI L4上層	不明	残長21.9 幅3.5 厚み1.3	両端部両側面を斜めに削り落とす
167	NRI L4上層	矢板か	残長19.1 幅4.8 厚み1.8	
168	NRI L4上層	不明	長さ11.7 幅9.5 厚み2.0	片面に段を形成
169	NRI L4上層	板材	長さ13.4 幅9.7 厚み2.7	
170	NRI L4上層	板材	残長17.6 残幅4.7 残厚1.7	両端部に切断面 側部加工面
171	NRI L4上層	板材	残長16.7 残幅4.5 残厚1.7	両端部に切断面 側部加工面
172	NRI L4上層	板材	残長14.5 残幅3.9 厚み1.0	
173	NRI L4上層	板材	長さ11.0 幅4.2 厚み1.3	両端部に切断面 側部加工面

吉田橋内(吉田道路)の調査

遺物番号	遺構	器種	法量 (cm)	備考
174	NRI 1.4上層	板材	残長12.8 残幅3.8 厚み2.1	端部に切断面
175	NRI 1.4上層	板材	残長6.7 残幅4.9 残厚1.5	端部に切断面
176	NRI 1.4上層	板材	残長16.5 残幅3.5 残厚1.5	両端部に切断面 側部加工面
177	NRI 1.4上層	板材	残長13.0 幅6.0 残厚1.8	両端部に切断面 側部加工面
178	NRI 1.4上層	板材か	残長12.4 残幅4.2 残厚1.4	
179	NRI 1.4上層	板材	残長8.6 残幅3.4 残厚1.1	端部切断面 側部加工面
180	NRI 1.4上層	板材	残長9.0 残幅4.2 残厚1.2	両端部切断面 側部加工面
181	NRI 1.4上層	板状製品	残長20.0 残幅2.9 厚み1.0	
182	NRI 1.4上層	板材	残長15.2 残幅4.4 残厚1.1	端部切断面 側部加工面
183	NRI 1.4上層	板材	残長13.5 残幅3.9 厚み1.0	両端部切断面 側部加工面
184	NRI 1.4上層	板材	残長12.7 残幅4.3 厚み1.5	両端部切断面
185	NRI 1.4上層	板材	長さ7.7 残幅4.7 厚み0.9	両端部切断面
186	NRI 1.4上層	板材	残長9.3 残幅3.9 残厚1.1	端部切断面
187	NRI 1.4上層	板材	残長11.3 残幅4.6 残厚0.6	端部切断面
188	NRI 1.4上層	板材	残長10.8 残幅3.5 残厚0.5	端部切断面
189	NRI 1.4上層	板材か	残長15.0 残幅1.2 厚み0.4	
190	NRI 1.4上層	松明か	残長31.4 残幅2.3 残厚1.9	廃材転用の松明か
191	NRI 1.4上層	板材	残長7.4 残幅6.5 厚み1.2	
192	NRI 1.4上層	板材か	残長9.5 残幅3.2 残厚0.9	
193	NRI 1.4上層	板材か	残長8.9 残幅5.1 厚み0.8	
194	NRI 1.4上層	板材	残長8.3 残幅6.0 残厚1.5	両端部切断面
195	NRI 1.4上層	板材	残長13.8 残幅3.2 残厚1.2	両端部切断面
196	NRI 1.4上層	板材	残長7.8 残幅4.4 厚み0.8	
197	NRI 1.4上層	板材か	残長6.4 残幅5.9 残厚2.0	端部切断面
198	NRI 1.4上層	板材か	残長9.9 残幅3.7 残厚1.2	表面一部が炭化
199	NRI 1.4上層	板材	残長8.4 残幅2.5 残厚1.0	両端部切断面
200	NRI 1.4上層	板材か	残長7.5 残幅2.2 残厚0.7	
201	NRI 1.4上層	板材か	残長6.5 残幅2.9 残厚1.1	
202	NRI 1.4上層	板材か	残長4.2 残幅3.0 残厚0.8	
203	NRI 1.4上層	板材か	残長6.3 残幅4.0 残厚1.2	
204	NRI 1.4上層	板材か	残長8.0 幅3.0 厚み1.0	
205	NRI 1.4上層	棒状製品	残長7.8 幅1.6 厚み0.9	
206	NRI 1.4上層	板材か	残長5.2 残幅3.4 残厚0.4	
207	NRI 1.4上層	板材か	残長7.1 残幅1.8 残厚0.8	
208	NRI 1.4上層	板材か	残長7.6 残幅2.1 残厚0.8	
209	NRI 1.4上層	板材か	残長9.3 残幅1.9 厚み0.4	
210	NRI 1.4上層	板材か	残長8.6 残幅2.9 残厚0.6	
211	NRI 1.4上層	板材か	残長8.5 残幅2.8 厚み0.4	
212	NRI 1.4上層	板材か	残長4.5 残幅1.9 厚み0.5	
213	NRI 1.4上層	板材か	残長5.8 残幅3.5 厚み0.5	
214	NRI 1.4上層	板材か	残長4.4 残幅3.4 厚み0.8	
215	NRI 1.4上層	板材か	残長3.1 残幅3.0 厚み0.5	
216	NRI 1.4上層	板材か	残長5.0 残幅1.5 残厚0.6	
217	NRI 1.4上層	板状製品	残長19.8 幅4.9 厚み0.7	218と同一個体か
218	NRI 1.4上層	板状製品	残長9.1 幅4.9 厚み0.7	217と同一個体か
219	NRI 1.4上層	板状製品	残長11.5 幅3.6 厚み0.4	
220	NRI 1.4上層	板状製品	残長5.7 幅4.7 厚み0.6	
221	NRI 1.4上層	板状製品	残長8.5 残幅1.8 残厚0.4	片側端部が炭化
222	NRI 1.4上層	板状製品	残長9.7 幅3.0 厚み0.6	
223	NRI 1.4上層	板状製品	残長17.5 幅4.5 厚み0.6	一方の先端部に人為的に穿たれたと見られる孔あり
224	NRI 1.4上層	板状製品	残長10.8 幅3.9 厚み0.8	
225	NRI 1.4上層	板状製品	残長20.3 幅2.7 厚み0.8	

吉田橋内(吉田遺跡)の調査

遺物番号	遺構	器種	法量 (cm)	備考
226	NRI L4上層	板状製品	残長4.1 幅2.4 厚み0.3	
227	NRI L4上層	板状製品	残長6.8 幅2.5 厚み0.5	
228	NRI L4上層	板状製品	残長14.1 残幅2.0 厚み0.5	
229	NRI L4上層	板状製品	残長5.8 幅2.0 厚み0.3	
230	NRI L4上層	松明か	残長4.4 残幅1.3 厚み0.6	片側端部・側面が炭化
231	NRI L4上層	松明か	残長8.0 残幅1.9 残厚0.6	両端部と側面が炭化
232	NRI L4上層	棒状製品	残長26.4 幅1.7 残厚1.5	
233	NRI L4上層	角材か	残長11.6 幅1.8 残厚1.3	
234	NRI L4上層	角材か	残長15.2 残幅1.1 残厚1.1	
235	NRI L4上層	松明か	残長13.3 幅1.5 残厚0.4	片側端部が炭化 廢材利用か
236	NRI L4上層	棒状製品	残長12.5 幅1.8 残厚0.8	
237	NRI L4上層	棒状製品	残長10.8 幅1.0 残厚0.6	
238	NRI L4上層	不明	残長16.1 残幅1.9 残厚0.8	
239	NRI L4上層	板状製品	残長22.4 幅3.3 厚み1.2	
240	NRI L4上層	板状製品	残長18.5 幅2.1 厚み0.8	
241	NRI L4上層	棒状製品	残長17.2 径1.0	筆軸か
242	NRI L4上層	板状製品	残長11.7 幅1.2 厚み0.5	
243	NRI L4上層	板状製品	残長10.5 幅1.8 厚み0.6	
244	NRI L4上層	松明か	残長3.2 幅3.0 残厚0.4	片側端部が炭化 廢材利用か
245	NRI L4上層	板状製品	残長7.0 幅1.5 残厚0.5	
246	NRI L4上層 割溝	角材か	残長12.3 残幅2.8 残厚2.5	
247	NRI L4上層	棒状製品	残長11.0 幅2.1 残厚1.2	両端切り込み部で折損
248	NRI L4上層	糸巻き具か	残長10.6 幅1.0 厚み1.4	非貫通の孔が穿たれる
249	NRI L4上層	円形曲物蓋・底板か	残長5.4 残幅2.5 残厚0.4	表面炭化
250	NRI L4上層	丸杭	残長47.4 径4.3	表面炭化
251	NRI L4上層	丸杭	残長14.5 幅2.5 残厚1.6	
252	NRI L4上層	丸杭	残長9.3 幅3.0 厚み2.9	端部が炭化
253	NRI L4上層	角材	残長25.8 残幅4.0 厚み3.4	表面炭化 後に松明に転用か
254	NRI L4上層	丸杭	残長22.2 幅3.0 厚み2.8	
255	NRI L4上層	丸杭	残長17.5 幅3.3 厚み3.4	
256	NRI L4上層 割溝	松明か	残長11.3 残幅3.6 厚み1.6	片側端部が炭化
257	NRI L4上層	松明か	残長11.6 残幅2.1 厚み1.2	片側端部と側面が炭化
258	NRI L4上層	松明か	残長16.2 残幅2.5 残厚2.0	片側端部が炭化
259	NRI L4上層	松明か	残長19.5 残幅2.6 厚み2.0	角材から転用か 表面炭化
260	NRI L4上層	松明か	残長4.6 残幅1.5 残厚0.2	片側端部が炭化
261	NRI L4上層	松明か	残長5.8 幅1.0 厚み0.7	片側端部が炭化
262	NRI L4上層	松明か	残長4.7 幅1.6 厚み0.7	表面炭化
263	NRI L4上層	松明か	残長22.7 残幅3.5 残厚1.5	表面炭化
264	NRI L4上層	松明か	残長18.1 残幅1.7 残厚0.7	片側端部が炭化
265	NRI L4上層	松明か	残長14.5 幅1.1 厚み0.8	片側端部が炭化
266	NRI L4上層	松明か	残長17.2 残幅2.0 残厚0.5	片側端部が炭化
267	NRI L4上層	松明か	残長16.7 残幅1.5 厚み1.0	片側端部が炭化
268	NRI L4上層	松明か	残長15.0 残幅2.3 残厚1.0	両端部が炭化
269	NRI L4上層	松明か	残長11.7 幅1.4 厚み1.1	片側端部が炭化
270	NRI L4上層	松明か	残長12.1 幅1.5 厚み0.7	片側端部が炭化
271	NRI L4上層	松明か	残長9.0 残幅0.9 残厚0.7	片側端部が炭化
272	NRI L4上層	松明か	残長11.8 幅1.4 残厚1.0	両端部が炭化
273	NRI L4上層	松明か	残長6.6 残幅2.4 残厚1.2	片側端部が炭化
274	NRI L4上層	松明か	残長8.6 残幅1.6 残厚1.3	両端部が炭化
275	NRI L4上層	松明か	残長10.8 幅2.8 厚み1.0	片側端部が炭化
276	NRI L4上層	松明か	残長8.9 残幅1.3 残厚0.9	片側端部が炭化

吉田構内(吉田道路)の調査

遺物番号	遺構	器種	法量 (cm)	備考
277	NRI L4上層	松明か	残長9.0 残幅1.8 残厚1.1	片側端部が炭化
278	NRI L4上層	松明か	長さ10.4 幅1.3 厚み0.7	片側端部が炭化
279	NRI L4上層	松明か	残長7.2 残幅1.7 残厚0.9	両端部が炭化
280	NRI L4上層	松明か	残長5.8 残幅1.6 厚み0.8	廃材利用か、片側端部が炭化
281	NRI L4上層	松明か	残長8.8 幅1.4 厚み1.2	角杭の廃材利用か、 端部・2側面が炭化
282	NRI L3	板状製品	長さ14.2 幅1.7 厚み0.8	
283	NRI L3	板材か	残長9.0 幅2.0 厚み0.6	
284	NRI L3	板材か	残長4.2 残幅2.5 残厚0.6	
285	NRI L3側溝	板状製品	残長13.6 幅1.5 厚み0.5	
286	NRI L3側溝	板状製品	残長8.5 幅1.5 厚み0.5	
287	NRI L3	板材か	長さ8.1 残幅0.9 残厚0.8	
288	NRI L3	板材か	残長8.9 残幅0.8 残厚0.6	
289	NRI L3	板材か	残長11.9 幅3.0 厚み1.5	断面凸レンズ形
290	NRI L3	松明か	残長24.5 幅1.4 厚み1.0	片側端部が炭化
291	NRI L3	松明か	残長13.1 幅0.8 残厚0.7	片側端部が炭化
292	NRI L3	松明か	残長10.4 残幅1.5 厚み1.0	片側端部が炭化
293	NRI L3	松明か	残長10.0 幅1.6 厚み1.0	片側端部が炭化
294	NRI L3	松明か	残長60.5 最大径19.7	片面・両端部が炭化
295	NRI L3	松明か	残長69.8 最大径20.3	両端部が炭化
296	NRI L2側溝	板材	残長27.6 残幅4.1 厚み1.3	
297	NRI L2	板状製品	残長4.7 残幅3.5 厚み0.5	
298	NRI L2	丸杭か	残長20.5 幅1.5 厚み1.6	竹材
299	NRI L2	板状製品	残長9.2 幅1.0 厚み0.6	
300	NRI L2	松明か	残長3.7 残幅3.2 残厚0.3	表面炭化
301	NRI L2	松明か	残長11.3 残幅3.4 残厚1.8	片側端部が炭化
302	NRI L2	松明か	残長6.3 幅2.1 残厚0.5	板状製品の廃材利用か、片側端部が炭化
303	NRI L2	松明か	残長8.1 残幅6.0 残厚3.1	両端部が炭化
304	NRI L2	棒状製品	残長26.5 幅2.3 厚み2.0	柄か
305	NRI 屑部	角杭	残長25.8 幅5.0 厚み4.3	断面六角形 杭列No.1
306	NRI 屑部	角杭	残長23.0 幅5.9 厚み4.4	断面六角形 杭列No.2
307	NRI 屑部	板杭	残長17.0 幅8.6 厚み7.0	杭列No.3
308	NRI 屑部	板杭	残長14.5 幅5.3	断面不整形 杭列No.4
309	NRI 屑部	板杭	残長14.2 残幅4.7 厚み0.6	断面長方形 杭列No.5
310	NRI 屑部	板杭	残長26.7 残幅6.4 厚み3.2	断面長方形 杭列No.6
311	NRI 屑部	杭	残長11.7 残幅1.6	杭列No.7
312	NRI 屑部	角杭	残長30.2 幅6.9 厚み5.2	断面五角形 杭列No.8
313	NRI 屑部	板杭	残長18.2 幅4.9 厚み2.2	断面長方形 杭列No.9
314	NRI 屑部	角杭	残長27.8 幅5.8 厚み5.7	断面四角形 杭列No.10
315	NRI 屑部	杭	残長13.8 幅4.3	断面凸レンズ形 杭列No.11
316	NRI 屑部	板杭	残長8.7 残幅3.0	断面長方形 杭列No.12
317	NRI 屑部	角杭	残長16.7 残幅4.6 厚み2.8	断面五角形 杭列No.13
318	NRI 屑部	角杭	残長32.3 残幅5.9 厚み4.1	断面四角形 杭列No.14
319	NRI 屑部	板杭	残長19.3 幅5.5 厚み1.8	断面長方形 杭列No.15
320	NRI 屑部	板杭	残長9.6 残幅2.0	断面長方形 杭列No.16
321	NRI 屑部	板杭	残長13.0 残幅8.5 残厚4.0	断面不整形 杭列No.17
322	NRI 屑部	杭	残長6.7 残幅2.3	断面円形 杭列No.18

5. 小結(図94)

第2調査区では、調査前に予測していた通り、調査区の東南東約24m地点で実施した動物医療センター・改修Ⅰ期工事で確認された埋没谷の延長部が確認された。当調査において谷埋土は大きく6層に分類されるが、改修Ⅰ期工事で確認された谷埋土との対応を見ると、

改修Ⅲ期 第1層:黄灰色(2.5Y4/1)強粘質土…改修Ⅰ期 第1層:灰色(5Y4/1)弱粘質土

改修Ⅲ期 第2層:黒褐色(10YR3/1)弱粘質土…改修Ⅰ期 第2層:灰色(5Y4/1)粘性砂質土

改修Ⅲ期 第3層:黒褐色(10YR3/1)疎泥弱質土…改修Ⅰ期 第3層:オリブ黒色(7.5Y3/1)粘性砂質土

改修Ⅲ期第2調査区 第4層上層:黒褐色(2.5Y3/2)粘土…改修Ⅰ期調査区 第4層:灰色(7.5Y5/1)粘性砂質土となるであろうか。

しかし、改修Ⅰ期工事で谷埋土とした堆積層からは木製品の顕著な出土が見られていない。大量の木製品及び自然木を検出したのは谷埋土上下位の自然堆積層と位置づけられたL6遺物包含層であるが、この層に含まれる土器類は7世紀後半から8世紀初頭に位置づけられるものが主体となっており、改修Ⅲ期谷埋土4層とは堆積時期が異なる可能性が高い。また改修Ⅰ期L6層の下位に遺構が検出され、その検出層も地山とは見られなかったことに対し、改修Ⅲ期の谷底は地山であった(写真184・189)。

両調査区の間にはなお約25mの距離が存在し、谷地形ということもあり厳密な堆積層の同定は困難である。動物医療センターは既存建物西側、まさに両調査区間の空地にさらなる増築計画が存在するため、計画実現時には事前の発掘調査が必要となる。この問題はその調査時に解明が期待される。

前述したが、第2調査区の北西16m地点では平成14年度に農学部解剖実習棟新営に伴う発掘調査が実施されている。略報しか公開されていないため詳細を知り得ないが、重複する河川2筋(河川跡1・2)が報告されている。その位置関係を確認すると(図94)、その走向から同一のものであることが分かる。調査者によって河川跡1は7世紀から14世紀の遺物を含み、8世紀後半から9世紀後半と推測されるSIB 8・9の上を覆うことから、9世紀後半以降に堆積が開始したと推察されている。

河川跡1埋土から出土する遺物の所属年代は、第2調査区谷埋土から出土する遺物の所属年代と同様であることから見て、今回確認された左岸は河川跡1の右岸に対応する可能性が高い。一方で筆者は谷(河川)は自然の谷筋を人為的に整備したもので、当初は底面に水流があったものの8世紀中頃にはすでに埋没を開始し、9世紀代には陸地化しており、上部に複数の遺物包含層が形成されたと考えている。谷地形の完全埋没は埋土最上層の出土資料が少ないため断定できないが、やはり14世紀代と推定しておく。また、包含層中(谷埋土第1～3層)に含まれる遺物の由来地は谷の南西に広がる台地、すなわち吉田遺跡第Ⅱ地区にて確認された集落遺跡と想定している。

動物医療センター改修Ⅰ期調査区、そして農学部解剖実習棟新営調査区を見る限り、官衙を想像させる古代の建物群は、谷の右岸傾斜地に設けられたようである。つまり人為的に整備された谷は建物群の南西域を区画していた可能性が高い。杭列が現在まで左岸にのみ確認されているのは、右岸に比して左岸の丘陵傾斜がより急峻で護岸設備が必要であると同時に、区画の内外を示す意図を含んでいた可能性も残す。

出土遺物に関しては、49㎡という狭小な調査区であるにもかかわらず、谷埋土より黒書須恵器3点を含む多量の上器資料の出土を見た。黒書には「主」の字が2点(内1点は「川」の可能性もある)、「井」の字が1点、そして「安」の字が1点確認された。農学部解剖実習棟新営調査区の河川跡からも「安」の字を持つ須恵器坏蓋が出土しており、埋土における黒書須恵器の出土率は極めて高い。特に文字「安」は「安部」、「安麻呂」等人名を示す可能性が指摘される。吉田遺跡の古代の実像を探る上で貴重な資料と

言えよう。

一方で農学部解剖実習棟調査区からは鈍尾の木製品、銅銚石、鯉羽口など金属器生産工場¹⁾の存在を示唆する遺物が出土しているが、第2調査区では官衙を連想させる資料として墨書須恵器の他2点の製塩土器小片が存在するものの、金属生産に関連する遺物は出土していない。

その反面、谷埋土、特に第4層上層より多量の木製品の出土を見た。用途不明品を含め曲物、斧柄、木鍔など少数の製品も存在するが、大半は木製品ですらくは廃材や加工時に出た木屑と推定される。有機物の遺存には種々の条件が必要であるが、さほど離れていない農学部解剖実習棟新築調査区との間で大きな条件の違いは想像しがたく、やはり第2調査区周辺に木材が多量に投棄される要因、つまり木製品を主として取り扱う施設の存在が想像される。

以上が第2調査区の調査成果である。出土資料に関しては、多量に出土した資料の中から図化可能資料だけを抽出し、報告したに過ぎない。墨書須恵器「安」の存在も本書写真版作成時に気づいた次第である。本書に未掲載の膨大な破片土器資料についても再調査の必要性を感じている。

また、本書対象年度の翌平成21年度に実施した動物区療センター改修Ⅲ期工事に伴う立会調査において、第2調査区の北東に新設された管路工事中に、谷の右岸を確認している。埋土の掘削は第1層に止まったものの相当数の遺物が出土している。次年度刊行予定の年報において谷の規模を含めて報告する所存である。

[註]

- 1) 横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属畜産院改修Ⅰ期工事に伴う発掘調査Ⅰ」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口埋蔵文化財資料館年報 平成18年度』, 山口
- 2) 「山に大学キャンパスマスタープラン2011」による。山口大学公式ホームページ平成21年2月22日発表。
<http://ds.ec.yamaguchi-u.ac.jp/~fms-01/kikaku/campus-master-plan2011digest.pdf>
- 3) a: 田畑直彦(2002)「山口大学橋内吉田遺跡―農学部校舎改修(解剖実習棟新築)に伴う発掘調査略報―」, 山口考古学会(編)『山口考古』第22号, 山口
b: 田畑直彦(2004)「平成16年度山口大学橋内遺跡調査の概要」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報 XVI・XVII』, 山口
- 4) 横山成己(2007)「吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報 平成17年度』, 山口

(4) まとめ

農学部附属動物区療センター改修Ⅲ期工事は、発掘調査対象地が決定された段階で、ある程度の調査成果が予測された。すなわち、第1調査区は埋没谷の北東側安定台地上に該当するため、古代官衙に関連する建物群の出土が、そして第2調査区ではその位置が埋没谷の下走向線上に当たするため、古代官衙関連資料を含め土器や木製品の多量出土が予想されたのである。

この予測は結果的に半ばはずれ半ば当たったことになる。第1調査区では、古代官衙関連建物どころか古代以前の遺構は1基も確認されず、代わって14世紀から16世紀にかけて継続的に存続した集落跡が発見されるに至った。当集落の出現に関しては、谷向かいの吉田遺跡第Ⅱ地区にて確認された集落の消長と関連するものと推定される。一方第2調査区では予測通り、埋没谷を検出した。調査区内にて谷肩部を確認することができたのも大きな幸運であった。調査区が狭小で谷埋土の掘削に集中できたため、遺物の所属層は一部の樹境界部出土のものを除き保証されている。埋土からは、墨書須恵器をはじめ

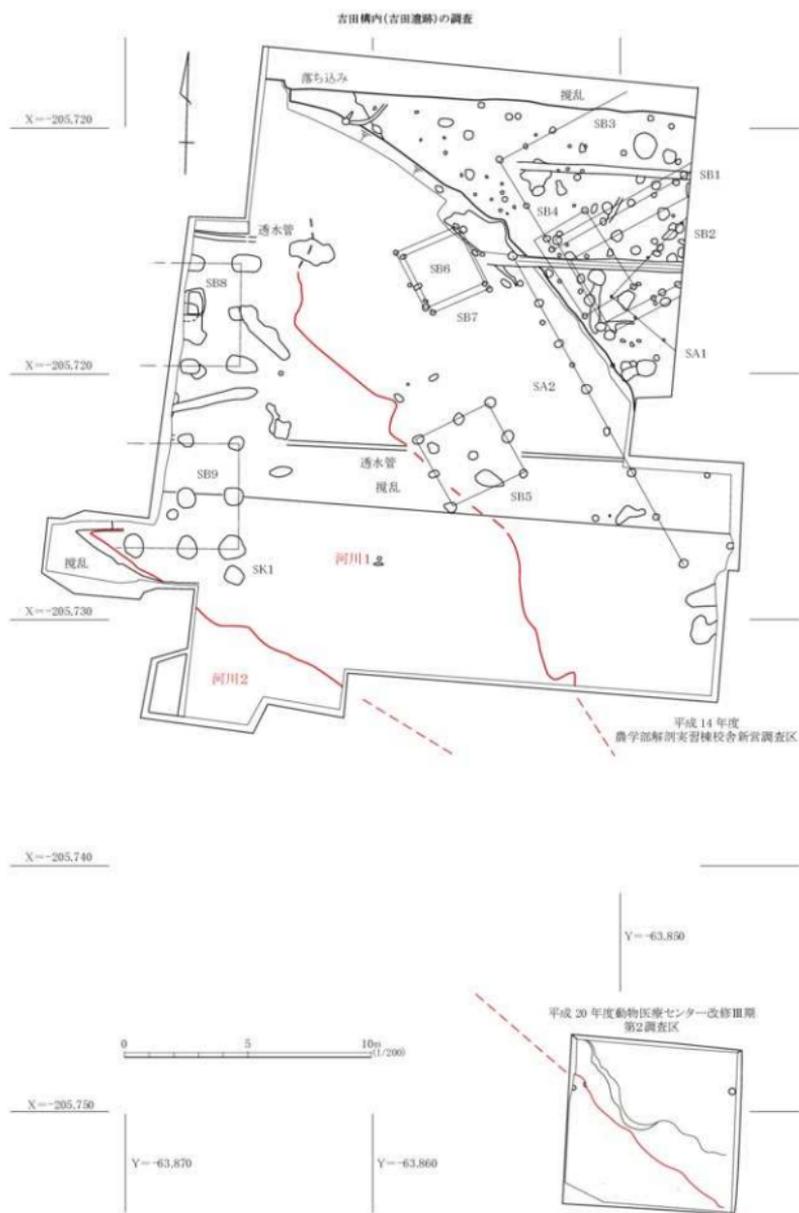


図94 農学部解剖実習棟調査区との位置関係

め多くの土器資料と、多量の木製品を得るに至った。本調査区においては、この谷は8世紀中頃から埋没が開始し、9世紀以降は窪地化した状態であり、14世紀頃埋没を終了するものと推察される。調査終了から本書刊行まで出土資料の整理・調査を行ってきたが、未だ細片資料にまで目が届いていない。新知見があった場合には追って報告を行う所存である。

動物医療センター周辺は、時期的には古代以降を中心とする遺構の密集地帯である。近世以降耕地化された地域であるが、耕地化に伴う削平はあまり受けていないようで、既往の調査においても総じて遺構の遺存状況は良好である。

統合移転時には広大な敷地に感じられた吉田橋内も、継続的な開発事業により徐々に空閑地が狭まっている。開発の手は主として丘陵地に存在する農学部附属農場敷地周辺にまで伸びてきているのが現状である。動物医療センター改修Ⅲ期工事の調査成果を見るまでもなく、今後も変わらぬ慎重な埋蔵文化財保護対応が必要であることは言を俟たないであろう。

6. 国際交流会館2号棟改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田橋内N 22区、O 22区、N 23区

調査面積 約457㎡

調査期間 平成20年5月15、26、30日、6月17日、
8月20日、25日、9月2、3日、10月7日

調査担当 田畑直彦

調査結果

山口大学では留学生の宿舎が大幅に不足しているため、吉田橋内の旧独身宿舎を「国際交流会館2号棟」に名称・用途を変更して全面改修を行うことになった。そしてこの改修に伴い、建物南側におけるペランダの新設工事、進入路の新設工事(敷地の切り下げ)、建物周辺における設備配管の取り替え・新設等の工事が計画された。

同棟周辺については平成7・8年度に試掘調査が行われたが、いずれも顕著な遺構・遺物は確認されていない。しかし、工事範囲が広範囲に及ぶため、立会調査を実施することになった。以下、主要な箇所について調査結果を報告する。

A地点は現地表下約69cmまでが緑石及び造成土で、以下約69～99cmで青灰色(10G6/1)シルト、灰色(2.5GY6/1)粗砂、黄褐色(10YR6/6)粗砂、明緑灰色(10G7/1)粗砂からなる河川堆積土を検出した。B地点は現地表下約42cmまでが造成土で、以下約42～50cmで暗オリーブ灰色(5GY4/1)シルト(旧水田耕土)、約50～58cmでオリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト(旧水田床上)、約50～85cmでオリーブ灰色(10Y6/2)砂礫土(地山)を確認した。C地点は現地表下約115cmまでが造成土で、以下約115～130cmでオリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト(旧水田床上)を確認した。これより下位は河川堆積土で、約130～142cmでオリーブ灰色(10Y6/2)シルト、約142～160cmで灰色(10Y6/1)粗砂、約160～190cmで明緑灰色(5B7/1)砂礫土を確認した。D地点は電柱の新設箇所である。現地表下約130cmまでは造成土であった。以下、約130～190cmでオリーブ灰色(2.5GY6/1)粗砂・シルトの互層(河川堆積土)、約190～280cmで青灰色(5B6/1)シルト(地山)を確認した。E地点は現地表下約90cmまで掘削を行ったが、全て造成土の範囲内であった。F地点は現地表下約70cmまでが造成土で、以下約70～8



図95 調査区位置図



写真 212 A地点土層断面 (南から)



写真 213 B地点土層断面 (南から)

2cmで灰色(10Y5/1)シルト(旧水田耕土)、約82～87cmで明黄褐色(10YR7/6)シルト(旧水田床土)を確認した。続く約87～97cmは黄灰色(2.5Y5/1)シルト(河川堆積土)で、同層からは時期不明の土器片1点が出上した。G地点は現地地表下約32cmまでが造成土で、以下約32～45cmで明黄褐色(2.5Y7/6)シルト(旧水田床土)、約45～75cmで灰色(5Y5/1)粗砂・灰褐色(7.5YR5/2)粗砂(河川堆積土)、約75～90cmで黄色(2.5Y8/6)粘土(地山)を確認した。また、造成土から須恵器底部片が1点出土した。H地点は現地地表下約19cmまでが造成土で、以下約19～28cmで灰色(5Y4/1)シルト(旧水田耕土)、約28～40cmで明黄褐色(2.5Y7/6)シルト(旧水田床土)、約40～59cmで灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト(河川堆積土)、約59～84cmで明青灰色(10BG7/1)粗砂・明黄褐色(2.5Y6/6)粗砂(地山)を確認した。敷地切り下げ工事では西端部で現地地表下約120cmまで掘削を行ったが、底面で旧水田床土が検出されるにとどまった。

今回の立会調査では、F地点以外の箇所でも河川堆積土を検出したが、F地点で土器が1点出土したのみであるため、詳細は不明な点が多い。ただし、隣接する国際交流会館敷地では、幅19m以上の河川が検出され、少量ではあるが、弥生時代前期から古墳時代後期の土器が出土している。今回検出した河川と同一の可能性が高く、注意が必要である。

なお、調査区南側の道路については、山口市教育委員会によって送水管埋設に伴う立会調査が行われているが、今回調査区から国際交流会館1号棟南側においては顕著な遺構等は検出されていない。一方、ハンドボール場の南側では、南北に走る幅1.5mの溝状遺構が検出されている。同溝の時期は不明であるが、弥生土器、須恵器が出土している。また、今回調査区から南に約75mの地点(神郡大塚遺跡)では、古代のものと考えられる竪立柱建物4棟、土壇7基、柱穴等が検出されている。

以上の状況から、吉田橋内においてもハンドボール場周辺においては遺構が存在する可能性が高く、今後とも埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

〔註〕

- 1) 村田尚一(2004)「第3章第1節2 吉田橋内長幹原遺壙(独身宿舎・国際交流会館排水管布設に伴う試掘調査)」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報XVI・XVII』山口
- 2) 河村吉行「第3章 国際交流会館新築工事に伴う試掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報XVI・XVII』山口
- 3) a: 柴崎文男・小玉村安 山口市教育委員会(編)『吉田遺跡』『古玉遺跡・陰子古園(山水園)遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告第40集、山口
b: 河村吉行「第4章第1節17 古道神駅1号線および旧門神部線の送水管埋設に伴う立会調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報VI』山口
- 4) 青森淳(2006)「神郡大塚遺跡6次調査」山口市教育委員会(編)『山口市埋蔵文化財年報—平成16年度—』山口



写真 214 C地点土層断面 (西から)



写真 215 D地点土層断面 (北東から)



写真 216 E地点掘削状況 (東から)



写真 217 F地点掘削状況 (南西から)



写真 218 F地点土層断面 (南から)



写真 219 G地点土層断面 (北から)



写真 220 H地点土層断面 (西から)



写真 221 敷地切り下げ部土層断面 (南西から)

7. サッカーグラウンド防球ネット取設工事に伴う立会調査



図96 調査区位置図



写真 222 調査区全景 (南西から)



写真 223 A地点断面面 (北西から)

調査地区 吉田橋内II 21・22区、I 21区

調査面積 約8.5㎡

調査期間 平成21年2月18日

調査担当 山畑直彦

調査結果

吉田橋内のサッカーグラウンドにおいて、ザッカーボールがグラウンド南側の道路にまで飛球することがしばしばあり、危険であることから、グラウンド南側に防球ネットを新設することになった。工事は防球ネットの基礎を11箇所において掘削するものである。調査区は平成8年度に実施された外灯新設に伴う試掘調査区と重複している。同試掘調査では河川や土壁、柱穴が検出された。調査による掘り込みは一部にとどめたため時期等は不明な点が多いが、河川・遺構からは縄文時代晩期～古墳時代前期の土器が出土している。以上から、今回の調査にあっても、遺構・遺物の検出が十分に予想されたが、掘削が小規模のため立会調査を実施した。

各地点の土層断面は図96の通りである。A地点は現地表下約23cmまでが表土・造成土で、以下約23～39cmで黒色シルト、約39～68cmで青灰色シルト(地山)を確認した。A地点東側に隣接するグラウンド屋外照明施設新設に伴う発掘調査のA調査区、西側に隣接する外灯新設に伴う試掘調査区では弥生時代中期～古墳時代前期の河川跡が検出されていることから、黒色シルトは河川埋土と考えられる。

B地点は現地表下約17cmまでが表土・造成土で、以下約17～70cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。C-1地点は現地表下約14cmまでが造成土で、以下約14～24cmで遺構埋土ないし遺物包含層と考えられる黒褐色シルト、24～67cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。C-2地点は現地表下約10cmまでが表土・造成土で、以下約10～30cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。また地山上面で直径約12cmのゴットを検出した。D地点は現地表下約18cmまで

が表土・造成土で、以下約18～70cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。E地点は現地表下約15cmまでが表土・造成土で、以下約15～70cmで緑灰色シルトと灰色粗砂の互層となっていた。溝もしくは河川

吉田構内(吉田遺跡)の調査

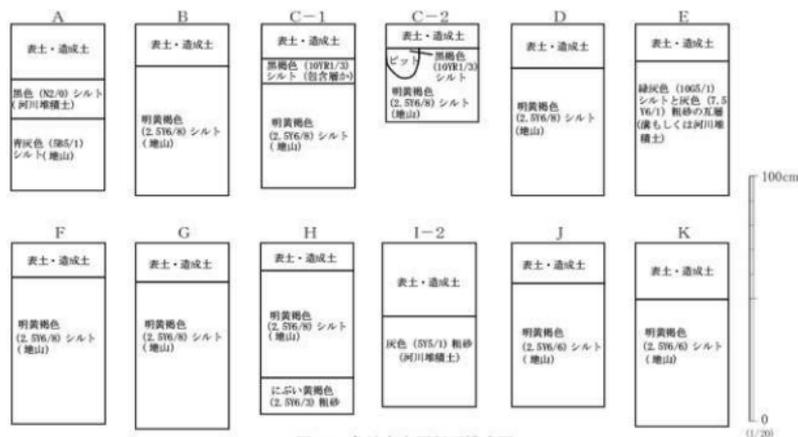


図 97 各地点土層断面模式図

堆積土と考えられる。また同層からは時期不明の土器片が少量出土した。F地点は現地表下約14cmまでが表土・造成土で、以下約14～74cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。G地点は現地表下約16cmまでが表土・造成土で、以下約16～76cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。H地点は現地表下約11cmまでが表土・造成土で、以下約11～55cmが明黄褐色シルト(地山)、約55～70cmで湧水を作りにぶい黄褐色粗砂を確認した。I-1地点は現地表下約50cmまで掘削を行ったが、全て造成土の範囲内であった。I-2地点は現地表下約30cmまでが表土・造成土で、以下約30～67cmで灰色粗砂を検出した。灰色粗砂は外灯新設に伴う試験調査区で検出された河川埋土と考えられる。J地点は現地表下約57cmまでが表土・造成土で、以下約57～70cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。K地点は現地表下約23cmまでが表土・造成土で、以下約23～75cmで明黄褐色シルト(地山)を確認した。

以上の調査の結果、A地点、I-2地点で河川埋土、C-1地点で遺構埋土ないし遺物包含層と考えられる土層、C-2地点でビット、E地点では溝もしくは河川堆積土と考えられる土層を検出した。しかし、調査面積が狭小であり、遺物もほとんど出土しなかったため、詳細を明らかにすることができなかった。サッカーグラウンドにおいては統合移転時の調査²⁾以来、縄文～古墳時代の遺構・遺物が濃密に分布していることが判明している。また、水山面が削平されているため、現地表面から遺構面までの深さが20cmに満たない箇所も多く、今後の地下掘削工事にあたっては慎重な対応が必要である。

[註]

- 1) 村田祐一(2004)「第3章第1節 吉田構内基幹遺構整備(外灯新設)に伴う試験調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
- 2) 豆谷和之(2004)「第2章 吉田構内グラウンド並外周更築改新設に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XIV』,山口
- 3) 小野忠邦編(1976)『山口大学吉田遺跡調査開(編)『吉田遺跡発掘調査概報』,山口



写真 224 B地点土層断面 (北西から)



写真 225 C地点土層断面 (北西から)



写真 226 E地点土層断面 (北西から)



写真 227 F地点土層断面 (北西から)



写真 228 G地点土層断面 (北西から)



写真 229 H地点土層断面 (北西から)



写真 230 I-2地点土層断面 (北西から)



写真 231 K地点土層断面 (北西から)

8. 正門導線改善工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内Q、S、15、S 18区
 調査面積 約174㎡
 調査期間 平成21年3月30日～4月1日
 調査担当 横山成己
 調査結果

(1) 調査の経緯(図98、写真232)

施設環境部より、正門改修工事に伴い正門駐車場・旧実験水田埋め立て地・大学会館西側空地等において導線(道路)を整備する工事計画が提出された。開発面積が広範囲に及ぶことから、埋蔵文化財資料館専門委員会(平成20年10月15日開催)において種々審議が行われたが、掘削深度が浅いことから埋蔵文化財に支障を来す可能性は極めて低いと判断されたため、遺跡を所轄する山口県教育委員の指導の下該当工事を文化財保護法第93条の「慎重工事」として取り扱うことが決定された。

しかしながら、同年12月24日より開始された吉田構内新教育棟新営工事(設備関連工事)に伴う木差堀調査成果において、大学会館西側に予定された道路建設工事で地下に埋存する遺構が破壊される可能性が指摘されたため、急遽遺跡破壊推定範囲において立会調査を実施する運びとなった。調査範囲は予定道路幅6m×全長29mの174㎡、調査期間は諸所の事情により平成21年3月30日から4月1日にかけての3日間と決定された。

(2) 基本層序(図99、写真239・240)

調査対象地の現状地形は南東から北西方向にかけて緩やかに降下しており、現地標高は調査区南東端部で21.09m、北西端部で20.51mを測る。これは該当地が姫山から南西に派生する舌状丘陵の北西側斜面に位置することに起因する。調査の結果、基本層序は①表土(層厚5～22cm)、②暗灰黄色弱粘質土:旧耕土(層厚2～8cm)、③黄褐色粘質土:旧床土(層厚最大16cm)であることが判明した。また調査区南半部では表土下に旧表土層(黄灰色弱粘質土層)が存在し、旧表土層を削って②③層が形成されていることを確認した。なお、調査区北側約4m、南側約1mの範囲は大学造成時に掘削を受けたものと思われる。

(3) 遺構(図99、写真233～238)

調査区内で検出された遺構は、ピット(Pit)60基、溝(SD)2条、落ち込み(SX)2基である。

ピット群

調査区全域において確認されたが、その分布は疎である。いずれも直径12～25cm程の小ピットであ



図98 調査区位置図



写真232 調査前全景(南東から)

り、深度も稀に20cmを測るものがあるが大多数は10cm以内と浅い。後世の削平によるものであろう。

確認したピットの配列からは建物は復元されないが、等間隔に分布するピットから柵列の存在が推定される。図98に示した柵列1・2・5は原地形の傾斜に沿う方向で約8mの間隔で平行しており、柵列3はそれに直行して設けられている。これらの柵列は耕作に伴う施設と推される。

これらピット群の埋土はいずれも同質であり、褐色色(7.5YR4/1)を呈する砂質土で締まりが弱い。ピット中には遺物がほぼ含まれておらず、僅かにPit7の須志器甕と見られる小片1点、Pit14の陶器皿口縁部片1点、Pit23の上師器片1点、Pit26の磁器甕体部片1点を数えるのみである。

なお、Pit44・54・55は前述した吉田橋内新教育棟新営工事(設備関連工事)に伴う本発掘調査で確認された遺構の再検出である。

溝

SD1は調査区中央部西側で検出した東-西方向に走る溝である。西側は調査区外に抜けており、検出長約150cm、幅約30cm、深さ約10cmを測る。遺物は出土していない。SD2は調査区北東側で検出した南東-北西方向の溝である。北西側は後世の擾乱により破壊されており、検出長約130cm、幅約20cm、深さ約10cmを測る。埋土から上師器の小片5点が出土しているが、器形、時期ともに不明である。走向から柵列と同様に耕作に伴う施設と推察される。

落ち込み

SX1は調査区ほぼ中央部で検出した不整形な落ち込みである。長軸約140cm、最深部で深さ約5cmを測る。北西部は後世の擾乱により破壊されている。遺物は出土していない。調査区北東隅で検出したSX2は南北幅約100cm、東西幅約50cmを測る落ち込みである。南から北に向かい段状に降下しており、調査区北東隅で最大深度約25cmを測る。埋土は2~5mmφの砂礫であり、調査区壁面より激しい湧水を見た。埋土中からは須志器甕体部片1点と上師器小片5点が出土している。この落ち込みは吉田橋内新教育棟新営工事(設備関連工事)に伴う本発掘調査で確認された埋没谷の南側肩部にあたるものと思われる。なお、当遺構に関しては調査最終日の降雨により調査区断面図に遺構断面を付加することが出来なかった。

(4) 遺物(図100、写真211)

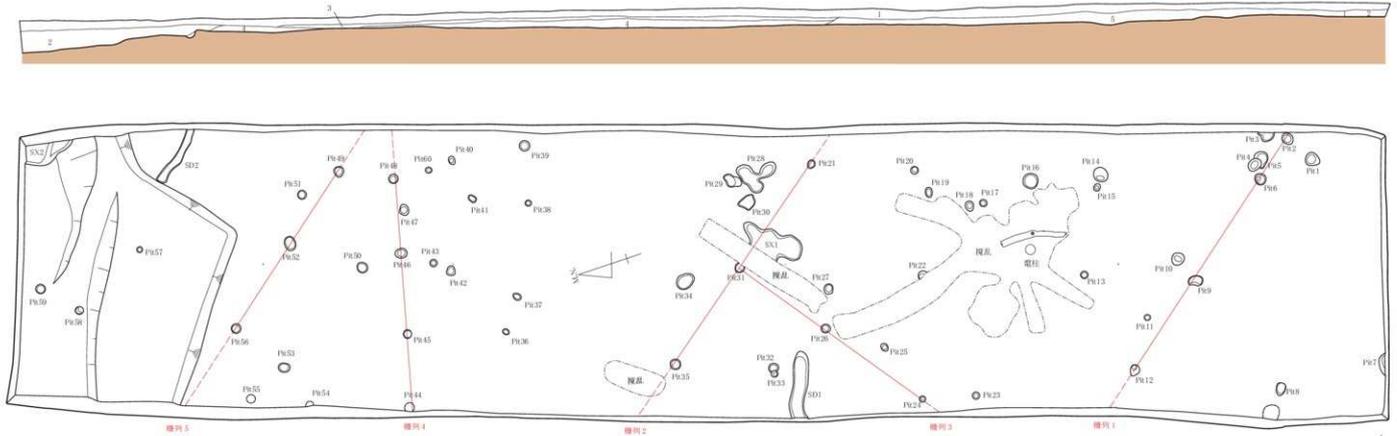
上記の如く、当調査では遺構から良好な資料が得られていない。図示し得るのは僅か2点のみである。1はPit14出土の陶器皿口縁部片で、内外面に灰釉がかかる。2はPit26出土の磁器甕体部片で、外面高台脇の単圈線上に草花文の染付けが見られる。その他、遺構検出時に須志器甕頸部片、瓦質土器底部片・足錫脚部片、粗陶器甕体部片等が出土しているが、特筆すべきものはない。

(5) 小結

当調査地点は、昭和46年に山口大学吉田遺跡調査団により発掘調査が実施された吉田遺跡第1地区D区第2地点の北西に近接する。第1地区D区第2地点に関しては「耕耘された上層が黒褐色であったので、総めくりして調べた。その結果、削平が著しいため明瞭な遺構の形態はとらえられず、若干の小起伏面や、小石の配石を見出したにすぎなかった。」と報告されており、その後の第1地区D区の再整理調査報告においても「おそらく、表土除去作業中に擾乱の激しいことが判明し、本地区の調査はその時点で切り上げられ、他地区に調査の主力が置かれたものと考えられる。削平により遺物包含層も遺構も検出されなかったため、第2地点の土層断面図も遺構平面図も作成されなかったのだろう。」との推察がなされている。出土遺物においては古墳時代中期の高坏片が存在するもの他は中世の土師器皿、瓦質土器足錫脚部片、滑石製石鏡片、近世の粗陶器甕底部片・口縁部片、磁石等であり、表土出土品と

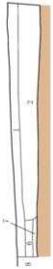
21.5m

21.5m



21.5m

0 5m (1/800)



- 1 褐灰色 (10YR4/1) 弱粘質土…表土
- 2 暗灰黄色 (2.5Y5/2) と灰色 (N/4) が混ざる 粘土…造成土
- 3 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 弱粘質土…旧耕土
- 4 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質土…旧床土
- 5 黄灰色 (2.5Y4/1) 弱粘質土…旧表土
- 6 褐色 (7.5YR4/3) 粘質土
- 7 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土
- 8 新教育研究棟設備関連工事に伴う本発掘調査(本書所収)の埋土

21.5m



写真 233 遺構検出風景(北東から)



写真 234 調査区全景(南東から)

21.5m

21.5m

図 99 調査区平面図・断面図



写真 235 調査区南東部遺構群検出状況 (南西から)



写真 236 調査区西部遺構群検出状況 (西から)



写真 237 調査区南東部遺構群完掘状況 (南西から)



写真 238 遺構完掘状況 (北から)



写真 239 調査区東壁断面 (北西から)



写真 240 調査区北壁断面 (南西から)

吉田橋内(吉田遺跡)の調査



Pit14 出土



Pit26 出土



図 100 出土遺物実測図

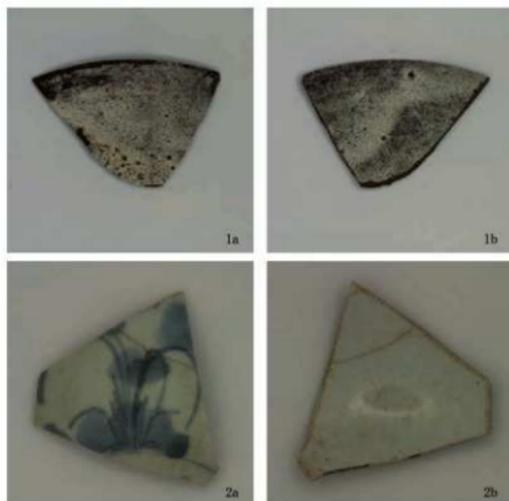


写真 241 出土遺物写真

表15 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構 層位	器種	部位	法量(cm)		胎土	備考
				①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面		
1	Pit14	陶器 皿	口縁部	①(11.4)	胎土 灰褐色(5YR4/2) 釉 灰白色(5Y8/1)	精緻	灰釉
2	Pit26	磁器 碗	体部		胎土 灰白色(2.5Y8/1)	精緻	染付(草花文)

見られる。

以上の調査成果に対し、今回の調査においてもほぼ同様の所見となる。調査地西側一帯は現在「国際・社会連携ゾーン」として埋立整備されており、将来的な開発工事等が予想されるが、少なくともその東部域において埋蔵文化財が良好に遺存する可能性は極めて低いと判断される。

【註】

- 1)本書序取23～42頁
- 2)小野忠福(1971)『山口大学構内第I地(Ⅱ)区発掘調査概報』山口大学、山口
- 3)豆谷和之(1995)「吉田遺跡第I地区D区の調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XⅢ』,山口

9. 教育実践センター廻りフェンス取設その他工事に伴う立会調査

調査地区 吉田橋内K 19区

調査面積 約2㎡

調査期間 平成21年2月27日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田橋内教育実践センター東側歩道拡幅工事に付随し、教育実践センター周囲にフェンスを設置する工事計画が立案された。予定されたフェンスの設計上の掘削深度は現地地表下約0.4mであったが、昭和62年に実施された教育実践センター棟新営に伴う発掘調査において、地表下40～60cmに検出される浅黄色土(縄文時代遺物包含層)上面に近世の土壌や溝、弥生時代から古墳時代に所屬すると推察される柱穴等が検出されているため、立会調査を行う運びとなった。調査はフェンス設置予定地の内、教育実践センター棟建設における余掘り範囲を除く1m×2m区間で実施した。

調査の結果、該当地の基本層序は第1層:表土(層厚約15cm)、第2層:真砂土(層厚約10cm)、第3層:造成土(層厚約30cm)、第4層:灰黄褐色粘質土(層厚約20cm)、第5層:明黄褐色粘質土であった。この第5層が上述既往調査の浅黄色土に該当するものと思われる。

調査区北東部の第5層上面において、長軸75cmの平面楕円形を呈する土壌1基を検出した(写真243)。遺構理上にはぶい黄褐色粘質土であり、理土中から土師器の小片1点が出上している。

既往の調査により、教育学部校舎南西～西地域には弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落跡および古墳時代後期から古代の遺物を包含する自然河川跡が確認されており、今回調査区の北に近接するメディアア基盤センター棟敷地の調査では、縄文時代の自然河川跡、中世から近世にかけての集落跡等が発見されている。遺跡地内においても最も複雑な様相を見せている地域に当たる。今後の開発計画においても慎重な対応が不可欠である。

1) 木村元治(1988)「吉田橋内教育学部附属教育実践研究指導センター・新営に伴う発掘調査」、『山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学橋内遺跡調査研究年報』、山口。



図101 調査区位置図



写真242 調査区西南部地山検出状況(南西から)



写真243 調査区北東部遺構完掘状況(北西から)

第3節 小串構内(山口大学医学部構内遺跡)の調査



図102 調査区位置図

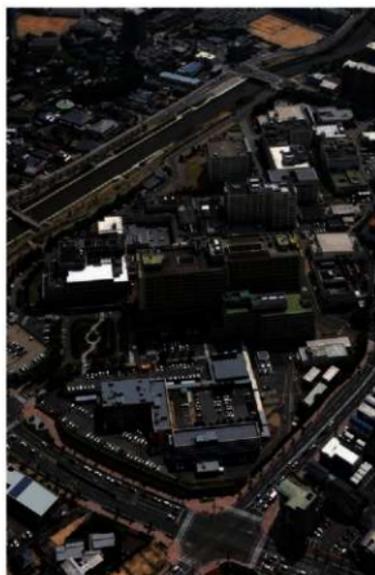


写真244 調査区周辺遠景(北西から)

1. 医学部総合研究棟改修Ⅱ期工事に伴う予備発掘調査

調査地区 小串構内総合研究棟東側空地

調査面積 9㎡

調査期間 平成20年7月9日～11日

調査担当 横山成己 藤野好博

調査結果

(1) 調査の経緯(図102、写真244)

小串構内北部に位置する総合研究棟(保健学科学研究棟)の改修Ⅱ期工事が計画された。開発予定地は広範囲に及ぶものであったが、既往の調査により小串構内北部に埋蔵文化財が密に遺存し、医学部病院および病棟以南では分布が希薄となることが明確となっていることから、開発域の北端部を対象に現地表から遺物包含層までの深度の確認を目的に予備発掘調査を実施することが平成19年度第12回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成20年3月5日開催)において承認された。

(2) 調査の経過(図103)

調査対象地は、改修工事において玄関スロープ建設予定地となっている総合研究棟東側空地とし、東西3m×南北3mの調査区を設定した。調査の経過は以下の通りである。

7月9日(水)…機材搬入、仮囲い、重機掘削

7月10日(木)…半・断面精査・写真撮影・断面実測

7月11日(金)…平板測量・埋め戻し

(3) 層序(図104、写真248・249)

調査では現地表(標高2.8m)下1.2mまで掘削を行った。層序は約5cm厚のアスファルト、約20cm厚の砕石の下に、第1層:黄灰色(2.5Y5/1)粘質土…造成土1、第2層:明黄褐色(2.5Y5/1)砂質土…造成土2、第3層:ボタ層、第4層:青黒色(5B2/1)強粘質土…旧耕土が存在する。第4層上面は標高1.6mを測る。

(4) 小結

近年の調査成果を振り返ると、平成16年度実施

の地下オイルタンク工事に伴う試掘調査³¹では旧耕土上面は標高1.6mで、前年度に実施の医学部総合研究棟改修1期工事に伴う予備発掘調査³²では旧耕土上面は第1調査区で標高1.5m、第2調査区で標高1.64m、第3調査区で標高1.67mで検出されている。今回の調査でも旧耕土はやはり標高1.6m地点で確認されていることから、総合研究棟(保健学科棟)周辺は過去において安定的に耕地化されており、後世の造成時に削平されることなく現在に至ったものと察せられる。

既往の調査では、旧耕土下にはいずれも主として近世の遺物を含む旧床土層、下位には中世、そして先史時代の遺物を含む遺物包含層が確認されている。本調査地域でも、更なる掘削を行えば同様の結果を見るであろう。

今回の調査原因となった工事計画は、当館と本学開発計画を担当する施設環境部との間で徹底した事前調整を行った結果、配管埋設予定地を既存配管ルートに、建物改修範囲を既存建物周囲の余掘り内に限定することができた。よって本来であれば工事中の立会調査で対応可能な工事計画となったが、今後の開発の継続を予測するとともに教育研究機関としてより積極的な姿勢での埋蔵文化財保護措置を行うため、埋蔵文化財に支障のない範囲で予備発掘調査を実施する運びとなった。

今回調査地に関しては、工事掘削が現地表下0.7mに止まるため、地下の埋蔵文化財に何ら支障のあるものではない。ただし、小串構内は現状で空閑地が少なく、新規建物等が計画可能な場所はほぼ構内北部に限られている。今回の調査も構内北部における良好な埋蔵文化財の遺存をより確実なものとしており、周辺域では今後とも慎重な埋蔵文化財保護対応が必要と言える。

【注】

- 1) 横山成三(2006)「第1章第3節1. 医学部基幹整備(オイルタンク他)工事に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成16年度—』,山口
- 2) 横山成三(2010)「第1章第4節1. 医学部総合研究棟改修1期工事に伴う予備発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成19年度—』,山口
- 3) 横山成三(2006)「第1章第3節2. 医学部職員宿舎他公共下水接続工事に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成16年度—』,山口

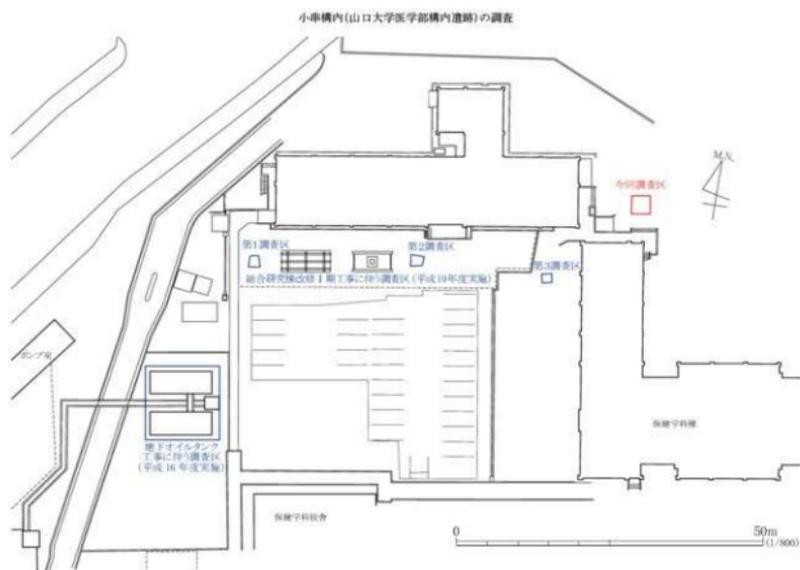


図103 調査区詳細図

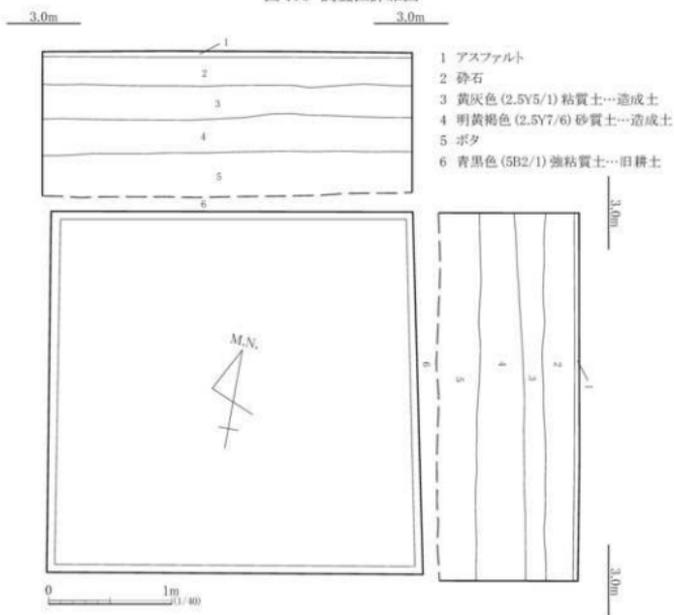


図104 調査区平面図・断面図



写真 245 調査風景 (南から)



写真 246 調査区全景 (西から)



写真 247 調査区全景 (南から)



写真 248 調査区北壁断面 (南西から)



写真 249 調査区東壁断面 (西から)

第4節 常盤構内(山口大学工学部構内遺跡)の調査

1. 工学部女子学生寄宿舎新営その他工事に伴う予備発掘調査

調査地区 常盤構内常盤寮2寮西側道路および東側空閑地

調査面積 24㎡

調査期間 平成20年5月19日～27日

調査担当 横山成己 藤野好博

調査結果

(1)調査の経緯(図105、写真250)

常盤構内北東部、現在の常盤寮北側駐車場敷地において女子学生寄宿舎新営が計画されたことを受け、平成19年度第12回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成20年3月5日開催)にて予備発掘調査の実施が承認された。

女子学生寄宿舎は、現在駐車場として活用されている埋め立て地が建設予定地であり、周知の埋蔵文化財包蔵地外に当たるため、現状の常盤寮周囲に新規布設される配管工事予定地を調査対象地とすることになった。配管は新営女子寮から常盤寮2寮の北側を通り国際交流会館A棟西側を抜ける計画であったが、平成7年に実施された国際交流会館新営工事に伴う試掘調査成果から、国際交流会館A棟周囲に埋蔵文化財が遺存する可能性は低いと判断されたため、常盤寮2寮西側南北配管ルートと東側東西ルートにそれぞれ調査区を設定し、予備発掘調査を実施した。

(2)調査の経過

第1調査区は常盤寮2寮西側配管予定地に南北20m×幅1mの範囲で、第2調査区は同じく常盤寮2寮の北東側配管予定地に東西長7m×幅0.6mの範囲で設定した。調査スケジュールは以下の通りである。

【第1調査区】

5月19日(月)…機材搬入、仮囲い、重機掘削開始

5月20日(火)…重機掘削終了・調査区内精査

5月21日(水)…写真撮影・測量

5月22日(木)…測量・埋め戻し開始

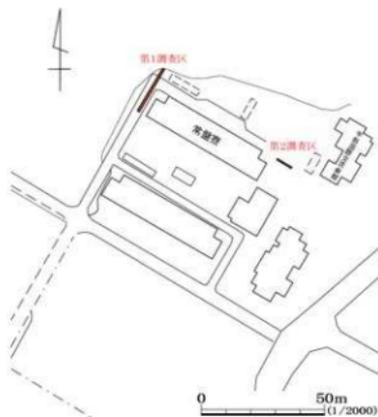


図105 調査区位置図



写真250 調査区周辺風景(東から)

5月23日(金)…埋め戻し終了・仮囲い撤去・機材伴出

【第2調査区】

5月23日(金)…機材搬入・仮囲い

5月26日(月)…重機掘削・調査区内精査・写真撮影

5月27日(火)…測量・埋め戻し

(3)層序(図106、写真251～258)

【第1調査区】

調査では現地表(調査区北端標高33.2m・調査区南端標高33.0m)下で最大1.2mまで掘削を行ったが地山は検出できなかった。更なる掘削は配管工事に影響が及ぶことが予想されたため、開発部局と協議の上掘削を中止した。層序は第1層:アスファルト(5cm)、第2層:砕石(30cm)、第3層:真砂土を含む造成土(80cm以上)である。造成土中から遺物は出土していない。

【第2調査区】

第2調査区の現地表は標高33.2mであり、調査区西部で検出した既設管理設部以外では標高32.6m地点で地山を検出した。層序は第1層:表土(20～30cm)、第2層:造成土(20～30cm)、地山:明黄褐色(10YR6/8)砂質土である。大学造成時に旧地表および地山が大きく削平を受けたようであり、遺構が遺存する状況にはなかった。表土、造成土中に遺物の混入は見られなかった。

(4)小結

平成7年度に第2調査区東側で実施された国際交流会館新営に伴う試掘調査では、調査区北端部において旧耕土が確認されている。このことはつまり常盤構内北西端部においては大学造成前の旧地表面が遺存していることを示している。またその下位には性格不明の段状遺構が検出されており、遺跡の性格を把握する上で重要な資料となっている。

常盤構内の他地域では大学建設時の造成により旧地形が激しく削平を受けているため、埋蔵文化財が過去において遺存していたとしても確認できる状況にない。今回の調査では埋蔵文化財は確認できなかったが、国際交流会館B棟周辺では今後とも地下の掘削計画に際しては慎重な対応が必要と考えられる。

【註】

- 1) 村田裕(2004)「第1章 常盤構内国際交流会館新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)「山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII」,山口

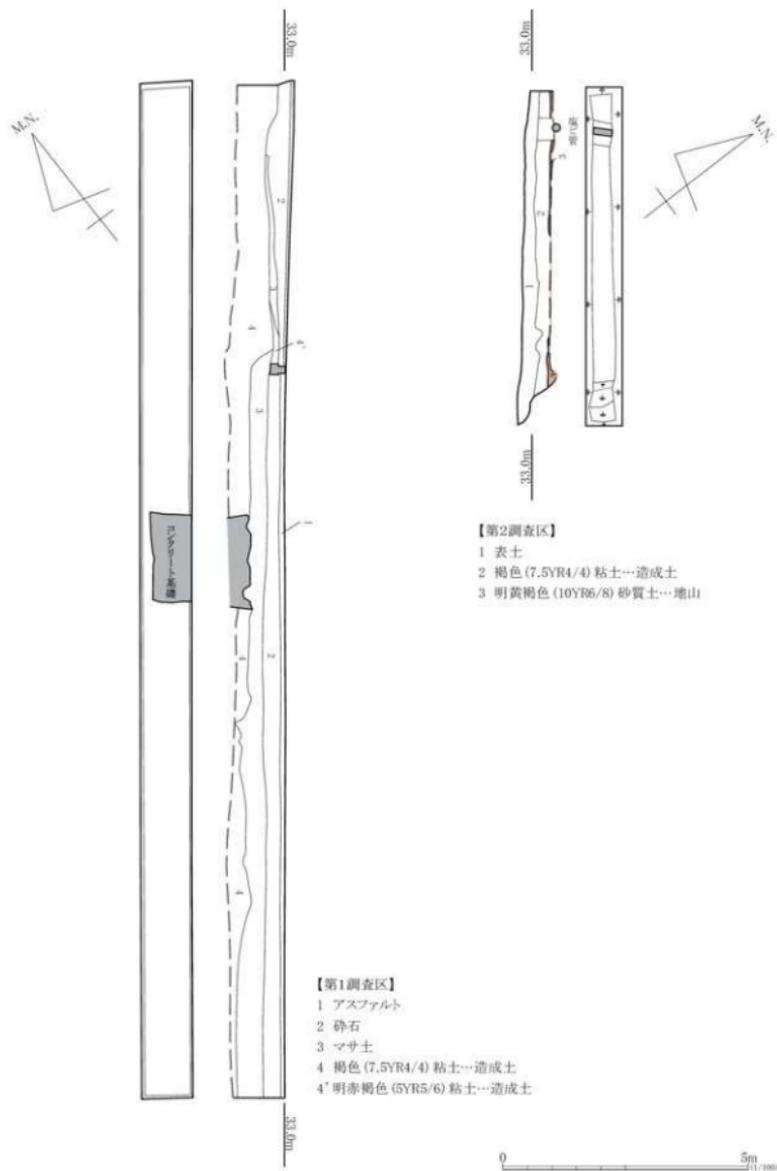


図 106 第1・第2調査区平面図・断面図



写真 251 第1調査区全景 (北東から)



写真 252 第1調査区全景 (南西から)



写真 253 第1調査区南西壁断面 (北から)



写真 254 第1調査区南西壁断面 (西から)



写真 255 第1調査区作業風景



写真 256 第2調査区全景 (西から)



写真 257 第2調査区全景 (南東から)



写真 258 第2調査区南西壁断面 (東から)

付録1 平成20年度 山口大学構内遺跡調査要項

山口大学大学情報機構規則

改正 平成18年3月14日規則第27号

(總旨)

第1条 この規則は、国立大学法人山口大学学園(平成16年規則第1号)第0条第2項の規定に基づき、国立大学法人山口大学(以下「本法人」という。)の大学情報及び情報基盤を総合的に整備する山口大学大学情報機構(以下「機構」という。)に關し必要な事項を定める。

(組織)

第2条 機構は、次の施設をもって組織する。

(1) 図書館

(2) デジタル基盤センター

(3) 学芸文化財資料館

2 前項の施設に關し必要な事項は、別に定める。

(業務)

第3条 機構は、次の業務を行う。

(1) 大学情報及び情報基盤の戦略的整備計画の策定に關すること。

(2) 大学施設及び情報基盤の整備の進捗及び実施に關すること。

(3) 情報セキュリティの推進及び実施に關すること。

(4) その他機構が必要と認めた事項に關すること。

2 前項の業務を行うため、機構は、各学部、各研究科、全学教育研究推進及び事務組織と相互に連携を図るものとする。

(運営委員会)

第4条 機構に、機構の管理及び運営に關する事項を審議するため、山口大学大学情報機構運営委員会(以下「運営委員会」という。)を置く。

2 運営委員会に關し必要な事項は、別に定める。

(情報セキュリティ委員会)

第5条 機構に、情報セキュリティに關する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報セキュリティ委員会(以下「情報セキュリティ委員会」という。)を置く。

2 情報セキュリティ委員会に關し必要な事項は、別に定める。

(審議基盤整備委員会)

第6条 機構は、情報基盤の整備に關する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報基盤整備委員会(以下「情報基盤整備委員会」という。)を置く。

2 情報基盤整備委員会に關し必要な事項は、別に定める。

(副総長)

第7条 機構に機構長を置き、学術情報担当副学長をもって充てる。

2 機構長は、機構の業務を統括する。

(副総務長)

第8条 機構に副機構長2名を置き、本法人の専任教授のうちから機構長が指名した者をもって充てる。

2 副機構長は、機構長を補佐する。

3 副機構長の担当は、機構長が定める。

4 副機構長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、機構長である副学長の任期の終業を迎えることではない。

5 副機構長に欠員が生じた場合の後任の副機構長の任期は、前任者の成任期間とする。

(専任大学教育職員)

第9条 機構に、専任大学教育職員を置く。

2 専任大学教育職員の選考は、運営委員会の議に基づき、学長が行う。

3 専任大学教育職員の選考に關し必要な事項は、別に定める。

(事務)

第10条 機構に關する事務は、情報連携部情報企画課において処理する。

(雑則)

第11条 この規則に定めるもののほか、後述に關し必要な事項は、別に定める。

附 則

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

山口大学埋蔵文化財資料館規則

平成16年4月1日規則第145号

改訂 平成17年3月24日規則第52号

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学大学情報機構規則(平成16年規則第139号)第9条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(目的)

第2条 資料館は、文化財保護法(昭和25年法律第24号)に基づき、国立大学法人山口大学(以下「本法人」という。)に所在する遺跡の埋蔵文化財の発掘調査及び研究を行い、出土品を収蔵・公開することを目的とする。

(業務)

第3条 資料館は、次の業務を行う。

- (1)本法人構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示及び調査研究
- (2)本法人構内等における埋蔵文化財の発掘調査及び報告書の発行
- (3)その他埋蔵文化財に関する必要な業務

(職員)

第4条 資料館に、次の職員を置く。

- (1)館長
- (2)副館長
- (3)資料館所長の専任大学教育職員
- (4)その他必要な職員

埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行うため、資料館に特別調査員若くは若者を置くことができる。

3 特別調査員は、専門委員会の議に基づき、館長が委嘱する。

(館長)

第5条 館長は、大学情報機構長をもって充てる。

2 館長は、資料館の業務を掌理する。

(副館長)

第6条 副館長の選考は、国立大学法人山口大学の専任教授のうちから山口大学大学情報機構運営委員会の議に基づき、学長が行う。

2 副館長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、副館長に欠員が生じた場合の後任の副館長の任期は、前任者の残任期間とする。

3 副館長は、館長を輔佐し、日常的な業務の執行及びこれに必要な意思決定に助力し、館長を助けるものとする。

(業務)

第7条 資料館に関する事務は、情報連携部情報企画課において処理する。

(規則)

第8条 この規則に定めるもののほか、資料館に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

2 第5条第1項の規定にかかわらず、当分の間、館長は、大学情報機構副機構長のうちから大学情報機構長が指名した者をもって充てる。

附 則

この規則は、平成18年4月2日から施行する。

山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会内規

(趣旨)

第1条 この規則は、山口大学大学情報機構運営委員会(平成16年規則第140号)第9条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会(以下「専門委員会」という。)の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

(開催事項)

第2条 専門委員会は、山口大学埋蔵文化財資料館(以下「資料館」という。)に関し、次の事項について審議する。

- (1)管理費及び運営に関する事項
- (2)整備充実に関する事項
- (3)予算に関する事項
- (4)その他資料館に関し必要な事項

(組織)

第3条 専門委員会は、次の委員をもって組織する。

- (1)機構長
- (2)副機構長
- (3)館長
- (4)副館長
- (5)資料館所長の専任大学教育職員
- (6)考古学担当の国立大学法人山口大学専任の大学教育職員
- (7)メディア基盤センター所長の専任大学教育職員のうち館長が指名した者1名
- (8)施設環境部長
- (9)情報連携部長

平成20年度山口大学構内造訪調査要項

(10)構内施設整備委員会副議長	委員会に出席させることができる。
(11)別座落表地に隣接のある部局の事務部の長	(評議会)
(任期)	第7条 専門委員会は、必要に応じて評議会を置くことができる。
第4条 前条第7号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。	2 評議会に預けし必要な事項は、専門委員会が別に定める。
(委員長)	(事務)
第5条 専門委員会に委員数を置き、総長をもって充てる。	第8条 専門委員会の事務は、情報環境部情報企画課において処理する。
2 委員長は、専門委員会を召集し、その議長となる。	(審判)
3 委員長に事故あるときは、副議長がその職務を代行する。	第9条 この内規に定めるもののほか、専門委員会の運営に關し必要な事項は、専門委員会が定める
(委員以外の者の出席)	附 則
第6条 専門委員会が必要と認めたるときは、専門委員以外の者を専門	この規則は、平成18年4月1日から施行する。

平成20年度 山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会

委員	阿部 憲孝 (大学情報機構長・理学部教授)	
	三池 秀敏 (大学情報機構副機構長・工学部教授)	
委員長	糸長 雅弘 (埋蔵文化財資料館長・大学情報機構副機構長・教育学部教授)	
委員	中村 友博 (副館長 人文学部教授)	村田 裕一 (人文学部准教授)
	小柏春徳理 (メディア基盤センター助教)	郡田 等 (施設環境部長)
	牧村 正史 (情報環境部長)	板谷 茂 (情報環境部情報企画課長)
	山畑 直彦 (埋蔵文化財資料館助教)	横山 成己 (埋蔵文化財資料館助教)

付節2 山口大学構内の主な調査

表16 山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第I地区A・B区	L~N-15	1	30?	土壇・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当 小野忠昭	年報 XI
	第II地区家畜病院新営	R-20・21 S-T-19・20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、 瓦質土器、須恵器	#	#	
	第III地区		3			弥生土器、土師器	試掘	#	
	第IV地区牛舎新営	S-T-10・11	4	300	弥生溝・土壇、 古墳型穴住居、 中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶磁器	事前	#	
昭和42年	第III地区杭列区 および野上競技場	D-19・20 E-17・19~21 F-17・18	6	1,600	杭列、弥生型穴住居	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 矢板柱木柱	事前	#	
	第III地区南区	G-21~23 H-22	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、 木器、石器	#	#	
	第III地区北区	H-20 I-19~21 J-20・21	8	1,400	型穴住居、溝、 土壇、柱穴		#	#	
	第III地区東南区	G-23 H-23・24 I-J-24 K-23・24 L-23	9		弥生型穴住居	弥生土器	#	#	①
	第III地区野球場		10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	#	
	第V地区学生食堂	J-20 N-14 P-16	11		弥生溝、古墳土壇	弥生土器、土師器	事前	#	
	第V地区		12		河川跡、柱穴、土壇	弥生土器、土師器	試掘	調査担当 山口大学吉田 遺跡調査団	
	第I地区C区大学本部新営	K・L-14	13	600	型穴住居、溝、土壇	土師器、須恵器、 瓦質土器	事前	#	
	昭和44年	第V地区教育学部			河川跡	弥生土器、土師器、 須恵器	試掘	#	
	昭和46年	第I地区D区第1地点	L-13	14		近世大溝	弥生土器、木炭屑	#	#
第I地区D区第2地点		L-13	15			弥生土器、土師器、 瓦質土器、石鏡	#	#	
第I地区D区第3地点		M-13・14	16		土壇、柱穴	弥生土器、瓦質土器	#	#	
第I地区D区第4地点		M・N-14	17		土壇、柱穴	弥生土器、土師器、 瓦質土器、石器	#	#	
第I地区D区第5地点		L-12・13	18		弥生溝	弥生土器、土師器	#	#	
第I地区D区第6地点		M-13	19		柱穴	弥生土器、土師器、 石器	#	#	
第I地区D区第7地点		M・N-13	20			須恵器	#	#	
第I地区E区第2学生食堂新営		M・N-14・15 O-15	21	900	古墳型穴住居、 土壇溝、柱穴	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 石器、鉄製品	事前	#	年報 XII
昭和50年	第II地区				弥生土器	試掘	#	①	
昭和51年	第III地区			型穴住居	弥生土器、土師器、 須恵器	#	#		
昭和53年	人文学部校舎新営	M・N-21	22	160			#	調査担当 吉藤喬一	年報 X
昭和54年	教育学部附風養護学校新営	A-20・21 B-19・20 C-19	23	410	溝、土壇	縄文土器、弥生土器	試掘	山口大学理蔵 文化財資料館 山口市 教育委員会	年報 IX
	理学部校舎新営	N・O-19・20	24	250			#	#	年報 X
	農学部動物舎新営	P-19	25	380			#	#	
	本部管理棟新営	L-14	26	740	溝、土壇、柱穴、 中世井戸、土蔵基、 住居跡	弥生土器、土師器、 石製品	事前	#	年報 VIII
昭和55年	経済学部校舎新営	K-21	27	66			試掘		
	農学部農畜観測実験施設新営	P・Q-15	28	50	溝、土壇		事前	#	年報 X
	本部環境整備	E-14~16 F-15・16	29				立会		

平成20年度山口大学構内遺跡調査要項

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査備考	文献
昭和55年	農学部環境整備	N-11 O-10-11 P-9-10	30				#	年報 X
昭和56年	教育学部校舎新営	H-19	31		弥生型穴住居、土壇、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前	年報 I
	教育学部音楽棟新営	H-16	32		溝		#	
	教育学部美術科・技術科実験実習棟新営	J-K-19-20	33		田河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	#	
	正門橋脚新営	I-11	34				立会	
	時計塔埋設	I-14	35				#	
	本部構内擁壁取設	K-L-13-14	36				#	
	教養部構内擁壁取設	I-15~17 J-17	37				# 工法等変更	
	構内循環道路舗装	J-M-15 M-N-16	38				#	
	農学部中庭整備	N-O-17	39				#	
暖房施設改修	O-16	40				# 工法等変更		
学生部文化会車庫新営	M-8-9	41				# 工法等変更		
学生部馬場整備	M-N-8-9	42				#		
昭和57年	附風園書館増築	L-M-16	43	600	弥生～古墳遺、土壇、柱穴、竈筒	弥生土器、土師器、須恵器、石器	事前	年報 II
	大学会館新営	M-N-14+15	44	130	弥生型穴住居、溝	弥生土器	試掘	
	教育学部附属美術学校アール新営	A-B-21	45	880			立会	
	放射性同位元素総合実験室排水槽新営	O-18	46	2			#	
	教養部自転車置場早稲口新営	L-17	47	10			#	
	教養部中庭環境整備	J-K-16	48	150			#	
昭和58年	大学会館新営	M-N-12+13	49	2,000	古墳井戸、土壇、柱穴、中世井戸、福立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、緑釉陶器、木簡、石器	事前	年報 III
	ラグビー場防球ネット新営	G-18-19 H-19-20	50	114	弥生遺、弥生～古墳型穴住居、土壇	弥生土器、土師器、石製品	# 型穴住居は工法変更により現地保存	
	理学部大学院校舎新営	M-N-20	51	409			立会	
	正門・南門二輪車置場および正門花壇新営	I-J-12+13 H-23	52	183			#	
	学生部アーチェリー場の台・電柱設置	N-8-9	53	33			#	
	学生部観音整備	M-7-8	54	1.6			#	
	学生部野球場散水栓取設	I-21 K-22	55	1			立会	
	教養部環境整備	I-15-16 J-15 K-17-18 L-18	56	81			#	
	学生部テニスコート改修	C-18 D-17 E-15-16 F-16	57	12			#	
	大学会館ケーブル布設	N-12	58	160	弥生土壇、柱穴	弥生土器	事前	
大学会館排水管布設	J~L-13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壇、古代～中世土壇、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	#		
学生部テニスコートフェンス改修	B-17 C-16-17 D-16 E-15	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
経済学部樹木移植	K-19-21	61	8			立会		
昭和59年	大学会館埋戻整備	L-14+15 M-N-15	62	392	弥生～中世遺物包含層、弥生型穴住居、貯蔵穴、土壇、古代～近世土壇、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶磁器、土製品、石斧、原石、鉄器、密壺	試掘	年報 IV
	経済学部環境整備(樹木移植)	K-L-20	63	5			立会	
	農学部附属農場飼料園排水溝修復整備	R-17~19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輸入陶磁器、轆口、石器、鉄片	#	
	農学部附属農場農道改修	V-15~17	65	325			#	
	教育学部前庭環境整備(樹木移植)	I-J-19	66	430			#	
昭和60年	中央ボイラー棟車止設置	O-P-16	67	2.5		須恵器	#	年報 V

平成20年度山口大学構内造替調査要項

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (㎡)	造構	造物	調査区分	備考	文献
昭和60年	大学会館環境整備(樹木移植)	M-15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鏡、砥石、鉄滓	#		年報V
	交通橋設置	J-20 N-14 P-18	69	3			#		
	農学部解剖実習棟周辺環境整備 (実験動物運動場設置)	Q-18	70	16			#		
	理学部環境整備(緑地設置)	N-21	71	4			#		
	農学部附属畜産病院補装	S-T-19	72	270			#		
昭和61年	国際交流会館新営	M-22・23 N-22	73	70	弥生～古墳河川跡 中世～近世溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、鉄線玉、加工意のある表片	試掘		年報VI
	山口銀行現金自動支払機設置 (電線路埋設)	J-19	74	11	包含層(河川跡か)	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S-20 T-U-19	75	165	中世溝、柱穴	土師器、瓦質土器	#	工法等変更	
	農学部附属農場農道交通規制 (脇錠ポール設置)	M-10 P-15 Q-15～17	76	12			#		
	正門橋(水田内)境界杭設置	J-10	77	0.25	包含層か		#		
	経済学部環境整備 (樹木移植・記念碑建立)	L-20	78	3			#		
昭和61年	吉田構内交通橋設置	G-23 K-9 O-22 S-20 V-17	79	3		須恵器	立会		年報VI
	市道神郷1号線および 周田神郷線の治水管理設	B-17・18 C-18・19 D-19・20 E-20・21 F-21・22 G-22・23 H-23・24 I・J・K-24 L-23・24 M・N-23 O-22・23 P・Q-22 R-21・22 S-21 T-20・21 U-19・20 V-18・19 W・X-18	80	2,100	古墳・弥生溝、 古代河川跡、 弥生包含層	弥生土器、土師器、須恵器 (墨書のあるもの含む) 瓦質土器、製塩土器、 石斧、板石	立会	山口市教育委員会 山口大学埋蔵文化財資料館	
	教養部自動販売機埋設 (屋根設置および縦型密移動)	K-L-18	81	3.5			#		
	教養部身体障害者用 スロープ取設	L-15・16	81	3			#		
	経済学部数水漏取設	L-20	83	4			#		
	吉田構内水泳プール 改修等	E-15 F-15・16 H-15	84	26.5	包含層		#		
	農学部附属農場 水道管理設	S-12	85	3			#		
	吉田構内汚水排水管等 継改修	M-18 O-15	86	15.5		土師質土器	#		
	本身体障害者用スロープ 取設	L-14	87	12			#		
	経済学部身体障害者用 スロープ取設	K-18～20 L-18	88	78			#	工法等変更	
	附属図書館荷物運搬用 スロープ取設	L-16	89	8		弥生土器	#		
	教養部37番教室改修	K-16	90	1			#		
	教育学部附属教育実践 研究指導センター新営	J・K-18・19	91	240		プランク、陶器、 植物遺体	事前		
	教養部複合棟新営	J・K-17	92	35	埋蔵土壌、溝、柱穴	土師器、須恵器、 土師質土器、石斧	試掘		
教養部複合棟新営	L-16	93	30	遺構遺積	弥生土器	立会			

平成20年度山口大学構内造替調査要項

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積(m ²)	造構	造物	調査区分	備考	文献
昭和62年	教養部複合棟新築	J-K-17・18	94	900	落し穴、河川跡、 整穴住居、土壌、溝、 井戸、埋戻土壌、 掘立柱建物跡、 谷状遺構、柱穴	縄文土器、土師器、 須恵器、土師質土器、 須恵質土器、 陶磁器、石鏡、石斧、 木製品	事前		年報Ⅵ
	九田川局部改修	B-16-17 C-16	95	20			立会	山口県教育 委員会 山口大学地蔵 文化財資料館	
	国際交流会館新築	M-N-22・23	96	195			#		
	教育学部附属養護学校 自転車庫増設	B-20	97	1			#		
	農学部附属農場B園場 排水管理施設及び 156圃場進入路拡幅	L~N-12	98	55	中世土壌墓か	弥生土器、土師器、 須恵器、輸入白磁、 国産磁器、磁石	#		
	農学部種養 経済学部集水網施設	N-17 J-20	99 100	3 0.5			#		
昭和63年	教養部複合棟新築に伴う 自転車庫増設	I-16	101	1	包含層か		立会		年報Ⅶ
	国際交流会館新築に伴う 排水管理施設	N+O-22	102	35	河川跡(溝か)、 包含層	弥生土器、須恵器	#		
	教養部複合棟新築に伴う ケーブル埋設	J-18	103	1			#		
	サッカー・ラグビー場改修	F-19+21 G-18	104	25	性格不明	弥生土器	#		
	消防用水設置	K~M-22	105	7.5			#		
	水銀灯新築	J-L-15	106	4	古墳溝状遺構柱穴	弥生土器、土師器、 六連式製造土器	事前		
平成元年	篠野寮ボイラー設備改修	O-20・21	107	25			立会		年報Ⅷ
	野球場防球ネット新築	H-22 I-21-22 J-K-21	108	7	包含層	弥生土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器	#		
	防火水龍配管布設	K-21・22	109	15	柱穴		#		
	吉田寮ボイラー設備改修	M-8	110	4			#		
	体育施設系給水管改修	G+H-16	111	50		陶器	#	工法等変更	
	大学会館前記念植樹	M-13	112	6			#		
	吉田寮ボイラー棟 地下貯油槽設備改修	M-8	113	45	包含層	土師器、須恵器、 土師質土器、陶器、 剥片、 二次加工のある剥片	#		
	第2武道場排水溝新築	G-15	114	2	溝		#		
	案内権蔵設置	I-14 L-18	115	0.5			#		
	本部車庫給水管改修	L-13	116	6.5		弥生土器	#		
平成2年	大学会館前庭環境整備	N-14-15	117	35	中世溝		#		年報Ⅸ
	大学会館前庭環境整備	M-15	118	2			#		
平成3年	第1学生食堂設備改修	J-J-19	119	7			#		年報Ⅹ
	教育学部附属養護学校案内板設置	E-20	120	1			#		
	農学部連合獣医学科棟新築	O+P-17	121	76	縄文河川	縄文土器、石器	試掘		
	農学部仮設プレハブ倉庫設置	P-17	122	6		須恵器	立会		
	農学部微生物実験室 その他機軸修繕設備改修	P-17	123	8			#		
平成4年	大学会館前庭記念植樹	L+M-15	124	2			#		年報Ⅺ
	サークル棟新築	F-14	125	1			#		
	農学部連合獣医学科棟新築	O+P-17	126	980	縄文河川	縄文土器、石器	事前		
平成5年	交通規制標識及びガード設置	H-22 M-10 O-22 R-19 S-20	127				立会		年報Ⅻ
	吉田構内道路 (南門ロータリー)敷設	H-23	128	40			#		
	ボイラー室給水管漏水補修	O-16	129	4			#		
	農学部附属農場ガラス室新築	S-14	130	3.5			#		
	大学会館前庭記念植樹	L+M-15	131	3			#		
	京町平川線緊急地方道路整備工事 及び山口大学吉田旧地 環境整備(正門周辺)	E-11+12	132				#		
平成6年	京町平川線緊急地方道路整備 (信号機設置)	I-11	133	7			#		年報Ⅼ
	本部裏給水管埋設	K~M-13	134	70	溝、柱穴	弥生土器、土師器、 滑石製模造品	事前		
	人文学部・理学部講義棟新築	M-20	135	4			試掘		

平成20年度山口大学構内造替調査要項

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積(m ²)	造構	造物	調査区分	備考	文献
平成5年	第2館内運動場新営	G-11-16	136	144	壊	弥生土器、須恵器、砥石	#		年報 XIII
	農学部給水管理設	N~P-18	137	9					
	基幹整備 (屋外給水管改修)	L-15 M-17-18	138	16				立会	
	農学部連合獣医学科棟新営 電気設備	O-16	139	4				#	
	大学会館前庭パワコー設置	N-14	140	1				#	
	大学会館前庭記念植樹	L-15	141	1.6				#	
	九田川河川局部改良	C-16 D-15-16	142	40				#	
	農学部電柱立替	V-17	143	0.2				#	
	農学部ガラス室設置	S-14	144	10				#	
	教育学部給水管理設	H-J-19	145	15				#	
	環境整備(大学会館前庭)	L-14 M-13~15 N-14-15	146	140.9				#	
	環境整備(遺跡保存地区)	H-20 I-19~21 J-20-21	147	361				#	
	環境整備(正門周辺)	G-13 H-12	148	350				#	
平成6年	グランド屋外照明施設新設	E-20 F-21 G-18-22 H-19-20 I-21	149	600	縄文河川、弥生住居、溝、土坑、弥生~古墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砥石、磨石、敲石	事前	工法等変更	年報 XIV
	第2館内運動場新営	G-1-15-16	150	726	弥生~古代溝、貯蔵穴、土坑、近世溝、土坑	弥生土器、土師器、須恵器、砥石、磨石、敲石、剥片、須恵器、瓦質土器、土師質土器、陶器、磁器、瓦、下駄			
	グランド屋外照明施設配線理設	F-21 G-20-21 H-19-20	151	300	縄文河川、弥生住居、溝、土坑、弥生~古墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砥石、磨石、敲石	#	工法等変更	
	経済学部商品資料館新営	K-L-21	152	87.5	河川	陶器、磁器	試掘		
	実験施設処理施設棟新営	H-12-13	153	2	河川				
	体育器具庫及びトイレ新営	G-H-17	154	60	河川			工法等変更	
	経済学部商品資料館 復設電柱設置	L-22 M-22-23	155	5				立会	
	人文学部の駐車場整備	K-23 L-22+23	156	6				#	
	教育学部附属養護学校 生活排水管改修	F-19	157	2				#	
	テニスコート改修	B-17 C-16-18 D-15~17 E-15-16	158	15				#	
	教育学部附属養護学校 生活訓練施設棟新営	B-20~22 C-20	159	16				#	
	陸上競技場整備(透水管理設)	C-18 D-18-19	160	200				#	
	ハンドボール場改修(プレハブ設置)	K-22	161	30				#	
野球場フェンス改修	H-22 I-21-22	162	3				立会		
基幹環境整備 (ボイラー室配電盤設置)	O-16	163	4	河川か			#		
九田川河川局部改良	D-15 E-14+15	164	100				#		
第2館内運動場電柱復設	G-14-15	165	0.5				#		
教育部水道管破裂修理	I-16	166	2				#		
グランド屋外照明施設配線理設	E-20 F-20~21 G-18-19-22 H-19-20 I-20-21	167	150				#	年報 XIV	
公共下水道接続 (教育学部附属養護学校 プール排水施設設置)	A-21	168	4				#		
サウナル棟給水管理設	F-14	169	1				#		
プール新営給水管理設	E-15 F-15-16	170	10				#		
公共下水道接続 (汚水管出水排水施設設置)	C-18	171	6	河川	土師器		#		
教育学部スロープ設置(音楽棟)	H-17	172	10				#		

平成20年度山口大学構内造替調査要項

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積(m ²)	造構	造物	調査区分	備考	文献
平成7年	農学部実験研究施設新営	Q・R-17	173	75	近世講	礎器	試掘		
	農学部実験研究施設新営	Q・R-17	174	520	中世井戸、近世講	石芥、須恵器、礎器、瓦器	事前		
	公共下水道接続	C-18 E-16 G-14	175	70	溝、土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、土師器	試掘		
	公共下水道接続	C-D-18 D-E-17 E-F-16	176	240	土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、石器、骨角器	事前		
	農学部附属農場牛舎新営	T-10	177	22			試掘		
	体舎宿舎改修	N・O-22	178	25.5	河川		試掘		
	第2学生食堂増築	N・O-15	179	48	柱穴、包含層	石礎	試掘		
	第2階内運動場外周照明施設新設	G-15・16	180				立会		
	構造成分センター新営工事用電柱仮設	O-19~21 P-22	181				#		
	農学部附属風車診療院/リカー新設	S-20	182				#		
	古田尊可徳ゾミ置場新設	N-10	183				#		
	農学部実験研究施設電気・情報ケーブル及びガス・給排水管布設	Q・R-17	184				#		
	情報処理センタースロープ新設	O-19	185				#		
基幹環境整備(ATMネットワーク布設)	E-19・20 F-18・19 G-18	186					#		
	I-15・16 J-20 K-19 M-10・11 N-12 O-16~18・20 P-18・19 Q-17・18	187					#		
平成8年	基幹環境整備(体舎宿舎・国際交流会館排水管布設)	M-23 O-22	188	22.5	河川		試掘		年報 XVI
	基幹環境整備(外灯新設)	H-1・21・22	189	306	河川	縄文土器、弥生土器、土師器、石器	試掘		
	農学部附属農場排水管布設	S-10・11	190	93	包含層、ピット	土師器、須恵器	試掘		
	陸上競技場鉄柵取除	G-18	191	5.5	包含層		立会		
	農学部附属農場排水溝改修	R-11	192	2.2			#		
	種野舎/リカー新設	O-20・21	193	7			#		
	テッカー・場給水管取替	H-19・20 I-19	194	12	包含層		#		
	基幹環境整備(共通教育センタースロープ・ガラス新設)	E-14	195	14.3	河川	縄文土器、須恵器	#		年報 XVI
	九田川河川局部改良	E-14	196	18			#		
	農学部附属農場道路舗装	K-12・13 L-12 M-11	197	27.6	近世用水路、溝状遺構	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、礎器	#		
	本部給排水管取替	K-14	198	2			#		
農学部附属農場畜舎病院患畜舎圍籾取設	S・T-19	199	1			#			
平成9年	農学部附属農場堆肥舎新営	S-10	200	41.5			試掘		
	農学部バイオ環境制御施設新営	Q-15・16	201	140	河川、溝	土師器、須恵器、製瓦土器、石礎	試掘		
	カーブミラー新設	M-11 N-21	202	0.8			立会		
	基幹環境整備(外灯新設)	J・K-21 K・L-22 L-23	203	23.5	包含層		#		年報 XVII
	共通教育棟エレベーター新設	K-16	204	42			#		
	九田川河川局部改良	E-14	205	4.8			#		
	本部2号館西側/リカー新設	L-13	206	0.5			#		
	教育学部附属養護学校時計塔新設	D-21	207	1.4	包含層	土師器	#		
基幹環境整備(教育学部附属養護学校排水管取替)	C・D-21	208	17	河川		#			
基幹環境整備(焼却場裏表土すきとり)	O-16	209	40			#			
平成10年	第2学生食堂増築及び改修	N・O-15	210	730	雁立柱建物、溝、土坑、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、礎器、製瓦土器、石礎、鉄製品	事前		
	教育学部附属養護学校給食室改修	C-21	211	9	縄文河川、土坑、柱穴	縄文土器、弥生土器	試掘		
	九田川河川局部改良	E・F-14 F-13	212				立会		

平成20年度山口大学構内造替調査要項

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積(m ²)	造構	造物	調査区分	備考	文献
平成10年	基幹環境整備(リッカー新設)	H-15 I-J-20 O-16・18	213				#		
	農学部動物用環境改修	Q-18	214				#		
	基幹環境整備(外灯新設)	L-17~19 M・N-18	215				#		
	理学部スロープ新設	M-18	216				#		
平成11年	ステンレス回転モニュメント新設	M-13	217				#		
	第2学生食堂増築その他に伴う屋外電力線路施設整備	O-14~16	218	包含欄、柱穴、河川	土師器、須恵器	#			
	九田川河川局部改良	F-G-13 G・H-12	219				#		
	第2学生食堂北西棟増新設	N-14	220				#		
	サッカー場南側防球ネット新設	G・H-22	221				#		
	第1体育館・共通教育本館スロープ新設	H-15 K-16	222				#		
平成12年	基幹環境整備(外灯新設)	I-12 K・L-18 L-15 M・N-17	223				#		
	総合研究棟新築	Q-18 R-17~19	224	250	河川	土師器、須恵器	試掘		
	総合研究棟新築	Q・R-18・19	225	830	河川、土坑	縄文土器、土師器、須恵器、製塩土器、瓦質土器、石蔵	事前		
	風倉及び周辺施設改修	M-8	226				立会		
平成13年	架空電線取り外し埋設	O-15 P-15・16 Q-14・15・18・19 R-13・14 R・S-19 S-14	227	包含欄			#		
	九田川河川局部改良	H-11・12 I-10・11 J-9・10 K・L-9	228				#		
	山口合同ガスガバナース新設及びガス配管布設	O・P-22	229				#		
	基幹環境整備(リッカー新設)	N-22 M-10 V-17	230				#		
	あづまや新設	L-18	231				#		
	共通教育センター空調設備新設	J-16	232				#		
	基幹環境整備(外灯新設)	J・K-21 M-10	233				#		
	経済学部校舎改修(プレハブ校舎新築)	K-21	234	40	河川	縄文土器	試掘		
	九田川河川局部改良(平成12年度工事追加分)	L-8・9	235		河川		立会		
	総合研究棟新築屋外配管布設	Q-18	236				#		
平成14年	理学部改修1期工事屋外配管布設	M-18・19 M・N-20 N-19	237				#		
	九田川河川局部改良	L-8・9	238				#		
	基幹環境整備(外灯新設)	I-14・15 J-15 K・L・M-15 N-16 Q~T・V-17	239		河川		#		
	理学部校舎改修2期工事ポンプ室配管布設	M-19	240				#		
	理学部校舎改修2期工事自転車養場新設	N-20	241				#		
	第1学生食堂トイレ改修	I-J-19	242				#		
	経済学部校舎改修(プレハブ校舎新築配管布設)	L-21	243				#		
平成14年	農学部校舎改修(解剖実習棟プレハブ校舎新築)	R・S-19	244	520	縦立柱建物、柱穴、土坑、包含欄、河川	土師器、須恵器(黒書土器)、製塩土器、絞輪陶器、瓦、樋口、肥尾、瀬籠石	事前		
	農学部附属農場実験圃場整地	O-14	245				立会		
	農学部校舎他改修	N~Q-17・18	246		河川	縄文土器	#		
	理学部改修3期工事(薬品庫展示板・自転車養場新設)	N・O-19 M-19・20	247				#		

平成20年度山口大学構内造形調査項目

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (㎡)	造 構	造 物	調査 区分	備 考	文献
平成 14年	東アジア研究科 プレハブ校舎新設	N-21	248				#		
	農学部校舎改修(解読実習棟 プレハブ校舎新設)	R-S-19	249		河川、包含層		#		
	教育学部・イレ改修	I-18	250				#		
平成 15年	農学部附属農場ガス管漏れ修理	O・P-16 Q-15	251	12	河川			立会	
	教育学部附属養護学校給食調理員 専用・イレ新設	C-21	252	1.7			#		
	農学部環境観測実験棟南側温室	P・Q-15	253	52			#		
	理学部中庭通路屋根新設	N-19	254	5.8			#		
	理学部中庭あずまや新設	N-20	255	6.8			#		
平成 17年	基幹環境整備(外灯)	F-16, H-14 G-13~15, 18 I-16, 19 J-19, L-12 Q-15	256	11.5	河川		#		
	教育総合研究センター改修Ⅰ期	J-K-16	257	130	ビツト、河川	赤生土器、土師器	予備		
	教育総合研究センター改修Ⅰ期	I・J・K-16 H-12, E-20	258	580	ビツト、河川	赤生土器、土師器 須恵器	立会		
	日本・トロジー学会 木田土壌の断面調査	R-16	259	3.1	河川		#		
	基幹環境整備(外灯)取設	H-17, 22・23	260	7.7			#		
平成 18年	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K・L-16, K-17 J-16-17	261	92	ビツト、溝、河川	赤生土器、土師器 石器	予備		
	農学部附属富家畜病院改修Ⅰ期	S-20	262	36	包含層・谷	土師器・須恵器 製塩土器	予備		
	農学部附属富家畜病院改修Ⅰ期	S-20	263	225		土師器、須恵器 緑釉陶器、木製品(柱頭)	本		
	農学部附属富家畜病院改修Ⅰ期	S-20	264	19	包含層		立会		
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K・L-16	265	84	ビツト、河川、杭列	縄文土器、赤生土器 土師器、須恵器	本		
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	J・K・L-16 I・J・K・L-17	266	480	ビツト、河川、溝	赤生土器、土師器 打製石斧、柱材	立会		
	資料館(東亜経済研究所)新設	L-20・21	267	100	土壌、落ち込み、河川		予備		
	プレハブ倉庫移設	I-16	268	29			立会		
	第一学生食堂改修	J-20	269	75			#		
	図書館前広場環境整備	L-17・18	270	55			#		
平成 19年	プレハブ校舎新設	F-14・15, G-15	271	400			#		
	人文学部外灯用電源敷設	M-20	272	6			#		
	テニスコートフェンス改修	B・C-17, C-18	273	10	河川、包含層		#		
	農学部附属動物医療センター改修Ⅱ 期	T-20	274	48	土壌、ビツト	土師器・須恵器 瓦質土器	本		
	駐車場整備工事	J-21	275	10			立会		
	資料館(東亜経済研究所)新設	L-20・21	276	550			#		
	第一事務局庁舎改修	L-15	277	5			#		
	吉田穿廊配水管敷設	M-11	278	11			#		
	農学部附属農場内電源敷設	Q-15, S-18	279	0.5	ビツト	須恵器	#		
	経済学部研究棟改修工事	L-M-19	280	26	河川、落ち込み		予備		
平成 20年	新教育研究棟新設	M・N-11・12	281	473	谷、ビツト、溝	赤生土器、土師器 須恵器、瓦質土器 青磁	予備		
	新教育研究棟設備関連工事	L-12~14 M-12・13	282	313	ビツト、溝、土壌	土師器、須恵器 緑釉陶器、白磁、青磁 因楽陶器、磁石	本		
	新教育研究棟新設	M・N-11・12	283	1,333	独立柱建物、ビツト 溝、土壌、井戸、谷	縄文土器、赤生土器 土師器、須恵器、青磁 緑釉陶器、瓦質土器 木製品	本		
	農学部附属動物医療センター改修Ⅲ 期	T-19 S-20	284	250	独立柱建物、ビツト 溝、谷	赤生土器、土師器 須恵器、製塩土器 青磁、瓦質土器 木製品	本		
	国際交流会館B棟改修工事	N・O-22 N-23	285	457	河川		立会		
	サッカーグラウンド防球ネット取設	H-21・22 I-21	286	8.5	河川、ビツト		立会		
平成 20年	正門改修等工事	Q-15 S-18	287	174	ビツト、溝、落ち込み	土師器、須恵器 瓦質土器、陶器、時期	立会		
	教育実践センター廻りフェンス取設	K-19	288	2	土壌	縄文土器	立会		

白石構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小学校・幼稚園運動場整備		1	60	古墳型穴住居、講状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品		試掘	年報Ⅲ
昭和60年	教育学部附属山口小学校 散水栓改修		2	1				立会	年報Ⅴ
	教育学部附属山口中学校 球技コート整備		3	2				#	
	教育学部附属幼稚園 環境整備(樹木植樹)		4	1				#	
昭和61年	教育学部山口附属学校 幼稚園・小学校部分	幼稚園・小学校部分	5	57	中世土壌カ	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器		試掘	年報Ⅵ
	汚水排水管布設	中学校部分		20	河川跡カ杭列	陶磁器、不明鉄製品、石鏝、刺片、積物遺体			
昭和61年	教育学部附属山口小学校 電柱移設		6					立会	年報Ⅵ
昭和62年	教育学部附属幼稚園 遊戯室拡張		7	40				#	年報Ⅶ
昭和63年	教育学部附属山口中学校 屋内消火栓設備改修		8	35	包含層	土師器、磁器、刺片		#	年報Ⅷ
平成元年	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設		9	260	弥生～古墳型穴住居、土壇、溝、柱穴、河川跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質陶器、黒色土器、播磨、二次加工の赤土刺片、使用痕のある刺片、刺片、石鏝、砥石		事前	年報Ⅸ
			10	0.3				立会	
			11	170	弥生講状遺構	弥生土器、土師器、打製石斧、附器、刺片、石鏝			
平成2年	教育学部附属山口中学校 汚水排水管布設		12	70	講状遺構	縄文土器、弥生土器、土師器、瓦質土器、不明鉄製品、石鏝、砥石、扁平打製石斧、砥石、刺片		事前	年報Ⅹ
			13	130		弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器、扁平打製石斧、砥石		立会	
平成6年	教育学部附属山口小学校 プール新築給水管埋設		14	3				#	年報ⅩⅣ
平成7年	教育学部附属山口中学校 プール新築給水管埋設		15	7				#	
平成10年	教育学部附属山口小学校 給食室改修		16					#	
平成10年	教育学部附属山口小学校 給食室改修		17					試掘	
平成12年	教育学部附属山口中学校 防球ネット新設		18					立会	
平成14年	教育学部附属山口中学校 給水設備改修		19					#	
平成14年	教育学部附属幼稚園 運動場整備		20		河川、柱穴	土師器		#	
平成15年	教育学部附属山口幼稚園並新設 山口小学校スロープ新設		21	27.7				立会	年報Ⅰ
平成16年	白石地区市道歩道改修		22	1	河川			立会	年報Ⅱ
平成16年	教育学部附属山口小学校事務室新築		23	101	河川、土壇または溝			#	
平成17年	教育学部附属山口幼稚園・小学校 フェンス・通用門改修		24	11				#	
平成17年	教育学部附属山口幼稚園・小学校 給水管改修		25	10				立会	年報Ⅲ
平成19年	教育学部附属山口中学校校舎等改修		26	121	河川、落ち込み、ピット	縄文土器、弥生土器		予備	年報Ⅴ
平成19年	教育学部附属山口中学校校舎等改修		27	38	河川、包含層			立会	

平成20年度山口大学構内遺跡調査要項

小串構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積(m ²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報Ⅲ
	医学部図書館増築		2	4			立会		
	医学部体育館新営		3	1			#		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4	44	近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報Ⅳ
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	#		
	医学部基幹整備(特高受電設備)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
	医学部臨床講義棟病理解剖棟新営		7	38			#		
昭和60年	医学部附属病院外来診療棟新営		8	300		土師質土器、瓦質土器、陶磁器	#		年報Ⅴ
	医学部基礎研究棟新営		9	10		近世陶器	#		
	医学部看護婦宿舎改修		10	25.5		近世陶磁器	立会		
	医学部看護婦宿舎改修		11	20			#		
	医学部環境整備(樹木移植)		12	40			#		
昭和61年	医学部附属病院外来診療棟新営		13	5			#		年報Ⅵ
	医学部附属病院外来診療棟周辺		14	18			#		
	環境整備等(排水処理)		15	6			#		
昭和62年	医学部附属病院車駐車場改修		15	6			#		年報Ⅶ
	医学部附属病院病棟新営		16	104		削器、ナイフ形石器、磨石刀痕	試掘		
昭和63年	医学部附属病院病棟新営		17	300		二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、礫石、礫、磨石、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	立会		年報Ⅷ
	医学部附属病院運動場整備		18	220			#		
平成元年	医学部附属病院MRI棟新営		19	45		削器、磨石刀、二次加工のある剥片、剥片、石核	試掘		年報Ⅸ
平成2年	医学部臨床実験施設新営電気工事		21	0.5			立会		年報ⅩⅠ
平成4年	焼却棟地盤調査		22				#		年報ⅩⅡ
平成5年	医学部臨床実験施設新営その他		23	9			#		年報ⅩⅢ
	医学部附属病院基幹設備(焼却棟新営)		24	6			#		
平成6年	医学部附属病院MRI-CT装置棟新営		25	300			#		年報ⅩⅣ
平成7年	医学部附属病院看護婦宿舎新営		26	40			試掘		
平成8年	医療技術短期大学部屋外排水管布設		27	6			立会		年報ⅩⅤ
平成9年	医学部聖霊碑・納骨堂新営		28	15.2			試掘		年報ⅩⅦ
	基幹環境整備(看護婦宿舎浄化槽撤去)		29	4			立会		
	医学部測候棟移設		30	10			#		
平成10年	宇部市土地区画整理事業(柳ヶ瀬大川内線)		31	134	包含層、近世～近代用水路	剥片、弥生土器、土師器、陶器、磁器	事前	宇部市教育委員会と共同調査	
平成10年	宇部市土地区画整理事業(柳ヶ瀬大川内線・医学部敷地西側特殊道路)		32	379	包含層、近世～近代溝	剥片、縄文土器、弥生土器、土師器、陶器、磁器	#	宇部市教育委員会と共同調査	
平成11年	宇部市土地区画整理事業(柳ヶ瀬大川内線)		33	792	近世～近代用水路、土坑	陶器、磁器、鉄製品	#	宇部市教育委員会と共同調査	
平成13年	医学部附属病院立体駐車場新営		34	229	包含層	縄文土器、弥生土器、土師器、陶器、磁器	試掘		
平成14年	医学部附属病院高エネルギー棟新営		35	13.25			#		
平成14年	総合研究棟新営		36	382	包含層	縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器	#		
平成15年	基幹環境整備(埋立)新営		37	76			試掘		年報Ⅰ

平成20年度山口大学構内造替調査要項

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (㎡)	造構	造物	調査区分	備考	文献
平成16年	医学部基幹環境整備 (地下オイルタンク他)		38	144		縄文土器、土師器、 陶器、磁器、石種	試掘		年報 2
	医学部職員宿舎他公共下水接続		39	400		弥生土器、土師器、 瓦質土器、陶器、磁器	#		
	医学部総合研究棟北側 連絡用渡り廊下取設		40	40.6			立会		
平成17年	医学部附属病院基幹環境整備 (冷熱源設備他改修)		41	37			#		年報 3
	医学部南側通用門廊取設		42	30			#		
平成18年	モニュメント設置		43	6.2			#		年報 4
平成19年	医学部総合研究棟改修Ⅰ期		44	6.75			予備		年報 5
平成20年	医学部総合研究棟改修Ⅱ期		45	9			予備		年報 6

平成20年度山口大学構内造替調査要項

常盤構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (㎡)	造構	遺物	調査 区分	備考	文獻
昭和58年	工学部校舎新築		1	70		須恵跡	試掘		年報 Ⅷ
	工学部図書館増築		2	70			〃		
昭和59年	工学部尾山宿舎排水管布設			20			立会		年報 Ⅳ
昭和60年	工学部尾山宿舎換気取設等			65			〃		年報 Ⅴ
	工学部受水機改修		3	1.5			〃		
	工学部尾山宿舎排水管改修			6			〃		
昭和61年	工学部身体障害者用スロープ取設		4	29			〃		年報 Ⅵ
	情報処理センター(常盤センター) 空調設備取設		5	30			〃		
昭和63年	工学部後却伊上屋新築		6	225			〃		年報 Ⅶ
平成元年	工学部夜間照明装置 及び防球ネット設置		7	2			〃		年報 Ⅷ
	工学部記念植樹		8	2.5			〃		
平成2年	工学部ガス管改修		9	45			〃		年報 Ⅸ
平成3年	大学祭展示物設置		10	7			〃		年報 Ⅹ Ⅰ
平成4年	工学部アレハブ研究・実験棟新築		11	6			試掘		年報 Ⅹ Ⅱ
	工学部・工業短期大学の 改組再編・博士課程設置に伴う 建築物等の新築		12	40			〃		
	工学部および工業短期大学部 職員宿舍取壊		13	9			立会		
	大学祭展示物設置		14	7			〃		
平成5年	工学部アレハブ研究・実験棟新築		15	12			試掘		年報 Ⅹ Ⅲ
	工学部地域共同研究開発 センター新築		16	16			〃		
平成7年	工学部国際交流会館新築		17	8		石蔵	〃		
平成8年	工学部国際交流会館新築		18	352	段状遺構	ナイフ形石蔵、剥片	事前		年報 Ⅹ Ⅳ
平成12年	工学部福利厚生棟新築		19	38.5			試掘		
平成13年	工学部インキュベーション センター新築		20	60			〃		
平成14年	総合研究棟新築		21	13.5			〃		
平成15年	工学部本館改修		22	428			立会		年報 1
平成16年	工学部定速速度圧力腐食割れ 実験室新築		23	20			試掘		年報 2
	工学部光半導体素子実験室新築		24	52.5			〃		
	工学部雨水幹線工事		25	9			立会		
平成17年	工学部職員宿舍排水施設改修		26	65			〃		年報 3
	工学部会議棟身障者スロープ取設置		27	38			〃		
平成18年	総合研究棟改修工事 (Ⅱ期・本館北)		28	280			確認		年報 4
平成19年	工学部総合研究棟改修(Ⅲ期・本館)		29	147			確認		年報 5
平成20年	工学部女子学生寄宿舎新築その他		30	24			予備		年報 6

平成20年度山口大学構内遺跡調査要項

光構内

調査年度	調査名	構内地区別	地点	面積 (㎡)	遺構	遺物	調査 区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属風光小学校 自転車置き場設置		1	6	近世～近代石垣	瓦質土器、陶磁器、瓦	試掘		年報 III
昭和59年	教育学部附属風光小・中学校 遊境伊新宮		2				立会		年報 IV
昭和60年	教育学部附属風光中学校 外灯改修		3	1		土師器	#		年報 V
昭和61年	教育学部附属風光小学校創立 記念事業(フロンズ像建立)		4	2.5		土師器、須恵器	#		年報 VI
昭和62年	教育学部附属風光中学校 グラウンド防球ネット設置		5	2		弥生土器、土師器、 瓦質土器、瓦 土師質土器、瓦	#	御手洗湾採集	年報 VII
昭和63年	教育学部附属風光小学校 遊器具修設		6	10		土師器、土師質土器、 陶磁器	#		年報 VIII
	教育学部附属風光小学校 屋外スピーカー設置		7	0.5		土師器、土師質土器、 須恵器、瓦器、 瓦質土器、陶磁器、 土鏝	#	御手洗湾採集	
平成2年	教育学部附属風光小学校 運動場改修		8	15		縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 施釉陶器、磁器、 土鏝、削片、鉋片	試掘	御手洗湾採集 遺物含む	年報 IX
	教育学部附属風光小学校 運動場改修		9	23	土壇	土師器、須恵器、 須恵器模倣土師器	事前		
平成3年	教育学部附属風光中学校 武道館新宮		10	38	土壇、溝状遺構	土師器、磁器、陶器	試掘		年報 X I
	教育学部附属風光小学校 屋外施設設置		11	18		土師器、石鏝	立会		
	教育学部附属風光中学校 バレーネット新設		12	0.5		土師器	#		
平成4年	教育学部附属風光中学校 武道館新宮		13	500	土壇、柱穴	縄文土器、須恵器、 土師器、瓦器	事前		年報 X II
平成5年	教育学部附属風光中学校 武道館修繕調査		14				立会		年報 X III
	教育学部附属風光中学校 武道館新宮その他		15	6			#		
平成6年	教育医学部附属風光小・中学校 プール新宮給排水管理設		16	19			#		年報 X IV
平成8年	教育学部附属風光小・中学校 園庭(外周フェンス・防球ネット)敷設		17	7		陶磁器	#		年報 X VI
平成10年	教育学部附属風光小学校 給食堂改修		18	6			#		
平成11年	教育学部附属風光小・中学校 上水道(給水管)改修		19	132	古墳包含層、柱穴、 近世～近代土壇	土師器、須恵器、 轉式系土器、 甕形土器、陶器、磁器	試掘 立会		
平成12年	教育学部附属風光小・中学校 護岸石積改修		20		石垣	陶磁器	立会		
平成12年	教育学部附属風光小・中学校 上水道(給水管)改修		21				#		
	教育学部附属風光小学校エレベータ 昇降路等新設		22	169	ピット、土壇、溝	縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器、石器	試掘 立会		年報 I
平成17年	教育学部附属風光小学校 体育器具庫新設		23	53		土師器、須恵器 磁器陶	予備		年報 3
	教育学部附属風光小・中学校護岸改修		24	40	石垣	陶磁器	立会		

平成20年度山口大学構内造跡調査要項

その他構内

調査年度	調査名	構内地区別	面積(m ²)	造構	造物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部オート駐車場 合宿研修所整備	宇部市大字小野 字土井	0.5				立会	年報 IV
昭和60年	学生部オート駐車場 合宿研修所整備	吉敷郡秋徳町 東字中道					〃	年報 V
昭和61年	熊野荘給湯機器取設	山口市熊野町3-21	7				〃	年報 VI
昭和63年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉 6丁目8-29	35	杭			〃	年報 VII
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市旭通9 2丁目3-32 山口市 水の上町6-9	1 7		土師質土器 瓦		〃 6号宿舎 〃 2号宿舎	
平成元年	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市白石 二丁目8-7	1		須恵器、土師器、 土師質土器、 瓦質土器、陶磁器		〃 7号宿舎採集	年報 VIII
平成2年	本部職員宿舎 公共下水道切替	山口市水の上町 6-1	1				〃 1号宿舎	年報 IX
平成3年	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市石観音町 1-25	1.2		陶磁器		〃 7号宿舎	年報 X
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市香山町 3-1	0.5				〃 3号宿舎	
平成4年	湯田宿舎A棟給配水 その他改修	山口市湯田温泉 6丁目	30				〃	年報 XI
	経済学部6号職員宿舎 電柱設置	山口市旭通9 2丁目3-32	0.5				〃	
	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市天花 932-2	1				〃	
平成6年	上野小路共同下水管布設	山口市上野小路 字久保7-4	7				〃	年報 XII
平成15年	湯田宿舎公共下水道接続 及び排水施設改修	山口市湯田温泉 6丁目8-29	44				〃	年報 XIV
平成16年	オート合宿所給排水整備	宇部市大字小野 字土井	80				確認	年報 1
平成17年	湯田宿舎D棟自転車置場新設	山口市湯田温泉 6丁目8-29	11				確認	年報 2
平成17年	経済学部職員宿舎2号フェンス取替	山口市水の上町6-9	1				確認	年報 3
	工学部職員宿舎(尾山) 排水施設改修	宇部市上野町 1-33-34	15				確認	

※文献① 山口大学吉田造跡調査団「吉田造跡発掘調査概報」(山口大学、1976年)

※昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田造跡調査団の関与した調査については、調査名をすべて把握しているわけではなく注意が必要である。

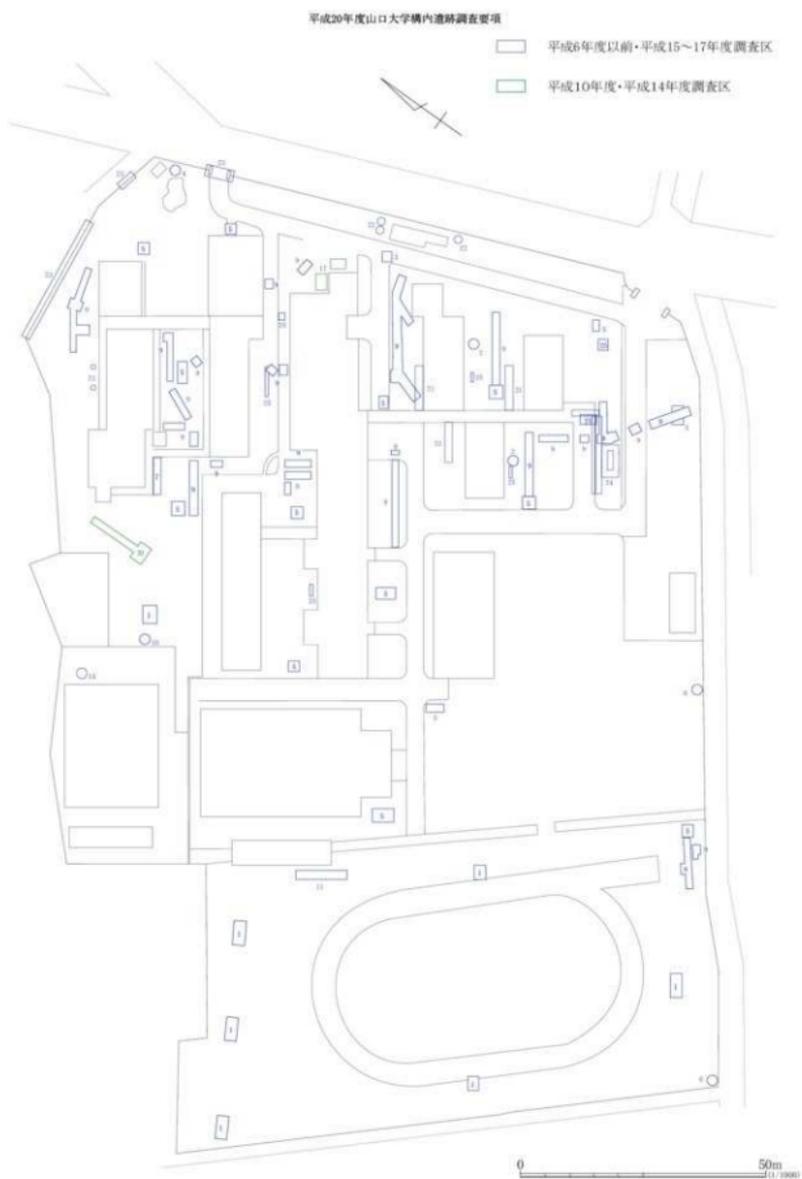


图 108 山口大学白石構内（幼稚園・小学校）調査区位置図

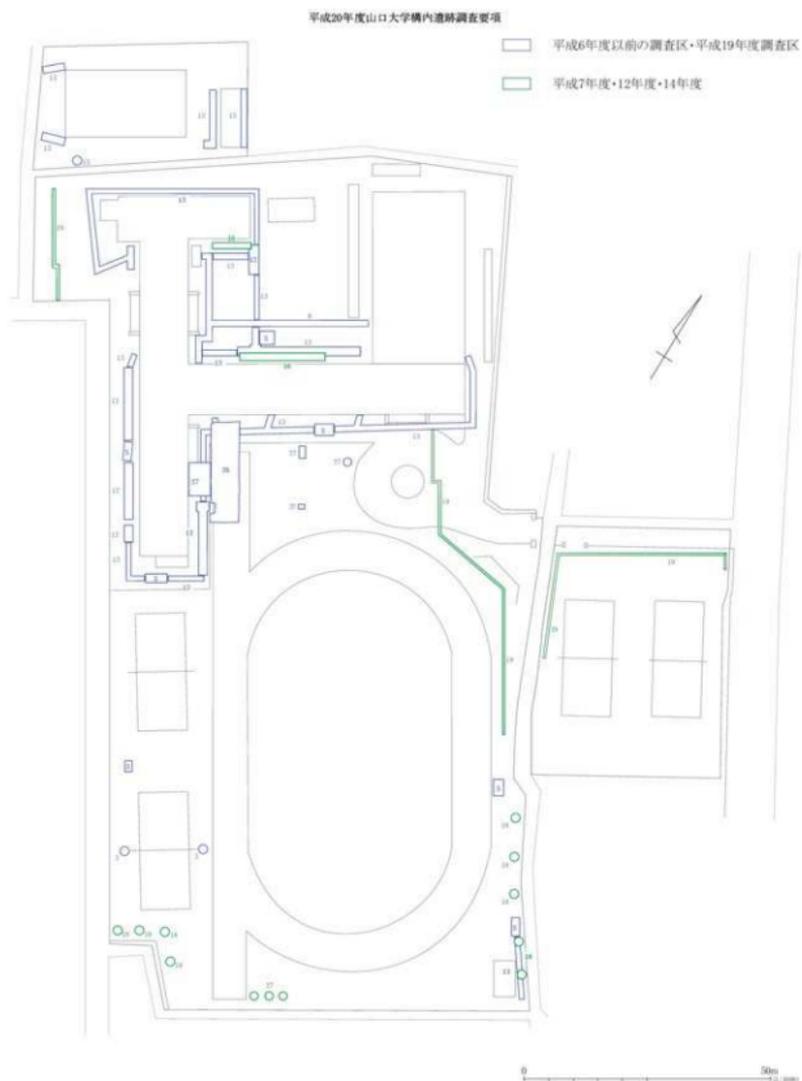


図109 山口大学白石構内（中学校）調査区位置図

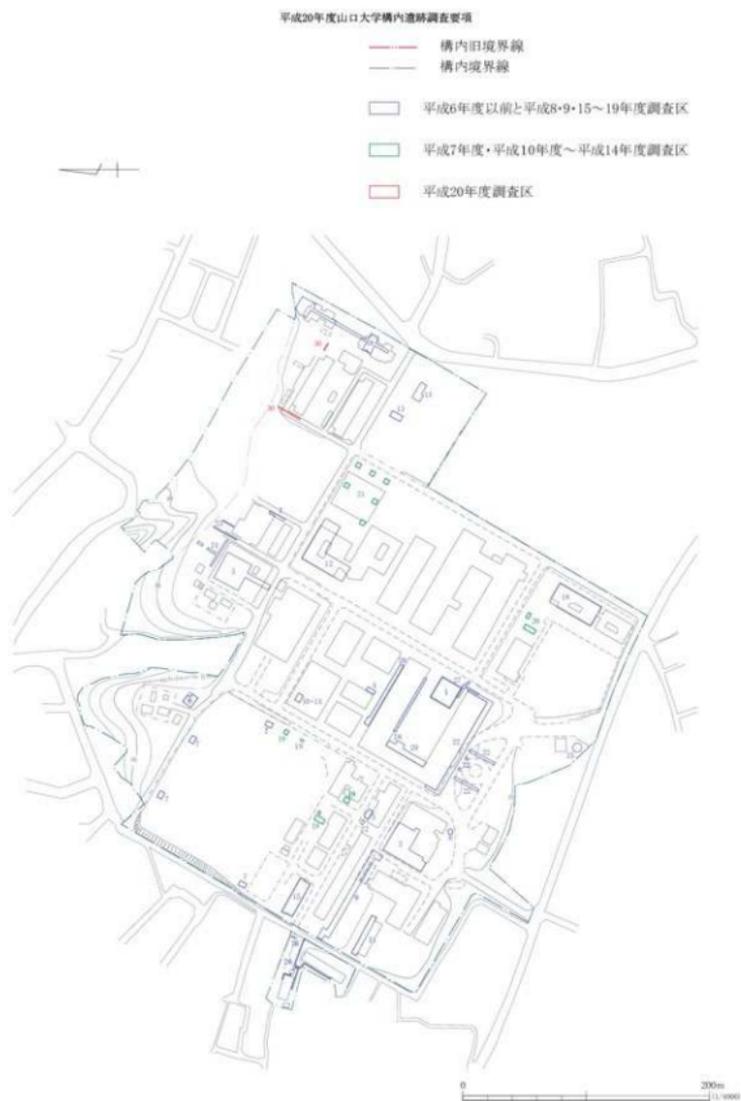


図111 山口大学常盤構内調査区位置図

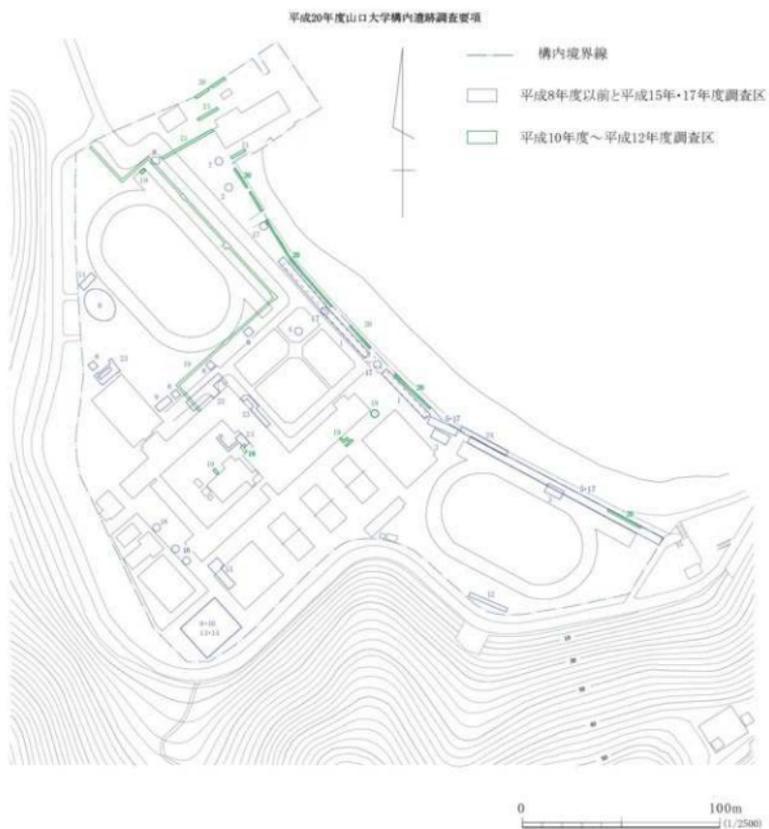


図 112 山口大学光構内調査区位置図

第2章 平成20年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する山口県内の各遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかわる教育活動を行ってきた。より具体的に述べると、展示・公開活動としては当館展示室において年に3回程度の企画展示を行うこと、教育活動としては年に1回の市民対象の公開授業を開催すること、そして学内の希望者に対して考古資料の取り扱い等の技術指導を行うことなどである。

平成20年度は、展示・公開活動として、企画展を3度開催した。また当館初のみであるが、学内の他の学術分野との連携企画展として本学教育学部美術教育教室有志との共催で美術展を開催し、更に地域の考古学研究団体の巡回展示に共催し、会場提供を行った。資料館展示室以外での展覧・イベント活動としては、総合図書館1階ロビーにて資料展示を、木学の祭典である七夕祭、医学部大学祭、工学部大学祭において出張展示を実施した。

社会教育活動に因しては、農学部附属農場との共催により第7回公開授業『古代人の知恵に挑戦！—古代のお米をつくってみよう3—』を開催した。また、山口市立平川中学校・山口大学教育学部附属山口中学校の総合教育の一環として、それぞれ2名の職場体験学習を受け入れた。その他、地域NPO法人との連携で前年度に実施した『築窯ワークショップ～野焼き体験・古代人に挑戦～』の成果展を山口県庁ロビーにて開催した。

当年度は、後半期に発掘調査業務が増加し、休館期間が長期化したため、昨年度に比して資料館展示室の入館者数が激減した(表17・18)。しかしその一方で新たな活動への取り組みを開始しており、次年度以降の活動への布石となる1年であった。以降、その活動内容の詳細を報告する。

表17 埋蔵文化財資料館利用者の推移

年度	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18	平成19	平成20
利用者総数	355	267	191	200	516	142	555	573	913	669	808	1157	1228	776

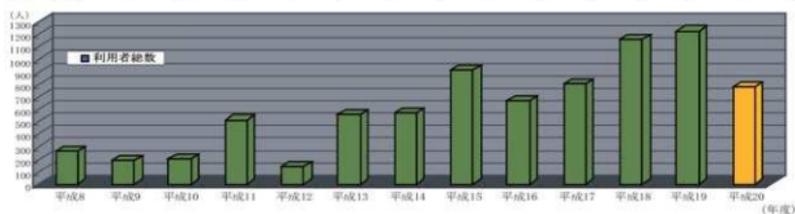
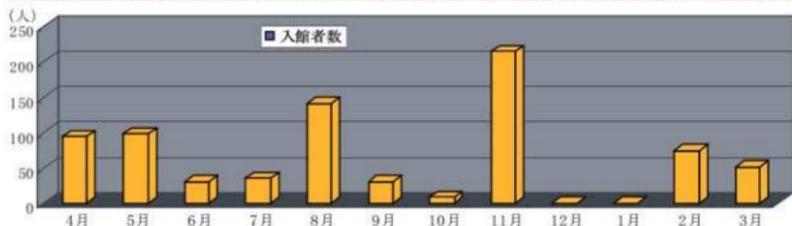


表18 平成20年度月別入館者数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
入館者数	94	98	30	35	141	30	8	215	休館	休館	74	51



第1節 資料館における展示公開活動

第25回企画展『ロマン発見～考古学者の鉄～』を開催

埋蔵文化財資料館には、当館が実施した構内遺跡での発掘調査出土品の他、本学統合移転時の山口大学吉田遺跡調査団により調査された吉田遺跡出土品、そして主として本学名誉教授小野忠熙氏が発掘調査を担当した県内主要遺跡の出土品が収蔵されている。当館はこれらの実物資料を活用し、様々なテーマで企画展示を開催しているが、展示室で実施しているアンケート調査では、以前より「なぜ上の中に遺跡があると分かるのか」「バラバラの土器をどのようにくっつけるのか」「遺跡の発掘に参加してみたい」など、遺跡の発掘調査方法に対する疑問や、発掘体験を希望する声が多く寄せられていた。

そこで平成29年度は、「遺跡とはどのような土地を指すのか」「発掘調査の目的とは」「発掘調査の技術と道具」「調査成果の活用方法」を学ぶ企画展を開催することとした。展示は2部構成とし、遺跡地での発掘調査(外業調査)を対象として第1部『ロマン発見～考古学者の鉄～』を、室内での整理作業から調査報告書の刊行(内業調査)、調査成果の活用までを対象に第2部『ロマン発見～考古学者の筆～』を開催することとなった。

第1部は平成29年4月1日から6月20日の期間で開催した。展示では、まずは本学吉田キャンパスが所在し、遺跡の密集地域でもある山口市平川地区の遺跡分布図を提示し、私たちの日常生活と埋蔵文化財保護活動の関係について説明を行った。その後遺跡が地下に埋もれる要因の解説し、私たちが実際に使用する掘削道具や測量機器の実物を展示した。

35㎡という限られた展示空間で立体物である遺跡の解説、そして発掘調査という行為を表現することはなかなか困難で、考古資料の展示以上に難解な用語が解説パネルに踊ることとなったが、観覧者からは「地道な作業を繰り返すとても根気のいる仕事であることがわかった」「宝探しではなく大切なのは「正確な記録」であることを知った」「これから4年間、資料館に通うことで子どもたちに日本史を楽しく教えられる先生になりたい」などの感想が聞かれおおむね好評であったが、「ホームセンターで買うことができそうな道具ばかりでがっかりした」「体一つでできそうな仕事と思っていたが、発掘調査には意外とお金がかかるんですね」など、意外な視点からの感想も多数寄せられた。実際の発掘調査体験とまではいかないが、多くの方々に遺跡地での発掘調査のイメージをつかんでいただけたものと思っている。



写真 259 第25回企画展ポスター



写真 260 企画展の様相

第26回企画展『ロマン発見～考古学者の筆～』を開催

第2部とした室内での整理作業(内業調査)から発掘調査報告書の刊行、出土資料の保管・活用は第1部以上に地道(地味)で動きの少ない行為であるため、展示における様々な工夫を必要とした。

まず、出土品の洗浄から接合、復元までは繊細な手の作業であるため、当館事務補佐員乃木友香の尽力により多量の「手」の石膏模型を製作し、各作業における手の動きを再現した(写真262)。また、体験型学習コーナーには遺物の接合体験として厚紙製遺物パズルと復元土器を砕いたパズルを用意したが、土器パズルは「復元品」であることがうまく伝わらなかったのか見学者が挑戦する姿をあまり見かけなかったことを記憶している。

遺物の実習作業の説明には使用する様々な道具を展示し、マネキンを用いて実習作業風景を再現した。これらの作業復元展示には見学者も非常に興味を抱いていたようで、「これまでの展示で一番面白かった」「この館は様々な工夫をしていて感心した」など嬉しい声が寄せられたが、一方で最終的な成果物である発掘調査報告書に関しては、「ご自由にお読みください」という声かけにもかかわらず、実際に手に取る方は極めて少なく、あらためて発掘調査報告書と資料の展示公開事業の存在意義を考えさせられる結果となった。

第2部の会期は7月14日から10月10日、第1部とあわせると6ヶ月をかけての開催であったが、総入館者は402名と近年の企画展としては低調であった。企画展示を2部構成としたのはスペースが狭小であることが大きな理由であるが、2部構成にすることでできるだけ多くの学生・教職員・学外者にリーダーとなっていたきたいという気持ちも少なからず存在した。そうした意味においては今回の企画は必ずしも成功とは言えない結果となったが、当館は大学という教育研究機関の博物館施設であることから、研究における基礎資料の獲得方法を丁寧に解説する機会を設けたと考えれば、この一連の企画展には重要な意義があったのではなかろうか。

ただし、当館としては異例の「実物資料を用いない展示」であったため、企画展内容を知らずに見学に訪れた方を失望させた一面もある。毎年の恒例展示とする予定はないが、学生が入れ替わる4年をめどに、開催期間を吟味した上で再度同様の企画を実施したいと思う。

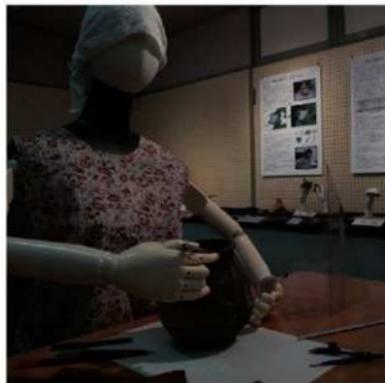


写真261 企画展の模様①



写真262 企画展の模様②

第27回企画展『謎の官衙～山口大学1200年の時空を超えて～』を開催

平成21年3月20日から同年5月29日まで、当館展示室において企画展『謎の官衙～山口大学1200年の時空を超えて～』を開催した。

当初は卒業・入学シーズンと重なる期間での開催となるため、吉田遺跡の概要展示を開催する予定であったが、本書所収の発掘調査概要報告に記述したごとく、年度後半から発掘調査業務が多忙となり、十分な展示準備期間が得られなかったため、急遽平成20年度七夕祭で実施した展示内容(本書254頁参照)を拡充させるかたちで企画展示を構築した。

吉田キャンパスが所在する吉田遺跡の東部から南部に広がる台地には、奈良時代から平安時代にかけて古代官衙が存在したと推定される。展示では「なぜ官衙が存在したと言えるのか」というテーマで、その証拠となる埋蔵文化財資料を種別ごとに以下のように公開した。

- 【1. 文字関連資料が語ること】古代における識字率を解説し、文字資料が存在する意味を説明した上で、吉田遺跡出土の墨書須恵器、木簡、円面硯などの実物展示を行った。
- 【2. 装身具が語ること】吉田遺跡からは、古代官人が身にまとったと考えられる腰帯具および蛇尾が出土している。このコーナーでは、奈良時代の衣服令を解説するとともに、「部見鳥ジューコンが古墳群出土資料も交えて実物展示を行った。
- 【3. 官衙の用途】吉田の地に官衙が存在したという文献的な記録は何も残っていない。このコーナーでは、これまでの発掘調査により出土した銅銚石や輪刃口などを展示し、この地に金属の铸造工房が存在した可能性を提示した。
- 【4. 遺構が語る官衙の存在】吉田キャンパス南部の動物医療センター周辺では、大型掘立柱建物や総柱建物が確認されている。このコーナーでは遺構配置を図示するとともに、大型掘立柱建物に用いられた柱礎を展示した。

この他、多数発見されている製塩土器(六連式製塩土器)片やその復元レプリカ、そして奈良時代前半期と後半期の上器資料の比較展示を行った。

比較的オーソドックスな展示内容であったが、開催期間中の入館者総数は413名に上った。十分な準備が行えぬまま踏み切った展示ではあったが、見学いただいた方々にお礼申し上げたい。



写真 263 第27回企画展ポスター



写真 264 企画展の様様

学内連携企画展『INSTALL -インストールー A・I・A アート・イン・アルケオロジー』を開催

平成21年2月2日から27日の期間、山口大学教育学部美術教育教室の学生有志による美術展を開催した。美術展示は当館初の試みであるが、学内他機関との連携展も初の試みであった。

展示出品者はいずれも教育学部生の植山俊博、山口早紀、勝木寛真、今井祥博、白土由季、梅原望、藤田知美、尻原友里奈の各氏である。展示に向けて彼らから心温まる紹介文をいただいたので以下に転載する。

本来この空間は埋蔵文化財の研究資料を博物館や科学館のような視点で展示、公開している場ですが、あえて美術作品を展示することにより普段の展示とは違った視点を提供する企画です。

近年の美術展では、美術作品をギャラリーや美術館ではなく、あえて博物館や科学館の中に展示するものも増えてきています。その場所固有の考古学や科学に関する文脈と美術作品がもつ意味との結合がどのような科学変化をもたらすのか、ご覧いただけたら幸いです。

埋蔵文化財に特化した当館がこのような企画展示を行うことに対しての賛否は多々あるが、この一文をもって学生教育に対し当館が提供しうる役割の多様性について異論はないものと思う。

筆者は美術に関しては門外漢であり、共催とは名ばかりで展示の一切については学生諸氏にまかせたままであった。唯一「美術展らしい」ポスターの作成に挑んだことをおぼろげながら記憶している。また開催期間中は発掘調査に従事していたため、見学者の様子も実見していない。しかし個人的な感想を述べれば、日々の発掘調査終了後、すでに閉館し、いつもよりモノが少ない展示室の中で、何を考えるでもなく肩並ぶ作品をただただ眺めていた自分（※展示室でするので作業服は脱いでいます）を思い返すと、その姿こそが歴史資料展にはない美術展の素晴らしいさを物語っているのではないかと考えている。

大学が休暇期間となる2月にもかかわらず、会期中74名の方々には展示を見ていただけたのは望外の喜びであった。この年度以降、当館においては学内連携展示が経常的な事業となるが、初回の成功に負うところが大きい。文末になるが、連携展示の開催に多人なる支援をいただいた本学教育学部中野良寿准教授に記して感謝の意を表したい。



写真 265 展示ポスター

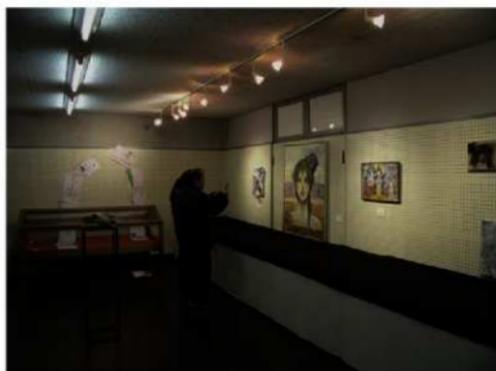


写真 266 展示の様様

地域連携展示 山口考古学フォーラム第1回巡回展示『やまぐち復元～古墳時代の食卓～』を開催
平成20年11月1日から11月28日までの期間、地域の考古学研究団体「山口考古学フォーラム」の巡回展示に共催参加した。

『やまぐち復元～古墳時代の食卓～』は、山口考古学フォーラムが平成19年から平成20年にかけておこなった研究成果を市民向けに展示として表現したもので、当館を皮切りに県内5施設(当館、山口市小郡文化資料館、光市文化センター、なかと歴史民俗資料室、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム)を巡回する企画であった。山口県初の考古資料巡回展と位置づけられ、展示の準備期間、巡回期間を通し共催館として当館も積極的に参加した。

展示内容としては、

1. 古墳時代(西暦400年～600年)の食器と調理器の変化
2. 古墳時代の人々は何を食べていたのか
3. 調理方法の変化による居住空間の変化

などについて実物の考古資料や模型、解説パネルを用いて解説したものであったが、当館独自のミニコーナーを設け、古墳時代以降、7世紀から8世紀にかけての山口大学構内遺跡出土土器を展示した。

また、オープンは本学大学祭である郷山祭にあたるため、イベントとして総合図書館2階グループ学習室にて記念講演『古墳時代の山口市』を館員の藤野好博が行い、展示室での資料解説を横山が行った。その他、同じく共催館である土井ヶ浜遺跡・人類学から提供を受けた『卑弥呼も食べた 古代の赤米 100g』をオープニングプレゼントとした効果もあってか、オープン初日だけで100名を超える入館者に恵まれた。

実物資料とともに各種模型を組み合わせた資料展示に対し、見学者の反応は極めて良好であり、展示物ばかりでなく無料配布された展示パンフレットも大人子供問わず好評であった。

地域の考古学研究団体との連携展示も当館として初の試みであったが、山口考古学フォーラム諸氏のみならず、その後の巡回先である様々な館と館員の方々とも交流を果たせ、当館としても有意義な取り組みであったと考える。また多人数で構築された展示と接触したことで得られた多々の展示技術を、今後の展示活動に生かして行く所存である。



写真 267 展示の様相①



写真 268 展示の様相②

大学情報機構2008 in 七夕 Fes.にて資料展示『KANGA～吉田キャンパスに眠る官衙～』を開催

平成20年7月5日十曜日に開催された山口大学七夕祭(山口大学学生祭)に当館が所属する大学情報機構もイベント参加することになり、総合図書館は図書館内にて『図書館ツアー』『オリジナルしおりを作ろう!』『思い山の日の新聞を読んでみよう!』を、メディア基盤センターはメディア基盤センター棟1階にて公開生放送『Live On Radio in TANABATA Fes.』を、そして当館は総合図書館2階一般閲覧室を借出し企画展示『KANGA～吉田キャンパスに眠る官衙～』を開催した。

埋蔵文化財資料館は以前より七夕祭当日に臨時開館していたが、当館が祭会場の範囲外に位置するため、残念ながら例年学生および学外者の入館は少数であった。平成20年度七夕祭は資料館の展示替え期間に当たったこともあり、初めて総合図書館内で企画展示を開催することとなった。

展示では、吉田キャンパス出土の黒書須恵器、木簡、円面硯、ものさし、鈿帯、製塩土器など古代官衙と関連する資料とともに、奈良時代から平安時代にかけての須恵器、土師器、埴輪陶器、黒色土器などを展示した。また昭和42年(1967)、山口大学吉田地区統合移転時に撮影された山口大学吉田遺跡調査団の発掘調査記録フィルムの上映も行った。その他、図書館での展示ということを意識し、山口県内の官衙関連遺跡の発掘調査報告書や概説書の閲覧コーナーも設置した。35㎡という当館展示室の狭小スペースに収められる日常の鬱憤を晴らすかのごとく充実した内容の展示を構成することができたと記憶している。

当日は晴天に恵まれた反面、図書館への入館者が少なく、メディア基盤センター主催のラジオ放送にも出演させていただき展示広報を行ったものの、見学者は練らであった。

大学情報機構では、平成17年度より処山祭(山口大学吉田キャンパス大学祭)にイベント参加しており、平成19年度にはその活動を医学祭(山口大学小串キャンパス大学祭)、常盤祭(山口大学常盤キャンパス大学祭)にまで拡大させた。平成20年度は、その取り組みを七夕祭にまで広げてみたが、問題点として事前広報の不十分さ、そして各祭の主体となる学生との連携不足が浮き彫りとなった。今後事業を継続する上で、まず「誰のために」「何のために」実施するのかを明確にした上で、着実な準備のもとに開催する必要があることを痛感した次第である。



写真 269 展示の様相①



写真 270 展示の様相②

大学情報機構2008 in 医学 Fes.にて資料展示『太古の技術革新～やよいとき登場～』を開催

昨年度に引き続き、平成20年11月8日十曜日に医学祭(山口大学小串キャンパス大学祭)にて大学情報機構主催のイベントを開催した。

会場は医学祭メインステージ裏手に位置する畜仁会記念会館1階ロビーとなり、大学情報機構3施設はそれぞれの特徴を発揮すべく、図書館はパネル及び図書展示『ふるさと文学者の横顔～山口市、宇部市にゆかりのある人たち～』を、メディア基盤センターは『お祭広場ライブ中継』を、そして当館は資料展示『太古の技術革新～やよいとき登場～』を開催した。

当館では、田畑直彦館員の指導の下、公開授業の一環として平成16年度より継続的に弥生土器の焼成方法と推定される「土器の覆い焼き」実験に取り組んでいる。その成果報告は既刊の山口大学理蔵文化財資料館年報に詳しいが、この度の資料展示では、限られたスペースながらも弥生土器実物資料と実見により焼成した資料との比較展示を行うことで実験成果を公開し、焼成方法の視覚的表現として覆い焼き模型とともに焼成実験のビデオ上映した。さらに「弥生土器覆い焼き説」の論議の一端を担っている東アジアに見られる土器焼成民俗事例の解説パネル展示も行った。

医学部内での考古学展示に若干場違いな感があったことも事実であるが、昨年度の参加経験により医学祭が「医学部生の研究・日常の問題意識の公開の場」であることを強く感じたため、当館としても研究・業務内容を直接的に公開する手法を採用した。

当日は生憎の曇天で小雨が降り続き、会場も導線的に人目に付きにくい場所であったが、70名の方々に見学いただいた。多くは本学学生と近隣市民の方々であり、展示物に対して様々な質問を受けた。わずか半日ばかりのイベントであったが、医学祭に参加した実感を得るとともに、充実した時間を過ごすことができた。機会を与えていただいた医学部生、医学部教職員の方々に深くお礼申し上げたい。



写真 271 展示の様相①



写真 272 展示の様相②

大学情報機構2008 in 常盤 Fes.にて企画展示『わたしの仕事展』を開催

医学祭と同様昨年度に引き続き、平成20年11月16日（日）に常盤祭（山口大学常盤キャンパス大学祭）にて大学情報機構主催のイベントを開催した。

会場も昨年同様常盤キャンパス講義棟D棟と決定され、図書館はパネル及び図書展示『ふるさと文学者の横顔～山口市・宇部市にゆかりのある人たち～』を、メディア基盤センターは『ビデオで学ぶネット社会を生き抜く力』の上映を、そして当館は当年度開催した第25回企画展『ロマン発見～考古学者の録～』と第26回企画展『ロマン発見～考古学者の筆～』を再構築し、『私の仕事展』という名称で企画展示を行った。

昨年度までの経験により、本学大学祭は3会場（吉田・小串・常盤）ともにそれぞれの特色があると印象受けていた。中でも常盤祭はイベント色が強く感じられたため、今回の展示では「いかに見学者の興味を引くか」に重点を置き、展示を構成した。

展示では「遺跡とは何か」「埋蔵文化財調査の方法」など、熟読しなくては理解できない解説パネルを極力省略化し、現地調査に用いる記録用のフィルムカメラや測量機器、遺物の実測道具、報告書編集用のPC機器など各種道具類を充実させ、体験コーナーを増やすことにした。

大学情報機構のイベント会場が常盤祭メイン会場への通り道となっていることもあり、開催時間（12時～18時）中、約160名もの方々に展示見学いただいた。各展示物ともそれぞれ興味を集めていたが、中でも測量機器オートレベルは老若男女問わず大人気であり、スタッフを持つマネキンを相手に疑似測量を楽しむ姿が見られた。「日頃工事現場で目にする器械を実際に体験できて嬉しい」との声が多数聞かれ、「発掘調査なんですけれども…」と複雑な思いを抱いたことが思い出される。これも工学部ならではの現象と前向きに受け止めたい。

七夕祭、医学祭、常盤祭を通して、あらためてイベント会場での埋蔵文化財展示の難しさを実感した。「実物から私たちの遠い祖先の生活を学び、考える」という考古資料展示の本道が実施しがたい環境下で、それでも考古学・埋蔵文化財に目を向けていただけるような展示の工夫が必要と考える。次年度以降、ワークショップ開催の可否も含めて検討課題となった。



写真 273 展示の様相①



写真 274 展示の様相②

第8回～第9回大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催

平成17年度より吉田キャンパス総合図書館内にて展示ケース1台を借用し、大学情報機構埋蔵文化財特別展を開催している。平成20年度も、図書館1階第2閲覧室にて2回の特別展を開催した。

第8回大学情報機構埋蔵文化財特別展「あしもとの遺跡シリーズ5 中近世の吉田遺跡」

「あしもとの遺跡シリーズ」では、第1回から4回まで「弥生時代の吉田遺跡」「古墳時代の吉田遺跡」「古代の吉田遺跡」「白石遺跡(山口大学教育学部附属山口中学校・小学校・幼稚園敷地)」を紹介してきた。シリーズ第5回は「中近世の吉田遺跡」をテーマとし、平成20年4月1日から7月4日までの期間で開催することとなった。

中近世の吉田キャンパス敷地に関して、近世は文書や絵図では現在の大学本部棟および農学部附属農機棟周辺に農村が形成される他は全域が農地であるとされ、発掘調査成果からもほぼ確実視されている一方で、中世の様相は未だ不明確な状況にある。わずかに本部2号館敷地で溝で区画された屋敷跡が、メディア基盤センター棟敷地とキャンパス南方の附属農場飼料園で中世期に成立した可能性のある集落跡が確認されているが、他の地では遺物包含層等から若干の中世土器が出土しているに過ぎない。今回の資料展示では以上の遺跡の現状を紹介したが、図らずも平成20年度後半期の発掘調査により、吉田遺跡において中世集落2ヶ所が発見されるに至った(本書所収)。今回の展示をもって「あしもとの遺跡シリーズ吉田遺跡」は終了予定であったが、今後新知見を交えた展示の必要性が生じたことは嬉しい誤算であった。

第9回大学情報機構埋蔵文化財特別展「あしもとの遺跡シリーズ6 山口大学医学部構内遺跡」

「あしもとの遺跡シリーズ」第6回は、本学小串キャンパスが所在する山口大学医学部構内遺跡をテーマとした。山口大学医学部構内遺跡は、明確な遺構は確認されていないが、包含層中から縄文時代後～晩期の土器をはじめ弥生～古墳時代の土器・石器、中～近世の土器や土製品、珍しい資料としては磁器製棋駒など豊富な遺物が出土することで知られている。吉田キャンパスで勉学に励む学生には馴染みの少ない場所ではあるが、こうした資料展示を開催することで多地域に及ぶ本学キャンパス間の交流が深まれば幸いである。



写真 275 第8回大学情報機構埋蔵文化財特別展



写真 276 第9回大学情報機構埋蔵文化財特別展

第2節 資料館における社会貢献活動

第8回公開授業『古代人の知恵に挑戦！—古代のお米をつくってみよう—』を開催

はじめに

当館では、平成13年度より、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆様に身近に感じていただくことを目的として、公開授業を開催している。

第8回目となる平成20年度の公開授業は、昨年度に引き続き、日本のお米のルーツとされる赤米をつくり、土器で炊いて食べてみるという内容である。今回は、埋蔵文化財資料館と山口大学農学部との共催で、吉田橋内の山口大学農学部実習農場で延べ4回に渡って行い、小学生5人、保護者・教育学部学生など21名、総勢26名の皆様に参加していただいた。以下、授業内容を報告する。

5月24日(土)—田植え—

好天の中、農学部附属農場の長砂技術専門職員に代かきをしていただいた約80㎡の水田に田植えを行った。田植えは、田植え綱を基準に横一列に並んで行い、1箇所3本の苗を植えた。初めて体験した参加者は、足が予想以上に泥に埋まるため動きづらそうであったが、次第に慣れてくると泥の感触を楽しんでいるように見受けられた。

7月19日(土)—雑草取り—

稲は約50～60cmに生長した。参加者はまず、長砂技術専門職員から稲の状態と雑草についての解説を受けた。水田には一面に「コナギ」を中心とする雑草が多く生えたため、稲は雑草に栄養分を取られたためか、葉がやや黄色い状態となっていた。その後、参加者全員で協力して除草を行った。雑草を抜くと、根が深く張っていることが分かり、稲が栄養不足になる状況を知ることができた。除草後は、実習室に移動し、アワビの貝殻を材料として、秋の収穫に備えた貝廬「づくり」を行った。

9月20日(土)—収穫—

昨年同様、大きな台風もなく、秋晴れの晴天の中、無事に収穫を迎えることができた。最終的に稲は長さ約90～110cmまで生長した。稲の成熟状況にはばらつきがあり、すでに熟したものもあったが、まだ青い穂も散見される状態であった。収穫には参加者が製作した貝廬「づくり」、模造した木廬「づくり」などを使用して徳摘みを行い、残りは鎌で根刈りをしてはぜ架けをした。参加者からは「自分でつくった貝廬「づくり」がとても収穫しやすいので、驚いた」「貝廬「づくり」・木廬「づくり」・石廬「づくり」のうちでは石廬「づくり」が使いやすかった」などの声が聞かれた。

10月4日(土)—脱穀・籾すり、赤米を食べる—

前回同様、秋晴れの晴天の中、公開授業最終日を迎えることができた。参加者は、まず、足踏み脱穀機による脱穀や唐箕による選別を体験した後、箒こぎ、臼と杵による籾すり、てみとザルによる選別を体験した。参加者は足踏み脱穀機・唐箕を使用するのと比較して、臼と杵による籾すり、てみとザルによる選別が大変手間と根気がいることを体感した様子で、最後にはかなり疲れた様子であった。残りの籾は精米機で籾すりをを行い、全収穫量を計量した結果、玄米で約11.4kgであった。

昼食には土器で白米4合に赤米0.5合を混ぜたご飯と赤米のみ3合のご飯を炊飯した。炊きたての赤米を試食すると、現在のお米よりもやや硬いものの、ほのかに甘い味であった。そのほか、おかずにはアユの塩焼きや磯鍋、ホクズガニのスープ、シジミのすまし汁をつくった。これらも大変美味しく、参加者に好評であった。



写真277 種まき (4月21日)



写真278 代かき (5月23日)



写真279 苗の観察 (5月24日)



写真280 田植え (5月24日)



写真281 雑草の説明 (7月19日)



写真282 雑草取り (7月19日)



写真283 貝脛丁づくり (7月19日)



写真284 赤米の花 (8月8日)



写真285 稲の観察 (9月20日)



写真286 石庖丁による収穫 (9月20日)



写真287 臼と杵による脱穀・初すり (10月4日)



写真288 土器による炊飯 (10月4日)



写真289 食事風景 (10月4日)



写真290 参加者の皆さん (10月4日)

公開授業を終えて

公開授業終了後、参加者からは「古代米をつくることを通じて様々な体験をすることができ、とても勉強になりました」「初すりをして赤米ができた時には単純にうれしかった」「土器で炊いたお米は本当においしかったです」などの声が寄せられ、授業の目的を達成することができたと感じている。

また、今回は、水田に雑草が非常に多かったこと、稲の生育にこれまで以上のばらつきがあったことが印象的であった。今回は前回までと会場が変わり、農学部附属農場での開催となったが、同農場の教職員をはじめ多くの方々に支えられて、盛況のうちに公開授業を終了することができた。館員一同心より御礼申し上げます。

『野焼き体験・古代人に挑戦』作品展を共催にて開催

平成19年度に実施した地域NPO法人「子どもとともに山口県の文化を育てる会」との共催企画『築窯ワークショップ～野焼き体験・古代人に挑戦～』にて焼成した粘土作品の成果展を、平成20年9月8日から9月19日の期間、山口県庁1階ロビーにて開催した。

ワークショップでの模様は『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成19年度－』に詳細を記したが、1月末の寒風の下、NPO法人スタッフ、当館スタッフ、そして参加者で5基もの覆い焼き窯を築き、約23時間かけて作品を焼き上げたことを、残暑厳しい晴天の下で懐かしく思い出しながら展示の準備を行った。

県庁職員には多少申し訳ないが、日頃重苦しい雰囲気につつまれている山口県庁ロビーが、子どもたちの楽しい気持ち、真剣な眼差しが見事に表現された粘土作品群に満たされ、雰囲気が一変していることが写真291、292からお分かりいただけると思う。

この様な環境下、当館の展示行為が子どもたちの美しい芸術作品の妨げにならない方が良いが、との危惧もあったが、共同で焼成した記念にと思い、ワークショップ時に焼成した復元弥生土器と窯体の残欠、そして覆い焼き模型を当館ブースにて展示した。また、小難しい解説パネルは不要と考えたが、当館の共催意義を鑑み、弥生土器の実物写真パネルと、木学学生の弥生人扮装写真パネルも展示させていただいた。

山口県庁は平日のみ入庁可能であるため、展示期間中会場を訪れることはできなかった。会期終了後、会場に設置された感想ノートを確認し、展示が成功裏に終了したことを知った次第である。視察に訪れて下さった方々には、本書にてお礼申し上げたい。

また、2年間に渡る取り組みを支えていただいたNPO法人スタッフ、地域の皆さま、参加校諸先生方、そして何より作品をつくった子どもたちに感謝の気持ちを伝えたいと思う。今後も各種団体から同様の協力依頼があった場合は積極的に参加してみたい。

[註]

- 1) 横山成己(2011)『築窯ワークショップ～野焼き体験・古代人に挑戦』を共催、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成19年度－』、山口



写真 291 展示の様相①



写真 292 展示の様相②

中学生の職場体験を受け入れ

平成20年8月26日から27日の両日にかけて山口市立平川中学校生徒2名、平成21年2月2日から3日の両日にかけて山口大学教育学部附属山口中学校生徒2名に対し、職場体験の受け入れを行った。

平川中学校生徒2名は、初日午前には遺跡の発掘調査方法の学習し、午後から(財)山口県埋蔵文化財センターの協力により朝田墳墓群の発掘調査を体験した。2日午前には吉田遺跡出土遺物の抜合・復元作業を、午後から復元部の彩色作業を体験した。両名とも残念ながら本来は当館ではなく他分野の職場体験を希望したとのことであったが、根気のいる作業を熱心かつ丁寧にこなす姿が見られた。

山口中学校生徒2名の受け入れ期間は当館発掘調査期間と重なったため、両日吉田遺跡にて職場体験を行う予定であったが、初日が雨天により発掘中止となったため、急遽室内で遺物への注記作業、報告書刊行のための実測図割付、トレース作業を体験した。2日目は好天に恵まれたため、終日吉田遺跡にて遺構削削を体験した。後日山口中学校長より「1名は将来考古学者になりたいと言っていた」と聞くに及び、当館による職場体験受け入れが生徒にとって有意義なものであったことを実感した。

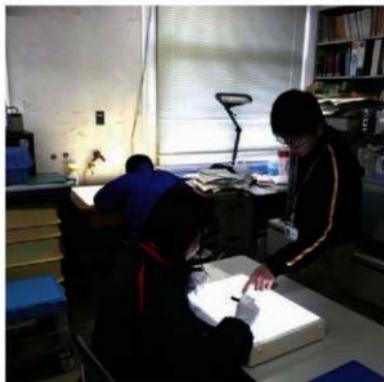


写真 293 教育学部附属山口中学校生徒の職場体験①



写真 294 教育学部附属山口中学校生徒の職場体験②



写真 295 山口市立平川中学校生徒の職場体験①



写真 296 山口市立平川中学校生徒の職場体験②

付篇

周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年

田畑 直彦

1. はじめに

山口県においては、山木 一朗氏(山木1979・2003・2005)、乗安和二氏(乗安1990)、吉瀬勝彦氏(吉瀬1996)、石井龍彦氏(石井2004)により、弥生時代後期から終末期の編年案が提示されている。しかし、他府県と比較して良好な資料が不足しているため、土器編年が立ち遅れている感否めない。筆者もかつて弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器編年案、弥生時代後期から終末期の土器編年案を提示したが(田畑2001b・田畑2006)、十分なものではなく、その後の資料の増加等によって、補足・修正が必要になった。今後の検討の余地も多いが、以下では、山口県東部(周防)を対象とし、土器様相の異なる西部・東部別の弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年案を提示したい。編年の大作は乗安氏・石井氏の編年案に準じたものであるが、今回、一部の資料、器種の位置づけ、併行関係について再検討を行った。

2. 編年の指標

1996年、松山市文化財センターで開催された古代学協会四国支部第10回松山大会では、『弥生後期の瀬戸内海—土器・青銅器・鉄器からみたその流域と交通—』がテーマとなった。このうち、第1テーマとして、「土器からみた弥生後期の瀬戸内海」が取り上げられ、福岡県(筑前)から大阪府(河内)に至る弥生時代中期末から終末期に至る土器編年案と併行関係表(田崎1996a)、椽人・模倣されたと考えられる資料についてのコメント表が示された。山口県においては、吉瀬勝彦氏が土器編年を担当したが、当時は現在よりも資料が少なかったため、他地域と比較して大まかな編年案が提示されるにとどまった(吉瀬1996)。上記大会で提示された土器編年案と併行関係表について、筆者は中期末と後期初頭、終末期に検討の余地があると考え、大枠については現在でも有効と考える。よって、今回の編年にあたっては、他地域との併行関係や交流状況を把握するため、同編年案と対比させたい。

周防の弥生土器は隣接地域からの影響等による地域色を持つため、筆者は、西部(旧吉敷郡・佐波郡)、東部(旧大島郡・玖珂郡・熊毛郡・都濃郡)に分けて土器編年を行う必要があると考えている。西部では弥生時代中期に須玖系土器が分布し、後期に至っても北部九州から一定の影響を受けるほか、瀬戸内系の土器も見られるなど、複雑な様相を呈する。東部は西部と比較して北部九州の影響が少なく、愛媛県中予地域(以下中予地域)との交流が密である。このため、周防内においても土器の比較が難しい場合がある。しかし、高坏は他の器種と比較して型式変化が明瞭な上、比較的地域色が少ないため、北部九州及び山口県内における併行関係の基準とすることができる。また、複合口縁壺など一部の器種では中予地域と近似する点が多いため、これらを併行関係を求める根拠とした。

3. 弥生時代中期末から後期初頭の土器の位置づけについて

筆者が周防・長門の弥生時代中期の土器編年案を発表した際(田畑2004)、中期Ⅳ期の土器には宮ヶ久保遺跡出土土器などに北部九州の高三瀨式併行の土器が含まれているとの指摘を受けた。しかし、周防・長門においては良好な一括資料に恵まれないこともあり、現時点では須玖Ⅱ式(新段階)と高三瀨式(古段階)の土器及び各々に伴う在来系土器を識別することは難しい。また、弥生時代中期に盛行す

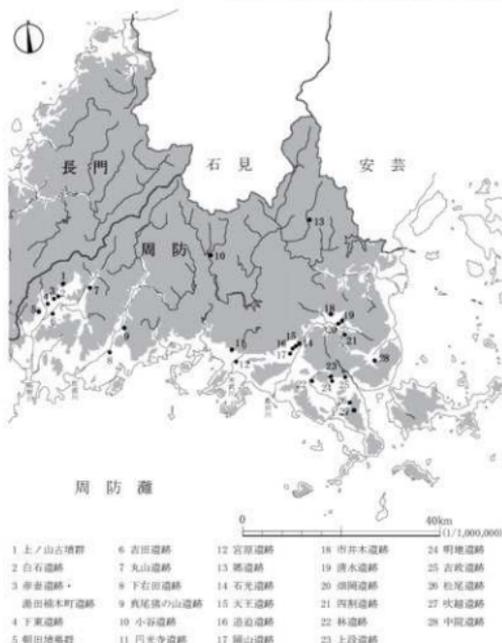


図 113 関連遺跡分布図

2004b)ため、確定はできない。以上の問題の解決には、良好な資料の蓄積を待つよりほかない状況である。本稿の編年案では、古代学協会四国支部第10回松山大会で提示された土器編年案との併行関係を提示するが、上記の通り、中期末から後期初頭の位置づけについては、今後の検討が必要と考えている。

なお、以下の編年案の提示にあたっては、土器に全形が不明なもの、変遷が不明瞭なものも見受けられることから、細かな器種分類は行わず、代表的なものを対象として行いたい。

4. 周防西部の編年

中期末

山口市古山遺跡第1地区A区ビット(豆谷1993)、山口市下東遺跡第1号溝状遺構(磯部1992)出土土器を基準資料とする。また、真尾猪の山遺跡SB1出土土器(谷口ほか2007)もこの段階に位置づけられる。周防独自の垂下口縁壺、遠賀川以東系の影響を受けた須玖系土器から構成されるが、下東遺跡第1号溝状遺構、真尾猪の山遺跡SB1のように、須玖系土器のみを出土する遺構もある。須玖系土器は遠賀川以東系の特徴を持つ須玖Ⅱ式新段階から高三瀨式古段階併行のものである。

後期Ⅰ-1期

垂下口縁壺が衰退・消滅する段階である。少量の資料ではあるが、山口市丸山遺跡1号土壇出土土器(山口市教育委員会1982)を基準資料とする。垂下口縁壺は垂下部が小さいもの(図119-1)、ヨコナ

る垂下口縁壺が衰退・消滅するのは次段階であることから、筆者はここに前期を認め、後期Ⅰ-1期とした。須玖Ⅱ式(新段階)から高三瀨式(古段階)の間は土器の変化に漸移的な部分があり、実際、山口県の上器と関係の深い遠賀川以東地域の須玖式土器においても、研究者間で位置づけに判断が分かれる資料もある。古代学協会四国支部第10回松山大会の併行関係表で提示されている通り、前期が認められるのは次の高三瀨式古段階と新段階の間である。

また、周防と伊予との併行関係を考えると、筆者は田崎氏(田崎1998)が指摘したように、高三瀨式古段階と瀬戸内のⅣ期の上器が併行する可能性が高いと考えるが、未だ「福岡県下で中期後半の須玖Ⅱ式土器に、瀬戸内Ⅳ期の典型的な間線文土器は伴出していない」(梅木

デにより口縁部上端が立ち上がるもの(図119-3)が見られる。口縁部上端が立ち上がるものは内折口縁部の影響で中期前半に見られるほか、以後も散見される。このため、いちがいに言えないが、この段階のものは、北部九州系もしくは瀬戸内系土器の影響を受けた可能性がある。資料の増加を待ちたい。また、小片であるが、6条のヘラ描沈線を持つ後期初頃の瀬戸内系長頸壺の頸部片(図115-4)がある。その他の器種、北部九州系土器の埴輪は不明である。

後期Ⅰ-2期

複合口縁壺が成立する段階である。防府市下右田遺跡SK990、SD221出土土器(原田1999)を基準資料とする。また、下右田遺跡SD630出土土器(本山2003)もこの段階の資料を含む。北部九州系・瀬戸内系土器で構成される。北部九州系の壺(図119-8)は鋤先口縁が袋状を呈し、上に立ち上がる形態となる。これは後述するように、高三階式新段階の袋状口縁壺の影響を受けたものと考えられる。よって、前稿では下右田遺跡SK990出土土器を後期Ⅰ-1期としていたが(田畑2004)、後期Ⅰ-2期に位置づけを変更する。瀬戸内系土器には拡張した口縁部に擬回線文(図119-10)回線文(図115-10)を施す壺が見られる。そして、口縁部の立ち上がりが未発達な複合口縁壺(図119-9)が出現する。

ここで複合口縁壺の成立過程について周防東部を含めて考えてみたい。周防においては、初瀬形態の複合口縁壺として、周南市日光寺遺跡第4号土壘出土の壺(図114-4)が知られている。従来、複合口縁壺は、前述した立ち上がりを持つ垂下口縁壺が祖形と理解されることが多かった(山本1979・乗安1990)。しかし、垂下口縁壺は後期Ⅰ-1期で消滅してしまう。また、図114-4の口縁部は、大きく広がる口縁部を持つ垂下口縁壺とは形態が異なり、直接の関連は考えにくい。筆者は、北部九州系土器、瀬戸内系土器とも口縁部に立ち上がりを持つことから、初瀬期の複合口縁壺の口縁部形態は北部九州系・瀬戸内系土器の影響を受けたものとする。また、この段階から後期Ⅱ-1期の複合口縁壺の口縁部・頸部には沈線を持つものが主休である(図114-4~7)ことから、直接的には瀬戸内系長頸壺の影響が大きかったと推測する。

瀬戸内系長頸壺は周防全域において散発的に出土している。このうち、図115-1~4・9は形態が岡山県の上東式に近似している。しかし、垂直に近い角度で立ち上がる口縁部形態、3のように沈線間に刺突を施す点は上東式と異なる。また、1・9のように内面にケズリを施さないものも存在する。以上の点からこれらは搬入品ではなく、倣製品と考えられる。一方、10は口縁部に回線を施し、内面に顕著なケズリが認められることから搬入品の可能性が高い。器形・文様等の特徴から広島県(備後～安芸)付近からの搬入が考えられるが、詳細は不明である。

次に上記の上器の併行関係について述べる。北部九州系土器で長門・周防と関係が深いのは豊前地域の土器であるが、この地域では後期Ⅰ-1期に袋状口縁壺はほとんど出土せず、後期Ⅰ-2期(高三階式新段階)から出土例が増加する(田崎1996)。以上から、北部九州系土器は高三階式新段階に併行すると考えられる。また、下右田遺跡第Ⅲ地区川河川砂層土器群1(山口県教育委員会1979)では、瀬戸内系長頸壺(図115-9)とKIVb式ないしKIVc式(橋口1979)に比定できる大型甕が共存している。KIVbないしKIVc式の甕は高三階式新段階に伴う(田崎1996)。また、周防でこの時期に出土している瀬戸内系長頸壺は平井編年(平井1996)の後期Ⅰ-2期の土器との関連が考えられるので、併行関係に矛盾はない。よって、図114-1~4は同時期に存在したと考えられる。後期Ⅰ-2期においては、中予地域においても、回線文系土器が見られる。また、複合口縁壺が大型品に出現すること、形態や文様等に共通する点が多いので(梅木1996b)、上記の過程による複合口縁壺の成立範囲は周防西部から中予地域に及んでいた可能性がある。しかし、中予地域の初瀬期の複合口縁壺には頸部に貼付

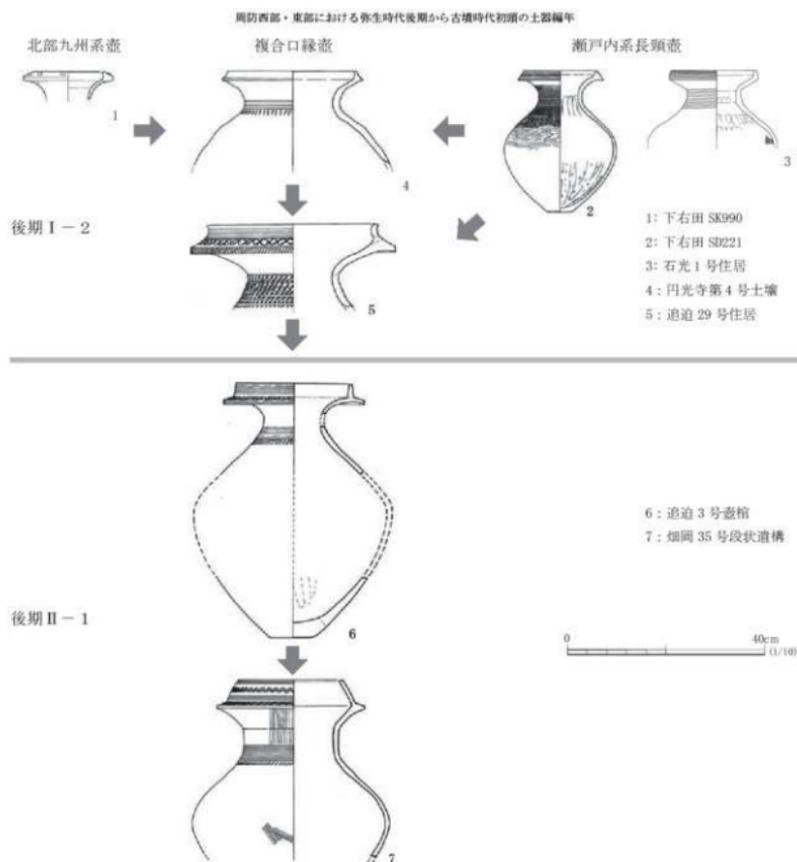


図 114 複合口縁壺の成立過程

突帯を持つものも存在するので(梅木1996b)、防予系複合口縁壺の成立には複数の系譜が存在したのであろう。

壺は瀬戸内の壺(図119-12)、「く」の字口縁で肩が張る胴部を持ち、刺突文を施すもの(図119-13)がある。

鉢・高杯の遺構に伴う資料はない。高杯は口縁部が屈曲して短く立ち上がるもの(図119-14)が存在すると考えられる。

後期 II - 1 期

複合口縁壺が定型化する段階であるが、資料不足により詳細は定かではない。周防東部の状況を参考にとすると、複合口縁壺には口縁部・頸部に多条沈線を持つもの(図119-15)が存在すると考えられる。また、北部九州系(下大隈式古段階)の複合口縁壺が存在することも予想される。

この段階の資料として、特殊な資料であるが、下右田遺跡14号住居跡出土土器(山口県教育委員会1973・図119-16~20)をあげておきたい。同住居跡出土土器は山陰系土器(図119-18・19)、豊前系高杯(図119-20)、在来系土器として少量の短頸壺、長頸壺、甕で構成される。山陰系・在来系とも甕の内面にはケズリが施される。山陰系土器は羽場遺跡SB 4・8出土土器(乘安ほか1989)と近似する。

後期Ⅱ-2期

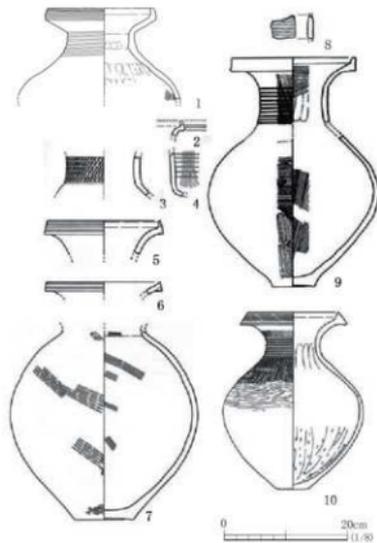
複合口縁壺の盛行期である。基準資料として、下右田遺跡S1695出土土器があるが、資料不足により詳細は不明が多い。壺の様相は不明である。甕には「く」の字口縁のものがある(図119-21)。高杯(図119-22)は屈曲部から口縁部が短く外反するもので、後述するAタイプに相当する。また、坏部が椀状のもの(図119-23)もある。その他、受部に角状の特記を持つ支脚(図119-24)が出現する。

終末期Ⅰ期

壺・甕の胴部中位が張り出すとともに、丸底化が進行する段階である。基準資料として下右田遺跡S11030・1049出土土器(原田1999)がある。また時期幅を持つが、吉田遺跡本部2号館第1号土壇出土土器(河村1990)、下右田遺跡SD240出土土器、S D260出土土器(原田1999)がある。

筆者はかつて吉田遺跡本部2号館第1号土壇出土土器を後期後半を主体とする資料と位置づけた(田畑2001a)。しかし、その後、同資料は後期後半から終末期前半に位置づけられている豊前地域の高島式土器(小田1976)に近似しているのではないかと指摘を受けた。そこで、高島式の基準資料で終末期前半に位置づけられている高島遺跡第2遺構出土土器と吉田遺跡本部2号館第1号土壇出土土器を図上で比較してみたい。高島式土器は、複合口縁壺口縁部の施文、長頸壺、鉢、「半胴長胴外反口縁」の甕(図116-9)、高杯に東九州的要素が強く認められ、土井ヶ浜IV式、吹越遺跡出土土器との共通性も指摘されている(小田1976)。また、「深皿状坏複合外反」の高杯(図116-15・16)、「丸底球胴外反口縁叩き調整」の甕(図116-10・11)に北部・中部九州との「緊密な関係」が指摘されており、「瀬戸内から東九州に足がかりをもつ土器群」、「北部、中部九州に広く分布するにいたった土器群」、「福岡地方の終末期土器と緊密な関係をもつ土器群」の組み合わせで設定された(小田1976)。

まず、複合口縁壺を見ると、複合口縁部が中位で屈曲して立ち上がる形状、端部の折り曲げ(図116-2・4~6)口縁部の施文〔無文のもの(図116-1・2)、波状文を持つもの(図116-4~6)〕、斜めないし直立する頸部の形状が吉田遺跡出土土器と共通する。一方、甕においては、高島式土器が胴部外面にタタキを施すものがあるのに対して、吉田遺跡出土土器にはなく、短い「く」の字口縁を持ち、胴部が強く張り出す甕(図117-8・9)が見られる点が異なる。



1: 石光1号住居(田畑実測) 9: 下右田第Ⅲ地区
2~4: 石光4号段状遺構 10: 旧河川跡砂礫土器群Ⅰ
5~7: 吉田Ⅱ-19区1号土壇 11: 下右田SD221

図115 後期Ⅰ-1~2期の瀬戸内系長頸壺

高杯においては、高島式土器が屈曲部から口縁部が緩やかに外反するもの(図116-15・16)であるのに対して、吉田遺跡では、Aタイプ:屈曲部が鋭く口縁部が短く外反するもの(図117-15・16)、Bタイプ:高島式土器と近似した口縁部を持つもの(図117-17~20)、Cタイプ:Bタイプよりも口縁部が長くなり、屈曲が緩やかになるもの(図117-21・22)がある。Aタイプは筑前の下大隈式新段階・北豊前のIV期、Bタイプは西新町式古段階・北豊前のV期、Cタイプは西新町式新段階・北豊前のVI期に見られるものである。AタイプからCタイプへの変遷は下右田遺跡、長門の土井ヶ浜IV式(坪井1968)、柳瀬遺跡(濱崎1997)でも認められる。周防東部では、後述するように中予地域の影響を受けた高杯が見られるため注意が必要であるが、豊前の影響を受けたと見られる高杯が吹越遺跡、吉政遺跡で出土しており、近似した変遷をたどることができる。

一方、裾部の形態を見ると、高島式土器には内湾しながら立ち上がるもの(図116-15~18)があるが、吉田遺跡出土の高杯裾部(図117-24~26)も裾部の形態は異なるものの、同様に内湾しながら立ち上がる。以上から、壺・高杯には近似した形態が多いと言える。山口県内では、秋根遺跡LK128から高島式の壺(伊東ほか1977)、川棚条早跡から碗形高杯(藤本2000)が出土していることから、高島式土器の影響が長門に及んでいたことが知られているが、周防西部においても一定の影響を与えていたであろう。

さて、吉田遺跡出土の高杯口縁部を見ると、高島式よりも古く位置づけられるAタイプが2点、高島式と近似するBタイプが4点、高島式土器よりも新しいCタイプが2点見られる。よって、吉田遺跡出土土器は高島遺跡第2遺構とはほぼ同時期の資料が主体であり、A、Cタイプを含むことから、前後の段階の資料を若干含むものと考えられる。

次に終末期I期からII期にかけての高杯の変遷について述べたい。筆者これまで上記について、口縁部が長くなることを重視してきた。しかし、終末期II期に位置づけられる山口市朝田墳墓群Ⅶ地区SK9(小南ほか2009)からは、Cタイプと見られるもの(図118-11・12)とともに、短い口縁部を持つが、屈曲が緩やかなもの(図118-9・10)が出土している。本稿ではこれらをDタイプと仮称しておく。以上から、前述した傾向はあるものの、高杯の口縁部が全て長くなるわけではなく、屈曲が失われていくことが重要な指標になると考えられる。今回、上記の変遷観に基づき、前稿で終末期I期に位置づけた防府市下右田遺跡SD240出土土器については、終末期I~II期の時間幅を持つ資料ととらえ、下関市柳瀬遺跡D地区LS001出土土器(濱崎1997)、下関市吉永遺跡Ⅲ一東地区SB-6出土土器(西田ほか1999)については終末期II期に位置づけを変更したい。

続いて、この段階の上器の概要について述べる。複合口縁壺は梅木氏の分類(梅木1996b)を参考にすると、頸部が長いもの(図119-25~28)と短いもの(図119-29)に大別できる。以下では前者をA類、後者をB類と仮称する。口縁部は無文か、波状文・歯文等を施す。また、頸部に沈線を持つものはほとんどなく、無文か貼付突帯を持つものが主となる。なお、現時点ではA類のうち、長く直立した頸部を持つ「佐波型」複合口縁壺(図119-28・山本1979)はこの段階に位置づけられる。ただし、直立した頸部を持つ複合口縁壺は長門、周防東部で後期II-1期から見られるため、出現時期はさらに遡る可能性がある。また、完形品がほとんどないため、識別基準及びその定義内容について今後の検討が必要である。「佐波型」複合口縁壺の成立には下大隈式の影響を考える説があるが(岩崎2008)、頸頭部の形態から、長頸壺や器台、周防東部・松山平野に見られる「細長頸複合口縁壺」(梅木2002)の影響を受けた可能性も考慮すべきであろう。下右田遺跡出土の複合口縁壺を見ると、「佐波型」複合口縁壺を含め、①口縁部を折り曲げることが少ない、②頸部は無文か断面三角形の貼付突帯を持つ、③平底が

周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初期の土器編年

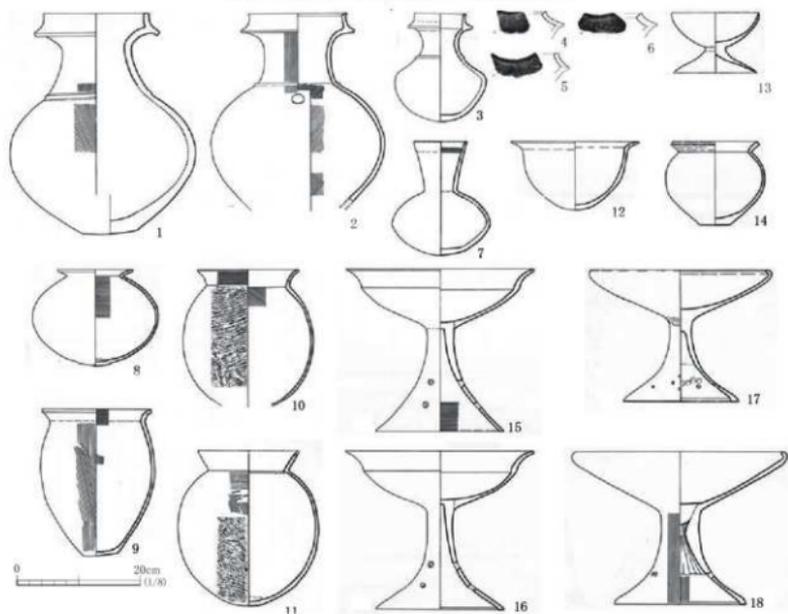


図 116 北九州市高島遺跡第 2 遺構出土土器 (小田 1976 より抜粋)

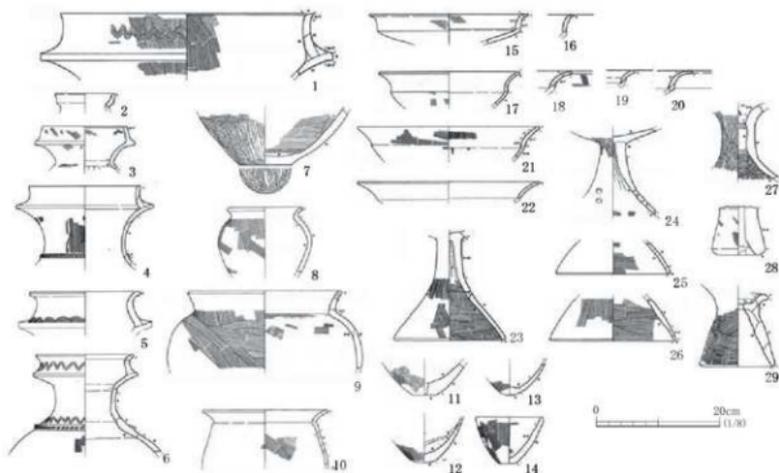


図 117 吉田遺跡本部 2 号館第 1 号土坑出土土器 (河村 1990 より抜粋)

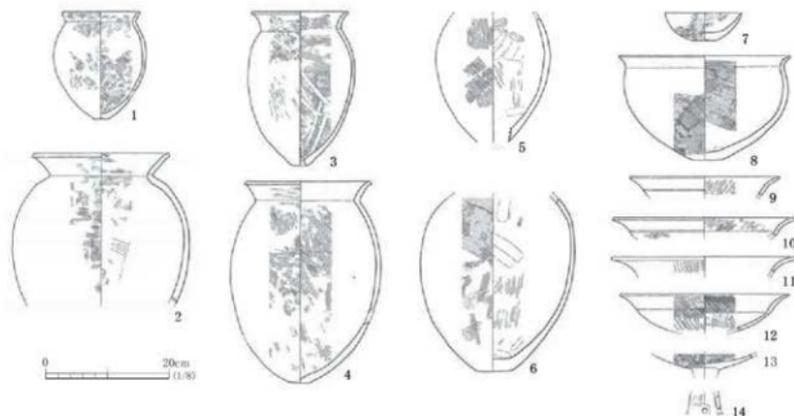


図118 朝田墳墓群Ⅴ地区SK9出土土器(小南ほか2009より抜粋・一部改変)

多いという特徴があり、後述する周防東部の複合口縁壺とは様相が異なっている。下右田遺跡は終末期Ⅰ～Ⅱ期の溝や竪穴住居跡が多数検出された山口県最大級の集落跡であることから、上記の特徴は佐波川下流域で共通する地域色と考えられる。この段階においては、山口盆地で高品式系の複合口縁壺、佐波川下流域では下右田遺跡を中心として「佐波型」複合口縁壺が分布していたと見られるが、地理的環境から西新町式系、周防東部系ものを含め、複数系譜の複合口縁壺が併存し、小地域により土器様相が異なっていた可能性が高い。

甕は短い口縁部を持ち、肩の張る胴部を持つもの(図119-32・33)がある。また、胴部中位以下に最大径を持つ甕(図119-34)もこの段階には出現している。ただし、周防東部のように口縁部が舌状に長くなるものは少ない。いずれも胴部外面はハケ、内面には荒いケズリが施される。

鉢は直口のもの(図119-35)と「く」の字口縁を持ち、肩部が張るもの(図119-36)があり、小型品は丸底化が進行する。高杯は前述したBタイプ(図117-17・図119-37)がこの段階に位置づけられる。その他、尊前系高杯(図119-39)も見られる。大型器台(図119-42)はこの段階から次段階にかけて存在するが、周防東部の状況から出現時期は後期Ⅱ-2期に遡る可能性が高い。支脚には角状突起を持つもの(図119-45)、受部が「し」字状に傾斜するもの(図119-46)等があり、前者はこの段階から出現する。

終末期Ⅱ期

前段階と比較して壺・甕・鉢の胴部下半の膨らみが増し、丸底化が進行する段階である。ただし、周防東部と比較して一定量平底が残る傾向がある。朝田墳墓群Ⅴ地区SK9出土土器(小南2009)を基準資料とする。また、胴部・底部形態が近似する朝田墳墓群Ⅱ地区SB10出土土器(中村ほか1983)、高杯の形態から朝田墳墓群Ⅴ地区3区A・B群(村岡ほか1986)もこの段階に位置づける。下右田遺跡SD240出土土器もこの段階の土器を含む。

複合口縁壺は資料不足により状況が不明瞭であるが、下右田遺跡SD240出土土器からA類は「佐波型」を含めて頸部が短くなると推測される。また、周防東部系のB類が増加すると推測される。

甕は短い口縁部に肩の張る胴部を持つもの(図118-2)と、口縁部がやや長く、胴部中位以下に最

大径を持つもの(図118-3・4)がある。内外面の調整はハケメが主体であるが、外面にタタキを残すものも見られる(図118-6)。また、下右田遺跡SD240出土土器には内面にケズリを施すものもある。全体的に小さな平底を持つものが多い。

鉢は直口のもの(図118-7)とくゞの字口縁のもの(図118-8)がある。高杯は前述した通り、C・Dタイプが見られる(図118-9~12)。器台・支脚も前段階に引き続き存在すると考えられる。

古墳前期Ⅰ期

畿内系土器が出現する段階である。山口市湯田楠木町遺跡土器捨て場出土土器(内山1975・山畑2012)、山口市赤妻遺跡SB2山土土器(増野ほか1990)を基準資料とする。また、朝田墳墓群Ⅲ B地区2号壺棺(中村ほか1979)、朝田墳墓群Ⅴ地区3区C群出土土器(村岡ほか1986)、山口市上ノ山古墳群台上築出土土器(植崎ほか1994)もこの段階に位置づけられる。

湯田楠木町遺跡土器捨て場出土土器は主に畿内系の土器で構成され、他には在来系の壺(図119-65)、少量の山陰系土器が見られるに過ぎない。壺には二重口縁壺(図119-58)、直口壺(図119-61・62)、広口壺(図119-63)がある。甕には布留系甕(図119-66)、伝統的V様式系甕(図119-67・68)がある。このほか、図示していないが、山陰系甕も少量見られる。鉢には口縁部が内湾ぎみに立ち上がるもの(図119-70)、小型丸底鉢(図119-71)、直口で外面にタタキを残すもの(図119-72)がある。高杯は布留系の高杯(図119-75・76)、伝統的V様式系高杯(図119-77)、小型高杯(図119-78)がある。器台には、小型器台(図119-79)、山陰系鼓形器台(図119-80)がある。以上の土器は畿内の布留0式後半から布留1式前半(寺沢1986)に併行する内容を持つ。なお、近似する土器を出土した山口市下東遺跡KD 4・5は首長居館の一部と推測される方形環溝であった可能性が高いと指摘されていることから(北島2011)、畿内系土器の出現には政治的背景も考慮すべきであろう。一方、湯田楠木町遺跡から約1.5km東に位置する山口市白石遺跡の弥生時代終末期～古墳時代前期の土器には、山陰系土器の割合が高く(河村・古賀1992、小南2006)、土器様相に違いが見られる。この他、在来系土器が一定量を占める土器群の存在も予想される。以上の状況は、当該期における集団の交流、出自を鋭敏に反映したものと考えられ、今後も時期区分と合わせて慎重な検討が必要である。

次に在来系土器について述べる。複合口縁壺は現状でB類のみ確認できる。前段階と比較して頸部径が広がり、球胴化する(図119-60)。土器棺に使用された大型壺以外の様相は不明であるが、複合口縁壺はこの段階をもって消滅すると考えられる。その他、壺には長頸壺(図119-64)がある。在来系高杯の口縁部は屈曲がほぼなくなり、内湾ぎみに立ち上がる(図119-73・74)。恐らく布留系高杯の影響を受けたものと考えられる。以上の在来系土器の様相には不明点が多い。

5. 周防東部の編年

中期末

田布施町明地遺跡SK01出土土器(岩崎1994・梅木2004a)、周南市小谷遺跡SB05・10出土土器(小野ほか1995)を基準資料とする。明地遺跡SK01からは伊予型高杯が出土しており、中予地域との併行関係が確認できる資料である(梅木2004a)。小谷遺跡SB05・10出土土器は垂下口縁壺等の在来系土器と須玖Ⅱ式新段階から高三滝式古段階の須玖系土器から構成される。現時点で須玖系土器がまとまって出土する遺跡の東限である。甕の胴部が強く張り出すものが見られるため、明地遺跡SK01出土土器よりもやや後出する資料と見られる。

後期Ⅰ-1期

垂下口縁壺が衰退・消滅し、瀬戸内系土器の存在が顕著となる段階である。柳井市中院遺跡SD1出土土器を基準資料とする。垂下口縁壺は垂下部が小さくなったもの(図120-1)、胴部片(図120-2)が見られるにすぎず、この段階をもって消滅するものと考えられる。土器の主体は瀬戸内系土器で、拡張した口縁部に凹線文を持つもの(図120-3)、頸部に沈線を持つもの(図120-3・4)があり、無文のもの(図120-5)も少量存在する。壺は中期末の系譜を引くもので、肩部が張り、上底のものが主体である(図120-7)。内面にはケズリを施すものが多い。

鉢は直口のもの(図120-8)と「く」の字口縁を持ち、肩部が張るもの(図120-9)がある。高杯には伊予系高杯(梅木2004a)(図121-85・86)と「く」の字口縁を持つ坏部に短い脚部がつくもの(図121-87)がある。図121-85は駒先状の口縁部に須玖系土器の影響が考えられる。一方、文様は中子地域の後期Ⅰ-1(梅木1996)の伊予型高杯と近似するが、胎上は他と変わらないことから、模倣品と考えられる(梅木2004a)。図120-86は明地遺跡SB32出土である。この遺構からは次段階の土器も出土しているが、この高杯は坏部・脚部に沈線を施す特徴から中期末から後期前半に位置づけられる(梅木2004a)。

後期Ⅰ-2期

複合口縁壺が出現するが、定型化していない段階である。周南市日光寺遺跡第4号土壺(新谷ほか1987)、岩国市郷遺跡SB302出土土器(藤田ほか2004)、周南市追迫遺跡29号住居跡出土土器(石井ほか1988)を基準資料とする。このほか、周南市石光遺跡4号段状遺構、包含層出土土器(石井ほか1990)、明地遺跡SB32出土土器(岩崎1994)の一部もこの段階の資料と考えられる。上記の資料のうち、追迫遺跡29号住居跡出土土器を新相ととらえる。また、石光遺跡包含層出土土器はやや発達した形態と見られる複合口縁壺の口縁部片を含むことから、新相までの時期幅を持つ資料ととらえる。

複合口縁壺は、複合口縁部の立ち上がり小さく、頸部の形状が分かる2点はいずれも頸部に沈線を施している。図114-4と5を比較すると、口縁部の立ち上がり頸部が長くなることから5が新しい傾向を持つ。ただし、頸部全面に施文すること、口縁部の立ち上がりが小さいことから、定型化した複合口縁壺とは言えない。その他、壺には瀬戸内系長頸壺(図120-13・14)、口縁部に凹線文を施す壺(図120-15)も存在する。頸部に沈線を施す壺(図120-16)、無文の壺(図120-17)には前段階と比較して、頸胴部界で明瞭に肩曲するものが見られるようになる。壺は胴部・底部形態、調整は前段階と近似するものの、口縁部を短く「く」の字状に折り曲げ、内面に明瞭な稜を持つもの(図120-19)が主体となる。また瀬戸内の影響により、口唇部に擬凹線(図120-19)、刺突文(図120-21)を施すものも見られる。新相においては、口縁部がやや長くなり、肩部の張りが弱いもの(図120-20)が出現する。

鉢は直口のもの(図120-22)と壺と同様に口縁部を短く「く」の字状に折り曲げ、内面に明瞭な稜を持つもの(図120-23)がある。高杯は傘形が分かるものは少ない。図121-90は形状としては台付鉢ととらえるべきかもしれないが、文様が失われて形態が鈍重になる点で伊予系高杯の退化形態と考えられる。器台はこの段階の新相から確実に存在する。図121-92・93は器高20cm前後の中型品と見られる。

後期Ⅱ-1期

定型化した複合口縁壺が出現する段階である。岩国市畑岡遺跡35号段状遺構出土土器(今地ほか1990)を基準資料とする。また、同遺跡27号段状遺構、岩国市市井木遺跡1号竈穴住居跡出土土器(石井ほか1997)もこの段階の資料ととらえる。

複合口縁壺は、現時点ではA項のみ確認でき、追迫遺跡3~5号壺棺墓(石井ほか1988)に見られるように、この段階から土器棺墓に使用されるようになる。また、口径10cm以下の小型品も存在する。なお、

特殊な複合口縁壺に中予地域にも分布する「細長頸複合口縁壺」(梅木2002)がある(図121-25)。

複合口縁壺は型式学的に、図114-6(追迫遺跡3号壺棺)のように頸部がくびれるものが古く、7(畑岡遺跡35号段状遺構)のように頸部が直立するものが新しいと考えられる。7の複合口縁部には、櫛描沈線文、波状文、頸部に櫛描沈線文、刺突文を施す。なお、中予では複合口縁部に波状文が見られるのは、次段階に併行すると考える後期Ⅱ-2期からである(梅木1996)。しかし、広島県西部(以下安芸地域)では、後期前半(安芸後期Ⅰ-2期～Ⅱ-1期)に壺の胴部に櫛描波状文が多用されていることから(伊藤1996)、その影響を受けた可能性があること、次段階の清水遺跡第1・第2環濠出土土器には頸部に多条沈線を持つ複合口縁壺が見られないことから、畑岡遺跡35号段状遺構出土土器をこの段階の新相に位置づけておきたい。単口縁の中型壺は資料がないため、様相は不明である。他に長頸壺(図120-26)、短頸壺(図120-27)がこの段階から出現する。また、畑岡遺跡27号段状遺構からは複合口縁壺の頸部と形態が共通し、上半部に多条の櫛描沈線文を施す壺が出土している。

壺は小型に上底が残るが、中型には前段階までの弥生中期の系譜を引く瞭然な上底はなくなり、わずかな上底を早するものが主体となる(図120-28～30)。小型・中型とも肩部の張り強いもの(図120-28・29)が主体であるが、肩部の張りが弱いもの(図120-30)が増加傾向にある。その他、前段階に引き続き、胴部に刺突文を施すものも存在する(図120-31・32)。

鉢は直口のもの(図120-33)、口縁部を「く」の字状に折り曲げるもの(図120-34・35)がある。高杯には口縁部に段を持ち屈曲するものがある(図121-94)。これは次段階に見られる甕状口縁の高杯(図121-101)とともに、島田川上流域固有の型式と見られる。この他、中予地域と近似した口縁部が大きく外反する高杯(図121-95)も存在する。器台は前段階に引き続き中型品が存在する(図121-96・97)。

後期Ⅱ-2期

複合口縁壺、器台が増加する段階である。畑岡遺跡29号段状遺構(今地ほか1990)、岩国市四割遺跡2号竪穴住居跡出土土器(和田ほか1991)を基準資料とする。また、岩国市清水遺跡第1環濠、第2環濠、6号土壇出土土器(石井ほか1989)もこの時期が主体の資料ととらえる。

複合口縁壺はA類に加えて、B類が出現する。B類には小型(図120-36・37)と中・大型(図120-39)がある。複合口縁部が袋状を呈するもの(図120-36)は中予地域にも見られる(梅木1996)。A・B類とも頸部に沈線を施すものは極めて少なく、無文もしくは1条の貼付突帯を持つものが多くなる。また、貼付突帯の形状は扁平となり、突帯上に斜格子文を刻むものが終末Ⅱ期にかけて主体となる。複合口縁部には波状文を施すものは多いが、沈線を持つものは少なくなる。この他、前段階に引き続き、「細長頸複合口縁壺」(図120-40)が存在する。単口縁の壺には複合口縁壺と形態が共通するもの(図120-41)が清水遺跡から多数出土しており、バリエーションに富む。壺は前段階と同じ形態のものが引き続き存在するが、胴部最大径の位置が胴部中位付近に下がるものが多くなる(図120-45)。外面はハケ、内面はケズリが施されるものが多い。

鉢は直口のもの(図120-47)、口縁部を「く」の字状に折り曲げるもの(図120-50～52)がある。後者のうち、口縁部がやや長くなり、小さな平底を持つもの(図120-51)は次段階以降に多く見られるようになる。高杯は、前述した島田川上流域独自の型式(図121-100・101)、周防で主体となる口縁部が「く」の字状に外反するものが見られる(図121-99)。後者は畑岡遺跡・清水遺跡出土土器には見られず、このことが内遺跡出土土器の位置づけを難しくしている。図121-99は四割遺跡2号竪穴住居跡出土の高杯で、口縁部形態は前述したBタイプに近似する。しかし、裾部が内湾せずに広がる形状が中予地域の高杯に近似することから、中予地域の影響を受けた高杯と考えられる。この段階に併行する中予地域の

高杯には口縁部が「く」の字状に外反するが、高島式土器の高杯よりも外反度の強いものが見られ(梅木1996b)、近似した高杯として松山市桑原田中遺跡SK1出土土器(松村1992第107図25)が挙げられる。この他、高杯には豊前系(図121-98)も存在する。

器台には小型(図121-102)のほか、大型器台(図121-103~105)があり、現時点で後者はこの段階から存在が確認できる。大型器台のうち、図121-106のように胴部に突帯を持つものは周防独自の特徴であるが(松村2008)、器台の口縁部~頸部の形態は複合口縁壺B類と近似している。複合口縁壺B類及び頸部に斜格子文を刻む扁平な貼付突帯が後期Ⅱ-2期に出現することから、このタイプの大型器台の出現時期は後期Ⅱ-2期が上限になると考えられる。なお、追迫遺跡2号、22号住居跡出土の器台はこの段階から終末Ⅰ期、畑遺跡22号段状遺構出土の器台はこの段階に属すると考える。支脚はこの段階から受部に突起を持つもの(図121-107)が出現する。

終末期Ⅰ期

清水遺跡9号段状遺構、清水遺跡2号住居跡、清水遺跡12号住居跡(石井ほか1989)、追迫遺跡2号住居跡(今地ほか1990)出土土器を古和、「吹越式」の標識資料とされている平生町吹越遺跡A地区第4号住居跡出土土器(山本ほか1972)を新相ととらえる。

清水遺跡出土土器は従来、後期末に位置づけられることが多い資料である(乗安1990・石井2004など)。しかし、環壕埋没後、環壕埋土を掘りこむ堅穴住居跡が検出されていることから、少なくとも2時期に大別できる。また、土器には丸底化したものが見られる。上記から、本稿では、環壕以外の遺構から出土した土器のうち、新しい傾向が見受けられるものを終末Ⅰ期の土器としてとらえる。これらの土器を吹越遺跡吹越遺跡A地区第4号住居跡出土土器と比較すると、丸底化が顕著な点で吹越遺跡出土土器が新しい傾向を持つ。また、清水遺跡出土土器には内面にケズリが施されるものが多いのに対して、吹越遺跡出土土器はハケメが主体であるという違いもある。ただし、吹越遺跡出土土器は各器種の量が少ないため、公表されているような土器だけで構成されていなかった可能性がある。また、前述したように高杯の型式が異なるため、清水遺跡出土土器と併行関係を詳細に検討することが難しい。このため、現状では上記のように仮に区分し、資料が増加した段階で再検討を行うのが妥当と考える。

複合口縁壺はA類、B類があるが、前段階と比較して底部が小さくなり丸底化が進行する。A類には口縁部先端を強めに折り曲げるもの(図120-54・63)も見られる。図120-63は吹越遺跡3号住居跡出土であるが、この段階に属するものと考えられる(乗安1990)。これに近似した口縁部片は平生町松尾遺跡1号住居跡(山口大学人文学部考古学研究室1984)、下松市宮原遺跡7号住居跡(山口県教育委員会1973)からも出土しており、終末期Ⅱ期にかけて存在する。また、この壺は豊後の後期Ⅲ期からⅣ期の壺に類似しているとの指摘もあり(田崎1996a)、豊後との関連にも注意が必要である。A・B類の比率は不明であるが、B類が多くなる。終末期Ⅰ期からⅡ期のB類は周防西部にも分布するほか、長門においても上井ヶ浜Ⅳ式(坪井1968)、突抜遺跡Ⅱ地区DW-4出土土器(渡辺1985)にも見られ、広く分布する。その他、複合口縁壺と形態が共通する甲口縁の壺(図120-65・66)、長頸壺(図120-56)も見られる。

甕は胴部最大径の位置が胴部中位にあり、新相になるにつれて長胴化・丸底化が進行し、口縁部は舌状に長くなる(図120-68)。一方で口縁部を短く折り曲げるものも存在する(図120-57)。

鉢は直口のもの(図120-59)、口縁部を「く」の字状に折り曲げるもの(図120-60~62)がある。高杯のうち、口縁部が「く」の字状に外反する高杯は、前段階と比較して口縁部が長くなるCタイプとなり、新相では口縁部の外反度が強くなる(図121-113)。図121-113は小田富士雄氏が指摘するように裾部形態が内湾傾向にあることから(小田1976)、高島式土器の影響を受けたものと考えられる。島田川上流

域に見られる銚状口縁の高杯(図121-109)は前段階と比較して口縁部が緩やかに外反し、坏部が深くなるが、これは口縁部が「く」の字状に外反する高杯の影響であろう。その他、椀状の坏部に低い脚部を持つもの(図121-112)がある。

器台は共作土器が少ないため、詳細に時期を絞り込めないものが多いが、前段階に引き続き盛行していると思われる。支脚は受部に突起を持つもの(図121-111)・持たないもの(図121-114)がある。なお、周防西部で多く見られる角状突起を持つ支脚の存在は未確認である。

終末期Ⅱ期

前段階と比較して壺・甕・鉢の胴部下半の膨らみが増し、丸底化が進行する段階である。柳井市吉政遺跡SB06・09出土土器(豊高ほか1996)、周南市岡山遺跡Ⅱ地区第2号台状壺、第3号台状壺2号主体出土土器(河島ほか1987)を基準資料とする。複合口縁壺と高杯の出土量が少ないため、基準資料には加えなかったが、光市林遺跡SB-6出土土器(尾崎ほか1993)、宮原遺跡7号住居跡出土土器(山口県教育委員会1973)もこの段階に位置づけられると考える。

複合口縁壺はB類が主体のようである。甕の様相は不明確であるが、胴部最大径の位置が胴部中心以下にあり、前段階と同様、口縁部の短いもの(図120-75)と長いもの(図120-76)がある。75は風化が激しく、内外面の調整がはっきりしない。76は口縁部の残存箇所が少なく、岡のように内湾する箇所と直線的に外反する箇所があり、底部付近にはタキが残る。鉢は直口のもの(図120-77)、口縁部が長くなり、前曲が緩くなるもの(図121-115)がある。また、脚部が中実の伝統的V様式系高杯がある(図121-115)。器台は引き続き存在する(図121-117)。支脚は出土例が少ないため、詳細は不明である。宮原遺跡7号住居跡では角状突起を持つ支脚が出土している。

古墳前期Ⅰ期

畿内系土器が出現する段階である。現時点では、布留0式から1式前半の時期幅でしかとらえることができない。迫道遺跡32・34号出土土器(石井ほか1988)を基準資料とするが、土器量は少ない。また、田布施町上段遺跡からはこの段階の壺棺蓋が検出されている(図120-81・谷口1994)。

複合口縁壺は球胴化し、この段階をもって消滅する。小・中型壺の様相は不明である。畿内系土器には、二重口縁壺(図120-82)、伝統的V様式系甕(図120-83)、小型鉢の胴～底部(図120-84)、高杯脚部(図120-118)がある。他遺跡から布留系甕も出土しているが、遺構に伴う良好な資料に欠けるため、詳細は不明である。恐らく周防西部の湯田楠木町遺跡土器捨て場出土土器に近似した土器群が存在するものと推測する。また、在来系土器の様相には不明な点が多いが、終末期Ⅱ期に近似した土器の存在が予想される¹¹⁾。なお、林遺跡SB3・4(尾崎ほか1993)からは次段階、布留1式後半に位置づけられる小型丸底壺、布留系甕が出土している。

6. まとめ

以上、周防西部と東部の弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年案を提示した。終わりに周防と関連が深い北部九州と中予地域との併行関係、周防の土器の特徴について簡潔に述べてまとめたい。併行関係については表19・20のように考えている。

後期Ⅰ-1期

この段階は伊予系高杯の存在から、中予地域の後期Ⅰ-1期に併行する。北部九州と併行関係を知る資料はないが、前後の併行関係から高二瀬式新段階の前半に併行すると考える。

後期Ⅰ－2期

周防西部の北部九州系の壺の形態から、高二瀬式新段階(後半)に併行すると考える。また瀬戸内系長頸壺から岡山県の後期Ⅰ－2期、前段階の併行関係と瀬戸内系土器が見られる点から中予地域の後期Ⅰ－2期と併行すると考える。

後期Ⅱ－1期

定型化した複合口縁壺が成立し、複合口縁部、頸部に多条沈線を持つ点から中予地域の後期Ⅱ－1期に併行すると考えられる。周防西部では良好な資料がなく、北部九州との併行関係を知る資料はないが、前後の併行関係から、下大隈式古段階に併行すると考えられる。長門では船頭遺跡V地区SD24(谷口ほか1995)から下大隈式古段階併行の複合口縁壺が出土している。

後期Ⅱ－2期

複合口縁壺の頸部に沈線を持つものが極めて少なくなり、頸部は無文か1条の貼付突帯を持つものが主体となること、複合口縁部が短く袋状を呈するもの(図120-36)が出現する点が共通することから(梅木1996a)、中予地域の後期Ⅱ－2期に併行すると考えられる。なお、袋状口縁の壺は、豊後においてもこの段階に併行すると見られる後期Ⅲ期に出現する(壺根2010)。この壺の出自は不明であるが、周防灘沿岸ではほぼ同時期に出現している点が注目される。

また、大型器台の存在が確認できるのはこの段階から終末期Ⅱ期にかけてであり、伊予との密接な関係がうかがえる。周防西部では良好な資料がないが、高島式土器に近似した高杯の形態から、下大隈式新段階に併行すると考える。ただし、中予地域の高杯には高島式土器の高杯と同様、口縁部が「く」の字状に外反するが、高島式土器の高杯よりも外反度の強いものが見られるため、周防東部の資料では注意が必要である。

終末期Ⅰ期

周防西部では、高島式土器に近似した土器から西新町式古段階に併行すると考えられる。中予地域と直接の併行関係を知る資料はないが、複合口縁壺はB類が主体となること、周防西部では受部に角状突起を持つ支脚が出現する点が共通することから、後期Ⅲ－1期に併行すると考えられる。ただし、豊前・中予地域の終末Ⅰ期からⅡ期の壺には胴部外面にタタキを残す壺が見られるのに対し、周防では外面調整はハケメが主体でタタキを残すものは少ない。

終末期Ⅱ期

高杯の形態から、西新町式新段階に併行すると考えられる。また、前後の併行関係から伊予の後期Ⅲ－2期に併行すると考えられる。

古墳前期Ⅰ期

畿内系土器が出現する段階であるが、現状では布留0式から1式前半の幅でしかとらえられる資料がない。北部九州の有山式古段階、中予地域の後期Ⅲ－3期に併行すると考えられる。在来系土器では終末期Ⅱ期と近似した土器群の存在が推測される。

周防の土器の特徴

周防では後期Ⅰ－1期に瀬戸内系土器の存在が顕著となる。瀬戸内系土器には模倣品も見られるが、壺・甕とも輸入品が認められることから、一定程度の人の移住が行われた可能性を指摘できる。そして後期Ⅰ－2期には北部九州の影響を受けつつ、瀬戸内系長頸壺をベースに複合口縁壺が出現する。以後、周防西部では土器様相に不明な点が多いが、北部九州・瀬戸内の影響を受けていたと見られ、終末期Ⅰ期までには下右田遺跡を中心として「佐波型複合口縁壺」が出現する。一方、周防東部では

中予地域と土器の特徴が共通する点が多い。

しかし、周防全域において、終末期Ⅰ期からⅡ期の覆外面の最終調整はハケを施すことを原則としており、中予地域と比較してタタキを残すことは少ない。また、後期Ⅱ-Ⅰ期から終末期Ⅰ期の甕の内面調整は、同時期中予地域ではハケを施すものが主体であるのに対して、周防ではケズリを施すものが多く、安芸地域の影響が考えられる。高杯においては、周防全域で豊前系(内湾口縁)が分布するほか、「く」の字口縁高杯には高島式土器と口縁部形態・変遷が近似したものが見られる。以上、東西隣接地域の影響を受けながらも、周防内で共通する特徴を保持していたことは、周防の弥生後期から古墳時代初期の社会の動向を知る上で重要であろう。

謝辞

本稿執筆にあたっては下記の諸氏・諸先生・諸機関にお世話になりました。末筆ながら記して感謝いたします。

梅木謙一、梅崎恵司、河合忍、久住猛雄、古賀信幸、小南裕一、田崎博之、中川寧、中村友博、西岡義貴、乗安和二郎、松岡睦彦、村山裕一、山本一朗、岩国市教育委員会、下関市教育委員会、防府市教育委員会、山口市教育委員会、山口市史編さん室、山口県埋蔵文化財センター、山口大学人文学部考古学研究室

[注]

- 1) 豊後では、近年、坪根伸也氏が後素V期(坪根1996)を上器Ⅰa期、Ⅰb期に細分している(坪根2007・2010)。
- 2) 例えば、福岡県宮室市小原道路1号野瀬穴土器資料について、田崎博之氏(田崎1998)は須玖Ⅱ式新段階と高三瀬式古段階の共存資料であるとすが、梅崎恵司氏(梅崎2005)は須玖Ⅱ式新段階に定礎づけている。
- 3) 筆者は田口2001b等で内折口縁甕を「内折口縁甕」と認識していた。この点を借りて深くお詫び申し上げます。
- 4) 現在、山本一朗氏は袋状口縁甕を複合口縁甕の類型と考えている(山本2005)。
- 5) 豊後地域では長須甕はV-1様式を通じて散見されるが、主要な形態ではないとされる(伊藤1992)。ただし、備後北部では近似的形態の甕(備後北部V-1様式:493)が存在する。同地域は山陰地方の影響が強いので、河防の瀬戸内系長須甕にも山陰地方の影響を考慮すべきかもしれない。かつて山本一朗氏より「周防型複合口縁甕形成初期にもっとも大きな影響を及ぼしたのは、山陰・中部瀬戸内の要素であった」との指摘もある(山本1979)。詳細は今後の検討が必要であろう。
- 6) この点については河合忍氏のご教示を得た。
- 7) 高杯の相互等については、梅崎恵司氏らからご教示を受けた。高島式土器は豊前の後素後半から終末期前半に位置づけられている(田崎1996c)。
- 8) ただし、長門の道橋一活資料の大半では高杯が1点以下しか出土していないため、詳細は今後の検討が必要である。
- 9) 「右山・二山遺跡」は、現在は下右山遺跡に含まれている。「広波型複合口縁甕」が出土したA-1濠出土土器は、掲載された区を見る限り、高杯はBタイプが主体であることから概ね終末期Ⅱ期に位置づけられると考えている。
- 10) 以前筆者は、山口市教育委員会のご厚意で湯田横木町遺跡で土器検出湯田山上土器を写真測定を行ったが(田畑2000)、その段階では出土土器の半数以上が行方不明であった。しかし、その後検出の土器が山口市の収蔵庫で発見され、「山口市史」編さん事業で再整理を行った結果、既報告資料と多数接合することが判明した。このため、大半の土器について同事業により写真測が行われた(王塚2012)。また、写真により、土器検出湯田山上土器には6世紀後半から7世紀前半の須臾塚坪なども含まれることが判明していたが(内田1975)、再整理の結果、須臾塚坪の頂部片や5〜7世紀期の土器群も含まれていることが判明した。このため、現在では、筆者が在池系とした土器には時期が下るものが含まれるものと認識している。再整理結果や出掘

2000との対応関係等については別稿で述べることにしたい。

- 11) 口縁部に段を持つ点では瀬戸内への影響が考えられる。田園遺跡2・3号住居跡からは、裾部に段を持つ瀬戸内系の高杯が出土している点にも注意が必要である。
- 12) 大きく取り上げられる清水遺跡第1層塚山の上の高杯(石井ほか1989・15図77)は、報告書図版49からも分かるように口縁部形態が一様ではないことから、口縁部に段を持ち思われる高杯(図121-94)とく「の字状口縁の高杯との折衷品と考えられる。
- 13) 追道遺跡2号、22号住居跡からは瀬戸内系を施した複合口縁帯の口縁部片が出土している。口子地域では瀬戸内(徳木氏:三倉文)は後期Ⅱ-2期から後期Ⅲ-2期にかけて見られる(梅木1996)。筆者は、形状においても同じ状況が認められると考える。よって、前後の資料を若干含む可能性はあるが、追道遺跡2号、22号住居跡を後期Ⅱ-2期の資料ととらえ、追道遺跡22号住居跡出土土器は前編(田畑2006)の位置づけを変更する。横河遺跡22号段状土壇については、袋状口縁を持つ者が共存していることを判断の根拠とした。
- 14) 他に周防東部における弥生時代終末期の遺構出土資料としては、松尾遺跡1号住居跡出土土器(山口大学人文学部考古学研究室(1984))があるが、実見させていただいたところ、終末期Ⅰ～Ⅱ期の土器を含んでいることを強調したため、時差幅を持つ資料ととらえている。
- 15) 土器を実見し、報告書掲載図よりも口縁部先端が長く強めに折り返されていることを確認した。報告書(石井ほか1989)図版63でも確認できる。
- 16) 河野伸也氏により、「頸部が大きくひろき、口縁部が外反する点で、豊後のものと類似する」とコメントされている。
- 17) 吉成遺跡S-B11からは後方系小型高杯の頸部が出土していることから、筆者が終末期Ⅱ期に位置づけた土器の一部は古墳前期Ⅰ期の土器を含む可能性がある。

参考文献

- 石井隆彦(2000)「山口県西部の弥生時代後期後半～古墳時代初期の土器について」山口県埋蔵文化財センター(編)『陶埴』第13号、山口
- 石井隆彦(2004)「山口県東部(周防)の弥生時代後期の土器について」山口県埋蔵文化財センター(編)『陶埴』第17号、山口
- 石井隆彦(2004)「周防部の弥生後期前半の土器について―鉢形跡出土土器をめぐって」木島隆夫追道集刊行会(編)『海峽の地域史―水島隆夫追道集―』下関(山口)
- 伊藤実(1992)『備後地域』平岡隆夫・松本岩雄(編)『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編―』木耳社、東京
- 伊藤実(1996)「安芸」古代学協会西国支部(編)『古代学協会西国支部松山大会資料―六年後編の碑』内海、松山(愛媛)
- 伊藤実(2001)「安芸(三条盆地)地域の庄内期の土器様式」古内式土器研究会(編)『古内式土器研究X・XV』八尾(大塚)
- 岩崎仁志(2008)「第四編第五章第二節 土器にみる文化の交流」山口県(編)『山口県史』通史編 原勢・古代、山口
- 梅木謙一(1996a)「複合口縁帯の動態―吾郎瀬戸内における地域圏の成立と展開―」古代学協会西国支部(編)『古代学協会西国支部松山大会資料―六年後編の碑』内海、松山(愛媛)
- 梅木謙一(1996b)「伊予」古代学協会西国支部(編)『古代学協会西国支部松山大会資料―弥生後期の瀬戸内海』、松山(愛媛)
- 梅木謙一(2000)「伊予中部地域」菅原康夫・梅木謙一(編)『弥生土器の様式と編年―四国編―』木耳社、東京
- 梅木謙一(2001)「伊予中部の上層」庄内式土器研究会(編)『庄内式土器研究X・XIV』八尾(大塚)
- 梅木謙一(2002)「伊予・周防山上市の細長頸複合口縁帯について」山口考古学会(編)『山口考古』第22号、山口
- 梅木謙一(2004a)「四防出二の伊予型高杯」水島隆夫追道集刊行会(編)『海峽の地域史―水島隆夫追道集―』下関(山口)
- 梅木謙一(2004b)「四防の弥生中期中葉～後期前葉の土器」埋蔵文化財研究会(編)『第53回埋蔵文化財研究集會弥生中期土器の行方関係―発表要旨集』福岡
- 梅崎寛明(1996)「南北朝九州―北編記」古代学協会西国支部(編)『古代学協会西国支部松山大会資料―弥生後期の瀬戸内海』、松山(愛媛)

- 梅崎恵司(2005)「東北部九州の弥生時代中期から後期前半の土器—須玖式土器の終焉—」(財)北九州市芸術文化振興財団 豊城文化財調査研究紀要』第19号,小倉(福岡)
- 小山富士郎(1976)『高森遺跡』北九州市埋蔵文化財調査会,小倉(福岡)
- 北島大輔(2011)「庄内における古墳前期の首長居館—下東遺跡の方形遺構と新田墳墓群—」『第160回九州古文化研究会発表資料』
- 久住猛雄(1999)「北前九州における庄内式伊行類の二器様相」庄内式土器研究会(編)『庄内式土器研究ⅡⅩⅩ』,八尾(大阪)
- 瀬尾周三(1992)「安芸地域」工岡謙夫・松本昌雄(編)『弥生土器の様式と編年—山口・山陰編—』,木耳社,東京
- 式末純一(1982)「北九州における弥生時代の複合口縁蓋」森貞次郎博士古物記念論文集刊行会(編)『森貞次郎博士古物記念古文化論集』,福岡
- 田崎博之(1996a)「基礎資料:各地域における弥生時代後期土器の様相」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料—弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)
- 田崎博之(1996b)「筑前」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料—弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)
- 田崎博之(1996c)「南豊前」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料—弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)
- 田崎博之(1998)「Ⅳ—九州系の土器からみた国線文系土器の時間的位置」下俣信行(編)『日本における石橋から鉄器への転換形態の研究』,松山(愛媛)
- 田畑直彦(2000)「付録Ⅲ—山口市湯田樋木町遺跡出土の古式二硬器」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年ⅩⅣ』,山口
- 田畑直彦ほか(2001a)『上東遺跡弥生時代遺物編』(山口市埋蔵文化財調査報告第77集—山口市教育委員会(編)),山口
- 田畑直彦(2001b)「周防・長門における庄内式伊行類の二器様相」庄内式土器研究会(編)『庄内式土器研究ⅩⅩⅤ』,八尾(大阪)
- 田畑直彦(2004)「周防・長門における弥生中期の土器と並行関係」豊城文化財研究会(編)『第33回豊城文化財研究会弥生中期土器の伊行関係発表資料集』,福岡
- 田畑直彦(2006)「山口県島田川流域の弥生集落—中流域遺跡群を中心として—」日本考古学協会2006年度愛媛大会実行委員会(編)『日本考古学協会2006年度愛媛大会研究発表資料集』,松山(愛媛)
- 坪井清二(1968)「山口県豊後郡豊北町上井が浜遺跡の上層」小林行雄・杉原弘介編『弥生式土器集成資料集』日本考古学協会,東京
- 坪根伸也(1996)「豊後」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料—弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)
- 坪根伸也(2007)「第2節—下郡遺跡群の弥生時代終末期から古墳時代初期の土器について—」『下郡遺跡群Ⅴ』(『大分市埋蔵文化財調査報告書』第76集—大分市教育委員会(編)),大分
- 坪根伸也(2010)「第Ⅲ章第3節(4)弥生時代後期から古墳時代前期の土器による時期区分」『下郡遺跡群Ⅵ』(『大分市埋蔵文化財調査報告書』100—大分市教育委員会(編)),大分
- 寺沢薫(1986)「畿内古式土器の編年と2・3の問題」矢部進紙(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告49—奈良県立橿原考古学研究所(編)),奈良
- 東安和二三(1990)「山口県(防長地域)」古代学協会四国支部(編)『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』,松山(愛媛)
- 権白達也(1979)「豊後」の編年の研究」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅩⅩⅠ—中巻—福岡県教育委員会(編)],福岡
- 平井貞子(1996)「豊前・豊前南部」古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料—弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)

- 松村さを里(2008)「西部瀬戸内における弥生時代後期の層間について—伊予地方を中心に—」『愛媛大学考古学研究所』下條信行(編)『妙見山1号穴—西部瀬戸内における初期前方後円墳の研究』,今治(愛媛)
- 松村 淳(1992)『桑原日中遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター。(編)『桑原地区の遺跡』,松山(愛媛)
- 松木岩穂(1992)『山芸・越後地域』正原隆夫・松木岩穂(編)『弥生土器の様式と編年』山崎・山陰編。木下社,東京
- 木下雅子(2000)「下石臼遺跡の弥生遺物SD630の土器について」『山口考古学会(編)』『山口考古』第29号,山口
- 山本一朗(1979)『Ⅲ 防長の弥生式土器』河陽考古学研究所(編)『山口県の弥生式土器—集成と編年』,光(山口)
- 山本一朗(1981)『防長の土器器』河陽考古学研究所(編)『山口県の土器器—須恵器—集成と編年』,光(山口)
- 山本一朗(1982)『防長複合口縁壺の系譜』考古学研究会(編)『考古学研究』第29巻第2号,河内
- 山本一朗(1993)『山口県東部(周防)弥生後期土器編年』瀬見浩先生退官記念事業会(編)『考古論集—瀬見浩先生退官記念論文集』,広島
- 山本一朗(2003)『大塚式の諸問題』山口考古学会(編)『山口考古』第23号,山口
- 山本一朗(2005)『吹越式の再検討』『越前志先生退官記念論文刊行会(編)』『考古論集(川越新志先生退官記念記念論文集)』,広島
- 吉瀬秀兼(1996)『周防・長門』古代学協会四国支部(編)『古代学協会四国支部松山大会資料—弥生後期の瀬戸内海』,松山(愛媛)

遺跡文献

- 赤坂道雄 堀野竹一哉(1990)『赤坂道雄』(山口県埋蔵文化財調査報告第132集) (山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 田嶋政彦(2012)『赤坂道雄』山口県(編)『山口県史—史料編—考古・古代』,山口
- 濱田浩太郎 中村敏也ほか(1979)『須田山崎遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第48集) (山口県教育委員会(編)),山口
- 中村敏也ほか(1995)『須田山崎遺跡Ⅱ』(山口県埋蔵文化財調査報告第99集) (山口県教育委員会(編)),山口
- 村岡由雄ほか(1986)『須田山崎遺跡Ⅲ』(山口県埋蔵文化財調査報告第99集) (山口県教育委員会(編)),山口
- 小西新一(2009)『須田山崎遺跡Ⅳ』(山口県埋蔵文化財センター調査報告第71集) (山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 石光道雄 小野道雄(1962)『第9号第9期(即ち)「早科大学小形原石光道雄」』(早科大学小形原石光道雄) (早科大学小形原石光道雄) (編),山口
- 石井北彦ほか(1990)『石光道雄』(山口県埋蔵文化財調査報告第121集) (山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 石井本道雄 石井本道雄ほか(1997)『石井本道雄』(山口県埋蔵文化財調査報告第25集) (山口県埋蔵文化財センター(編)),山口(山口)
- 上段道雄 谷口哲一(1997)『上段道雄出土の遺物類』(山口県埋蔵文化財センター(編)『出土』第1号,山口
- 上野由夫(1981)『第2期(即ち)上野由夫』(『周防内遺跡—土の由夫館』(山口県埋蔵文化財調査報告第16集) (山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 田北幸道雄 藤谷尚一(1987)『田北幸道雄』(山口県埋蔵文化財調査報告第165集) (山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 尾道道雄 石井道雄・岡島清(1988)『尾道道雄Ⅰ』(山口県埋蔵文化財調査報告第107集) (山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 岡山道雄 岡島清・富田謙次(1987)『岡山道雄』(山口県埋蔵文化財調査報告第99集) (山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 奥ノ原道雄 和田金之助(1992)『奥ノ原道雄』(山口県埋蔵文化財調査報告第105集) (山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 藤田道雄 藤田秀幸(1980)『藤田道雄』(山口県埋蔵文化財センター調査報告第14集) (山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 小笠道雄 小笠道雄・藤川貴和・中野達之(1997)『小笠道雄』(山口県埋蔵文化財調査報告第175集) (山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 清水道雄 石井道雄ほか(1989)『清水道雄』(山口県埋蔵文化財調査報告第112集) (山口県埋蔵文化財センター(編)),山口
- 下段道雄 村上道雄(1972)『1409号(即ち)バイパス 下段道雄—高松遺跡』(山口県埋蔵文化財調査報告第21集) (山口県教育委員会(編)),山口
- 藤原吉文(1962)『下段道雄Ⅱ』(山口県埋蔵文化財調査報告第68集) (山口県教育委員会(編)),山口

周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初期の土器編年

- 下石川遺跡 山口県教育委員会(編)(1973)、石川・下石川遺跡 第45号の紀要遺跡 久米市遺跡(山口県歴史文化財調査報告第19号)、山口
- 山口県教育委員会(編)(1979)、下石川遺跡第3次調査紀要(山口県歴史文化財調査報告第48号)、山口
- 原田光則(1989)『下石川遺跡第10・13・14・15号発掘調査報告』防府市教育委員会(編)、防府(山口)
- 白石遺跡 吉野高木子(2002)『第2次 丸山町西教存字加藤跡(山口)中学校跡(未定)発掘調査報告』山口大学歴史文化財資料館(編)、山口大学歴史文化財調査報告第31号、山口
- 小南原 2006『白石遺跡(山口)県歴史文化財センター調査報告第36号』山口県歴史文化財センター(編)、山口
- 西原遺跡 和田益之博(1991)『西原遺跡(山口)県歴史文化財調査報告第22号』山口県歴史文化財センター(編)、山口
- 中院遺跡 西尾豊(編)(2003)『中院遺跡(山口)県歴史文化財センター調査報告第38号』山口県歴史文化財センター(編)、山口
- 大工遺跡 菅日若(2000)『大工遺跡(山口)県歴史文化財調査報告第108号』山口県歴史文化財センター(編)、山口
- 加賀遺跡 今川敏三(1995)『加賀遺跡(山口)県歴史文化財調査報告第195号』山口県歴史文化財センター(編)、山口
- 井遺跡 尾崎雄一(著)菅日若(1992)『井遺跡(山口)県歴史文化財調査報告第39号』山口県歴史文化財センター(編)、山口
- 丸尾遺跡 伊藤由ほか(1970)『丸尾遺跡発掘 丸尾遺跡発掘調査報告』平生所教育委員会、平生(山口)
- 山本 1984(1972)『丸尾遺跡発掘 丸尾遺跡発掘調査報告』平生所教育委員会・山口県教育委員会、平生(山口)
- 松尾遺跡 山口大学文学部考古学研究室(2007)『長毛郡宇生町松尾遺跡の調査』山口大学文学部考古学研究室(編)『西部編年』内における弥生文化の研究』山口
- 山形橋の山遺跡 谷口智一(2007)『山形橋の山遺跡(山口)県歴史文化財センター調査報告第82号』山口県歴史文化財センター(編)、山口
- 丸山遺跡 山口県教育委員会(2008)『丸山遺跡(山口)県歴史文化財調査報告第172号』山口
- 宮家遺跡 山口県教育委員会(2003)『宮家遺跡』宮崎遺跡・土佐宮遺跡(山口)県歴史文化財調査報告第89号、山口
- 明地遺跡 岩崎仁志(1993)『明地遺跡(山口)県歴史文化財調査報告第32号』山口県歴史文化財センター(編)、山口
- 岩崎仁志(1993)『明地遺跡Ⅱ(山口)県歴史文化財調査報告第167号』山口県歴史文化財センター(編)、山口
- 高田原本町遺跡 内田宗一(1973)『山口市高田原 高田中学校造成地高田原本町遺跡』地区史調査委員会(山口)市教育委員会(編)、山口
- 田原野原(2006)『田原野原 山口市高田原本町遺跡出土の古式土師器』山口大学歴史文化財資料館(編)『山口大学歴史文化財調査報告第47号』山口
- 川瀬野原(2002)『高田原本町遺跡(山口)市(編)、山口市史 史跡編 考古・古代』山口
- 古川遺跡 河村友行(1980)『古川遺跡(山口)県歴史文化財調査報告第17号』山口大学歴史文化財調査報告(編)山口大学歴史文化財調査報告第17号、山口
- 豆谷和之(1993)『古川遺跡第1地区A区画上の弥生時代中期後半の土器について』山口大学歴史文化財資料館(編)『山口大学歴史文化財調査報告第47号』山口
- 古成遺跡 豊島成行(2001)『古成遺跡(山口)県教育財団歴史文化財調査報告第21号』山口県歴史文化財センター(編)、山口

長門の関連遺跡(本文言及遺跡に限る)

- 秋波遺跡 伊藤原隆一(内記)編(1977)『秋波遺跡』山口県歴史文化財調査報告第22号 山口県教育委員会(編)、山口(山口)
- 川瀬野原遺跡 藤本有紀(2005)『川瀬野原遺跡Ⅰ(大瀬・台地区)』防府市の文化財第17号、防府市教育委員会(編)、防府(山口)
- 突波遺跡 坂口一雄(1985)『よみかえる弥生のスカーフェイス-突波遺跡-』山口県歴史文化財調査報告第87号、山口県教育委員会・山口県歴史文化財センター(編)、山口
- 船尾遺跡 谷口村一(1993)『船尾遺跡Ⅱ(山口)県歴史文化財調査報告第178号』山口県歴史文化財センター(編)、山口
- 利根遺跡 豊安由(2015)『1965』『利根遺跡-互石遺跡(山口)県歴史文化財調査報告第191号』山口県歴史文化財センター(編)、山口
- 御前遺跡 初崎真(1997)『御前遺跡』山口県教育委員会(山口)県歴史文化財調査報告第76号、山口県教育委員会(編)、山口(山口)
- 古木遺跡 西尾大繁(1999)『古木遺跡(山口)県歴史文化財センター調査報告第29号』山口県歴史文化財センター(編)、山口

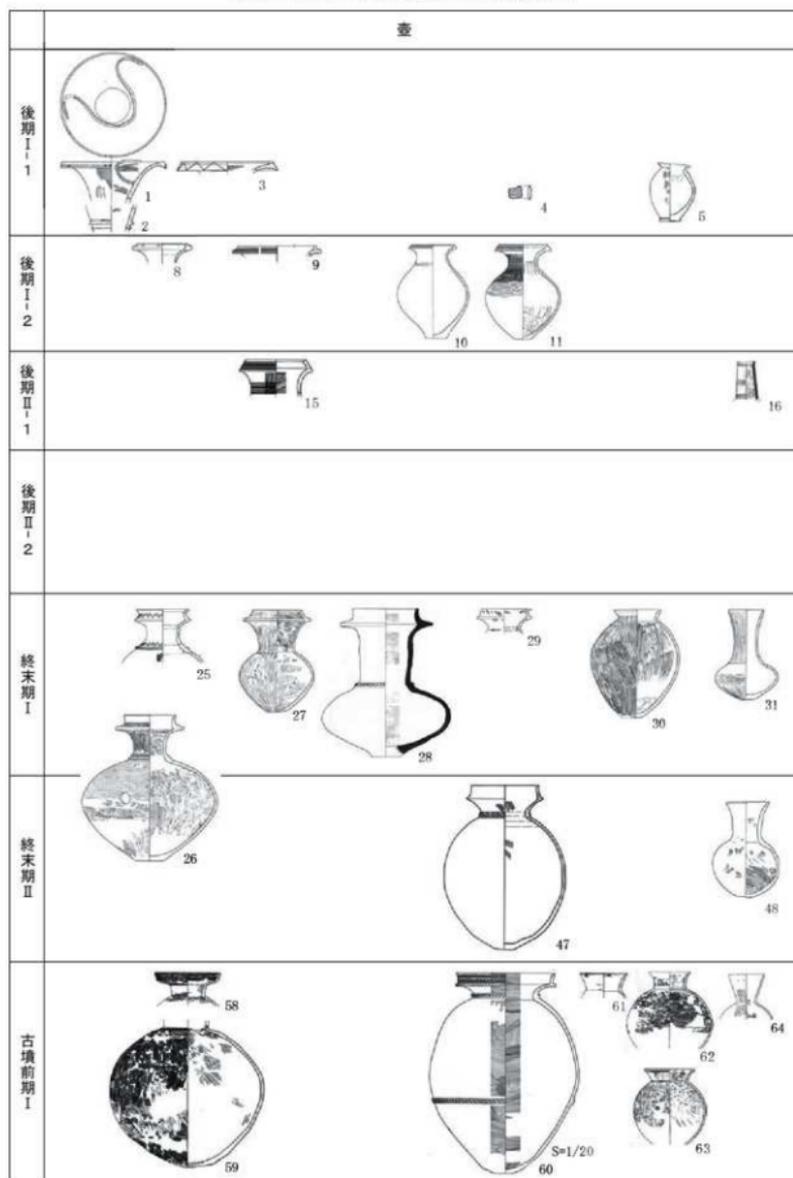


図 119 周防西部における弥生時代後期から古墳時代初期



頭の土器編年図 (同一期内の上下は時期差を示さない)



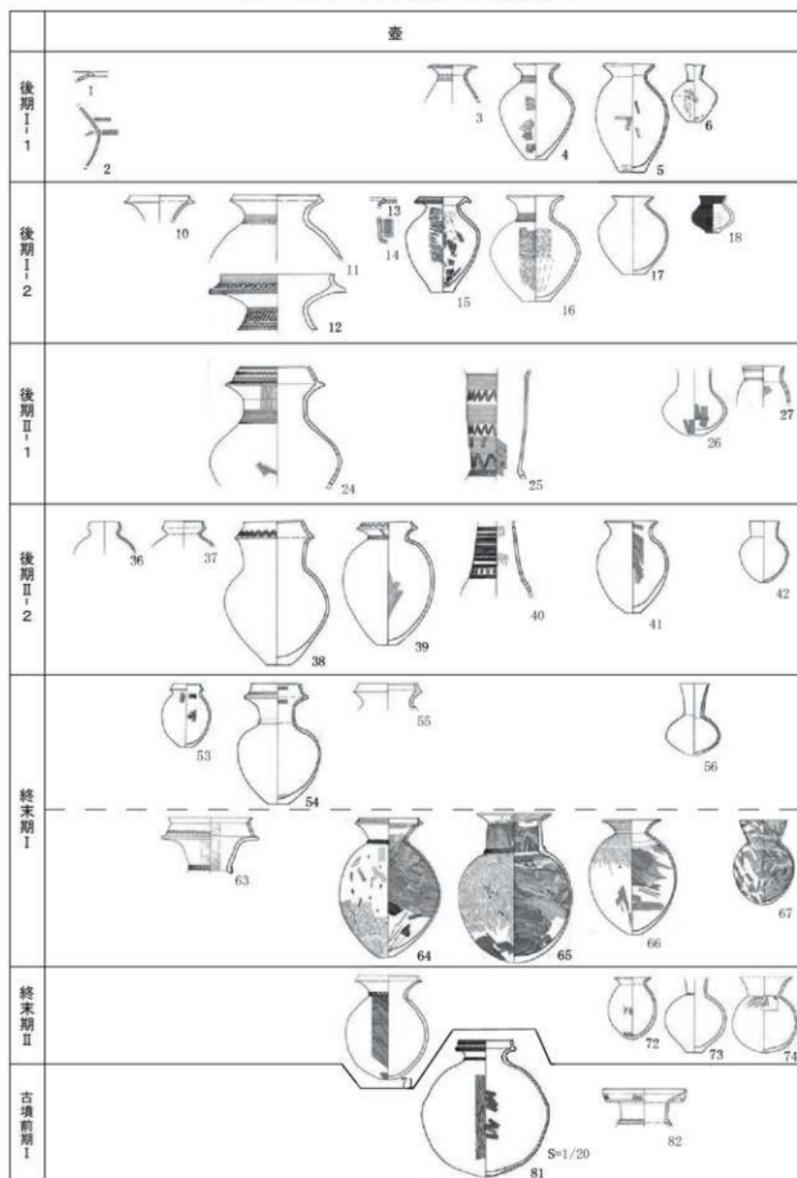
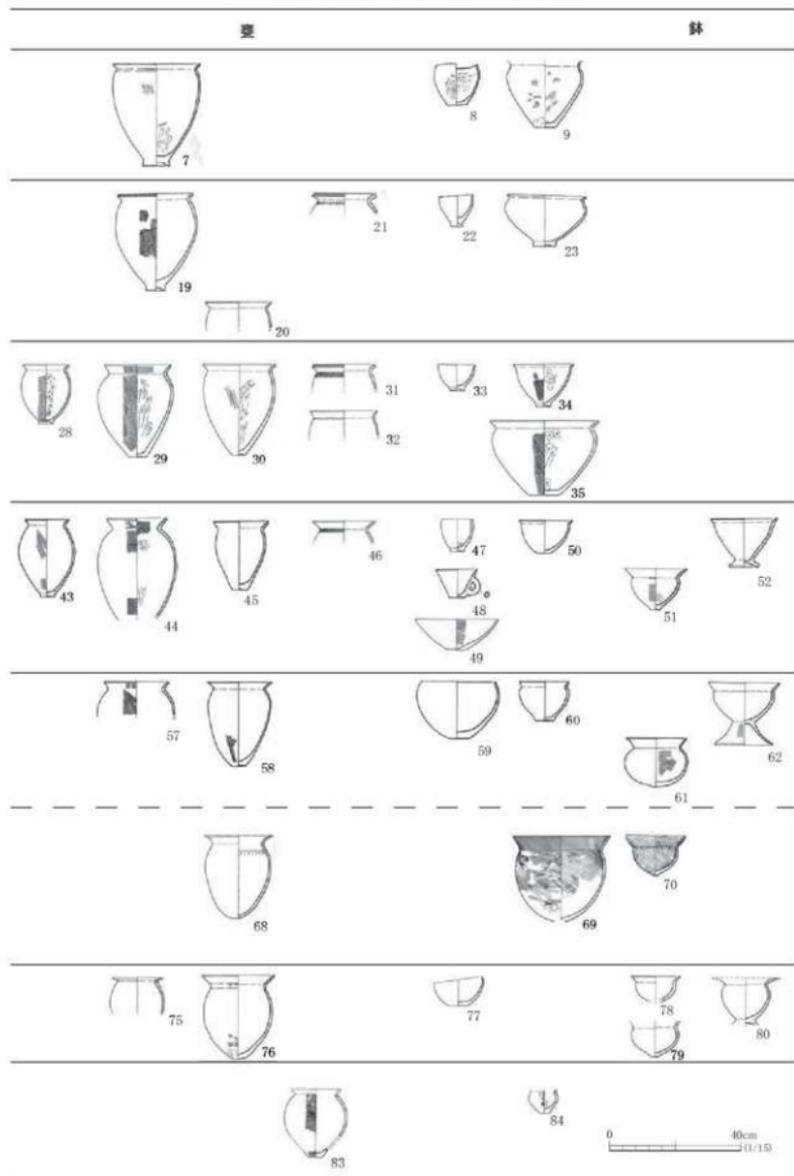
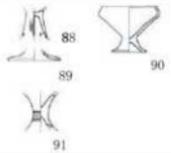
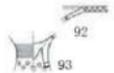
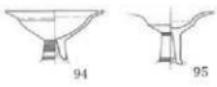
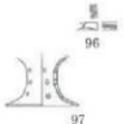
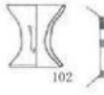
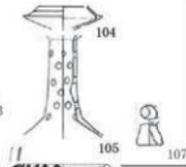
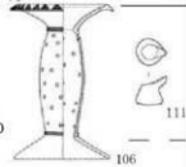
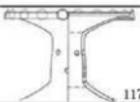


図120 周防東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年図



0 40cm (1/10)

(壺・甕・鉢) (後期Ⅰ-Ⅱ期を除き、同一期内の上下は時期差を示さない)

	高杯	器台	支脚
後期 I-1			
後期 I-2			
後期 II-1			
後期 II-2			
終末期 I			
終末期 II			
古墳前期 I			

※後期 I-2 期を除き、同一期内の上下は時期差を示さない

図 121 周防東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年図 (高杯・器台・支脚)

表 19 併行関係表 (田崎 1996a より作成)



※() 内は『弥生土器の様式と編年(山陽山陰編)』・『同(四国編)』の編年
出雲は『弥生土器の様式と編年(山陽山陰編)』の様式編年対照表から作成

表 20 山口県における併行関係表

	長門西部	長門北部	周防西部	周防東部
中期Ⅳ	下七見第3地区SK32 宝蔵寺SK26・29	(宮ヶ久保A・I期) (坂平沖尻Ⅰ)	吉田第1地区ICビット 下東1号段状遺構	小谷S805・10 明地2次S801
後期Ⅰ-1	(柳瀬包含層)	(宮ヶ久保I期)	丸山1号土壌	中院S8-1
後期Ⅰ-2	塚の原LS615	(+)	下右田17次SK990 下右田13次SK221 (下右田S8638)	円光寺4号土壌 朝霧地区SK302 道迫29号住居跡
後期Ⅱ-1	吉永田-東地区SK24 (柳瀬V地区SK24)	羽邊S81・8 突抜第Ⅱ地区CW11	下右田14号住居跡	畑田35号段状遺構
後期Ⅱ-2	下七見第2地区SK80 松濱SK18	(+)	下右田S1695	畑田29号段状遺構 西原2号段状住居跡 (清水第1・2遺構)
終末期Ⅰ	(秋保D066(第Ⅱ層)) 秋田S996	突抜第Ⅱ地区CW4	(吉田2号館1号土壌) 下右田S11030 (下右田S8246)	道迫2号住居跡 清水2・12号住居跡 清水9号段状遺構
終末期Ⅱ	柳瀬0地SK5091 吉永田-東地区SK6 柳瀬0地SK5095	(+)	(下右田S8246) 朝田墳墓群塚SK9 朝田墳墓群V地区IC群	吹浦A地区 4号住居跡 吉波S806・09 岡山1号台状墓 岡山B地区9号台状墓 2号主体
古墳前期Ⅰ	吉永田-東地区SK32・ 58・60 下七見第Ⅱ地区SK2 武久川下流域赤里遺跡	突抜第Ⅱ地区CW25	唐田橋本町土器捨て溝 朝田墳墓群V地区IC群 上の山古墳台状墓	道迫32-34号住居

※縦幅は時間幅を示さない

() 内は時間幅のある資料

図出典

図 113 筆者作成

図 114・116～118 各報告書より転載・一部改変

図 115 1は田畑実測、他は各報告書より転載

図 119 各報告書より転載

後期Ⅰ-1 1～7 丸山遺跡第1号土壙

後期Ⅰ-2 8・10・13 下右田 SK990、9・14 下右田 SD630、11、12 下右田 SD221

後期Ⅱ 1 15 下右田第Ⅲ地区旧河川跡砂層、16～20 下右田 14号住居跡

後期Ⅱ-2 21～24 下右田 SI695

終末期Ⅰ 25、29、33～38、43 吉田本部2号館第1号土壙、26 下右田 SD240 上層、27・30～32 下右田 SI1030、
28 下右田 A-1 溝上層、39 下右田 SI1049、40～42、44 下右田 SD240 上層、45、46 下右田 SD260

終末期Ⅱ 47 朝田墳墓群第Ⅱ地区第10号型穴住居跡、48 下右田 SD240 上層、
49～54 朝田墳墓群Ⅶ地区 SK9、55・56 朝田墳墓群Ⅴ地区3区B群、57 白石A区第5層

古墳前期Ⅰ 58・59、61～63、65～68、70～72、75～80 湯山榑木町土器捨て場、

60 朝田墳墓群Ⅲ B地区第2号遺構、67 宗妻 SB2、64・69 朝田墳墓群Ⅴ地区3区、

73・74 二ノ山古墳群台状墓

図 120・121 各報告書より転載・一部改変

後期Ⅰ-1 1～9、85、87 中院 SD1、86 明地 SB32

後期Ⅰ 2 10・11・17・19・22・23・88・89・90 出光寺第4号土壙、12・20・91・92・93 追道29号住居跡、

13・14 石光4号環状遺構、15 明地 SB32、16・18 郷 SB302、21 石光包含層

後期Ⅱ-1 24・26～28、30～35、94～97 畑岡35号段状遺構、25、29 畑岡27号段状遺構

後期Ⅱ-2 36・38・41・42・43・45・48・104・105 清水第1層壕、37・46・47・49・98・101・103 畑岡29号段状遺構、
44・51・99 畑岡2号型穴住居、39・40・50・52・100・102 清水第2層壕、106 天王17号住居跡、
107 清水6号土壙

終末期Ⅰ 53・56・57・59 清水9号段状遺構、54・58・61・110・111 清水12号住居跡、60・62・109 清水2号住居跡、
55・108 追道2号住居跡、63 次越A地区第3号住居跡山上土器、64～70、112、113 次越A地区第4号住居跡、
114 松尾1号住居跡

終末期Ⅱ 71・73・116 岡山Ⅱ地区第3号台状墓2号主体直上、72・76・79 吉政 SB09、74・75・77・78・80、
115 吉政 SB06 (奥江岡を改変)、117 岡山Ⅱ地区第2号台状墓

古墳前期Ⅰ 81 上段1号壺形墓、82 追道34号住居跡、83、84、118 追道32号住居跡

報告書抄録

ふりがな	やまぐちだいがくまいごうぶんかざいしりょうかんばんほう
書名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
副書名	—平成20年度—
巻次	
シリーズ名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
シリーズ番号	6
編著者名	田畑直彦 横山成己
編集機関	山口大学埋蔵文化財資料館
所在地	〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1 ℡083-933-5035
発行年月日	西暦2012年(平成24年)3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 58秒	131度 28分 06秒	20081224- 20090216	313㎡	新教育研究棟設備関連工事
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 59秒	131度 28分 08秒	20090217- 20090424	1,333㎡	新教育研究棟新営工事
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 47秒	131度 28分 21秒	20090105- 20090319	250㎡	動物医療センター改修 Ⅲ期工事
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 46秒	131度 28分 05秒	20080701- 20080710	26㎡	経済学部研究棟改修工事
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 59秒	131度 28分 08秒	20081201- 20090327	473㎡	新教育研究棟新営工事
山口大学 医学部構内遺跡	山口県宇部市 小串1丁目1-1	35202		33度 57分 41秒	131度 14分 58秒	20080709- 20080711	9㎡	医学部総合研究棟 改修Ⅱ期工事
山口大学 工学部構内遺跡	山口県宇部市 常盤台2丁目16-1	35202		33度 57分 26秒	131度 16分 30秒	20080519- 20080527	24㎡	工学部女子学生寄宿舍 新営その他工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉田遺跡	集落跡	中世	ピット・溝・土塚・谷	土師器・須恵器 緑釉陶器・白磁・青磁	
吉田遺跡	集落跡	縄文～中世	掘立柱建物・ピット 溝・土塚・井戸・谷	縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器・青磁	縄文貯蔵穴
吉田遺跡	集落跡	古代・中世	掘立柱建物・ピット・溝 谷	土師器・須恵器・製塩土器 青磁・瓦質土器・木製品	墨書須恵器
吉田遺跡	集落跡				
吉田遺跡	集落跡	中世	谷・ピット・溝	弥生土器・土師器・須恵器 青磁・瓦質土器	
山口大学 医学部構内遺跡	散布地				
山口大学 医学部構内遺跡	散布地				

山口大学埋蔵文化財資料館年報
—平成20年度—

平成24年3月30日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753-8511 山口市吉田1677-1

印刷 (有)三共印刷

〒759-0204 宇部市大字妻崎開作1953-8

